

# 菊模様皿山奇談

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫



## 序

大奸は忠に似て大智は愚なるが如しと宜なり。此書は三遊亭圓朝子が演述に係る人情話を筆記せるものとは雖も、其の原を美作国久米郡南条村に有名なる皿山の故事に起して、松蔭大藏が忠に似たる大奸と遠山權六が愚なるが如き大智とを骨子とし、以て因果応報有為轉變、恋と無常の世態を縷述し、読む者をして或は喜び或は怒り或は哀み或は樂ましむるの結構は実に当時の状況を耳聞目撃するが如き感ありて、圓朝子が高座に上り、扱て引き続きまして今晚お聞きに入れまするは、とお客の御機嫌に供えたる作り物語りとは思われざるなり。蓋し当時某藩に起りたる御家騒動に基き、之を潤飾敷衍せしものにて、其人名等の世に知られざるは、憚る所あつて故らに仮設せるに因るならん、読者以て如何とす。

明治二十四年十一月

春濤居士識

## 一

美作みまさかのくに 国くに 衆しゆ 郡ぐん に皿山という山があります。美作や衆の皿山皿ほどの眼まなこで見ても見のこした山、という狂歌がある。その皿山の根方ねがたに皿塚ともいい小皿山ともいう、こんもり高い処がある。その謂れを尋ねると、昔南みなみ 衆しゆ 郡ぐん の東山村ひがしやまむらという処に、東山ひがしや 作左衛門まさくざえもんと申す郷士ごうしがありました。頗る豪家すこぶであります。奉公人は余り沢山使います。此の人の先祖は東山將軍義政よしまさに事つかえて、東山という苗字を貰ったという旧家であります。其の家に東山公から拝領の皿が三十枚あります。今九枚残っているのが、肥後ひごの熊本の本願寺支配の長峰山ちようほうざん 随正寺ずいしょうじという寺の宝物ほうもつになって居ります。これは彼の諸方で経済学の講釈こうしゃくをしたり、平天平地へいてんへいちとかいう機械きがいをもって天文学を説いて廻りました佐田さだ介石かいせき和尚おしょうが確たしかかに見たと私わたくしへ話わされました。何どの様な皿かと尋ねましたら、非常に良い皿で、色は紫が、つた処もあり、また赤いような生臙脂しやうえんじが、つた処があり、それに青貝あざのようにピカ／＼した処もあると云いますから、交趾かうち焼やきのような物かと聞きましたら、いや左様そようでもない、珍めづらしい皿で、成程一枚こわ毀こわしたら其の人を殺すであろうと思おもうほ

どの皿であると云いました。其の外ほかにある二十枚の皿を白菊と云つて、極薄手ごくはくの物であると申すことですが、東山時分に其様な薄作うすさくの唐物はない筈、決して薄作ではあるまいと仰しやる方もございませうが、ちよいと触つても毀れるような薄い皿で、欠けたり割れたりして、継いだのが有るということです。此の皿には菊の模様が出ていたので白菊と名づけ、あとの十枚は野菊のような色気がある処から野菊と云いました由で、此の皿は東山家伝来の重宝ちようほうであるゆえ大事にするためでも有りませう、先祖が此の皿を一枚毀す者は実子たりとも指一本を切るといふ遺言状をこの皿に添えて置きましたと申すことで、ちと馬鹿々々しい訳ですが、昔は其様なことが随分沢山有りましたそうでございます。其の皿は実に結構な品でありますゆえ、誰も見たがりませんから、作左衛門は自慢で、件の皿を出しますのは、何うどいうものか家例かれいで九月の節句に十八人の客を招待しょうだいして、これを出します。尤も豪家もつとですから善い道具よも沢山所持して居ります。殊に茶器には余程の名器を持つて居りますから自慢で人に見せませう。又御領主の重役方などを呼びましては度々響応を致します。左様な理由わけゆえ道具係という奉公人がありますが、此の奉公人が頓とんと居附きません。何故なぜというのと、毀せば指一本を切ると云うのですから、皆道具係という怖れて御免ごうむを蒙ります。そこで道具係の奉公人には給金を過分に出します。其の頃三年で拾

両と云つては大した給金でありますが、それでも道具係の奉公人になる者がありません。中には苦しませに、なんの小指一本ぐらい切られても構わんなど、度胸で奉公にまいる者がありますが、薄作だからつい過まつては毀して指を切られ、だん／＼此の話を聞伝えて奉公に参る者がなくなりました。陶器と申す物も唐土には古来から有つた物ですが、日本では行基菩薩が始まりだとか申します。この行基菩薩という方は大和国菅原寺の住僧でありましたが、陶器の製法を發明致されたとの事であります。其の後元祖藤四郎という人がヘーシを發明致したのは貞応の二年、開山道元に従い、唐土へ渡つて覚えて来て焼き始めたのでございましょうが、これが古瀬戸と申すもので、安貞元年に帰朝致し、人にも其の焼法を教えたという。是れは今明治二十四年から六百六十三年前のことで、又祥瑞五郎大夫頃になりました、追々と薄作の美しい物も出来ましたが、其の昔足利の時代にも極綺麗な毀れ易い薄いものが出来ていた事があります。丁度明和の元年に、桑野美作守高義公国替で、美作の国勝山の御城主になりました。その領内南条郡東山村の隣村に藤原村と云うが、此の村に母子暮しの貧民がありました。母は誠に病身で、千代という十九の娘がございます、至つて親孝行で、器量といひ品格といひ、物の云いよう裾捌きなり何うも貧乏人の娘には珍らしい別嬪で、他から

嫁に貰いたいと云い込んでも、一人娘ゆえ上げられないと云う。尤も其の筈で、出が宜しい。これは津山つやまの御城主、其の頃松平まつだいら越後守えちごのかみ様の御家来遠山とやま龜右衛門かめえもんの御内室の娘で、以前は可なりな高を取りました人ゆえ、自然と品格ちかが異つて居ります。浪人して二年目に父を失い永らくの間浪々中、慣れもしない農作や人の使いをして僅かわずの小島こはたをもつて其の日をやつと送つて居る内に、母が病氣附きまして、娘は母に良い薬を飲ませたいと、昼は人に雇われ、夜は内職などをして種々いろいろ介抱かいぼうに力を尽しましたが、母は次第しだいに病が重おもりました。こゝに以前此の家に奉公を致していました丹治たんじと申す老翁じやういがありまして、時々見舞に参ります。

丹「えゝお嬢様、何うでがす今日こんにちは……」

千「おや爺じいやか、まアお上りな、爺おやや此間こないだは誠に何よりの品を有難うよ」

丹「なに碌なものでございせんが、少しも早く母かあさまの御病氣が御全快になれば宜よいと心配してはいますが、何うも御様子が宜くねえだね」

千「何うかして少しお氣をお晴しなさると宜いいが、私はもういけない、所詮死ぬからなんて御自分の氣から漸々だん／＼御病氣を重くなさるのだから困るよ、今朝はお医者様を有難う、早速来て下さつたよ」

丹「参りましたかえ、あのお医者さまはえらい人でござえまして、何でもはア此の近辺の者で彼のあ人に掛つて癒なほらねえのはねえと云う、宅うちも小さくつて良いお出入場でいりばも無ねえようだが、城下から頼まれて、立派なお医者さまが見放した病人を癒した事が幾許いくばもありやすので、諸方へ頼まれて往ゆきますが、年い老とつて居るから診みようが丁寧だてえます、脉みやくを診るのに両方の手を押つかめえて考えるのが小こ一いつ時ときもかゝつて、余り永いもんだで病人が大儀だから、少し寝かしてくんろてえまで、診るそうです」

千「誠に御親切に診て下さいますけれども、爺や彼の先生の仰しやるには、朝鮮の人参の入つてるお薬を飲ませないとお母つかさまはいけないと仰しやったよ」

## 二

其の時に丹治は首を前へ出しまして、

丹「へえー何を飲ませます」

千「人参の入つてるお薬を」

丹「何どのくらい飲ませるんで」



千「一箱も飲ませれば宜いと仰しやったの」

丹「それなら何も心配は入りません、一箱で一両も二両もする訳のものじゃアございやせん、多寡たかの知れた胡蘿蔔にんじんぐらいを」

千「なに胡蘿蔔ではない人參だわね」

丹「人參てえのは何だい」

千「人の形に成つて居るような草の根だというが、私は知らないけれども、誠に少ないもので、本邦こっちへも余り渡らない物だけれども、其のお薬をお母つかさまに服たべさせる事もできないんだよ」

丹「何うかして癒らば買つて上げたいもんだが、何どの位のものでがす」

千「一箱三拾両だとさ」

丹「そりやア高たけえな、一箱三拾両なんて魂消たまげた、怖ろしい高え薬を売りたいがる奴じゃアねえか」

千「なに売りたいがると云う訳ではないが、其のお薬を飲ませればお母さまの御病氣が癒ると仰しやるから、私は其れを買いたいと思うが買えないの」

丹「むゝう三拾両じゃア仕様がねえ、是れが三両ぐらいのことなら大事な御主人やめえの病には

換えられねえから、宅うちを売ったつて其の薬を買つて上げたといは思いますが、三拾両なんてえらい話だ、そんな出来ねえ相談を打たれちやア困ります、御病人の前で高でえ声じやア云えねえが、殊ことに寄つたら其様な事を機会しおにして他ほかへ見せてくんろという事ではないかと思つと、誠に気が痛みやすな」

千「私も実は左様そう思つているの、それに就ついて少しお前に相談があるからお母さまへ共々ともに願つておくれな、私が其のお薬を買うだけの手当こしらを拵こしらえますよ」

丹「拵こしらえるたつて無いものは仕様があんめえ」

千「そこが工夫だから、兎も角お母さまの処へ一緒に」

と枕元の屏風を開け、

千「もしお母様つかさま、二番が出来ましたから召上よれ、少し詰つて濃くなりましたから上り悪うございましょう、お忌いやならば半分召上よれ、あとの滓おりのあります所は私が戴かきますから」  
母「此の娘こは詰こらんことを云う、達者な者がお薬を服たべて何うする、私は幾あら裕あるほどお薬を飲んでも効験きくめがないからいけないよ、私はもう死ぬと諦あらめましたから、お前其様そんに薬を勧めておくれでない」

千「あら、またお母さまはあんな事ばかり云つていらつしやるんですもの、御病気は時節

が来ないと癒りませんから、私は一生懸命に神さまへお願掛けをして居ますが、あなた世間には七十八まで生きます者は幾許も有りますよ」

母「いゝえ私は若い時分に苦勞をしたものだから、それが矢張り身体に中つているのだよ」

千「あの爺やが参りましたよ」

母「おゝ丹治、此方へ入つておくれ」

丹「はい御免なせえまし、何うでござえますな、些とは胸の晴る事もござえますかね、お嬢さんも心配しておいでなさいますから、能くお考えなせえまし、併しま旧が旧で、あゝいう生活をなすつた方が、急に此様な片田舎へ来て、私のような者を頼みに思つて、親子一人で僅かな畠を持つて仕つけもしねえ内職をしたりして斯うやつて入らつしやるだから、あゝ詰らねえと昔を思つて氣を落すところから御病氣になつたものと考えますが、私だつて貧乏だから金づくではお力になれませんが、以前はあなたの処へ奉公した家来だアから、何うかして御病氣の癒るように蔭ながら信心をぶつて居りますが、お嬢さまの心配は一通りでないから、我慢してお薬を上んなせえまし」

母「有難う、お前の眞実は忘れません、他にも以前勧めたものは幾許もあるが、お前のよ

うに末々まで力になつてくれる人は少ない、私は死んでも厭いはないけれども、まだ十九や廿歳の千代を後に残して死ぬのはう……」

丹「あなた、然う死ぬ死ぬと云わねえが宜うござえます、幾ら死ぬたつて死なれません、寿命が尽きねえば死ぬるもんでねえから、どうも然う意地の悪い事ばかり考えちやア困りますなア、死ぬまでも薬を」

千「何だよう、死ぬまでもなんて、そんな挨拶があるものか」

丹「はい御免なせえまし、それじやア、死なねえまでもお上んなせえ」

千「お前もう心配しておくれでない」

丹「はい」

千「お母さま、あの先刻桑田さまが仰しやいました人參のことね」

母「はい聞いたよ」

千「あれをあなた召上れな、人參という物は、なに其様に飲みにくいものでは有りませんと、少し甘味がありました」

母「だつてお前、私は飲みたくつても、一箱が大金という其様なお薬が何うして戴かれますものか」

千「その薬をあなた召上るお気なら、私が才覚して上げますが……」

母「才覚たつてお前、家には売る物も何も有りやアしないもの」

千「私をあのお隣村の東山作左衛門という郷土の処へ、道具係の奉公に遣つて下さいましな」

其の時母は皺枯れたる眉にいとゞ皺を寄せまして、

母「お前、飛んでもない事をいう、丹治お前も聞いて知つてるだろうが、作左衛門の家では道具係の奉公人を探していて、大層給金を呉れる、其の代りに何とかいう宝物の皿を毀すと指を切ると云う話を聞いたが、本当かの」

丹「えゝ、それは本当でござえます、旧の公方さまから戴いた物で、家にも身にも換えられねえと云つて大事にしている宝だから、毀した者は指を切れという先祖さまの遺言状が伝わつて居るので、指を切られた奴が四五人あります」

母「おゝ怖いこと、其様な怖い処へ此の娘を奉公に遣られますかね、とても遣られませんよ、何うして怖くない、皿を毀した者の指を切るといふ御遺言だか何だか知らんけれども、其の皿を毀したものの指を切るなんぞとは聞いても慄とするようだ、何うしてゝ、人の指を切ると云うような其様な非道の心では、平常も矢張り酷かろう、其様な処へ奉公がさ

せられますものか、瘦せても枯れても遠山龜右衛門の娘じやアないか、幾許零落ても、私は死んでも生先の長いお前が大切で私は最う定命より生延びている身体だから、私の病気が癒つたつて、お前が不具になつて何うしましょう、詰らぬ事を云い出しましたよ、苦し紛れに悪い思案、何うでも私は遣りませんよ」

千「然うではありましようけれども、なに気を附けたら其様な事は有りますまい、私も宜く神信心をして丁寧に取り扱えば、毀れるような事はありますまいと存じますからねお母さま、私は一生懸命になりまして奉公を仕遂せ、其の中あなたの御病気が御全快になれば、私が帰つて来て、御一緒に内職でもいたせば誠に都合じやアございませんか、何卒遣つて下さいまし、ねえお母さま、あなた私の身をお厭いなすつて、あなたに万一の事でも有りますと、矢張り私が仕様がなないじやア有りませんか」

母「はい、有難うだけれども遣れませんが、亡つたお父さんのお位牌に対して、私の病を癒そうためにお前を其様な恐ろしい処へ奉公に遣つて済むものじやアない、のう丹治」  
丹「へえ、あなたの云う事も道理でござえます、これは遣れませんか」

千「だけでも爺や、お母さんの御病気の癒らないのを見すく知つて、安閑として居られる訳のものではないから、私は奉公に往き仮令粗相で皿を一枚毀した処が、小指一本切ら

れたつて命にさわるわけではなし、お母さまの御病気が癒った方が宜いわけじゃアないか」  
 丹「うん、これは然うだ、然う仰しやると無理じゃアない、棄置けば死ぬと云うものを、  
 あなたが何う考えても打棄つて置かれねえが、成程是れは奉公するも宜うござえましよ  
 う」

母「お前馬鹿な事ばかり云っている、私が此の娘を其様な処へ遣られるか遣られないか考  
 えて見なよ、指を切られたら肝心な内職が出来ないじゃアないか、此の困る中で猶々困  
 ります、遣られませんよ」

丹「成程是れはやれませんな、何う考えても」

千「あらまア、あんな事を云つて、何方へも同じような挨拶をしては困るよ」

丹「へえ、是れは何方とも云えない、困ったねえ：じゃア斯うしましょう、私がの媪を何  
 卒お頼ん申します、私がお嬢さまの代りに奉公に参りまして、私が其の給金を取りますか  
 ら、お薬を買つて下せえまし」

千「女でなければいけない、男は暴々しくて度々毀すから女に限るといふ事は知れて  
 居るじゃアないか」

丹「然うだね、男じゃア毀すかも知れねえ、私等は何うも荒つぽくつて、并鉢を打毀し

たり、厚ぼつてえ摺鉢すりばちを落して破つた事もあるから、困つたものだアね」

千「お母さん、何卒どうぞやって下さいまし」

と幾度いくたびも繰返しての頼み、段々母を説附とくつけまして丹治も道理もつともに思つたから、

丹「そんならばお遣つかなすつた方が宜よろかろう」

と云われて、一旦母も拒みましたが、娘は肯きかず、殊ことに丹治も俱とも々々、勧めますので、仕方がないと往生てつるをしました。幸い他に手蔓てづるが有つたから、縁かを求めて彼の東山作左衛門方へ奉公の約束をいたし、下男うけにんの丹治が受人うけにんになりました、お千代は先方へ三ヶ年三十両の給金で住込む事になりましたのは五月の事で、母は心配でございしますが、致し方がないので、泣く泣く別れて、さて奉公に参つて見ると、器量よは佳し、起居動作物たちいふるまいの云いよう、一点も非の打ち処とこがないから、至極作左衛門の氣に入られました。

## 三

作左衛門はお千代の様子を見まして、是れならば手篤てあつく道具を取扱つてくれるだろう、誠に落着いて、宜よい、大切な物を扱あうに真実で粗相がないから宜いと、大層作左衛門は目



をかけて使いました。此の作左衛門の忤せがれは長助ちようすけと申して三十一歳になり、一旦女房を貰いましたが、三年前ぜんぜんに少し仔細有つて離別りべついたし、独身ひとりみで居ります所が、お千代は何うも器量きりやうが好いので心底しんぞこから惚れぬきまして真実まじつにやれこれ優とりなしく取做して、長「あれを買つてお遣やんなさい、見苦しいから彼の着物あを取換えて、帯を買つてやつたら宜よろからう」

などと勧めますと、作左衛門も一人ひとり子の申すことですから、其の通りにして、お千代くくと親子共に可愛がられお千代は誠に仕合せで丁度七月のことで、暑い盛りに本山寺ほんざんじという寺に説法せっぽうが有りまして、親父おやじが聴ききに参まゐりました後あとで、奥の離れた八畳の座敷へ酒肴けさかなを取り寄せ、親父の留守を幸い、鬼の居ないうちに洗濯で、長助が、

長「千代やく、千代」

と呼びますから、

千「はい若殿様、お呼び遊あそばしましたか」

長「一寸ちよつと来い、く、今いま一盃いっぱいやろうと云うんだ、お父さんのお帰りのない中うちに、今日けふはちとお帰りが遅くなるだろう、事に寄ると年寄の喜八郎きはちろうの処へ廻ると仰しやつたが村の年寄の処へ寄れば話が長くなつて、お帰日も遅くなるう、ま酌しやくをして呉れ」

千「はい、お酌を致します」

長「手櫛たすきを脱とんなさい、忙いそがしかろうが、何もお前は台だい所どころを働かんでも、一切道具道具ばかり取扱おつて居れば宜よいんだ」

千「あの大殿様がお留守でございませうから宜よいお道具は出だしませんで、粗末そまつと申しては濟たみませんが、皆此みなの様な物で宜よしゆうございませうか」

長「酌たくはは美女たば、食くい物は器もので、宜よい器けでないと肴さかなが旨うまく喰くえんが、酌たくははお前まへのような美しい顔かほを見ながら飲のむと酒さけが旨うまいなア」

千「御冗談ご冗談ばかり御意遊ごいばします」

長「酔よわんと極ごくりが悪いから酔ようよ」

千「お酔よい遊あそばせ、ですが余あまり召上めいじやうると毒どくでございませうよ」

長「まだ飲のみもせん内うちから毒どくなどと云いつちやア困こるが、実まことにお前は堅かたいねえ」

千「はい、武骨ぶこつ者ものでいけません」

長「いや、お父ちちさんがお前まへを感じかんじているよ、親孝行おんこうぎやうで、何なにを見ても聞きいても母ははの事ことばかり云いつて居ゐるつて、併しかしお前まへのお母ははの病びやう気きも追お々々全快ぜんがいになると云いう事ことで宜よいの」

千「はい、御当ごなた家たさまのお蔭かげで人參じんじんを飲のみましたせいせいか、段々だんだん宜よしくなりまして、此このの程ほど

病褥とこを離れましたと丹治がまいつての話でございですが、母が申しますに、其方そちのような行届ゆきときません者を置いて下さるのみならず、お目を掛けて下さいまして、誠に有難いこととで、種々いろく戴き物をしたから宜しく申上げてくれと申しました」

長「感心だな、お前は出が宜いと云うが……千代く千代」

千「はい」

長「どうも何だね、お前は十九かえ」

千「はい」

長「ま一盃酌いで呉んな」

千「お酌を致しましょう」

長「半分残してはいかんな、何うだ一盃飲まんか」

千「いえ、私は些とも飲めません、少し我慢して戴きますと、顔が青くなつて身体が震えます」

長「その震える処がちよいと宜しいて、私は酔いますよ、お前は色が白いばかりでなく、頬の辺眼へんの縁ふちがぼうと紅いのう」

千「はい、少し逆上のぼせて居りますから」

長「いや逆上のぼせではない、平常ふだんから其の紅い処が何とも言われん」

千「御冗談ばかり……」

長「冗談じゃアない、全くだ、私わしは三年前まえに家内を離別したて、どうも心掛けの善くない女で、面倒だから離縁をして見ると、独身ひとりみで何かと不自由でならんが、お前は誠に氣立が宜しいのう」

千「いゝえ、誠に届きませんでいけません」

長「此の間私わしが……あの……お前笑つちやア困るが、少しばかり私が斯う五いっくだり行ほどの手紙を、……認しためて、そつとお前の袂たもとへ入れて置いたのを披ひらいて読んでくれたかね」

千「左様でございましたか、一向存じませんで」

長助は少し失望ていの体で、

長「左様でございますかなど、落着き払つていては困る、親に知れては成らん、知つての通り親父は極堅ごくけんいので、あの手紙を書くにも隠ひそれて漸ようよう二行にぎようぐらい書くと、親父に呼ばれるから、筆を下に置いて又一ひとくだり行書き、終しまいの一行は庭の植うえ込みの中で書きました  
が、蚊に喰われて弱つたね」

## 四

千「それはまあお気の毒さま」

長「なに全くだよ、親父に知れちやア大変だから、窃<sup>そつ</sup>とお前の袂へ入れたが、見たろう／＼」

千「いゝえ私<sup>わたくし</sup>は気が付きませんでした、何だか私の袂に反古<sup>ほご</sup>のようなものが入つて居ましたが、私は何だか分りませんで、丸めて何処<sup>どこ</sup>かへ棄てましたよ」

長「棄てちやア困りますね、他人<sup>ひと</sup>が見るといけませんな」

千「そんな事とは存じませんもの、貴方<sup>あなた</sup>はお手紙で御用を仰<sup>おおせつ</sup>付けられましたのでございますか」

長「仰付けられるなんて馬鹿に堅いね、だがね、千代く」

千「何でございます」

長「実はね私<sup>わし</sup>はお前に話をして、嫁に貰いたいと思うが何うだろう」

千「御冗談ばかり御意遊ばします、私<sup>わたくし</sup>の母は他に子と申すがありませんから、他家<sup>わき</sup>へ嫁にまいる身の上ではございませぬ、貴方は衆人<sup>ひと</sup>に殿様と云われる立派なお身の上でお在遊<sup>いで</sup>

ばすのに、私のようなはしたない者を貴方此様な不釣合で、釣合わぬは不縁の元ではございませんか、お家のお為めに成りません」

長「なに家の為めになつてもならんでも不釣合だつて、私は妻を定むるのに身分の隔てはない事で、唯お前の心掛けを看抜いて、此の人ならばと斯う思つたから、実はお前に心のたけを山々書いて贈つたのである、然も私は丹誠して千代尽しの文で書いて贈つたんだよ」  
千「何でございますか私は存じませんもの」

長「存じませんで、私の丹誠したのを見て呉れなくつちやア困りますなア、どうかお前の母に会つて、母諸共引取つても宜しいや」

千「私の母は冥加至極有難いと申しましようけれども、貴方のお父様が御得心の有る氣遣いがありますまい、私のようなはしたない者を御当家さまの嫁に遊ばす氣遣いはございませんもの」

長「いえ、お前が全く然う云う心ならば、私は親父に話をするよ、お前は大変親父の氣に入つてるよ、どうも沈着があつて、器量と云い、物の云いよう、何や角や彼れは別だと云つて居るよ」

千「なに、其様な事を仰しやるものですか」

長「なに全く然う云つてるよ、宜いじやアないか、ね千代く千代」

と雀が出たようで、無理無態にお千代の手を我膝へグツと引寄せ、脇の下へ手を掛けようとする、振払い。

千「何をなさいます、其様な事を遊ばしますと、私は最うお酌にまいりませんよ」

長「酔った紛れに、少しは酒の席では冗談を云いながら飲まんと面白うないから、一寸やつたんだが、どうもお前は堅いね、千代く」

千「はい最うお酌を致しますまいと思ひます、最うお止し遊ばせ、お毒でございますよ」

長「千代く」

千「また始まりました」

長「親さえ得心ならば何も仔細はあるまい、何うだ」

千「そうではありますが、まア若殿様、私の思ひますには、夫婦の縁と云うものは仮令親が得心でも、当人同志が得心でない事は夫婦に成れまいかと思ひます」

長「それは然うさ、だがお前さえ得心なら宜いが、いやなら否と云えば、私も諦めが附こ  
うじやアないか」

千「私のような者を、私の口から何う斯うとは申されませんものを、余り恐入りました」

其の時お千代は身を背けまして、

千「何とも申上げられませんが、余り恐入りまして」

長「恐入らんでも宜しいさ、お母さえ得心なら、母諸共此方へ引取つて宜しい、もし窮屈きやくで否いやならば、聊か田地でんじでも買い、新家しんやを建つて、お母に下婢おんなの一人も附けるくらいの手当をして遣ろうじやアないか。此の家は皆私わしのもので、相続人の私だから何うにもなるから、お前さえ応おうと云えば、お母に話をして安樂にして遣ろうじやアないか、若もしお母は堅いから遠山の苗字を継ぐ者がないとでもいうなら、夫婦養子をしたつて相続人は出来るから、お前が此方こつちへ来ても仔細こつちないじやアないか」

千「それは誠に結構な事で」

長「結構なれば然そうしてくれ」

千「お嬉しゆうは存じますか」

長「さ、早くお父さまの帰らん内に応うんと云いな、酔つた紛れにいう訳じやアない、真実の事だよ」

千「私は貴方わたくしに対して申上げられませんが、御主人さまへ勿体なくつて……」

長「何も勿体ない事は有りませんから早く云いなさいよ」



千「恐入ります」

長「其そんな様に差はずかしがらんでも宜しいよ」

千「貴方わたくし私わたしのような卑ひしい者の側へお寄り遊ばしちやアいけません、私が困ります、そうして酒臭くつて」

長「ね千代く千代」

千「それじゃア貴方、本当に私わたくしが思う心の丈たけを云いましょうか」

長「聞きましょう」

千「それじゃア申しますが、屹きつと度、∴身分も顧りみず大それた奴だと御立腹では困ります」

長「腹などは立たんからお云いよ、大それたとは思いません、小それた位ぐらいに思います、云つて下さい」

千「本当に貴方御立腹はございせんか」

長「立腹は致しません」

千「それなれば本当に申上げますが、私わたくしは貴方あなたが忌いやなので……」

長「なに忌だ」

千「はい、私わたくしはどうも貴方が忌でございます、御主人さまを忌だなどと云つては済みませ

んけれども、真底私は貴方が忌でございます、只御主人さまでいらつしやれば有難い若殿さまと思つて居りますが、艶書てがみをお贈り遊ばしたり、此の間から私にちよいと御冗談を仰しやることもあつて、それから何うも私は貴方が忌になりました、どうも女房に成ろうという者の方で否いやでは迎とても添われるものじやアございませぬから、素もとより無い御縁とお諦め遊ばして、他わきから立派なお嫁をお迎えなすつた方が宜しゆうございましょう、相当の御縁組でないと御相続の爲になりませんから、確しかとお断り申しますよ」

長「誠にどうも……至極道理……」

と少しの間は額へ筋が出て、顔がんしょく色いろが變つて、唇をブルブル震わしながら、暫く長助が考えまして、

長「千代、至極道理もつともだ、最う千代くと続けては呼ばんよ、一言ひとことだよ、成程何うもえらい、賢女だ、成程どうも親孝心、誠に正しいものだ、心掛けと云い器量と云い、余り氣に入つたから、つい迷いを起して此こ様な事を云い掛けて、誠に羞はじ入つた、再び合す顔はな いけれども、真に思つたから云つたんだよ、併しかしお前に然そう云われたから諦めませよ確しかと断念しましたが、おまえ此のことを世間へ云つてくれちやア困りますよ、私わしは親父とんに何様な目に遇うか知れない、堅い氣象の人だから」

千「私は世間へ申す処じやア有りませんが、あなたの方で」

長「私は決して云わんよ、云やア自ら恥辱を流布するんだから云いませんが、あゝ……誠  
に愧入った、此の通り汗が出ます、面目次第もない、何卒堪忍して下さい」

千「恐入ります、是れから前々通り主家来、矢張千代く〜と重ねてお呼び遊ばしまして、  
お目をお掛け遊ばしまして……」

長「そう云う事を云うだけに私は誠に困りますなア」

千「誠に恐入ります、大旦那さまのお帰り遊ばしません内に、お酒の道具を隠しましよ  
うか」

長「あゝ仕舞っておくれ〜」

千「はい」

とそれ／＼道具を片付けましたが、是れから長助が憤ってお千代につれなく当るかと思  
いました処、情なくも当りませんで、尚更宜く致しまして、彼の衣類は汚い、九月の節  
句も近いから、これを拵えて遣るが宜いと、手当が宜いので、お千代もあゝお諦めにな  
ったか、有難い事だ、あんな事さえないと結構な旦那様であると一生懸命に奉公を致しま  
すから、作左衛門の気にも入られて居りました。月日流るゝが如くで、いよ〜九月の節

句と成りました。桑野美作守の重役を七里先から呼ばなければなりません、九の字の付く客を二十九十八人招待を致し、重陽を祝する吉例で、作左衛門は彼の野菊白菊の皿を自慢で出して観せませす。美作守の御勘定奉行九津見吉左衛門を初め九里平馬、戸村九右衛門、秋元九兵衛其の他御城下に加賀から九谷焼を開店した九谷正助、菊橋九郎左衛門、年寄役村方で九の字の附いた人を合せて十八人集めまして、結構な御馳走を致し、善い道具ばかり出して、頻りに自慢を致します事で、実に名器ばかりゆえ、客は頻りに誉めます。此の日道具係の千代は一生懸命に、何卒無事に役を仕遂せませすようにと神仏に祈誓を致して、皿の毀れんように気を付けましたから、麁相もなく、彼の皿だけは下つてまゐります。自分は蔵前の六畳の座敷に居つて、其処に膳棚道具棚がありますから、口分をして一生懸命に油汗を流して、心を用い働いて、無事に其の日のお客も済んで、翌日になりますと、作左衛門が、

作「千代」

千「はい」

作「昨日は大きに御苦勞であつた、無事にお客も済んだから、今日は道具を檢めなければならん」

千「はい、お番附のございますだけは大概片付けました」

作「うむ、皿は一応検めて仕舞わにやならん、何かと御苦勞で、嘸骨が折れたらう」

千「私は一生懸命でございました」

作「然うであつたらう、此の通り三重の箱になつてゐるが、是は中々得難い物だよ、何処へ往つたつて見られん、女で何も分るまいが、見て置くが宜い」

千「はい、誠に結構なお道具を拝見して有難い事で」

作「一応検めて見よう」

と眼鏡をかけて段々改めて、

作「あゝ、先ず無事で安心を致した、是れは八年前に是れだけ毀したのを金粉繕いにし  
て斯うやつてある、併し残余は瑕物にしてはならんから、どうかちやんと存して置きた  
い、是れだけ破つた奴があつて、不憫にはあつたが、何うも許し難いから私は中指を切ろ  
うと思つたが、それも不憫だから皆な無名指を切つた」

千「怖い事でございます、私は此のお道具を扱いますとはらく致します」

作「是れは無い皿だよ、野菊と云つて野菊の色のように紫がゝつてる処で此の名が有るの  
じゃ、種々先祖からの書附もあるが、先ず無事で私も安心した」

と正直な堅い人ゆえ、検めて道具棚へ載せて置きました。すると長助が座敷の掛物を片付けて、道具棚の方へ廻つて参まりました。

長「お父とつさま」

作「残らず仕舞つたか」

長「お軸物は皆仕舞いました」

作「客は皆道具を誉めたらう」

長「大層誉めました、此の位の名幅めいぶくを所持している者は、此の国にやア領主にも有るまいとの評判で、お客振りも甚ひとく宜しゆうございました」

作「皆良い道具が見たいから来るんだ、只呼んだつて来るものか、権式けんしきぶ振つて、併し土産も至極宜かつたな」

長「はい、お父とつさま、あの皿を今一応お検めを願います、野菊と白菊と両りよう様共ようとともお検めを願います」

作「彼あれは先刻さつき検めました」

長「お検めでございませうが、少し訝おかしい事が有りますと云うは棚の脇こんにやくのりに蒟蒻糊こんじやくのりが板の上に溶いて有つて、粘つていますから、何だか案じられます、他の品でありませんか

ら、今一応検めましようかね、秋、お前たちは其方へ行きなさい、金造、裏手の方を宜く掃除して置け、喜八、此方へ参らんようにして、最う大概蔵へ仕舞ったか、千代や」

千「はいくはい」

長「先刻お父さんがお検めになったそうだが、彼の皿を此処へ持って来い」

千「はい、先刻お検めになりました」

長「検めたが、一寸気になるから今一応私が検めると云うは、祝いは千年だが、お父さまのない後は家の重宝で、此の品は私が守護する大事な宝物だから、私も一応検めます」

千「大旦那さまがお検めになりました、宜しい、少しも仔細ないと御意遊ばしましたのに、貴方何う云う事でお検めになります」

長「先程お父さまがお検めになつても、私は私で検めなければ気が済まん」

千「何う云う事で」

長「何う云う事なんてとぼけるな、千代汝は皿を割つたの」

五

お千代は呆れて急に言葉も出ませんでした、

千「何うもまあ思い掛けない事を仰しやいます私は割りました覚えはございません、ちやんと一々お検めになりました、後は柔かい布巾で拭きまして、一々彼の通り包みまして、大殿様へ御覧に入れました」

長「いや耄けるなそんなら如何の理由で棚に糊付板が有るのだ」

千「あれはお箱の蓋の棧が剥れましたから、米搗の權六殿へ頼みまして、急に拵えに竹篋を削つて打つてくれましたの」

長「耄けるな、其様なことを云つたつて役には立たん、巧く瞞かそうたつて、然うはいかんど、此方は確と存じておる、これ千代、其の方が怪しいと認めが附いて居ればこそ検めなければならんのだ早く箱を持って来い」

と云われてお千代はハツとばかりに驚きましたが、何ゆえ長助が斯様なことを云うのか分りませんでした、彼の通り検めたのを毀したと云うのは変だなど考えて、よう／＼思い当りましたのは、先達て愛想尽しを云つた恨みが、今になつて出て来たのではない、何事も無ければ宜いがと怖々、にお千代が野菊白菊の入つた箱を長助の眼の前へ差出しますと、作左衛門が最前検めて置いた皿の毀れる氣遣いはない、忤は何を云うのかと



存じて居りますと、長助は顔色かおいろを変えて、

長「これ千代、それ道具棚にある糊付板を此処こゝへ持つて来い……さ何う云う訳で此板これを道具棚へ置いた」

千「はい、只今申上げます通り、あのお道具の箱の棧とが剥れましたから、打付けて貰おうと存じますと、米搗の權六が己おれが附けて遣ろうと申して附けてくれましたので」

長「いゝや言訳をしたつて役には立たん、其の箱の紐をサツサと解け」

千「そうお急ぎなさいますと、また粗相をして毀すといけませんもの」

長「汝おのれが毀して置きながら、又其様そんなこと申す其の手はくわぬぞ、私わしが箱から出す、さ此処こゝへ出せ」

千「あなた、お静かになすつて下さいまし、暴々あらくしく遊ばして毀れますと矢張り私わたくしの所為いになります」

作「これこれ長助、手暴くせんが宜よい、腹立紛れてまえに汝おのれが毀すといかんから、矢張り千代お前まへ検めるが宜よい」

千「はい〜」

と是れから野菊の箱の紐を解いて蓋を取り、一枚〜皿を出しまして長助の眼の前ならへ列

べまして。

千「御覽遊ばせ、私が先刻検めました通り瑾は有りやアしません」

長「黙れ、毀した事は先刻私が能く見て置いたぞ、お父さま、迂濶りしてはいけません、此者は中々油断がなりません、さ、早く致せ」

千「其様なに仰しやつたつて、慌てゝ不調法が有るといけません、他のお道具と違ひまして、此品が一枚毀れますと私は不具になりますから」

長「不具になつたつて、受人を入れて奉公に来たんじやアないか、さ早く致せ」

千「早くは出来ません」

と申して検めに掛りましたが、急がれる程尚おおじく致しますが、一生懸命に心の内に神仏を念じて粗相のないようにと元のように皿を箱に入れてしまい、是れから白菊の方の紐を解いて、漸々三重箱迄開け、布帛を開いて皿を一枚ずつ取出し、検めては布帛に包み、ちゃんと脇へ丁寧に置き、

千「是で八枚で、九枚で十枚十一枚十二枚十三枚十四枚十五枚十六枚」

と漸々勘定をして十九枚と来ると、二十枚目がポカリと毀れて居たから恟り致しました。千「おや……お皿が毀れて居ります」

長「それ見ろ、お父様御覽遊ばせ、此の通り未だ粘りが有ります此の糊で附着けて瞞か  
そうとは太い奴では有りませんか」

千「いえ、先程大殿様がお検めになりました時には、決して毀れては居りません」

長「何う仕たつて此の通り毀れて居るじやアないか」

千「先刻は何とも無くつて、今毀れて居るのは何う云う訳でしょう」

作「成程斯う云う事があるから油断は出来ない、これ千代毀りようも有ろうのに、ちよつと欠いたとか、罅が入った位ならば、是れ迄の精勤の廉を以て免すまいものでもないが、斯う大きく毀れては何うも免し難い、これ、何は居らんか、何や、何やでは分らん、お、それ〱辨藏、手前はな、千代の受人の丹治という者の処へ直に行つてくれ、余り世間へばつと知れん内に行つてくれ、千代が皿を毀したから証文通りに行うから、念のために届けると云つて、早く行つて来い」

辨「へえ」

と辨藏は飛んで行つて、此のことを気の毒そうに話をすると、丹治は驚きまして、母の処へ駈込んでまいり。

丹「御新造さまア……」

母「おや丹治か、先刻は誠に御苦労、お蔭で余程宜いよ」

丹「はつく、誠にはや何ともどうも飛んだ訳になりました」

母「ド、何うしたの」

丹「へえ、お嬢様が皿ア割ったそうで」

母「え……丹治皿を彼が……」

丹「へえ、只今彼家の奉公人が参りまして、お千代どんが皿ア割っただ、汝受人だアから何ほ証文通りでも断りなしにやア扱えねえから、ちよつくら届けるから、立合うが宜いと思つて来ました、私が考えますに、先方はあゝ云う奴だから、詫びたつても肯くまいと思つて、私が急いでお知らせ申しに来やしたが、お嬢さまが彼家へ住込む時、虫が知らせましたよ、門の所まで私送り出して来たアから、貴方皿ア割つちやアいけないよと云つたら、お嬢様が余程薄いもんだそうだし、原土で拵えたもんだから割れないとは云えないから、それを云つてくれちやア困るよと仰しやいましたが、何とまア情ねえ事になりましたな、どうか詫をして見ようかと思いません」

母「それだから私が云わない事じやアない、彼の娘を不具者にしちやア濟まないから、私も一緒に連れてつておくれ」

丹「連れて行けたって、あんた歩けますまい」

母「歩けない事もあるまい、一生懸命になつて行きますよ、何卒どうぞお願いだから私の手を曳いて連れてつておくれ」

丹「だがはア、是れから一里もある処で、なか／＼病揚句やみあげくで歩けるもんじやアねえ」

母「私は余りびつく悔りしたんで腰が脱けましたよ」

丹「これはまア仕様がねえ、私わしまで腰が脱けそうだが、あんた腰が脱けちやア駄目だ」

母「何卒どうぞお願いだから……一通りあれ彼の心術こころだてを話し、孝行のために御当家ごちちらさまへ奉公に

来たと、次第を話して、何処までも私がお詫をして指を切られるのを遁のがれるようにします

から、丹治誠にお気の毒だが、負おぶつておくれな」

丹「負つてくれたつて、ちよつくら四五丁の処なれば負つて行つても宜えいが……よし／＼

宜ようござえます、私わしも一生懸命だ」

と其の頃の事で人力車くるまはなし、また駕籠かごに乗るような身の上でもないから、丹治が負つてせつせと参りました。此方こちらは最前から待ちに待つて居ります。

作「早速庭へ通せ」

という。百姓などが殿様御前などと敬い奉りますから、益々増長して縁近き所へ座布団

を敷き、其の上に座して、刀掛に大小をかけ、凜々しい様子で居ります。両人は庭へ引出され。

丹「へえ御免なせえまし、私は千代の受人丹治で、母も詫びことにまいりました」

作「うむ、其の方は千代の受人丹治と申すか」

丹「へえ、私は年来勤めました家来で、店請致して居る者でござえます」

作「うん、其処へ参つたのは」

母「母でございます」

と涙を拭きながら、

「娘が飛んだ不調法を致しまして御立腹の段は重々御尤さまでござりますが、何卒老体の私へお免じ下さいまして、御勘弁を願ひとう存じます」

作「いや、それはいかん、これはその先祖伝来の物で、添書も有つて先祖の遺言が此の皿に附いて居るから、何うも致し方がない、切りたくはないけれども御遺言には換えられんから、止むを得ず指を切る、指を切つたつて命に障る訳もない、中程から切るのだから、何も不自由の事もなからう」

母「はい、でございますけれども、此の千代は親のために御当家様へ御奉公にまいりまし

たので、と申すは、私が長煩いで、人参の入った薬を飲めば癒ると医者に申されましたが、長々の浪人ゆえ貧に迫つて、中々人参などを買う手当はございませんのを、娘が案じまして、御当家のお道具係を勤めさえすれば三年で三拾両下さるとは莫大の事ゆえ、それを戴いて私を助けたいと申すのを、私も止めましたけれども、此娘が強つてと申して御当家さまへ参りましたが、親一人子一人、他に頼りのないものでございます、今此娘を不具に致しましては、明日から内職を致すことが出来ませんから、何卒御勘弁遊ばして、私は此娘より他に力と思うものがございませんから」

長「黙れ、幾回左様な事を云つたつて役に立たん、其のために前々奉公住みの折に証文を取り、三年に三拾金という給金を与えてある、斯の如く大金を出すのも当家の道具が大切だからだ、それを承知で証文へ判を押して奉公に來たのじゃアないか、それに粗相でもある事か、先祖より遺言状の添えてある大切の宝を打碎き、糊付にして毀さん振をして、箱の中に入れて置く心底が何うも憎いから、指を切るのが否なれば頬辺を切つて遣る」

母「何卒御勘弁を……」

と泣声にて、

「顔へ疵きずが付きましては婿取前の一人娘で、何う致す事も出来ません」

長「指を切つては内職が出来んと云うから面つらを切ろうと云うんだ、疵が出来たって、後あとで膏藥を貼れば癒る、指より顔の方を切つてやろう」

と長助が小ちいさ刀がたなをすらりと引抜いた時に、驚いて丹治が前へ膝行すざり出まして、

丹「何卒どうぞお待ちなすつて下せえまし」

長「何だ、退のけ〜」

丹「お前さまは飛んだお方だアよ」

長「何が飛んだ人だ」

丹「成程証文は致しやしただけけれども、人の頬ほ邊ぺたを切るてえなア無ねえ事です」

長「手前は何のために受人に成つて、印いんぎよう形がたを捺ついた」

丹「印形だつて、是程やに厳かましかアねえと思つたから、印形を捺おきやした、ほんの掟おきてで、一寸よつと小指へ疵を附けるぐれえだアと思ひやしたが、指を打切ぶられると此のちの後内職が出来ま

せん、と云つて無闇に頬邊ほなんて、どう云うはずみで鼻でも落したらそれこそ大變だ、情ねえ事で、嬢さんの代りに私わしを切つておくんなせえ」

長「いや手前を切る約束の証文ではない、白痴たわけた事を云うな、何のための受人だ」



丹「受人だから私が切られようというのだ」

長「黙れ、証文の表に本人に代つて指を切られようと言う文面はないぞ、さ顔を切つて遣る」

と丹治と母を突きつけ、既に庭下駄を穿いて下りにかゝるを、母は是れを遮り止めようと致すを、千代が、

千「お母様、是れには種々理由がありますんで、私が少し云い過ぎた事が有りまして、斯う云う事に成りまして済みませんが、お諦め遊ばして下さいまし、さア指の方は内職に障つて母を養う事が出来ませんから顔の方を……」

長「うん、顔の方か、此方の所望だ」

作「これく長助、顔を切るのは止せ」

長「なに宜しい」

作「それはいかん、それじやア御先祖の御遺言状に背く、矢張指を切れく、不憫にも思うが是れも致し方がない、従来切来つたものを今更仕方がない、併し長助、成丈指を短かく切つてやれ」

長「さ切つてやるから、己の傍へ来て手を出せ」

千「はい何うぞ……」

母「いえ、私わたくしを切つて下さいまし、私は死んでも宜いい年でござります」

丹「旦那、私わしの指を五本切つて負けておくんなせえ」

長「控えろ」

と今千代の腕を取つて既に指を切りにかゝる所へ出て来た男は、土間で米を搗ついていました權六という、身の丈たけ五尺五六寸もあつて、鼻の大きい、胸から脛すねへかけて熊毛くまげを生はやし、眼の大きな眉毛の濃い、髯ひげの生えている大の男で、つか／＼と出て来ました。

六

此の時權六は、作左衛門の前へ進み出まして、

權「はい少々御免下さいまし、權六申上げます」

長「なんだ權六」

權「へえ、実は此の皿を割りました者は私わしだね」

長「なに手前が割つた……左様な白痴たわけたことを云わんで控えて居れ」

權「いや控えては居られやせん、よく考えて見れば見る程、あゝ悪い事をしたと私や思  
いやした」

長「何を然う思つた」

權「大殿様皿を割つたのは此の權六でがす」

作「え……其の方は何うして割つた」

權「へえ誠に不調法で」

作「不調法だつて、其の方は台所にはかり居て、夜は其の方の部屋へまいつて寝るのみで、  
蔵前の道具係の所などへ参る身の上でない其の方が何うして割つた」

權「先刻箱の棧が剥れたから、どうか繕つてくんろてえから、糊をもつて私が繕ろうと思  
つて、皿の傍へ参つたのが事の始まりでござえます」

千「權六さん、お前さんが割つたなどと……」

權「えーい黙つていろ」

丹「誠に有難うござえます、私は此の千代さんの家の年来の家来筋で、丹治と云う者で、  
成程是れは此の人が割つたかも知れねえ、割りそうな顔付だ」

權「黙つて居なせえ、お前らの知つた事じゃアない、えゝ殿様、誠に羞かしい事だが、此

の千代が御当家へ奉公に参つた其の時から、私は千代に惚れたの惚れねえのと云うのじやアねえ、寝ても覚めても眼の前へちらつきやして、片時も忘れる暇もねえ、併し奥を働く女で、台所へは滅多に出て来る事はありませんが、時々台所へ出て来る時に千代の顔を見て、あゝ何うかしてと思ひ、幾度か文を贈つちやア口説いただアね」

長「黙れ、其の方がどうも其の姿や顔色にも愧じず、千代に惚れたなどと怪しからん奴だなア、乃で手前が割つたというも本当には出来んわ、馬鹿々々しい」

權「それは貴方、色恋の道は顔や姿のものじやアねえ、年が違ふのも、自分の醜い器量も忘れてしまつて、お千代へばかり念をかけて、眠ることも出来ず、毎晩夢にまで見るような訳で、是程私が方で思つて文を附けても、丸めて棄てられちやア口惜しかろうじやアござえやんせんか」

長「なんだ……お父さまの前を愧じもせずに怪しからん事をいう奴だ」

と口には云えど、是れは長助がお千代を口説いても弾かれ、文を贈つても返事を遣さずで恥かしめられたのが口惜しいから、自分が皿を毀したんであります。罪なきお千代に罪を負わせ、然うして他へ嫁に往く邪魔に成るようにお千代の顔へ疵を附けようとする悪策を權六が其の通りの事を申しましたから、長助は変に思ひまして、

長「手前は全く千代に惚れたか」

權「え、惚れましたが、云う事を肯かねえから可愛さ余つて憎さが百倍、嫁に行く邪魔をして呉れようと、九月のお節句にはお道具が出るから、其の時皿を打毀して指を切り不具にして生涯亭主の持てねえようにして遣らうと、貴方の前だが考えを起しまして、皿、検めの時に箱の棧が剥れたてえから、糊でもつて貼けてやる振をして、下の皿を一枚毀して置いたから、先ず恋の意趣晴しをして嬉しいと思ひ、実は土間で腕を組んで悦んでいと、此の母さまが飛んで来て、私が病苦を助けてえと危え奉公と知りながら参つて、人参とかを飲まそうと親のために指を切られるのも覚悟で奉公に来たアから、代りに私を殺して下せえ、切つて下せえと子を思ふお母の心も、親を助けてえというお千代の孝行も、聴けば聴く程、あゝ一実に私汚ねえ根性であった、何故此様な意地の悪い心になつたかと考えたアだね、私が是れを考えなければ狗畜生も同様でござえますよ、私ア人間だアから考えました、はア一悪い事をしたと思ひやしたから、正直に打明けて旦那さまに話いして、私が千代に代つて切られた方が宜いと覚悟をして此処え出やした、さアお切んなせえ、首でも何でもお切んなせえまし」

長「妙な奴だなア、手前それは全くか」

權「へえ、私が毀しやした」

作「成程長助、此者が毀したかも知れん、懺悔をして自分から切られようという以上は、然うせんければ宜しくない、併し久しく奉公して居るから、平生の氣象も宜く知れて居るが、口もきかず、誠に面白い奴だと思つていた、殊に私に向つて時々異見がましい口答えをする事もあり、正直者だと思つて目を掛けていたが、他人の三層倍も働き、力も五人力とか、身体相応の大力を持つていて役にも立つと思つていたに、顔形には愧じず千代に恋慕を仕掛るとは何の事だ、うん權六」

權「はい誠に面目次第もない訳で、何卒私を………」

千「權六さん、お前私へ恋慕を仕掛けた事も無いのに、私を助けようと思つて然う云つてお呉れのは嬉しいけれども、それじゃア私が済みません」

權「え、い、其様なことを云つたつて、今日誠実を照す世界に神さまが有るだから、まあ私が言うことを聞け」

長「いや、お父さまは何と仰しやるか知らんが、どうも此の長助には未だ腑に落ちない事がある權六手前が毀したと云う何ぞ確な証拠が有るか」

權「え、証拠が有りやすから、其の証拠を御覧に入れやしよう」

長「ふむ、見よう」

權「へえ只今……」

と云いながら、立つて土間より五斗張ごとうはりの白を持ってまいり、庭の飛石の上にならずしりと両手で軽々と下おろしたは、恐ろしい力の男であります。

權「これが証拠でござえます」

と白菊の皿の入った箱を白の中へ入れました。

長「何を致すく」

權「なに造作ぞうさア有りません」

と何時いつの間まに持つて来たか、杵きねの大きいのを出して振上げ、さくーりつと力に任せて箱諸共に打碎ういたから、皿が微塵きじんに砕けた時には、東山作左衛門は驚きました。其処そこに居りました者は皆顔を見合せ、呆氣あつけに取られて物をも云わず、

一同「むむう……」

作左衛門は憤おこつたの憤らないのでは有りません。突然いきなり刀掛やぶに掛けて置いた大刀ひつさを提げ、顔の色を変え、

作「不埒おのれ至極の奴だ、汝氣おのれが違つたか、飛んだ奴だ、一枚毀してさえ指一本切るといふに、

二十枚箱諸共に打碎くとは……よし、さ己が首を斬るから覚悟をしろ」

と詰寄せました。權六は少しも憶する気色もなく、縁側へどっさり腰をかけ、襟を広げて首を差し伸べ、

權「さ斬つて下せえ、だが一通り申上げねばなんねえ事があるから、是れだけ聞いて下せえ、逃げも隠れもしねえ、私やア米搗の權六でござえます、貴方斬るのは造作もねえが、一言云つて死にてえことがある」

と申しました。

## 七

さて權六という米搗が、東山家に数代伝わるどころの重宝白菊の皿を箱ぐるみ搗摧きながら、自若として居りますから、作左衛門は太く憤りまして、顔の色は変り、唇をぶる／＼顫わし、疝癰が高ぶつて物も云われん様子で、

作「これ權六、どうも怪しからん奴だて手前は何か気でも違つたか、狂気致したに相違ない、此皿は一枚毀してさえも指一本を切るといふ大切な品を、二拾枚一時に碎くといふの



は実に怪しからん奴だ、さ何ういう心得か、御先祖の御遺言状おかきものに對しても棄置かれん、只今此の処はげに於いて其の方の首を斬るから左様心得ろ、權六を取とり遁にがすな」

と烈はげしき下知いたしかたに致いた方しかたなく、家の下僕おとこたちがばら／＼と權六の傍へ来て見ますと、權六は少しも驚く気色もなく、縁側へどつきりと腰を掛けまして作左衛門の顔をしげ／＼と見て居りましたが、

權「旦那さま、貴方あんたは実にお氣の毒さまでござえます」

作「なに……いよく此奴こやつは狂氣致して居る、手前氣の毒ということを存じて居るかい、此の皿を二十枚砕くと云うのは……予かねて御先祖おかきものよりの御遺言状の事も少しは聞いているじやアないか、仮令たしえ氣違でも此の儘には棄置かんぞ」

權「はい、私わしア氣も違います、素もとより貴方あんたさまに斬られて死ぬ覺悟で、承知して大事でえじの皿みを悉皆みんなちこわ打毀しました、もし旦那さま、私わしア生国もとは忍おしの行ぎょうだ田での在あで生れた者でありやすが、少ちいさい時分に両親ふたおやが亡ななつてしまい、知る人に連れられて此この美作みまさかの国くにへ参まゐつて、何処どこと云つて身も定まりやしねえで居りましたが、縁有つて五年前あそこ当家あそこへ奉公めえに参りまして、長ながえ間お世話になり、高たけえ給金も戴たまきました、お側にいて見れば、誠にどうも旦那さまは衆人ひとにも目をかけ行届いきも能く、どうも結構な旦那さまだが、此この二十枚の皿みが此

処うちの家の害げえだ、いや腹はらアお立ちなさるな、私は逃にげ 匿かくれはしねえ、素もとより斬きられる覚悟かくごでした事ことだが、旦那だんなさま、あんた此こゝの皿わらわはまア何なにで出来できたものと思おも 召おほしめします、私わたしア土つち塊かたまりで出来できたものと思おもえ、それを粗相そそうで毀こわしたからとつて、此こゝの大事だいじな人間にんげんの指さしい切きるの、足あしい切きると云いつて人ひとを不具ふぐにするようような御遺言おきこまりごんご状じょうを遺のこしたといいう御先祖おきなづきさまが、如何いかにも馬鹿ばか氣きた訳わけだ」

作つく「黙もくれ、先祖せんぞの事ことを悪あく口くち申まうし、尚更さら棄置しかんぞ」

權けん「いや棄置しかねえでも構かまわねえ、素もとより斬きられる覚悟かくごだから、併しかし私わたしだつて斬きられぬえと思おもえば、あんた方かた親子おなご二人ふたりが、りで斬きると云いつても、指さしでも附つけさせるもんじやアねえ、大だいけい膂力ちからが有あるが、御当ごちから家けへ米搗奉公こめうしほうこうをしていて、私わたしア何も知しんねえ在郷ざいじやうもんで、何なにのわきめえ弁別べんべつも有ありやしねえが、村むらの神主かみさまのお説教せつぎやうを聴ききに行いくと、人ひとは天あめが下したの靈物みたまもので、万物ばんぶつの長ながだ、是こゝれより尊とうといものいきあるものは無ない、有情物いじきあるものの主宰つかさどだてえから、先まず禁裏きんりさまが出来できても、お政治せいじをなさる公方こうほう様さまが出来できても、此こゝの美作みさく一いつ国こくの御領主ごりやうしゅさまが出来できても、勝山かたやまさまでも津山つやまさまでも、皆みな人間にんげんが御政治ごせいじを執とるのかと私わたしは考かんえ、皿わらわが政治せいじを執とつたてえ話わは昔むかしから聞きいた事ことがねえ、何様どんな器物ぶつでも人間にんげんが発はつ明めいして拵こしらえたものものだ、人間にんげんが有あればこそ沼ぬまア埋うめたり山やまア掘崩ほりくずしたり、河かへ橋はしを架かけたり、田地でんぢ田畠でんぱたを開墾けいこんするか

ら、五※も実つて、貴方様も私も命い継いで、物を喰つて生きていられるだア、其の大  
 事なこれ人間が、粗相で皿ア毀したからつて、指を切つて不具にするという御先祖様の御  
 遺言を守るだから、私ア貴方を悪くは思わねえ、物堅え人だが余り堅過ぎるだ、馬鹿  
 つ正直というのだ、これ腹ア立つちやアいけねえく、どうせ一遍腹ア立つてしまつて、  
 然うして私を打斬るが宜うがすが、それを貴方が守つてゐるから、此の村ばかりじゃアな  
 い、近郷の者までが貴方の事を何と云う、あゝ東山は偉い豪士だが、家に伝わる大事な宝  
 物だつて、それを打毀せば指い切るの足い切るので、人を不具にする非道な事をす  
 る、東山てえ奴は悪人だと人に謂わせるように、御先祖さまが遺言状を遺したアだね、然  
 うじゃアごぜえませんか、乃でどうも私も奉公して居るから、人に主人の事を悪党だ非道  
 だと謂われ、ば余まり快くもごぜえせん、御先祖さまの遺言が有るから、貴方はそれを  
 守り抜いて、証文を取つて奉公させると、中には又喰うや喰わずで仕様がねえ、なに指  
 ぐらい打切られたつて、高え給金を取つて命い継ごう、なに指い切つたつてはア命には障  
 らねえからつて、得心して奉公に来て、つい粗相で皿を打毀すと、親から貰つた大切な身  
 体に疵うつけて、不具になるものが有るでがす、実にはア情ねえ訳だね、それも皆な此の  
 皿の科で、此の皿の在る中は末代までも止まねえ、此の皿さえ無ければ宜いと私は考えま

して、疾とつから心配しんべえしていました、所で聞けば、お千代とんは齡としもいかにないのに母かさまが塩梅あんばいが悪いわりって、良い薬を飲まねば癒ならない、どうか母さまを助けたい、仮令たとえ指を切られるまでも奉公して人參をかうだけの手当をしてえと、親子相談の上で証文を貼り、奉公に来た者を今指い切られる事になって、誠にはア可愛そうにと思ったから、私が此の二十枚の皿を悉みんな皆打砕ないたが、二十人に代つて私が一人死ねば、余あとの二十人は助かる、それに斯うやつて大切でえいな皿だつて打砕なけば原もとの土塊つちツころだ、金だつて銀だつて只形を拵なえて、此の世の中の手形同様に取遣とりやりをするだけの物と考かんえます、金だつて銀だつて人間程たいせつ大切な物でなえから、お上かみでも人間を殺せば又其の人を殺す、それでも尚なお助けてえと思う心があるので、何とやらさまの御法事と名を付けて助かる事もありやす、首を打斬ぶつきる奴でも遠島で済ませると云うのも、詰り人間が大切だから、お上でも然うして下さるのだ、それを無闇ぶちぎに打斬ぶるとは情ねえ話だ、あなたの御先祖さまは東山將軍義政さまから戴いた、東山という大切な御苗字だという事は米を搗なきながら蔭で聞いて知つて居ますが、あの東山は非道つちツころだ、土塊つちツころと人間と同じ様に心得ていると云われたら、其の東山義政のお名前までも汚けがすような事になって、貴方あなたは済むめえかと考かんえますが、何卒どうかして此の風儀を止めさせてえと思つても、他に工夫が無なえから、寧いっそ禍わざわいの根を絶なとうと打砕ぶいてしまつただ、私一人死ん

で二十人助かれれば本望ですが、私も若え時分には、心得違えもエラ有りましたが、漸く此の頃本山寺さまへ行つて、お説法を聞いて、此の頃少し心も直つて参りましたから、大勢の人に代つて私一人死にます、どうか其の代り、お千代さんを助けてやつて下せえまし、親孝行な此様な人は国の宝で土塊とは違います、さ私を斬つて下せえまし、親戚兄弟親も何も無え身の上だから、別に心を置く事ありません、さ、斬つておくんせえまし」と沓脱石へピツタリ腰をかけ、領の毛を搔上げて合掌を組み、首を差伸ばしまして、口の中で、

権「南無阿弥陀仏くくくくくくくくくくくくく」

斯る殊勝の体を見て、作左衛門は始めて夢の覚めたように、茫然として暫く考え、作「いや權六許してくれ、どうも実に面目次第もない、能く毀してくれた、あゝ辱けない、真実な者じゃ、なアる程左様……これは先祖が斯様な事を書遺しておいたので、私の祖父より親父も守り、幾代となく守り来つていて、中指を切られた者が既に幾人有ったか知れん、誠に何とも、ハヤ面目次第もない、權六其方が無ければ末世末代東山の家名は素より、其方の云う通り慈昭院殿（東山義政公の法名）を汚す不忠不義になる所であった、あゝ誠に辱ない、許してくれ、權六此の通り……作左衛門両手を出して詫るぞ、宜くマ思

い切つて命を棄て、私の家名を汚さんよう、衆人に代つて斬られようという其の志、実に此の上もない感服のことだ、あゝ恥入つた、実に我が先祖は白痴だ、斯様な事を書遺すというは、許せ〜」

と縁先へ両手をついて詫びますと、傍に聞いて居りました悴の長助が、何と思つたかポロリと膝へ涙を落して、権六の傍へ這つてまいりました。

長「権六、あゝ一誠に面目次第もない、中々其方を殺すどころじゃアない、私が生きては居られん、お千代親子の者へ対しても面目ないから、私が死にます」

と慌てゝ短刀を引き抜き自害をしようとするから、権六が驚いて止めました。

## 八

権六は長助の顔を視つめまして、

権「貴方何をなさりやアす」

長「いや面目ないが、実は此の皿を毀したのはお父様、此の長助でございます」  
作「なに……」

長「唯今此の權六に当付けられ、実に其の時は赤面致しましたけれども、誰も他に知る氣遣いは有るまいと思いましたが、実はお千代に恋慕を云いかけたを恥しめられた恋の意趣、お千代の顔に疵を付け、他へ縁付の出来ぬようにと存じまして、家の宝を自分で毀し、其の罪を千代に塗付けようとした浅ましい心の迷い、それを權六が存じて居りながら、罪を自分の身に引受けて衆人を助けようという心底、実に感心致しました、それに引換え私の悪心面目もない事でございますから……」

作「暫く待て〜」

權「若旦那様、まゝお待ちなせえまし、貴方が然う仰しやって下されば、權六は今首を打斬られても名僧智識の引導より有難く受けます、何卒お願えでござえますから私が首を……」

作「どう致して、手前は世の中の宝だ、まゝ此処へ昇つてくれ」

と是れから無理やりに權六の手を把つて、泥だらけの足のまゝ畳の上へ上げ、段々お千代母子にも詫びまして、百両（此の時だから大したもので）取り出して台に載せ、作「何卒此の事を世間へ言わんよう、内聞にしてくれ」

と云うと、母子とも堅いから金を受けません、それでは困ると云うと。

權「そんなら私が志しが有りますから、此のお金をお貰い申し、昨年から引続きまして、当御領地の勝山、津山、東山村の辺は一体に不作でござえまして、百姓も大分困っている様子でございますから、何うか施しを出したいのですが、それに此の皿のために指を切られたり、中には死んだ者も有りましょうから、どうか本山寺様で施餓鬼を致し、乞食に施行を出したいと思えます」

作「あゝ、それは感心な事で、入費の処は私も出そう」

と云うので、本山寺という寺へまいりまして、和尚さまに掛合いますと、方丈も大きに感心して、そんならばと、是れから大施餓鬼を挙げました。多分に施行も出しました事でございまして、彼の碎けた皿を後世のためにと云うので、皿山の麓方のこんもりとした小高き処へ埋めて、標しを建て、これを小皿山と名づけました。此の皿山は人皇九十六代後醍醐天皇、北條九代の執権相摸守高時のために、元弘二年三月隱岐国へ謫せられ給いし時、美作の国久米の皿山にて御製がありました「聞き置きし久米の皿山越えゆかんだとはさらにおもひやはせむ」と太平記に出てありますと、講談師の放牛舎桃林に聞きましたが、さて此の事が追々世間に知れて来ますと、他人が尊く思い、尾に尾を付けて云い囃します。時に明和の元年、勝山の御城主にお成りなさいました桑野



美作守さまのお城普請しろふしんがございまして、人足を雇い、お作事奉行さくじが出張り、本山寺へ入らっしゃいまして方々御見分が有ります。其の頃はお武家を大切にしましたもので、名主年寄始め役人を鄭重ていちょうに待遇もてなし、御馳走などが沢山出ました。話の序ついでに彼の皿塚の事をお聞きになりました、山川やまかわひろし廣ひろという方が感心なされて、山「妙な奴もあるものだ、其の權六という者は何処どこに居る」

とお尋ねになりますと、名主が、

名「へえ、それは当時遠山と申す浪人の娘のお千代と云う者と夫婦になりました、遠山の家名を相続して居ります、至つて醜男ぶおとこで、熊のような、毛だらけな男でございしますが、女房はそれはく、美くしい女で、權六は命の親なり、且其の気性に惚れて夫婦になりたいと美人から望まれ、即ち東山作左衛門が媒妁人なこうどで夫婦になり親子睦ましく暮して居ります、東山のつい地面内へ少しばかりの家を貰つて住んで、農業を致し、親子の者が東山のお蔭で今日では豊かに暮して居ります」

と聞いて廣は猶々なほくゆか床しく思い、会いたいと申すのを名主が、名「いえ中々いっこくく一國もので、少しも人に媚る念こびがありませんから、今日直こんにちぐと申す訳には参りません」

というので、是非なく山川も一度お帰りになりました、美作守さまの御前に於て、自分が実地を踐んで、何処に何ういう事があり、此処に斯ういう事があつたとお物語を致し、彼の權六の事に及びますと、美作守さま殊の外御感心遊ばされて、左様な者なら一大事のお役に立とうから召抱えて宜かろうとの御意がござりましたので、山川は早速作左衛門へ係つてまいりました。其の頃は御領主さまのお抱えと云つては有難がったもので、作左衛門は直に權六を呼びに遣わし、

作「是れは權六、来たかえ、さア此方へ入んな」

權「はい、ちよつくら上るんだが、誠に御無沙汰しました、私も何かと忙しくつてね」  
作「此の間中お母さんが塩梅が悪いと云つたが、最う快いかね」

權「はい、此の時候の悪いので弱え者は駄目だね、あなた何時もお達者で結構ですが」

作「扱て權六、まア此の上もない悦び事がある」

權「はい、私もお蔭で喰うにやア困らず、彼様心懸の宜い女を鼻にして、おまけに旦那様のお媒妁で本当は彼のお千代も忌だつたろうが、仕方なしに私の鼻に成っているだアね」  
作「なに否どころではない、貴様の心底を看抜いての上だから、人は容貌より唯心じゃ、何しろ命を助けてくれた恩人だから、否応なしで」

權「併しかし夫婦に成つて見れば、仕方なしにでも私わしを大事にしますよ」

作「今此こゝ処で惚のろけんでも宜よい兎に角夫婦仲が好よければ、それ程結構な事はない、時に權六段々善い事が重なるなア」

權「然そうでございます」

作「知つてゐるかい」

權「はい、あのくらい運の宜いい男はねえてね、民右衛門たみえもんさまでございましょう、無む尽じんが當つて直すぐに村の年寄役を言付かつたつて」

作「いや左様そうじゃアない、お前だ」

權「え」

作「お前が倅しあわせ倅だと云うは桑野美作守様からお抱えになりますよ、お召しだどよ」

權「へえ有難うござえます」

作「なにを」

權「まだ腹も空すきませんが」

作「なに」

權「お飯めしを喰くわせるといふので」

作「アハ……お飯ではない、お召抱えだよ」

權「え、然うでござえますか、藁の中へ包んで脊負つて歩くのかえ」

作「なにを云うんだ、勝山の御城主二万三千石の糸野美作守さまが小皿山の一件を御重役方から聞いて、貴様を是非召抱えると云うのだが、人足頭が入るといので、貴様なら地理も能く弁えて居つて適當で有ろうといので、初めは棒を持って見廻つて歩くのだが、江戸屋敷の侍じやアいかないといので、お召抱えになると、今から直に貴様は侍に成るんだよ」

權「は、そりやア眞平御免だよ」

作「眞平御免という訳にはいかん、是非」

權「是非だつて侍には成れませんよ、第一侍は字い知んねえば出来ますめえ、また劍術も知らなくつちやア出来ず、それに私やア馬が誠に嫌だ、稀には随分小荷駄に乗かつて、草臥休めに一里や二里乗る事もあるが、それでせえ嫌だ、矢張自分で歩く方が宜いだ、其の上いろはのいの字も書くことを知らねえ者が侍に成つても無駄だ」

作「それは皆先方さまへ申し上げてある、山川廣様というお方に貴様の身の上を話して、学問もいたしません、劍術も心得ませんが、膂力は有ります、人が綽名して立白の權六

と申し、両手で白を持って片附けますから、あれで力は知れますと云つてあるが、其の山川廣と云うのはえらい方だ」

權「へえ、白酒屋かえ」

作「山川廣（口の中にて）山川白酒と間違えているな」

權「へえー其の方が得心で、糸野さまの御家来になるだね」

作「うん、下役のお方だが、今度の事に就いては其の上役お作事奉行が来て居ますよ、有難い事だのう」

權「有難い事は有難いけども、私やア無一國な人間で、忌にお侍へ上手を遣つたり、窮屈におつ坐る事が出来ねえから、矢張胡坐をかいて草臥れ、ば寝転び、腹が空つたら胡坐を搔いて、塩引の鮭で茶漬を搔込むのが旨えからね」

作「其様ことを云つては困る、是非承知して貰いたい」

權「兎に角母にも相談しましょう、お千代は否と云いますめえが、お母も有りますし、年い老つてゐるから、貴方から安心の往くように話さんじやア承知をしません、だから其の前に私がお役人さまにも会つて、是れだけの者だがそれで勤まる訳なら勤めますとお前さまも立会つて証人に成つて、三人鼎足で緩く話しをした上にしましょう」

作「鼎足という事はありませんよ、宜しい、それではお母には私が話そうから、直に呼んだら宜かろう」

とこれから母を呼んで段々話をしましたが、もと遠山龜右衛門という立派な侍の御新造に娘ゆえ大いに悦び、

母「お屋敷へお抱えに成るとは此の上ない結構な事で」

と早速承知を致しましたので、是れからお抱えに成りましたが、私は頓と心得ませんが、棒を持つて見廻つて歩き、大した高ではございません、十石三人扶持、御作事方賄い役と申し、少祿では有りますが、段々それから昇進致す事になるので、僅でも先ず高持に成りました事で、毎日棒を持つて歩きますが、一体勉強家でございまして、少しも役目に怠りはございません、誠に宜く働き、人足へも手当をして、骨の折れる仕事は自分が手伝いを致して居りました。此の事が御重役 秋月喜一郎あきつききいちろうというお方の耳に入りどうか權六を江戸屋敷へ差出して、江戸詰の者に見せて、情け者の見手本なまにしたいと窺ひそかに心配をいたして居ります。

糸野美作守さまの御舎弟に 紋もん之丞のじょう前次ちかつぐさまと云うが有りまして、 当時そのころ美作守さま  
 は御病身ゆえ御控えに成つて入らつしやるが、 前殿ぜんさまの御秘蔵の若様でありましたから、  
 御次男でも中々羽振りは宜うございますが、 誠に武張つたお方ゆえ武芸に達しておられま  
 すので、 馬を能く乗るとか、 槍を能く使うとか云う者があると、 近付けてお側を放しませ  
 ん。 所で件くだんの權六の事がお耳に入りますと、 其の者を予が傍そばへ置きたいとの御意ゆえ、 お  
 附の衆から老臣へ申し立て、 上かみへも 言ごんじょう 上かみになると、 苦しゅうないとの御沙汰ごさたで、 至急  
 に江戸詰を仰付けられたから、 母もお千代も悦びましたが、 悦ばんのは遠山權六でござい  
 ます。 窮屈いっくで厭いやだと思いましたが、 致し方がありませんから、 江戸谷中三崎やなかさんさきの 下屋敷しもやしき  
 へ引移ります。 只今は開けまして綺麗に成りましたが、 其の頃梅を大層植込み、 梅の御殿  
 と申して新らしく御普請が出来て、 誠にお立派な事でございます。 前次様は權六が江戸着  
 という事をお聞きになると、 至急に会いたいから早々呼出せという御沙汰でございませ  
 う。 是れから 物ものがしら 頭あたまがまいりまして、 段々したばなし 下した 話はなしをいたし、 權六は着慣れもいたさん麻あさが  
 上下みしもを着て、 紋附とは云え木綿もので、 差さし 函はこに任せお次まで罷まかり出で控えて居ります。  
 外村惣江とのもらそうえと申すお 附つきがしら 頭あたまお 納戸役なんどやく 川添富彌かわぞいとみや、 山田金吾やまだきんごという者、 其の外御小姓ほかが

二人居ります。侍さむらい分ぶんの子で十三四歳ぐらいのが附ついて居り、殿様はきつと固かたく鬢びんを引ひ詰つめて、芝居しばでいたす忠臣蔵ちゆうしんざうの若狭わかさ之助のすけのように眼まなこが吊つるし上あっているのは、疝かん癩しやく持もちと  
いうのではありません。髪かみを引詰ひめて結むすうからであります、誠に活潑かっせつな良い御気象ごきさうの御舎  
弟あにさまで、

小姓せうしやう「えゝ、お召めいによりまして權六ごんろくお次つぎまで控ひかえさせました」

前まへ「あゝ富彌とみ、早速さつそく其そのの者ものを見みたいな、ずつと連つれてまいって予よに見みせてくれ、余程よほど勇義ゆうぎ  
なもので、重宝じゆうほうの皿いしを一時いちじに打碎うちいた気象きさうは実に英雄いゆうじや、感服かんぷくいたした早々さつさつ此処こゝへ」

富とみ「えゝ、田舎いんか育よくちの武骨ぶこつ者ものゆえ、何なにとお言葉ことばをおかけ遊あそばしても御挨拶ごあいさつを申まし上あぐる術すべ  
も心得こころえません無作法むさくは者もので、実まことに手前てまへどもが会あひましても、はつと思おもいます事ことばかりで、何  
分ぶんにも御前ごぜん体ていへ罷まかり出いでましたら却かえつて御無礼ごむれいの義ぎを……」

前まへ「いや苦しゆうない、無礼むれいが有あつても宜よろしい、早く会あひたいから呼よんでくれ、無礼むれい講かうじ  
や、呼よべ〜」

富とみ「はつ〜權六ごんろく〜」

權ごん「はい」

富とみ「お召めいしだ」



權「はい、おめしと云うのは御飯を喰うのではない、呼ばれる事だと此の頃覚えまして」  
 富「其様な事を云つてはいかん、極御疳癪が強く入つしやる、其の代り御意に入れば仕合せだよ」

權「詰り気に入られるようにと思つてやる仕事は出来ましねえ」

富「其様なことを云つてはいかん、何でも物事を慇懃に云わんければなりませんよ」

權「え、彼処で隠元小角豆を喰うとえ」

富「丁寧に云わんければならんと云うのだ」

權「そりやア出来ねえ、此の儘にやらして下せえ」

富「此の儘、困りましたなア、上下の肩が曲つてるから此方へ寄せたら宜かろう」

權「之れを寄せると又此方へ寄るだ、懐へこれを納れると格好が宜いと、お千代が云いましたが、何にも入つては居ません」

富「此の頃は別して手へ毛が生えたようだな」

權「なに先から斯ういう手で、毛が一杯だね、足から胸から、私の胸の毛を見たら殿様ア魂消るだろう」

富「其様な大きな声をするな、是から縁側づたいにまいるのだ、間違えてはいかんよ、彼

処へ出ると直にお目見え仰せ付けられるが、不躰に殿様のお顔を見ちやアなりませんよ」

権「えゝ」

富「いやさ、お顔を見てはなりませんよ、頭を擡ると仰しやった時に始めて首を上げて、殿様のお顔をしげ／＼見るのだが、粗にしてはなりませんよ」

権「そんならば私を呼ばねえば宜いんだ」

富「さ、私の尻に尾付いてまいるのだよ曲つたら構わずに……然う其方をきよと／＼見て居ちやアいかん、あ痛い、何だつて私の尻へ咬付いたんだ」

権「だつてお前さん尻へ咬付けつて」

富「困りますなア」

と小声にて小言を云いながら御前へ出ました。富彌は慇懃に両手を突き、一礼して、

富「へい、お召に依つて権六罷出ました、お目見え仰付けられ、権六身に取りまして此の上なく大悦仕り、有難く御礼申上げ奉ります」

殿「うん権六、もつと進め／＼」

と云いながら見ると、肩中の広い、筋骨の逞しい、色が真黒で、毛むくじやらでございます。実に鍾馗さまか北海道のアイノ人が出たような様子で有ります。前次公は見た

ばかりで大層御意に入りました。

殿「どうも骨格が違うの、是は妙だ、權六其の方は国で衆人のために宝物を打碎いた事を予も聞いておるが、感服だのう、頭を擡げよ、面を上げよ、これ權六、權六、如何致した、何も申さん、返答をせんのか」

富「はつ、これ御挨拶を〜」

權「え〜」

富「御挨拶だよ、お言葉を下し置かれたから御挨拶を」

權「御挨拶だつて……」

と只きよと〜して物が云えません。

殿「もつと前へ進め、遠くては話が分らん、ずっと前へ来て、大声で遠慮なく云え、頭を上げよ」

權「上げろたつて顔を見ちやアなんねえと云うから誠に困りますなア、何うか此の儘で前の方へ押出して貰いてえ」

小姓「此の儘押出せと、尋常の人間より大きいから一人の手際にはいかん、貴方そら尻を押し給え」

權「さアもつと力を入れて押出すのだ」

殿「これく何を致す其様なことをせんでも宜しいよ、つかく歩いてまいれ、成程立派じゃなア」

權「え、まだ頭を上げる事はなんねえか」

殿「富彌、余り厳ましく云わんが宜い、窮屈にさせると却つて話が出来ん、成程立派じゃなア、昔の勇士のようであるな」

權「へえ、なんですと」

殿「古の英雄加藤清正とも黒田長政とも云うべき人物じゃ、どうも顔が違うのう」

權「へえ、どうも誠に違います」

富「誠に違いますなんて、自分の事を其様な事を云うもんじゃア有りませんよ」

殿「これく小声で然うぐずく云わんが宜い」

權「衆人が然う云います、へえ鼻は誠に器量が美いつて」

富「これく家内の事はお尋ねがないから云わんでも宜い」

權「だって話の序だから云いました」

富「話の序という事がありますか」

殿「其の方生国は何処じや、美作ではないという事を聞いたが、左様か」

権「何でござえます」

殿「生国」

権「はてな……何ですか、あの勝山在にいる医者の木村章國でがすか」

殿「左様ではない、生れは何処だと申すのじや」

権「生れは忍の行田でござえますが、少せえ時分に両親が死んだゞね、それから仕様がな  
くつて親戚頼りも無えもんでがすが、懇意な者が引張つてくれべえと、引張られて美作  
のくに  
国へ参りまして、十八年の長え間大くお世話さまでござえました」

富「これくお世話さまなんぞと云う事は有りませんよ」

権「だつてお世話になつたからよ」

殿「これ富彌控えて居れ、一々咎めるといかん、うん成程、武州の者で、長らく国許へ  
参つて居つたか、其の方は余程力は勝れて居るそうじやの」

権「私が力は何の位あるか自分でも分りませんよ、何なら相撲でも取りましようか」

富「これく上と相撲を取るなんて」

権「だつて、力が分らんと云うからさ」

殿「誠にうい奴だ、予が近くにいてくれ、予が側近くへ置け」

富「いえ、それは余り何なんで、此の通りの我がさつ雑ものを」

殿「苦しゆうない、誠に正直潔白よで宜い、予が傍そばに居れ」

権「それは御免を願いてえもんで、私わしには出来ませんよ、へえ、此こん様な窮屈な思いをするのは御免だと初手から断つたら、白酒屋さんの、えゝ……」

殿「山川廣か」

権「あの人よ」

富「あの人よと云う事が有るかえ、上かみのお言葉に背く事は出来ませんよ」

権「背くたつて居いられませんよ」

富「居おられんという事は有りません、御無礼至極じやアないか」

権「御無礼至極だつて居いられませんよ」

殿「マ富彌控えて居れ、然う一々小言を申すな、面白い奴じや」

権「私わしア素米もとこめつき搗なんで何も知んねえ人間で、劍術も知んねえし、学問もした事アねえから何うにも斯うにもお侍さむらいには成れねえ人間さ、力はえらく有りますが、何でも召抱えてえと御領主さまが云うのを、無理に断れば親や女房に難儀が掛るといふから、そりやア困るが、

これ〜で宜くばと己がいうと、それで宜いから来いと云われ、それから参つただねお前さま……」

富彌ははらく〜いたしましたして、

富「お前さまということは有りませんよ、御前様と云いなさい」

権「なに御前と云うのだえ、飯だの御膳だのつて何方でも宜いじゃアないか」

殿「これ富彌止めるな、宜しいよ、お前も御前も同じことじゃのう」

権「然うかね、其様な事は存じませんよ、それから私が此処の家来になつただね、して見るとお前様、私のためには大事なお人で、私は家来でござえますから、永らく居る内にはお互えに心安立てが出て来るだ」

富「これ〜心安立てという事がありますか」

権「するとお大名は誠に疝癩持だ」

富「これ〜」

殿「富彌又口を出すか、宜しい、控えよ、実に大名は疝癩持だ、疝癩がある、それから」  
 権「殿様に我儘が起れば、私にも疝癩が有りますから、主人に間違つた事を云われると、ついでそれから仲が悪くなります、時々逢うようにすれば、人は何となく懐かしいもので、

あゝ会いたかつた、宜く来たと互えに大騒ぎをやるが、毎日傍にいと、私が殿様の疝癩をうん／＼と気に障らねえように聞いていると、私が胡麻摺になり、誑諛になつていけねえ、此処にいる人に偶には些とぐれえ腹の立つ事があつても、主人だから仕方がねえと諦め、御前さまとか御飯とかいいう事になつて、実の所をいうと然ういう人は横着者だね」

殿「成程左様じや、至極左様じや、正道潔白な事じや、これ權六、以来予に悪いことが有つたら其の方諫言を致せ、是が君臣の道じや、宜しい、許すから居てくれ」

權「尊公がそれせえ御承知なら居ります」

殿「早速の承知で過分に思う、併し其の方は劍道も心得ず、文字も知らんで、予の側に居るのは、何を以て君臣の道を立て奉公を致す心得じや」

權「他に心得はねえが、夜夜中乱暴な奴が入るとなりませんから、私やア寝ずに御殿の周囲を内証で見廻つていますよ、もし狐でも出れば打殺そうと思つてます」

殿「うん、じゃが戦国の世になつて戦争の起つた時に、若し味方の者が追々敗走して敵兵が旗下まで切込んでまいり、敵兵が予に槍でも向けた時は何う致す」

權「然うさね、其処が大切だ」



殿「さ何う致して予を助ける」

權「そりやア尊公あんたどうも此処に一つ」

と權六は胸をたゞき、

「忠義という刃物が有るから、劍術は知らねえでも義という鎧を着ているから、敵が槍で尊公に突掛つきかけて参めえれば、私わしア掌てで受けるだ、一本脇腹へ突込まして、敵ひねを捻り倒して打ぶちこ殺してやるだ、其の内に尊公を助けて逃にげがすだけの仕事よ」

殿「うん成程、立派な事だ、併しかし然うまま甘く口くちでいう通りに行くかな」

權「屹きつと度行ります、其処しゆうは主家来の情合だからね」

殿「うん面白い奴じや、然しからば敵が若し斯様に致したら何うする」

とすつと立ち上つて、欄間に掛けて有りました九尺柄えの大身おわみの槍を取つて、スツ／＼と二三度しごいて、

「斯様に突き掛けたら何う致す」

と真まに突ついて蒐かつた時に權六が、

權「然しかうすれば斯かう致します」

と少しも動かずに、ジリ／＼と殿様の前へ進むという正直律義の人でございます。

## 十

桑野紋之丞前次と仰しやる方は、未だお部屋住では有りますが、勇気の優れた方で、活潑なり学問もあり、実に文武兼備と講釈師なら誉る立派な殿様でございませぬれども、そこはお大名の疔癩で、甚く逆らつて参ると、直に抜打に御家来の首がコロリなど、いう事が有るもので、只今の華族さまは開けて在つしやいますから、其様な野蛮な刃物三昧などはございませぬが、前次様は御勇気のお方だけあつて、九尺柄の大身の槍をすつと繰出した時に、權六は不意を打たれ、受くるものが有りませぬから左の掌で、

權「むゝ」

と受けましたが剛い奴で、中指と無名指の間をすつと貫かれたが、其の掌で槍の柄を捕まえて、ぐつと全身の力で引きました。前次公は踞めいて前へ膝を突く処を、權六が血だらけの手で捕え付け、

權「其の時は斯う捻り倒して敵を酷え目に遇わして、尊公を助けるより他はねえ、何うだ、敵も魂消るか」

と大<sup>だい</sup>力<sup>りき</sup>でグツクと圧<sup>お</sup>すから前次公も堪<sup>た</sup>えかねまして、

殿「權六宥<sup>ゆる</sup>せ、宥<sup>ゆる</sup>せ」

と云うは余程苦しかったと見えます。これを見るとお側に居りました川添富彌、山田金吾も驚きました。が、御側小姓の外村惣江が次の間に至り、一刀を執<sup>と</sup>つて立上り、

惣「棄置かれん奴」

とバラ／＼と二人来<sup>きた</sup>つて權六へ組付こうとするを睨<sup>にら</sup>み付け、

權「寄付くと打殺<sup>ぶつころ</sup>すぞ」

惣「斬つてしまえ、無礼至極な奴だ、御前を何と心得る、如何<sup>いか</sup>に物を心得んとは申しながら、余りと申せば乱暴狼藉」

と立ちかゝるを、殿様は押されながら、

殿「いやなに惣江、手出しをする事は必ずならんぞ、權六放してくれ、あ痛い、放せ、予が悪かった、宥<sup>ゆる</sup>せ／＼」

權「宥<sup>ゆる</sup>せと云つて敵じやア許せねえけれども、先<sup>ま</sup>ず仕方話だから許します、さ何うだね」  
殿「ハツ／＼」

と殿様は稍<sup>ようや</sup>く起上りましたが、血だらけでございます。是は權六の血だらけの手で押付

けられたから、顔から胸から血だらけで、これを見ると御家来が驚きまして、呆れて口が利けません。

殿「ハツく、至極道理だ」

權「道理だつて、私が何も手出し仕たじやアねえのに、押えるの斬るのと此処にいる人が云うなア分んねえ、咎も報いも無えものを殿様が手出ししいして、槍で突殺すと云うだから、敵が然うしたら斯うだと仕方話いしてお目に掛けたゞ、敵なら捻り殺すだが、仕方話で、ちよつくら此の位なものさ」

殿「至極正道潔白な奴じや、勇気なものじや、何と申しても宜しい、予に悪い事があつたら一々諫言をしてくれ、今日より意見番じや、予が側を放さんぞ」

と有難い御意で、それからいよく医者を呼び、疵の手当を致して遣わせと、殿様も急に血だらけですからお召替になる。大騒ぎでござります。御褒美として其の時の槍を戴きましたから、是ばかりでも槍一筋の侍で、五十石に取立てられ、頭取下役という事に成りましたが、更に誂いを致しませんが、堅い氣象ゆえ、毎夜人知れず刀を差し、棒を提げて密つと殿様のお居間の周囲を三度ずつ不寝に廻るといふ忠実なる事は、他の者に真似は出来ません立派な行いでございます。又お供の時は駕籠に附いてまいりません。

權「私わしア突張つっぱつたものを着て、お駕籠の側へ付いてまいっても無駄でござえます、お側には劍術を知つてる立派なお役人が附いているだから、狼藉者がまいっても脇差を引抜いて防ぎましようが、私ア其の警衛けいゑいの方々に狼藉者が斬付けるとなんねえから、若もし怪しい奴が来るといかねえから私ア他の人の振ふりで先へめえりましよう、袴はかまなどア穿はくのは廢よして貰もれえましよう、刀は差せと云わば仕方がねえから差しますが、私だけはお駕籠の先へぶら／＼往いきます」

と我儘を云うてなりませんが、左様な我儘なお供はござりませんから、權六も袴を付け、大小を差し、紺足袋福草履こんたびふくぞうりでお前まきとも 駆で見廻つて歩きます、お中屋敷は小梅で、此処これへお出でのおりも、未だお部屋住ゆえ大したお供ではございませんが、權六がお供をして上野の袴はかま 腰こしを通りかゝりました時に、明和三年正月も過ぎて二月になり、追々梅も咲きました頃ですから、人もちら／＼出掛けます。只今權六が殿様のお供をして山下の浜田と申す料理屋（今の山城屋）の前を通りかゝり、山の方かたの觀物小屋みせものごやに引張る者が出て居りますが、其方そちらへ顔も向けず四辺あたりに気を付けてまいると、向うから来ました男は、年頃二十七八にて、かつきりと色の白い、眼のきよろ／＼大きい、鼻はなすじ梁の通つた口元の締つた、眉毛の濃い好いい男で、無地の羽織ちやくを着し、一本短い刀を差し、紺足袋雪駄穿せつたばきでチャラ／＼

やつて参りました。不図出会うと中国もので、矢張素と松平越後様の好い役柄を勤めました。松蔭大之進の悴、同苗大藏というもので、浪々中互いに知って居りますから、權「大藏さんく〜」

と呼びますから大藏は振向いて、

大「いや是れは誠に暫らく、一別已来……」

權「うっかり会ったって知んねえ、むお変りがなくつて……此処で逢おうとは思いません  
だったが、何うして出て来たえ」

と立止つて話をして居りますから、他の若侍が、

若「これく〜權六殿く〜」

權「えゝ」

若「お供先だから、余り知る人に会ったつて無闇に声などを掛けてはなりませんよ」

權「はい、だがね国者に逢つて懐かしいからね、少し先へ往つておくんなせえ、直ぐに  
往くと殿様に然う申しておくんなせえ、まお前達者で宜い、何処にいるだ」

大「お前も達者で何処に居らるか、実に立派な事で、お抱えになったことは聞いたが、  
立派な姿で、此の上もない事で、拙者に於ても悦ばしい」

權「ま悦んでくんろ、今じやア奉公大切に勤めてゐるだが、お前めえさんは何処どこにいるだ」

大「拙者は根岸ひぐれの日暮ひぐれケ岡おかに居おる、あの芋いも坂さかを下くだりた処ところに」

權「私わしの処ところへは近ちかえから些ちつと遊あそびに來きなよ、其そのの内私うちも往ゆくから」

若「これこれ々々其様そのようなことを云いつては成なりません」

權「今日は大将たいしょうがゐるから此処こゝで別わかれるとしよう、泣なく子こと地頭ぢちうにやア勝かたれねえ」

と他の家來衆けらいしゆも心配しんぱいして彼是かれこれ云いいますので、其その日は別わかれ、翌日あした大藏だいざうは權六けんりくの家うちへまいりましたから、權六けんりく悦よろこびました。此こゝの大藏だいざうはもと越後守えちごのり様の御家來ごけらいで、遠山とんざん龜右衛門かめゑもんとは同じ屋敷やしきにいた者ものゆえ、母ははもお千代ちよひも見知みしりの事ことなれば、

「お互たがひいに是これは思おもひ掛かけない、縁ゆかりと云いうものは妙たぎだ、国くにを出でたのは昨きのう年の秋あきで、貴方あなたも国くににお在いたという事ことは人の噂うわさで聞ききました」

大「お前めえも御無事ごむじで、殊ことに御夫婦仲ごふうなつも宜よろし、結構けいこうで」

權「まあね、お母ははも誠まことに安心あんしんしたし、殿様たんとも最たんと眞まことにしてくれるだが、扶持たんとも沢山たんとは要いらな  
い、親子三人おやこ三人喰くうだけ有あれば宜よろいてえに、其様そのような事を云いわずに取とつて置おくが宜よろいつて、種い  
々な物ものをくれるだ、貰もらわねえと悪わるいと云いうから、仕方しかたなしに貰もらうけれども、何でも山盛やまもり  
り呉くれるだ、喰く物ものなどは切溜きりだめを持もつてつて脊負しよつて來こねえばなんねえだ、誠まことにはア有あ

難<sup>りがて</sup>え事になつて、勿体ねえが、他に恩返<sup>おんげえ</sup>しの仕様がねえから、旦那様を大切<sup>でえじ</sup>に思つて、不寝<sup>ねず</sup>に奉公する心得だが、貴方<sup>あんた</sup>は今の若さで遊んでいずに、何処かへ奉公でもしたら宜かろう」

大「拙者も然<sup>そ</sup>う思つてる、逆<sup>とて</sup>も国へ往つたつていけんから、何処ぞへ取付こうと思つて、御当家でお羽振の宜<sup>い</sup>いお方は何というお方だね」

權「私<sup>わし</sup>ア其様な事は知んねえ、お国家老の福原數馬様、寺島兵庫様、お側御用神<sup>かんば</sup>原五郎治様とかいう奴があるよ」

大「奴とは酷<sup>ひど</sup>いね」

權「それに此間<sup>こゝ</sup>ちよつくら聞いたが、御当家には智仁勇の三人の家来があるとよ、渡邊<sup>わたなべ</sup>織江<sup>おりえ</sup>さんという方は慈悲深い人だから是が仁で、秋月喜一郎<sup>あきづききいちろう</sup>かな是はえら剛<sup>きつ</sup>い人で勇よ、えゝ何とか云いッけ……戸村主水<sup>とむらもんど</sup>とかいう人は智慧があると云いやした、此者<sup>これ</sup>が羽振の宜<sup>い</sup>い処だ、其の人らの云う事は殿様も聴くだ、御家来に失策<sup>しくじり</sup>が有つても、渡邊さんや秋月さんが取做<sup>とりな</sup>すと殿様も赦<sup>ゆる</sup>すだ、秋月さんは槍奉行を勤めているが、成程<sup>つよ</sup>剛<sup>きつ</sup>そうだ、身<sup>せ</sup>丈<sup>たい</sup>が高くつてよ」

と手真似をして物語る内、大藏<sup>てのひら</sup>は掌<sup>てのひら</sup>の底に目を附けました。



大「足下そつかて掌を何うした、穴が開いているようだが」

權「これか、是は殿様が槍を突掛つツけて掌てで受けるか何うだと云うから、受けなくつてとい  
うので、掌で受けたゞ」

大「むゝ、そうか、そして御家来の中仁うちは渡邊織江、勇は秋月、智は戸村、成程斯うい  
事は珍らしいから書付けて往ゆきましよう」

と細かに書いて暇いとま乞こを致し、帰る時に權六が門まで送り出してまいりますと、お役  
所から帰る渡邊に出会いましたから、權六も挨拶する事ぐらいのことは心得て居りますか  
ら、丁寧ていねいに挨拶する。渡邊も答礼して行過ゆきすぎるを見済みすまして、

大「彼は」

權「彼あれが渡邊織江様よ、慈悲深い方で、家来に難儀いする者が有ると命懸で殿様に詫言わがごとを  
してくるだ、困るなら銭い持つて行けと助けてくれると云うだ、どうも彼あの人には敵かなわ  
ねえ」

大「成程寛仁大度、見上げれば立派な人だね」

權「なにい、韓信が股ア潜りだと」

大「いえ中々お立派なお方だ、最う五十五六にもなろうか……拙者も近い所にいるから、また度々お尋ね下さい、拙者も亦お尋ね申します」

權「お前辛抱しなよ、お女郎買におつ溺つてはいかねえよ、国と違つてお女郎が方々に在るから、随分身体を大事にしねば成んねえ」

大「誠に辱けない、左様なら」

と松蔭大藏は帰りました。其の後渡邊織江が同年の三月五日に一人の娘を連れて、喜六という老僕に供をさせて、飛鳥山へまいりました。尤も花見ではない、初桜故余り人は出ません、其の頃には海老屋、扇屋の他に宜い料理茶屋がありまして、柏屋というは可なり小綺麗にして居りました。織江殿は娘を連れて此の茶屋の二階へ上り、御酒は飲みませんから御飯を上げていました。此の娘は年頃十八九になりました、色のくつきり白い、鼻筋の通つた、口元の可愛らしい、眼のきよろりとした……と云うと大きな眼付で、少し眼に怖味はありますが、是も巾着切のような眼付では有りません、堅いお屋敷でございますから好い服装は出来ません、小紋の変り裏ぐらいのことで、厚板の帯な

どを締めたもので、お父さまは小紋の野掛装束で、お供は看板を着て、真鍮巻の木刀を差して上端に腰をかけ、お膳に酒が一合附いたのを有難く頂戴して居ります。

二階の梯子段の下に三人車座になつて御酒を飲んでゐる侍は、其の頃流行つた玉細の藍の小弁慶の袖口がぼつ／＼といったのを着て、砂糖のすけない切山椒で、焦茶色の一本独鈷の帯を締め、木刀を差して居るものが有ります。火の燃え付きそうな髪をして居るものも有り、大小を差した者も有り、大鬚の連中がそろ／＼花見に出る者もあるが、金がないので往かれないのを残念に思ひまして、少しばかり散財をしようとして、味噌吸物に菜のひたし物、香物、沢山という酷い誂えもので、グビ／＼と大盃で酒を飲んで居ります。二階では渡邊織江が娘お竹と御飯が済んで、

織「これ／＼女中」

下婢「はい」

織「下に従者が居るから小包を持って来いと云えば分るから、然う云つてくれ」

下婢「はい畏まりました」

とん／＼／＼と階下へ下りまして、

下婢「あの、お供さん、旦那があの子の小さい風呂敷包を持って二階へ昇れと仰しやいました

よ

喜「はい畏まりました」

と喜六と云う六十四才になる爺さんが、よぼ／＼して片手に小包を提げ、正直な人ゆえ下足番が有るのに、傍に置いた主人の雪踏とお嬢様の雪踏と自分の福草履三足一緒に懐中へ入れたから、飴細工の狸見たようになって、梯子を上ろうとする時、微酔機嫌で少し身体が斜になる途端に、懐の雪踏が迸つて落ると、間の悪い時には悪いもので、彼喧嘩でも吹掛けて、此の勘定を持たせようと思つている悪浪人の一人が、手に持つていた吸物椀の中へ雪踏がぼちやりと入ったから驚いて顔を上げ、

甲「これ怪しからん奴だ、やい下ろ、二階へ上る奴下ろ」

と云いながら喜六の裾を取つてぐいと引いたから、ド、トンと落ち、

喜「あ痛いやい……」

甲「不礼至極な奴だ、人が酒を飲んでゐる所へ、屎草履を投込むとは何の事だ」

と云いながら二つ三つ喜六の頭を打つ喜六は頭を押えながら、

喜「あ痛い……誠に済みませんが、懐から落ちたゞから御勘弁を願えます」

甲「これ彼処に下足を預る番人があつて、銘々下足を預けて上るのに、懐へ入れて上る奴

があるものか、是には何か此の方に意趣遺恨があるに相違ない」

喜「いえ意趣も遺恨もある訳じゃねえ、お前めえさま様には始めてお目に懸かつて意趣遺恨のある理由わけがござえません、私わしは何にも知んねえ田舎漢いなかもで、年も取つてるし、御馳走の酒を戴はき、酔払いになつたもんだから、身体が横になる機はずみに懐なから雪踏ゆきふが落ちただから、どうか御勘弁を」

と詫わびましたが、浪人は肩を怒こらせまして、

甲「勘弁まか罷りならん、能く考えて見ろ、人の吸物の中へ斯様に屎草履しらかを投な込んで、泥だらけにして、これを何うして喰くうのだ」

喜「誠に御道理ごもつとも……併しかし屎草履と仰おしやるが、米でも麦でも大たい概げ土どから出来ねえものはねえ、それには肥料こやしいしねえものは有ありますめえ、あ痛い、又打うつたね」

甲「なに肥料こやしをしないものはないが、直接じかに肥料を喰くい物ものに打ぶかけて喰くう奴やつがあるか、怪けしからん理由わけの分わらん奴やつじゃアないか」

乙「これ〱其様そんな者に何を云いつたつて、痛いも痒かゆいも分わるものじゃアない、家来からいの不調ふてう法はは主人しゅじんの粗相そそうだから、主人しゅじんが此処こゝへ来て詫わるならば勘弁まかして遣やらう、それまで其の小包こぶちを此方こちらへ取とり上げて置おけ、なに娘むすめを連れて年としを老とつてゐる奴やつだと、それ〱今いまも云いう通り家

来の不調法は主人の不調法だから、主人が此処へ来て、手前に成り代つて詫るなれば勘弁を仕まいものでもないが、それ迄包を此方へ預かる、一体家来の不調法を主人が詫んとう事は無い」

喜「詫ん事は無いたつて、私が不調法をして、旦那様を詫に出しては済みません、それに包を取上げられてしまつては旦那様に申訳がないから、どうか堪忍しておくんなせえましな、私が不調法を為したんだから、二つも三つも打叩かれても黙つて居やすんだ、人間の頭には神様が附いて居ますぞ、其処を叩くてえ事はねえ」

甲「なに……」

と又打つ。

喜「あ痛い、又打つたな」

甲「なにを云う、其様な小理窟ばかり云つても仕様がねえ、もつと分る奴を出せ」

喜「あ痛い……だからま一つ堪忍しておくんなせえましよ」

甲「勘弁罷りならん」

喜「勘弁ならんて、此の包を取られ、ば私がしくじるだ」

甲「手前が不調法をしてしくじるのは当然だ、手前が門前払いになつたて己の知つた

事かえ、さ此方へ出さんか」

喜「あ……あれ……取つちまつた、其の包を取られちやア私が済まねえと云うに、あのまア慈悲知らずの野郎め」

甲「なに野郎だ……」

と尙お事が大きくなつて、見ちやア居られませんから茶屋の女中が、

下婢「鎌どんを遣つておくれな」

鎌「なに斯ういう事は矢張り女が宜いよ」

下婢「其様なことを云わずに往つておくれよ」

鎌「客種が悪い筋だ、何かごたつこうとして居る機みだから、どうも仕様がな」

下婢どもがそれへ参り、

下婢「ね、あなた方」

甲「何だ、何だ手前は」

下婢「貴方申しお供さん、お気を附けなさらないといけませんよ、貴方ね、此方は下足番の有るのを御存じないものですから、履物を懐へ入れて梯子段を昇ろうとした処を、つい酔つていらつしやるもんですから、不調法で落ちたのでしよう、実にお気の毒さま、何

卒うそね、ますういうお花見時分で、お客さまが立込んで居りますから、御機嫌を直していらつしやいよ、何ですよう、ちよいと貴方ア」

甲「なんだ不礼至極な奴め、愛敬が有るとか器量が好よいとか云うならまだしも、手前の面を見ろい、手前じゃア分らんから分る人間を出せ」

下婢「誠にどうも、あのちよいと清次せいじどん」

清「そら、己の方へ来た」

下婢「取つても附けないよ、変な奴だよ」

清「女でも宜よいのに、仕様がなね」

と若い者が悪浪わるろう人の前へ来て、額へ手を当て、

若「えへゝゝ」

甲「変な奴が出て来た、手前は何だ」

若「今日こんにちは生憎あいにく主人が下町までまいって居りませんから、手前は帳場に坐っている番頭で、御立腹の処は重々御尤ごもつともさまでございますが、何分にもへえ、全体お前さんが逆らつては悪い、此方こなたで御立腹なさるのは御尤もで仕方がない謝まんなさい、えへ……誠まことに此の通り何も御存じないお方で相済みませんが…」



甲「只相濟まんくと云つて何う致すのだ」

若「どうか旦那さま」

甲「うん何だと、何が何うしたと、此これ碗わんを何う致すよ、只勘弁しろたつて、泥ほつけにした物が喰えるかい」

清「左様なら旦那さま、斯様致しましょう、お料理を取換えましょう、ちよいとお芳よしどん、是をずつと下げて、何か乙おつな、ちよいとさつぱりとしたお刺身と云つたようなもので、えへへへ」

甲「忌いやな奴だな、空そら笑わらいをしやアがつて」

清「ずつとお料理を取換え、お爛よの宜よい処よを召上り、お心持を直してお帰りを願います」  
それより他に致し方がないので、酒さけ肴さかなを出しまして、

清「是は手前の方の不調法から出来ました事でげすから、其のお代は戴きません、皆様へ御馳走の心得で」

乙「黙れ、不礼至極なことを云うな、御馳走なんて、汝てまえに酒肴しゆこうを振舞つて貰もらいたいから立腹致したと心得おて居おるか、振舞つて貰もらいたい下心おこで怒おこつてる次第じゃアなえぞ」

清「いえその最はじまり初はじまりは上げて置いて、あとで代を戴きます」

甲「汝てまえでは分らんもつと分る者を遣よこせ」

二階では織江殿も心配して居りますところへ、喜六が泣きながら昇あがつてまいりました。

## 十二

喜六は力無げに二階へ上あがつてまいり、

喜「はい御免下せえまし」

織「おゝ喜六か、是へ来い〜」

喜「はい、誠に何ともはア申訳のねえ事をしました、悪い奴にお包とを奪られて」

織「困つたものじゃアないか、何故草履なげを懐へ入れて二階へ上つたのだよ、草履を懐へ入れて上へ昇あがるなどという事があるかえ」

喜「はい、田舎者で何も心得ませんから」

織「何も心得んとて、先方で立腹するところは尤もつともじゃアないか、喰く物の中へ泥草履を投入れゝば、誰だつて立腹致すのは当あたりまえ然なのことじゃ、それから何う致した」

喜「へえ、三人ながら意地の悪い奴が揃つてゝ、家来の不調法は主人の不調法だから、余よ

所目そめに見て二階に居ることはねえ、此処こゝへまいり、成り代つて詫をしたら堪忍してくれると云いまして、お包を取上げましたから、渡すめえと確しつかり押えると、あんな傍に居た奴が私わしの頭を叩いて、無理やりに引奪ひつたくられましたから、大切な物でも入へつて居おろうかと心配して居ります」

織「何も入つて居らん空風からぶろしき呂敷ではあるが、不調法をして詫をせずに置く訳にもいかん、手前の事から己が出ると、拙者は糸野美作守家来渡邊織江と申す者でござると、斯う姓名を明かさなければならん、己の名前は兎も角も御主人の名を汚けがす事になつちやア誠に濟まん訳じゃアないか、手前は長く奉公しても山出しの習慣しぐせが脱ぬけん男だ、誠に困つたもんだの」

喜「へえ、誠に困りました、然そうして私わしが頭あたまア五つくらしました」

織「打うたれながら勘定などをする奴やつが有りますか」

喜「余あまり口惜くやしうございます、中央まんなかにいた奴の叩くのが一番痛うござえました」

織「誠に困るの」

竹「お父ちちさま、斯とつう致いたしましょうか、却かえつて先方たへよが食たべ酔よつて居りますところへ貴方あなたが入いらっしゃいますより、私わたくしは女のことで取上げもいたすまいから、私わたくしが出て見みましようか」

織「いや、己がいなければ宜いが、己がいて其の方を出しては宜しくない」

竹「いゝえ、喜六と私と二人で此処へまいりました積りで、誠に不調法を致しましたと言申したら宜かろうと存じます、のう喜六」

喜「はい、お嬢様が出れば屹度勘弁します、皆な助平そなものばかりで」

織「こら、其様なことを云うから物の間違になるんだ」

竹「じゃア二人の積りで宜いかえ、私は手前を連れてお寺参りに来た積りで」

喜「どうか何分にも願います」

とお竹の後に附いて悄悄々と二階を下りる。此方は益々唳り立つて、

甲「さア何時までべんぐと棄置くのだ、二階へ折助が昇つた限り下りて来んが、さ、これを何う致すのだ」

と申して居るところへお竹がまいり、しとやかに、

竹「御免遊ばしませ」

甲「へえお出でなさい、何方さまで」

竹「只今は家来共が不調法をいたして申訳もない事で、何も存じません田舎者ゆえ、盗られるとわるいと存じまして、草履を懐へ入れて居つて、つい不調法をいたし、御立腹をか

けて何とも恐入ります、少し遅く成りましたから早く帰りませんと両親が案じますから、何卒御勘弁遊ばしまして、それは詰らん包ではございますが、これに成り代りまして私からお詫を致します事で」

甲「どうも是は恐入りましたね、是はどうも御自身にお出では恐入りましたね、誠にどうもお麗わしい事でありますな、へへへ、なに腹の立つ訳ではないが、ちよつと三人で花見という訳でもなく、ふらりと洗湯の帰り掛けに一口やつておる処で、へへへ」

竹「家来どもが不調法をいたし、嘸御立腹ではございませうが……」

甲「いや貴方のおいでまでの事はないが、お出で下されば千万有難いことで、何とも恐入りました、へへへ、ま一盃召上れ」

と眼を細くしてお竹を見詰めて居りますから、一人が気をもみ、

乙「何だえ、仕方がないな、貴公ぐらい女を見ると惚い人間はないよ、女を見ると勘弁なり難い事でも直にでれくと許してしまう、それも宜いが、後の勘定を何うする、勘定をよく、前に親娘連れで昇つた立派な侍が二階に居るじゃアないか、然るを女を詫によこすてえ次第があるかえ、其の廉を押ししたら宜かろう、勘定を何うするよ」

甲「うん成程、気が付かんだつたが、前に昇つていたか、至極どうも御尤もだから然う致

そうじゃアないか」

丙「何だか分らんことを云つてる、兎に角御主人がお詫に來たから、それで宜いじゃアないか、斯様な人ざかしい処で兎や斯う云えば貴公の恥お嬢様の辱になるから、甚だ見苦しいが拙宅へお招ぎ申して、一口差上げ、につこり笑つてお別れにしたら宜かろう」

甲「これは至極宜しい、宅は手狭だが、是なる者は拙者の朋友で、可なり宅も広いから、ちよつと一献飲直してお別れと致しましょう」

と柔しい真白な手を真黒な穢い手で引張つたから、喜六は驚き、

喜「なにをする、お嬢様の手を引張つて此の助平野郎」

甲「なに、此ん畜生」

と又騒動が大きくなりましたから、流石の渡邊も弱つて何うする事も出来ません。打棄つて密と逃げるなどというは武家の法にないから、困却を致して居りました。すると次の間に居りました客が出て参りました。黒の羽織に藍微塵の小袖を着大小を差し、料理の入った折を提げて來まして、

浪人「え、卒爾ながら手前は此の隣席に食事を致して、只今帰ろうと存じて居ると、何か御家來の少しの不調法を廉に取りまして、暴々しき事を申掛け、御迷惑の御様子、実

は彼処あれにて聞兼き、かねて居りましたが、如何にも相手が悪いから、お嬢様をお連れ遊ばして嘸さぞかし御迷惑でござろうとお察し申します、入らざる事と思おぼしめ召すかしらんが、尊公の代りに手前が出ましたら如何いかゞで」

織「これは何なんともはや、折角の思召ではござるが、先方では柄えのない所へ柄を上げて申掛けを致すのだから、貴殿へ御迷惑が掛つては相済まん折角の御親切ではござるが、平ひらにお捨置きを願いたい」

浪人「いえ、手前は無禄無住むろくむじゅうの者で、浪々の身の上、決して御心配には及びません、御主名ごしゅめいを明あかすのを甚ひとく御心配の御様子、誠に御無礼な事を申すようでござるが、お嬢様を手前の妹の積りにして、手前は不加減で二階に寝ていたとして詫入れ、ば宜しい」

織「何ともそれでは恐入ります事で、併しかし御迷惑だ……」

浪「その御心配には及びませんから手前にお任せなされ」

と提げ刀で下へ下ると、三人の悪浪人わるろうにんはいよく哮たけり立って、吸物碗を投付けなど乱暴をして居ります所へ、

浪人「御免を……」

甲「何だ」

浪人「手前家来が不調法をいたしまして、妹がお詫に出ました由怪しからん事で、女の身でお詫をいたし、却かえつて御立腹を増すばかり、手前少々腹痛が致しまして、横になって居ります内に、妹が罷まかり出て重々恐入りますが、何卒御勘弁を願います」

甲「む、尊公は先刻此さつきの方の吸物椀の中へ雪踏を投込んだ奴の御主人かえ」

浪「左様家来の粗相は主人が届かんゆえで有りますから、手前成り代つてお詫を致します、どうか御勘弁を願います、此かくの如く両手を突いてお詫を……」

甲「此奴こいつかえく」

乙「此者これじゃアなえよ、其奴そいつは前さきに昇あがつていた奴だ、もつと年を老とつてる奴だ、此奴は彼の娘あへ諂おべつかに入つて来たんだ、其様な奴をなじらなくつちやア仕様がねえ、え、始めて御意得ます、御尊名を承わりたいね……手前は谷山藤十郎たにやまとうじゅうろうと申す至つて武骨なので、斯かくの如く泥だらけになった物が喰えますかよ、此の汁が吸えるかえ」

と半分残つていた吸物椀を打掛ぶつかけましたから、すつと味噌汁が流れました。流石温和さすがの仁たちまも忽たちまち疝癪たぢまが高ぶりましたが、じつと耐こらえ、

浪「どうか御勘弁を願います、それゆえ身不肖ながら主人たる手前が成代つてお詫をいた



すので、幾重にも此の通り……手を突く」

甲「手を突いたつて不礼を働いた家来を此方こつちへ申し受けよう、然そうして此方の存じ寄にいたそう」

浪「それは貴方御無理と申すもの、何も心得ん山出しの老人ゆえ、相手になすつた処がお恥辱になればとて誉れにもなりますまい、斬つたところが狗いぬを斬るも同様、御勘弁下さる訳には相成りませんか」

乙「ならんければ何ういたした」

浪「ならんければ致し方がない」

甲「斯こゝう致そう、当家でも迷惑をいたそうから、表へ出て、広々した飛鳥山の上にて果はたし合あいに及ぼう」

浪「何も果合いをする程の無礼を致した訳ではござらん」

甲「無いたつて食物くいものの中へ泥草履を投込んで置きながら」

浪「手前は此の通り病身で迎とてもお相手が出来ません」

甲「出来んなら尚宜しい、さ出る、病身結構だ、広々した飛鳥山へ出て華々しく果合いをしなせえ、最もう了簡まか罷りならん、篋べらぼう棒め」

と侍の面部へ唾を吐掛けました。

## 十三

斯うなると幾ら柔和でも腹が立ちます、唾を吐き掛けられた時には物も云わず半手拭を出して顔を拭く内に、眼がきりりと吊し上りました。相手の三人は酔っているから気が付きませんが、傍の人は直気が付きまして、

○「安さん出掛けよう、斯んな処で酒を呑んでも身になりませんよ、彼の位妹が出て謝つて、御主人が塩梅の悪いのに出て来て詫びているのに、酷い事をするじゃアないか、汁を打掛けたばかりで誰でも大概怒つちまう、我慢してえるが今に始まるよ、怪我でも仕ねえ中に出掛けよう、他に逃げ処がないから往こう〜」

△「折を然う云つたつけが間に合わねえから、此の玉子焼に鱈の照焼は紙を敷いて、手拭に包み、猪口を二つばかり瞞かして往こう」

と皆逃支度をいたします。此方の浪人は屹度身を構えまして、

浪「いよく御勘弁相成んとあれば止むを得ざる事で、表へ出てお相手になろう」

とずいひつさがたなと提げ刀で立つと、他の者が之を見て。

○「泥棒ツ」

△「人殺しいく」

と自分が斬られる訳ではないが、遽あわてゝ逃出すから、煙草盆を蹴散けちらかす、土瓶を踏ふみ毀こわすものがあり、料理代を払つて往ゆく者は一人もありません、中に素早い者は料理番へ駈か込んで鱈かつを三本担かぎ出す奴があります。彼の三人は真赤な顔をして、

甲「さ来い」

浪「然しからばお相手は致しますが、宜よろくお心を静めて御覽ごらんじろ、さして御立腹のあるべき程の粗相でもないに、果はた合あいに及んでは双方の恥辱になるが宜よろしいか」

乙「えゝ、やれく」

と何うしても肯ききません、酒の上で気が立つて居ります、一人が握にぎり拳こぶしを振つて打掛あるを早くも身をかまし、

浪「えい」

と逆に捻ねじ倒たおした手練てなみを見ると、余あの二人がばらくくと逃げました。前に倒れた奴が口惜くやしいから又起上つて組附あいて来る処ところを、拳こぶしを固めて脇腹の三枚目（芝居あでいたす当

身てみをくわせるので、余り食ったって旨いものでは有りません。

甲「うゝーん」

と倒れた、詰らんものを食ったので、見物の弥次馬が、

△「其方そっちへ二人逃げた、威張った野郎の癖せまに容ゆるア見やアがれ、殴れく」

と何だか知りもしないのに無茶苦茶ぞうりわらじに草履草鞋を投付ける。

織「これ喜六、よくお礼を申せ」

喜「へえ、誠に有難ありがたえことで、初はじまりは心配して居りました、若もし貴方に怪我でもあらば

仕様がねえから飛出そうと思つてやしたが、此の通りおつ死ぬちまで威張りアがつて野郎」

二つ三つ打つを押し止め、

浪「いや打つたつて致し方がありません罪も報いもない此奴こやつを殺しても仕様がなから、

御家来はゞか憚りだが彼方あつちで手桶を借り水を汲んで来て下さい」

喜「はい畏かしこまりました」

彼の侍かは其処そこに倒れた浪人の双方の脇きょうろくの下へ手を入れ、脇きょうろく 肋いっかつへ一活いっかつ入れる。

甲「あつ……」

と息を吹ふきかえ 反ふっかす処へ水を打掛ける。

甲「あつ／＼／＼……」

浪「其様な弱い事じゃアいけません、果合いをなさるなら立上つて尋常に華々しく」

甲「いえ／＼誠に恐入りました、酔に乘じ甚だ詰らん事を申して、お気に障つたら幾重にもお詫を致します、どうか御勘弁を願います」

喜「今度は詫るか、詫るといふなら堪忍してやるが、弱え奴だな、己よ様な年い老つた弱えもんだと馬鹿にして、三つも四つも殴りアがつて、斯う云う旦那に捉まると魂消てやアがる、我身を捻つて他人の痛さが分るだろう、初まりの二つは我慢が出来なかつたぞ、己も殴るから然う思え」

と握拳を固めてこん／＼と続けて二つ打つ。

甲「誠に先程は御無礼で」

と這々の体で逃げて行くと、弥次馬に追掛けられて又打たれる、意気地のない事。

織「どうか一寸旧の席へ、まあ／＼何卒……」

浪「いえ、些と取急ぎますから」

織「でもござろうが」

と無理に旧の茶屋へ連戻り、上座へ直し、慇懃に両手を突き、

織「斯かようの中ゆえ拙者の姓名等も申上げず、恐入りましたが、拙者は糸野美作守家来渡邊織江と申す者、今日こんにち仏参ぶつさんの歸途かえりみち、是なる娘が飛鳥山の花を見たいと申すので連れまいり、図らず貴殿の御助力を得て無事に相納まり、何ともお礼の申上げようもござりません、併しかしどうも起倒流きとうりゅうのお腕前お立派な事で感服いたしました、いずれ由よしあるお方と心得ます、御尊名をどうか」

浪「手前てまいは名もなき浪人でございます、いえ恐入ります、左様でございますか、実は拙者は松蔭大藏と申して、根岸の日暮が岡の脇の、乞食坂を下おりまして左へ折れた処に、見る蔭もない茅屋ぼうおくに佗住居わびずまいを致して居ります、此の後ごとも幾久しく……」

織「左様で、あゝ惜しいお方さまで、只今のお身の上は」

大「誠に恥入りました儀でござるが、浪人の生計たつき致し方なく売ばいトぼくを致して居ります」

織「売トを……易を……成程惜しい事で」

喜「お前さまは売うトない者しやか、どうもえらいもんだね、売ばいトぼく者しやだから負けるか負けねえかを占みて置いて掛るから大丈夫だ、誠に有難うござえました」

織「何いれ御尊宅へお礼に出ます」

と宿しゆくしよ所姓名を書付けて別れて帰ったのが縁となり、渡邊織江方へ松蔭大藏が入いりこみ、

遂に糸野美作守様へ取入って、どうか侍に成りたい念があつて企んで致した罫にかゝり、渡邊織江の大難に成ります所のお話でございます。此の松蔭大藏と申す者は前に述べました通り、従前美作国津山の御城主松平越後様の家来で、宜い役柄を勤めた人の子であります。浪人して図らず江戸表へ出てまいりましたが、彼の権六とも馴染の事でございます。ゆえ、権六方へも再三訪れ、権六もまた大藏方へまいりまして、大藏は織江を存じておりますから喧嘩の仲裁へ入りました事でございます。屋敷へ帰つても物堅い渡邊織江ですから早く礼に往かんければ気が済みませんので、お竹と喜六を伴れ、結構な進物を携えまして日暮ヶ岡へまいつて見ると、売卜の看板が出て居りますから、

織「あ此家だ、喜六一寸其の玄関口で訪れて、松蔭大藏様というのは此方かと云つて伺つてみる」

喜「はい畏りました、えゝお頼み申します」

大「ドーレ有、助何方か取次があるぜ」

有「はい畏りました」

つかくくと出て来ました男は、少し小、狭な男でございます。子持縞の布子を着て、無地小倉の帯を締め、千住の河原の煙草入を提げ、不粋の打扮のようだが、もと江

戸子どっこだから何処どつか気が利いて居ります。

有「え、おいでなさえまし、何でござえます」

喜「え、松蔭大藏様と仰しやるは此方こちらさまで」

有「え、松蔭は手前でござえますが、何か当とう用ようか身の上を御覧なされるなれば丁度今余り

人も居ねえ処で宜しゅうござえます、ま、お上あがなせえまし」

喜「いや、然そうじゃアござえませんが、旦那さまア此方こちらさまですと」

織「あい、御免ください」

と立派な侍が入って来ましたから、有助も少し容かたちを正して、

有「へえ、おいでなせえまし」

織「え、拙者は糸野美作守家来渡邊織江と申す者、え、早々お礼に罷まかり出いすべきでござつ

たが、主しゅ用よう繁多に就つき存じながら大きにお礼が延引いたしました、稍ようく今こん日にち番退ばんきの帰

りに罷まかり出でました儀で、先生御在宅なれば目通りを致しとうござる」

有「はい畏りました……え、先生」

大「何だ」

有「何なんだか飛鳥山でお前さんがお助けなすつた糸野美作守の御家来の渡邊織江とかいう



人がお嬢さんを連れて礼に来ましたよ」

大「左様か直すくに茶の良いのを入れて 葺たば盆こぼん、に火を埋いけて、宜よいか己が出迎むかうから……

いや是はくくどうか見苦しい処へ何とも恐入りました、どうか直にお通とほりを……」

織「今日こんにちは宜く御在宅で」

大「宜うこそ……是れはお嬢様も御一緒で、此の通とほりの手狭てせまで何とも恥入りましたことで、さ何卒なにとぞお通とほりを……」

織「え、御家来誠に恐入りましたが、一寸ちよつとお台を……何でも宜しい、いえく其様そのんな大きな物でなくとも宜しい、これく其の包の大きな方を此これ処へ」

と風呂敷を開ひらきまして、中から取出したは白羽しろはぶたえ二重一匹に金子が十両と云つては、其の頃では大した進物で、これを大藏の前へ差出しました。

#### 十四

尚も織江は慇いんぎん懃ぎんに、

織「先ず御機嫌宜しゆう、え、過日は凶あらずも飛鳥山で何とも御迷惑をかけ、彼の折おりはあ、

いう場所でござつて、碌々お礼も申上げることが出来んで、屋敷へ帰つても此娘が又どうか早うお礼に出たいと申しまして、実に容易ならん御恩で、実に辱けない事で、彼の折は主名を明すことも出来ず、怖い事も恐ろしい事もござらんが、女連ゆえ大きに心配いたし居りました、実に其の折は意外の御迷惑をかけまして誠に相済みません事で」

大「いえく、何う致しまして、再度お礼では却つて恐入ります、殊に御親子お揃いで斯様な処へおいでは何とも痛入りましてござる」

織「え、此品は（と盆へ載せた品を前へ出し）何ぞと存じましたが、御案内の通りで、下屋敷から是までまいる間には何か調べます処もなく、殊に番退けから間を見て抜けて参りましたことで、広小路へでも出たら何ぞ有りますようが、是は誠にほんの到来物で、粗末ではござるが、どうか御受納下さらば……」

大「いや是は恐入つたことで……斯様な御心配を戴く理由もなし、お辞のお礼で十分、どうか品物の所は御免を蒙りとう、思召だけ頂戴致す」

織「いえ、それは貴方の御気象、誠に御無礼な次第ではあるけれども、ほんのお礼のしるしまでございますから、どうかお受け下さるよう……甚だ何でござるが御意に適つた色にでもお染めなすつて、お召し下されば有難いことで、甚だ御無礼ではござるが……」

大「何<sup>なん</sup>ともどうも恐入りました訳でござる然<sup>しか</sup>らば折角<sup>おぼしめし</sup>の思召<sup>おぼしめし</sup>ゆえ此の羽二重<sup>はにふた</sup>だけは頂戴<sup>ちやうたい</sup>致しますが、只今の身の上では斯様な結構な品を購<sup>と</sup>るわけには逆<sup>とて</sup>もまいりません、併<sup>しか</sup>し此のお着<sup>さかなりよう</sup>料<sup>りょう</sup>とお記<sup>しる</sup>しの包は戴<sup>さか</sup>く訳にはまいりません」

織「左様でもござろうが、貴方<sup>なん</sup>が何<sup>なん</sup>でございますなら御奉<sup>ごほう</sup>公人<sup>こうじん</sup>にでもお遣<sup>つか</sup>わしなすつて下さる<sup>さ</sup>る<sup>よう</sup>に」

大「それは誠に恐入ります、嬢<sup>ぢやう</sup>さま誠に何とも……」

竹「いえ親共と早くお礼に上<sup>あが</sup>りたいと申し暮<sup>く</sup>し、私<sup>わたくし</sup>も種<sup>いろく</sup>々心ならず居りましたが、何分にも番<sup>ばん</sup>がせわしく、それ故<sup>ゆゑ</sup>大きに遅<sup>おそ</sup>れました、彼<sup>あ</sup>の節<sup>ふし</sup>は何ともお礼の申<sup>まを</sup>しようもございませぬ、喜<sup>き</sup>六<sup>む</sup>やお前<sup>まへ</sup>一寸<sup>ちよつと</sup>此方<sup>こちう</sup>へ出て、宜<sup>よろ</sup>くお礼を」

喜「はい旦那さま、彼<sup>あ</sup>の折<sup>おり</sup>は何ともはお礼の云<sup>い</sup>う様<sup>よう</sup>もございませぬ、私<sup>わし</sup>なんざアこれもう六十四になりますから、何もこれ彼奴<sup>あいつら</sup>等に打<sup>うち</sup>殺<sup>ころ</sup>されても命<sup>いのち</sup>の惜<sup>おし</sup>いわけはなし、只私の不<sup>ふ</sup>調法<sup>てうぽう</sup>から旦那様の御名義<sup>ごなぎ</sup>ばかりじゃアねえ、お屋敷<sup>やしき</sup>のお名前<sup>な</sup>まで出るような事<sup>こと</sup>があつちやア済<sup>す</sup>まねえと覚悟<sup>かくご</sup>を極めて、私一人<sup>ひとり</sup>打<sup>うち</sup>殺<sup>ころ</sup>されたら事<sup>こと</sup>が済<sup>す</sup>もうと思<sup>おも</sup>つてる所<sup>ところ</sup>へ、旦那様<sup>だんなさま</sup>が出て何ともはお礼<sup>れい</sup>の申<sup>まを</sup>しようはありません、見掛<sup>みかけ</sup>は綺麗<sup>きれい</sup>な優<sup>やさ</sup>しげな、力<sup>ちから</sup>も何もねえようなお前<sup>まへ</sup>様が、大<sup>だい</sup>の野郎<sup>のらう</sup>を打<sup>うち</sup>殺<sup>ころ</sup>しただから、お侍<sup>さむらい</sup>は異<sup>ちが</sup>つたものだど噂<sup>うわさ</sup>をして居<sup>ゐ</sup>りました」

大「然う云われては却つて困る、これは御奉公人で」

喜「はい私ア何でござえます、お嬢さまが五才の時から御奉公をして居り、長え間これ十五年もお付き申していますからお馴染でがす、彼の時お酒が一口出たもんだから、お供だで少し加減をすれば宜かったが、急いで飲つつけたで、えら腹が空つたから、二合出たのを皆な酌飲んじまい、酔ぱらいになつて、つい身体が横になつたところから不調法をして、旦那様に御迷惑をかけましたが、先生さまのお蔭さまで助かりましたは、何ともお礼の申上げようはござえません」

織「え、今日は直にお暇を」

大「何はなくとも折角の御入来、素より斯様な茅屋なれば別に差上るようなお下物もありませんが、一寸詰らん支度を申し付けて置きましたから、一口上つてお帰りを」  
織「いや思召は辱けないが、今日は少々急ぎますから、併し貴方様はお品格といい、先達て三人を相手になすつたお腕前は余程武芸の道もお心懸け、御熟練と御無礼ながら存じました、どうか承わりますれば新規お抱えに相成つた權六と申す者と前々から知るお間柄ということを一寸屋敷で聞きました、御生国は矢張美作で」

大「はい、手前は津山の越後守家来で、父は松蔭大之進と申して、聊か高も取りました者

でござるが、父に少し届かん所がありました、お暇いとまになりました、暫しばらくの間黒戸くろとの方へま  
 いて居り又は權六の居りました村方にも居りました、それゆえに彼あれとは知る仲でござい  
 ます」

織「実にどうも貴方は惜おしいことで、大概忠臣二君に事つかえずと云う堅い御氣象であらつしや  
 るから、立派な処から抱えられても、再び主しゅは持たんといいところの御決心でござるか」  
 大「いえ、二君に仕つかえんなどと申すは立派な武士の申すことで、どうか斯うやつて店たなが  
 借りを致して、売ばい卜者ぼくしやで生涯くちはて朽果くちはてるも心外なことで、仮令たとえ何様なんな下役小祿しゆでも主しゆ取り  
 をして家名を立てたい、心こころ懸がけもござりますが、これという知しる己べもなく、手蔓てづる等とうもない  
 ことで、先せん達だつて權六に会あひまして、これ、だと承うり、お前は羨うらやましい事ことで、遠山の苗  
 字ななを継ついでと米こめ搗つきをしていた身の上の者が大祿たいろくを取るようになったも、全くお前の  
 心こころ懸がけが良いので自然そに左様な事ことになったので、拙者どんなどは早く親おやに別わかれるくらいな不  
 幸あきらの生うれゆえ、とても然そういう身の上には成なれんが、何様なんな処ところでも宜よろしいから再び武家ぶけに  
 なりたい、口くちが有あつたら世話せわをしてくれんかと權六にも頼たのんで置おきましたくらいで、何どの  
 様な小祿せいろの旗はた下もとでも宜よろしいが、お手蔓てづるがあるならば、どうか御推拳ごすいけんを願ねがひたい、此この儀  
 は權六にも頼たのんで置おきましたが、御重役ごじゆうやくの尊公定そんこうじやうめしお交つきあ際あいもお広ひろいこと、心得こころえますから」

織「承知致しました、え、宜しい、いや実に昔は何か貞女両夫に見えずの教訓を守つて居りましたが、却つてそれでは御先祖へ対しても不孝にも相成ること、拙者主人美作守は小禄でござるけれども、拙者これから屋敷へ立帰つて主人へも話をいたしましょう、貴方の御器量は拙者は宜く承知しておるが、家老共は未だ知らんことゆえ、始めから貴方が越後様においでの際のように大禄という訳にはまいりません、小禄でも宜しくば心配をして御推挙いたしましょう」

大「どうもそれは辱けない事で」

と是から互に酒を飲合つて、快く其の日は別れましたが、妙な物で、助けられた恩があるゆえ、織江が種々周旋いたしたところから、丁度十日目に松蔭大藏の許へお召状が到来致しましたことで、大藏披いて見ると。

御面談申度儀有之候間明十一日朝五つ時当屋敷へ御入来有之候様美作守 申付候此段得御意候以上

美作守内

三月十日

寺島兵庫

## 松蔭大藏殿

という文面で、文箱ふぼこに入つて参りましたから、当人の悦びは一通りでございませぬ、先ず請書うけしよをいたし、是から急に支度にかゝり、小清潔こぎよつぱりした紋付の着物が無ければなりませぬ、紋が少し異ちがつていても宜い、昌しょう平へいに描かかせても直じきに出来るだろうが、今日一日のことだからと有助を駄つけさせて買ついに遣わし、大小は素もとより用たしなみ意いがありますから之を佩さして、翌朝よくあさの五つ時に虎の門のお上屋敷かみやしきへまいりますと、御門番には予かねて其の筋から通知がしてありますから、大藏を中の口へ通し中の口から書院へ通しました。

## 十五

御書院の正面には家老寺嶋兵庫、お留守居渡邊織江其の外お目附列座で新規お抱えのこと言渡し、拾俵五人扶持をくだ下し置かるゝ旨のお書付を渡されました。其のお書付には高拾俵五人扶持と筆太に書いて、宛名は隅の方へ小さく記してござります。織江きたから来る十五日御登城の節お通り掛けお目見え仰おおせつ付つけらるゝ旨、且上屋敷かつに於てお長家ながやを下し置かるゝ旨をも併あわせて達たしましたので、大藏は有難うげきよしのお受うけをして拝領の長家ながやへ下さがりまし

た。織江が飛鳥山で世話になった恩返しので、御不自由だらうから是もお持ちなさい、彼もお持ちなさいと種々な品物を送ってくれたので、大藏は有難く心得て居りました。其の中十五日がまいると、朝五つ時の御登城で、其の日大藏は麻上下でお廊下に控えていると、臆てござり〜と申す麻上下と足の音がいたす、平伏をする、というのでお目見えというから読んで字の如く目で見るのかと存じますと、足音を聞くばかり、寧ろお足音拝聴と申す方が適當であるかと存じます。併し當時では是すら容易に出来ませんことで、先ず滞りなくお目見えも済み、是から重役の宅を廻勤いたすことで、是等は総て渡邊織江の指図でございりますが、羽振の宜い渡邊織江の引力でございしますから、自から人の用いも宜しゅうございしますが、新参のことで、谷中のお下屋敷詰を申付けられました。始りはお屋敷外を槍持六尺棒持を連れて見廻らんければなりません、槍持は仲間部屋から出ます、棒持の方は足軽部屋から出て、整石の処をとん〜とん〜敲いて歩く、余り宜い役ではありません、芝居で演じましても上等役者は致しません所の役で、それでも拾俵の高持になりました。所が大藏如才ない人で、品格があつて弁舌愛敬がありまして、一寸いう一言に人を感じさせるのが得意でございしますから、家中一般の評判が宜しく、甲「流石は渡邊氏の見立だ、あれは拾俵では安い、百石がものはあるよ」



乙「いゝえ何<sup>なん</sup>でげす、家老や用人よりは中々腕前が良いそうだが、全体<sup>あれ</sup>彼を家老にしたら宜<sup>よろ</sup>かろう」

などと種々<sup>いろく</sup>なことを云います。大藏は素<sup>もと</sup>より気が利いて居りますから、雨でも降るとか雪でも降ります時には、部屋へ来まして

大「一盃<sup>いっぱい</sup>飲むが宜<sup>よ</sup>い、今日は雪が降つて寒いから巡<sup>おまわり</sup>検<sup>わし</sup>は私一人で廻ろう、なに槍持ばかりで宜しい、此の雪では誰も通るまいから咎める者も無かろう、私一人で宜しい、これで一盃飲んでくれ」

と金<sup>かね</sup>びらを切りまして、誠に手当が届くから、寄ると触ると大藏の評判で、

甲「野<sup>のがみ</sup>上イ」

乙「えゝ」

甲「今度新規お抱えになつた松蔭様はえらいお方だね」

乙「彼<sup>あれ</sup>は別だね一寸<sup>ちよつと</sup>来ても寒かろう、一盃飲んだら宜かろうと、仮令<sup>たとえ</sup>二百でも三百でも錢を投出して目鼻の明く処は、どうも苦勞した人は違うな、一体御当家様よりは立派な大名の御家来で立派なお方が貧乏して困つて苦勞した人だから、物が届いている、感心な事だ、夜<sup>よ</sup>は寒いから止せゝと御自分ばかりで見廻りをして勤めに怠りはない、それから見

ると此方等は寝たがってばかりいて扱さて仕様がないの」

甲「本当にどうも……お、噂うわさをすれば影とやらで、おいでなすつた」

と仲間共ちゆうげんどもは大藏を見まして、

「え、どうもお寒うございます」

大「あ、大きに御苦労だが、又廻りの刻限が来たから往つてもらわなければならん、昼間きやくらいお客ま来て又た遺失物おとしものでもあるといかんから、仁助私にすけわしが一人で見廻ろう、雪がちらちらと来たようだから」

仁「成程降つて来ましたね」

大「よほど降つて来たな、提灯ちようちんも別に要いるまい、廻りさえすれば宜よいのだ、私わしは新役だからこれが務つとめで、貴様達は私に連れられる身の上だ、殊ことに一人や二人狼藉者が出ても取つて押えるだけの力はある、といつて何も誇るわけではないが、此の雪の降るに、連れて往いかれるのも迷惑めいわくだろうから」

仁「面目次第こちとらもありませんが、此方等は狼藉者でも出ると、真先まつさきに逃出し、悪くすると石へ蹴くつまずいて膝ひざア毀こわすたちでありますよ、恐入こわりますな」

大「御家中ごかちゆうで万事ばんじに心附こころづきのある方は渡邊殿と秋月殿である、寒さかろうから寒ささし凌しのぎ

に酒を用いたら宜かろうと云つて、御酒を下すつたが、斯様な結構な酒はお下屋敷にはないから、此の通り徳利を提げて来た、一升ばかり分けてやろう別に下物はないから、此錢で何ぞ嗜な物を買つて、夜蕎麦売が来たら窓から買え」

仁「恐れ入りましたな、何ともお礼の申そうようはございません、毎もお噂ばかり申しております実に余り十分過ぎまして……」

大「雪が甚く降るので手前達も難儀だろう、私一人で宜しい提灯と赤合羽を貸せ〜」

と竹の饅頭笠を被り、提灯を提げ、一人で窃かに廻りましたが却つてどか〜多勢で廻ると盗賊は逃げますが、窃かに廻ると盗賊も油断して居りますから、却つて取押えることがあります。無提灯でのそ〜一人で歩くのは結句用心になります。或日お客来で御殿の方は混雑致しています時、大藏が長局の扉の外を一人で窃かに廻つてまいりますと、沢山ではありませんが、ちら〜と雪が顔へ当り、なか〜寒うござります、雪も降止みそうで、風がフツと吹込む途端、提灯の火が消えましたから、

大「あゝ困つたもの」

と後へ退ると、長局の板扉の外に立つて居る人があります。無地の頭巾を目深に被りまして、扉に身を寄せて、小長い刀を一本差し、小刀は付けているかいなか判然分りま

せんが、鞆の光りが見えます。

大「はてな」

と大藏は後へ退つて様子を見ていました。すると三尺の開ひらきぐち口がギーと開あき、内から出て来ました女はお小姓姿、文金ぶんぎんの高髻たかまげ、模様は確しかと分りませんが、華美はでな振袖で、大和錦やまとにしきの帯を締め、はこせこと云うものを帯へ挟んで居ります。器量はつきりも判然分りませんが、只色の真白まっしろだけは分ります。大藏は心の中で、ヤア女が出たな、お客来の時分に芸人を呼ぶと、毎も下屋敷のお女中方が附いて来るが、是は上屋敷の女中かしらん、はてな何うして出たろう、此の掟の厳しいのに、今日こんにちのお客来で御藏おくらから道具だしを出入れするお掃除番が、粗忽そこつで此の締りを開けて置いたかしらん、何にしろ怪けしからん事だと、段々側へ来て見ますと、堀外へいそとに今の男が立つて居りますからハ、ア、さてはお側近く勤むる侍と奥を勤めるお女中と密通をいたして居るのではないかと存じましたから、後へ退つて息を屏こころして、密そつと見て居りますと、彼の女は四辺あたりをきよろしく見廻しまして声を潜め、女「春部はるべさま、春部さま」

春「シツく、声を出してはなりません」

と制しました。

## 十六

お小姓姿の美しい者が眼に涙を浮めまして、

女「貴方わたしから私わたしから幾許いくらお文ふみを上げましても一度もお返辞うかのないのはあんまりだと存じま  
す、貴方はもう亀井戸かめいどの事をお忘れ遊ばしたか、私はそればかり存じて居りますけれど  
も、掟おきてが厳しいのでお目通りを致すことも出来ませんでした、今晚は宜よい間まにお目に懸  
れました」

春「他ひとに知れてはならんが、今夜は雪が降つて来たので、廻りの者も自然役目を怠つて、  
余りちよん／＼叩いて廻らんようだが、先刻さつぎちよいと合図をしたから、ひよつと出て来よ  
うと存じてまいったが、此の事が伯父に知れた日にア実に困るから、他ひとに知れんようにし  
て私わたしも会いたいと思うから、来年三月宿やど下さがりの折に、又例の亀井戸の巴屋ともえやで緩ゆるくり話  
を致しましょう」

女「宿下やどさがりの時と仰しやっても、本当に七夕様のようにでございますね、一年に一度しきやア  
お目通りが出来ないのかと思いますと、此の頃では貴方の夢ばかり見て居りますよ、私わたしは

思いの儘なことを書いて置きましたから、これを篤くり見て下されば分りましょう、私の身にかゝる事がございますからお持ち遊ばせ」

と渡す途端に後から突然に大声で、

大「火の廻り」

という。二人は恟り致しまして、後へ退き、女は慌て、開き戸を締めて奥へ行く。彼の春部という若侍も同じく慌て、お馬場口の方へ遁げて行く。大藏は密と後へ廻つて、三尺の開戸を見ますと、慌て、締めずにまいったから、戸がばたく、煽るが、外から締りは附けられませんから石を支つて置きまして、

独言に、

大「困つたな、女が手紙を出したようだが、男の方で取ろうという処を、己が大きな声で唸鳴つたから、驚いたものか文を落して行つた、これは宜い物が手に入った」

と懐へ入れて詰所へ帰り、是から同役と交代になります。

大「此の手紙をいづぞは用に立てよう」

と待ちに待つて居りました。彼の春部というものは、お小姓頭を勤め十五石三人扶持を領し、秋月の甥で、梅三郎という者でございます。お目附の甥だけに羽振が宜しく、お父さまは平馬という。梅三郎は評判の美男で、婀娜な、ひんなりとした、芝居でいたせば

家橘かきつか上りの菊のぼの助でも致しそうな好い男おとこで、丁度其の月の二十八日、春部梅三郎は非番のことだから、用達ようたし旁かた々／＼というので、根津の下屋敷を出まして、上野の広小路で買物をいたし、今山下の袴はかま腰こしの方へ掛ろうとする後うしろから、松蔭大藏が声をかけ

大「もしくく春部さまく」

梅「あい、これは大藏殿かえ」

大「へえ、今日は好よいお天気になりました、お非番でげすか」

梅「あゝ幸い非番ゆえ浅草へでもまいろうかと思う」

大「へえ私わたくしも今日こんにちは非番で、ま別に知己しるべもありませんし、未だ当地の様子も不慣ふなれでござい  
ますから、道を覚えて置かなければなりません、切せめて小梅のお中屋敷へまいる道だけでも覚えようと存じて、浅草から小梅の方へまいると存じまして、実は頼たのみ合あわせてまい  
りました」

梅「然そうかえ、三さん作さくはお前の相役あいやくだね」

大「へえ左様でござります、えゝ春部さま、貴方少々伺いたい儀がござりますが、決して  
お手間は取らせませんから、あの無極庵むきよくあん（有名の蕎麦店そばや）まで、えへ貴方少々御馳走に  
差上げるといふは甚はなはだ御無礼な儀でござりますが、一寸ちよつと伺いたい儀がござりますから、

お急ぎでなければ無極の二階までおいでを願います」

梅「別に急ぎも致さんが、何か馳走をされては困ります、お前は大分下役の者へ馳走をして振舞うという噂があるが余り新役中に華美な事をせんが宜いと伯父も心配しています」

大「へえ、毎度秋月さま渡邊さまのお引立に因りまして、不肖の私が身に余る重役を仰付ければ、誠に有難いことで決してお手間は取らせませんから」

梅「いや又にいたそう」

大「どうか甚だ御無礼でございますが何卒願います、少々お屋敷の御家風の事に就て伺いたい儀がございます」

梅「左様か」

と素より温厚の人でございますから、強つてと云うので、是から無極の二階へ通りました。追々 詠物の肴が出てまいりましたから、

大「女中今少しお話し申す事があるから、誰も此処へ参らんようにしてくれ、用があれば手を拍つて呼ぶから」

女中「はい、左様なれば此処を閉めましょうか」

大「いや、それは宜しい……え、お急ぎの処をお引留め申して何とも恐入りました」



梅「あい何だえ、私に聞きたい事というのは」

大「え、外でもござりませんが、お屋敷の御家風に就て伺いたい儀がござる、それと申すも拙者は何事も御家風を心得ません不慣の身の上にて、斯様な役向を仰付けられ、身に余りて辱けない事と存じながら、慾には限りのないもので、何の様に拙者身体が続くだけは御奉公致します了簡なれども、上役のお引立が無ければ逆も新参者などは出世が出来ません、渡邊殿は別段御鼻屑を下さいますが、貴方の伯父御さまの秋月さまは未だ染み々々、お言葉を戴きました事もないゆえ、大藏疾より心懸けて居りますが、手蔓はなし、よんどころんにち、抛なく今日迄打過ぎましたが、春部様からお声が、りを願い、秋月様へお目通りを願ひまして、お上へ宜しくお執成を願ひますれば拙者も慾ばかりではござらん、先祖へ対して此の上ない孝道かと存じますで、どうぞ伯父上へ貴方様から宜しく御推挙を願ひたい」

梅「いや、それはお前無理だ、よく考えて見なさいお前は何か腕前が善いとか文道にも達して居るとか、又品格とよい応対とよい、立派な侍の胤だけあつて流石だと家中の評も宜しいが、何ぞ功がなければ出世は出来ん、其の功と云うは他に勝れた事があるとか、或は屋敷に狼藉でも忍入った時に取押えたとか何かなければ逆もいかんが、如何に伯父甥の間柄でも、伯父に頼んで無理にあゝしてくれ、斯うしてくれと云つては依怙の沙汰にな

つて、それでは伯父も濟まん訳だから、然うそいう事で私わしを此これ処へ呼び寄せて、お前が馳走をして引立ひきたてを願うと云つて、酒などを飲ましてくれちや誠に困る、斯様な事が伯父に知れると叱られますから御免……」

と云い棄て、立上る袖を押えて、

大「暫くお待ちを……此の身の出世ばかりでなく、斯かく申す大藏も聊いさぐかお屋敷へ対して功がござる、それゆえ強しいて願いますわけで」

梅「功が有れば宜しい、何ういう功だ」

大「愚昧ぐまいの者にて何事も分りませんが、お屋敷の御家風は何ういう事でござろうか、罪の軽けいじゆう重を心得ませんが、先ず御家中内に罪あるものがございます時に、重き罪を軽く計らう方が宜しいか、罪は罪だから其の悪事だけの罪に罰するが宜しいか、私心得わたくしのために承知をして置きとうござる」

梅「それは罪を犯したる者の次第にも困よりましようけれども、上かみたる者は下したの者の罪は減じ得られるだけ軽くして、命を助けんければならん」

大「それは然そうあるべき事で、若もし貴方の御家来が貴方に対して不忠な事を致しまして、手討に致すべき奴を手討にせんければならん時、手討に致した方が宜しいか、但しお助け

なすつて門前払いにいたし、永のお暇を出された方がお宜しいか」

梅「其様な事は云わんでも知れて居る、斬る程の罪を犯し、斬るべきところを助け、永の暇と云つて聊か手当をいたして暇を遣わす、是が主従の情というもので、云うに云われん処が有るのじや」

## 十七

大藏は感心した風をして聞き了り、

大「成程甚だ恐入りますが、殿様も誠に御仁慈厚く、また御重役方も皆真に智仁のお方々だという事を承わつて居りますが、拙者はな、お屋敷内に罪あるもので、既にお手討にもなるべき者を助けました事が一廉ございます、此の廉を以てお執成を願います」

梅「むゝ、何ういう理由で、人は誰だね」

大「えゝ疾より此の密書が拙者の手に入つて居りますが、余人に見せては相成らんと、貴方の御心中を看破つて申し上げます、どうか罪に陥らんようにお取計いを願ひとうござる」  
梅「何だ、密書と云えば容易ならん事だ」

と手に取つて見て驚きましたも道理で、いつぞや若江から自分へ贈つた艶書であるから、かつと赤面致しましたが、色の白い人が赧くなつたので、そりアどうも牡丹へ電灯を映けたように、どうも美しい好い男で、暫く下を向いて何も云えません。大藏少し膝を進ませまして、

大「是は私の功かと存じます、此の功によつてお引立を願ひとう存じます、只出世を致したいばかりではないが、拙者前に津山に於て親父は二百四十石領りました、松蔭大之進の家に生れた侍の胤、唯今ではお目見得已上と申しても、お通り掛けお目見えで、拙者方では尊顔を見上ぐる事も出来ませんから、折々お側へ罷出でお目通りをし尊顔を見覚えるように相成りたいで」

梅「いや伯父に宜く然う云いましょう、秋月に宜く云えば心配有りません、屹度伯父に話をします、貴公の心掛けを誠に感心したから」

大「それは千万辱けない、其のお言葉は決して反故には相成りますまい」

梅「武士に二言はありません」

大「へえ辱けない」

春部梅三郎は真つ赤に成つて、彼の文を懐に入れ其の儘表へ駈出すを送り出し、広小路

の方へ行く。後姿を見送つて、にやりと苦笑いをしたは、松蔭大藏という奴、余程横着者でございます。扱其の歳の暮に春部梅三郎が何ういう執成しを致しましたか、伯父秋月へ話し込むと、秋月が渡邊織江の処へまいりまして相談致すと、素より推挙致したのは渡邊でございますが、自分は飛鳥山で大藏に恩になつて居りますから、片鼻肩になるようで却つて当人のためにならんからと云つて、扣え目にして居りますと、秋月の引立で御前体へ執成しを致しましたから、急に其の暮松蔭大藏は五十石取になり、御近習お小納戸兼勤を仰付けられました。御部屋住の前次様のお付き元締兼勤を仰付けられました。此の前次様は前申し述べました通り、武張つたお方で武芸に達した者を手許に置きたいというので、御当主へお願い立でお貰い受けになりましたので、お上邸と違つてお長家も広いのを頂戴致す事になり、重役の氣受けも宜しく、男が好つて程が善いから老女や中老までも誉めそやし、

○「本当にえらいお人で、手も能く書く、力も強く、他は否に諂うなどと申すが、然うでない、真実愛敬のある人で、私が此の間会つた時にこれく云つて、彼は誠の侍でどうも忠義一途の人であります」

と勤務が堅いから忽ち評判が高くなりました。乃で有助という、根岸にいた時分に使つ

た者を下男に致しまして、新規に林藏りんぞうという男を置きました。これは屋敷奉公に慣れた者を若党に致しましたので、また男ばかりでは不自由だから、何ぞ手許使てもとづかいや勝手許かつてもとを働く者がなければなりませんから、方々へ周旋を頼んで置きますと、渡邊織江の家来船ふなが上忠助みちゆうすけという者の妹お菊きくというて、もと駒込片町こまごめかたまちに居り、当時本郷春木町ほんごうはるきちようにいる木具屋岩吉きぐやいわきちの娘がありました。今年十八で器量はよし柔和ではあり、恩人織江くちいの口入くちいでありますから、早速其の者を召抱えて使いました。大藏は物事が行届ゆきとぎき、優しくつて言葉の内に愛敬があつて、家来の龜相かめそうなどは知つても咎とがめませんから、家来になつた者は誠に幸いで、屋敷中の評判が段々高くなつて来しました。折しも殿様が御病気で、次第に重くなりました。只今で申しますと心臓病とでも申しますか、どうも宜しくない事がございます。只今ならば空気の好よい処とか、樹木の沢山あります処を御覧なすつたら宜かろうというので、大磯とか箱根とかへお出いででが出来ますが、其の頃では然そうはまいりません。然しかるに奥様は松平和泉守まつだいらいずみのかみさまからお輿入れこしいになりましたが、四五年前ぜんにお逝去かくれになり、其の前まえから居りましたのはお秋あきという側室ゆかけで、これは駒込白山はくさんに住む山路宗庵やまじそうあんと申す町医の娘を奥方から勧めて進ぜられたので、其の頃諸侯の側室ゆかけは奥様から進ぜらるゝ事でございますが、今は然そういう事はないことで、且那様が妾を抱えようと仰しやると、

少しつんと遊ばしまして、私は箱根へ湯治に往きますとか何とか仰しやいますが其の頃は  
 固いもので、奥様の方から無理に勧めて置いたお秋様が挙げました若様が、お三歳とい  
 時に奥様がお逝去になりましたから、お秋様はお上通りと成り、お秋の方という。側  
 室が出世をいたしますと、お上通りと成り、方名が附きます。よく殿方が腹は借物だ良  
 い胤を下す、只胤を取るためだと軍鶏じやア有るまいし、胤を取るといふ事はありませ  
 ん造化機論を拝見しても解つて居りますが、お秋の方は羽振が宜しいから、御家来の内二派  
 に分れ、若様の方を鼻負いたすものと、御舎弟前次様を鼻負いたす者とが出来て、お屋敷  
 に騒動の起ることは本にもあれば義太夫にも作つて有ります。前次様は通称を紋之丞さま  
 と仰せられ、武張つた方で、少しも色気などは無く、疝癖が起るとつか／＼と物を  
 仰しやいます。お秋の方も時としては甚く何か云われる事があり、御家来衆も苛く云われ  
 るところから、

甲「紋之丞様を御相続としては御勇氣に過ぎて実に困る、あの疝癖では逆も治らん、勇ば  
 かりで治まるわけのものではない、殿様は御病身なれば、万一お逝去になつたらお秋殿の  
 お胤の若様を御相続とすればお屋敷は安泰な事である」

とこそ／＼若様附の御家来は相談をいたすとは悪いこととございますが、紋之丞様を無

い者に仕ようという、ない者というのは殺してしまうと云うので、昔はよく毒薬を盛るといふ事がありました。随分お大名にありました話で、只今なればモルヒネなどという劇剤もありますが、其の時分には何か鳩毒とか、或は舶来の石ぐらいのところ、毒の劇しいところです。彼の松蔭大藏は智慧が有つて、一家中の羽振が宜くつて、物の決断は良し、彼を抱込めば宜いと寺島兵庫と申す重役が、松蔭大藏を抱込むと、松蔭は得たりと請合つて、

大「十分事を仕遂せました時には、どうか拙者にこれくの望がございますが、お叶え下さいますか」

寺「委細承知致した、然らば血判を」

大「宜しい」

と是から血を出し、我姓名の下へ捺すとは痛い事をしたもので、ちよいと切つて、えゝと捺るので、忌な事でありませう。只今は血を見る事をお嫌いなさるが、其の頃は動ともすれば血判だの、迎も立行が出来んから切腹致すの、武士道が相立たん自殺致すなどと申したもので、寺島松蔭等の反逆も悉皆下組の相談が出来て、明和の四年に相成りました。其の年の秋までに謀策を仕遂せるのに一番むずかしいものは、浮舟という老女で年は五



十四で、男優りの尋常ならんものが属して居ります。此者を手に入れなければなりません。此者と物堅い渡邊織江の兩人を何うかして手に入れんけりやアならんが、これくと渡邊に打明けていう訳にはいかずと、云えば直に殺されるか、刺違えて死兼ね忠義無類の極頑固な老爺でございますから、これを亡いものにせんけりアなりません。

十八

老女も中々の才物ではございますが、女だけに遂に大藏の弁舌に説附けられました。此の説附けました事は猥褻に涉りますから、唯説附けたと致して置ましよう。扱て此の一味の者がいよく毒殺という事に決しまして、毒薬調合の工夫は有るまいかと考えて居りますと御案内の通り明和の三年は関東洪水でございまして、四年には山陽道に大水が出て、二年洪水が続き、何処となく湿気しますので、季候が不順のところから、流行感冒インフルエンザと申すような悪い病が流行って、人が大層死にましたところが、お扣の前次様も矢張流行感冒に罹られました処、段々重くなるので、お医者方が種々心配して居りますが、勇気のお方ゆえ我慢をなすつて押しおいでのいけません、風邪を押し損なつたら仕方

がない、九段坂を昇ろうとする荷車見たように後へも前へも往けません。とうとう藤本の寄席へ材木を押込むような事が出来ず。こゝで大藏がお秋の方の実父山路宗庵は町医でこそあれ、古方家の上手でありますから、手に手を尽して山路をお抱えになすつたら如何と申す評議になりますと、秋月は忠義な人でございますから、それは怪しからん事、他から医を入れる事は容易ならん事にて、お薬を一々毒味をして差上げる故に、医は従来のお医者か然も無くば匙でも願うが宜いと申して承知致しませんから、如何致したら宜かろうと思つていました。すると九月十日に、駒込白山前に小金屋源兵衛という飴屋があります、若様のお小さい時分お咳が出ますと水飴を上げ、又はお風邪でこんくお咳が出ると水飴を上ります。こゝで神原五郎治と神原四郎治兄弟の者と大藏と三人打寄り、額を集めみづがなわはなし鼎足で談を致しました時に、人を遠ざけ、立聞きを致さんように襖障子を開広げて、向うから来る人の見えるようにして、飴屋の亭主を呼出しました。

源「え、今日お召によつて取敢ず罷り出ました、御殿へ出ます心得でありましたが、御当家さまへ出ました」

大「いや、御殿では却つて話が出来ん、其の方例の係り役人に遇つても、必らず当家へ来たことを云わんように」

源「へえ畏まりました、此の度は悪い疫が流行り、殿様には続いてお加減がお悪いとか申すことを承りましたが、如何で」

大「うん、どうもお咳が出てならん」

源「へえ、へい、それははや何とも御心配な儀で……今日召しましたのは何ういう事ですか、何うか飴の御用向でも仰付けられますのでございますか」

大「神原氏貴公から発言されたら宜しゅうござろう」

神「いや拙者は斯ういう事を云い出すは甚だいかん、どうか貴公から願いたい、斯う云う事は松蔭氏に限るね」

大「拙者は誠に困る、え、源兵衛、其の方は御当家へ長らく出入をするが、御当家さまを大切に心得ますかえ」

源「へえ決して粗略には心得ません、大切に心得て居ります」

大「ム、ウ、御当家のためを深く其の方が思うなら、江戸表の御家老さま、又此の神原五郎治さま、渡邊さま、此の四郎治さま、拙者は新役の事ではあるが此の事に就てはお家のためじゃからと云うので、種々御相談があつた、始めは拙者にも分りません所があつたが、だん／＼重役衆の意見を承わつて成程と合点がゆき、是はお家のためという事を承

知いたしたのだ」

源「へえ、どうも然ういう事は町人などは何も弁えのありません事でございまして、へえ何ういう事が御当家さまのお為になりますので」

大「他でもないが上が長らく御不例でな、お医者も種々手を尽されたが、遠からずと云う程の御重症である」

源「へえ何でげすか、余程お悪く在つしやいますんで」

大「大きな声をしては云えんが、来月中旬までは保つまいと医者が申すのじゃ」

源「へえ、どうもそれはおいとしい事で、お目通りは致しませんが、誠に手前も長らく親の代からお出入りを致しまして居りますから、誠に残念な事で」

大「うむ、就ては上がお逝去になれば、貴様も知つての通り奥方もお逝去で、御順にまければ若様をとこのだが、まだ御幼年、取つてお四歳である、余りお稚さ過ぎる、併しお胤だから御家督御相続も仔細はないが、此の事に就て其の方に頼む事があるのだ、お家のため且容易ならん事であるから、必ず他言をせん、何の様な事でもお家のためには御意を背きますまい、という決心を承知せん中は話も出来ん、此の事に就いては御家老を始め、こゝにござる神原氏我々に至るまで皆血判がしてある、其の方も何ういう事があつても他

言はせん、御意に背くまいという確とした証拠に、是へ血判をいたせ」

源「へえ血判と申しますは何ういたしますので」

大「血で判をするから血判だ」

源「え、それは御免を蒙ります、中々町人に腹などが切れるものではございません」

大「いや、腹を切ってくれろというのではない」

源「でも私は見た事がございます、早野勘平が血判をいたす時、臓腑を引出しましたが、

あれは中々町人には」

大「いや、腹を切る血判ではない、爪の間をちよいと切つて、血が染んだのを手前の姓

名の下へ捺すだけで、痛くも痒くもない」

源「へえ何うかしてさ、くれや何かを剥くと血が染みますことが……ちよいと捺せば宜し

いので、私は驚きました、勘平の血判かと思ひまして、然ういう事がお家のおために成れ

ば何の様な事でもいたします」

大「手前は小金屋と申すが、苗字は何と申す」

源「へえ、矢張小金と申します」

と云うを神原四郎治が筆を執りて、料紙へ小金源兵衛と記し、

大「さア、これへ血判をするのだ、血判をした以上は御家老さま始め此の方等ほうらと其の方とは親類の間柄じやのう」

源「へえ恐入ります、誠に有難いことで」

大「のう、何事も打解けた話でなければならん、其の代り事成就なせば向後御出入頭こうごおでいりがしらに取立てお扶持も下さる、就てはあゝいう処へ置きたくないから、広小路あたりへ五間々口ごけんまぐちぐらいの立派な店を出し、奉公人を多人数使つて、立派な飴屋になるよう、御家老職に願つて、金子きんすは多分に下りよう、千両までは受合つて宜しい」

源「へえ……有難いことで、夢のようでございますな、お家のためと申しても、私風情わたくしが何のお役にも立ちませんが、それでは恐入ります、いえ何様な事どんでも致します、へえ手や指ぐらいは幾許切つても葉さえ附ければ直じきに癒なわりますから宜しゅうございます、なんの指ぐらいを切りますのは」

とちよいと其の頃千両からの金子かねを貰つて、立派な飴屋になるといふので嬉しいから、指の先を切つて血判をいたし、

源「何ういう御用で」

大「さ、こゝに葉がある」

源「へえくくく」

大「貴様は、水飴を煮るのは余程手間のかゝったものかのう」

源「いえ、それは商売ですから直に出来ますことで」

大「どうか職人の手に掛けず、貴様一人で上の召上るものだから練れようか」

源「いえ何ういたしまして、年を老つた職人などは攪廻しながら水涕を垂すこともありまして、決して左様なことは致させません、私が如何ようにも工夫をいたします」

大「それでは此の薬を練込むことは出来るか」

源「へえ是は何のお薬で」

大「最早血判致したから、何も遠慮をいたすには及ばんが、一大事で、お控えの前次様は御疳癪が強く、動もすれば御家来をお手討になさるような事が度々ある、斯様な方がお世取に成れば、お家の大害を惹出すであろう、然る処幸い前次様は御病氣、殊にお咳が出るから、水飴の中へ此の毒薬を入れて毒殺をするので」

源「え……それは御免を蒙ります」

大「何だ、御免を蒙るとは……」

源「何だつて、お忍びで王子へ入らっしゃる時にお立寄がありました、お十三の頃からお

目通りを致しました前次様を、何かは存じませんが、私の手からお毒を差上げますことは  
迎も出来ません」

という、神原四郎治がキリ、と眦まなじりを吊し上げて膝を進めました。

## 十九

神原「これ源兵衛、手前は何のために血判をいたした、容易ならんことだぞ、お家のため  
で、紋之丞様が御家督に成れば必らずお家の害になることを存じているから、一家中の者  
が心配して、此の通り役柄をいたす侍が頼むのに、今となって否いやだなどと申しても、一大  
事を聞かせた上は手討にいたすから覚悟いたせ」

源「ど、何卒御免を……お手討だけは御勘弁を……」

大「勘弁まか罷りならん、神原殿がお頼みによつて、其の方に申聞もうしきけた、だが今になって違  
背はいされては此の儘に差置さしおけんから、只今手討に致す」

源「へえ大変な事で、私は斯様な事とは存じませんでした、大變な事になりましたな、  
一体水飴は私の処では致しませんへえ不得手なんで」



大「其様な事を申してもいかん」

源「へえ宜しゆうございます」

と斬られるくらいならと思つて、不承く承知致しました。

大「一時遁れに請合つて、若し此の事を御舎弟附の方々へ内通でもいたすと、貴様の宅へ踏込んで必ず打斬るぞ」

源「へえく御念の入つた事で、是がお薬でございますか、へえ宜しゆうございます」

と宅へ帰つて彼の毒薬を水飴の中へ入れて煉つて見たが、思うようにいきません、どうしても粉が浮きます、綺麗な処へ石の粉が浮いて居りますので、

源「幾ら煉てもいきません」

と此の事を松蔭大藏に申しますから、大藏もどうしたら宜かろうと云うので、大藏の家へ山路という医者を呼び飴屋と三人打寄つて相談をいたしますと、山路の申すには、是は斑猫という毒を煮込んだら知れない、併し是は私のような町医の手には入りません、なにより効験の強いのは和蘭陀でカンタリスという脊中にある虫で、是は豆の葉に得て居るが、田舎でエゾ虫と申し、斑猫のことで、効験が強いのは煎じ詰めるのがよからうと申しましたので、なる程それが宜かろうと相談が一決いたし、飴屋の源兵衛と医者の方

路を玄関まで送り出そうとする時、衝立の蔭に立ってしまいましたのは召使の菊という女中で、これは松蔭が平生目を掛けて、行々は貴様の力になって遣わし、親父も年を老つてい  
るから、何時までも箱屋（芸妓の箱屋じゃありません、木具屋と申して指物を致します）をさせて置きたくない、貴様にはこれ〜手当をして遣うという真実に絆されて、  
表向ではないが、内々大藏に身を任して居ります。是は本当に惚れた訳でもなし、金ず  
くでもなし、変な義理になつたので、大藏も好男子であります。此の菊は至つて堅い  
性質ゆえ、常々神原や山路が来ては何か大藏と話をしては帰るのを、案じられたものだ  
と苦にしていたのが顔に出ます。今大藏が衝立の蔭に菊のいたのを認めて悔り致したが、さ  
あらぬ体にて、

大「源兵衛、少し待ちな」

と連戻つて、庭口から飴屋を送り出そうとすると、林藏という若党が同じく立つて聞い  
ていましたので、再び驚いたが、仕方がないと思ひ、飴屋を帰してしまつたが、大藏は腹  
の中で菊は船上忠助の妹だから、此の事を渡邊に内通をされてはならん、船上は古く渡邊  
に仕えた家来で、彼奴の妹だから、こりやア油断がならん、なれども林藏は愚者だか  
ら、林藏から先へ當つて調べてみよう。と是から支度を仕替えて、羽織大小で彼の林藏と

いう若党を連れ、買物に出ると云つて屋敷を立出で、根津の或る料理茶屋へ昇りましたが、其の頃は主家来のけじめが正しく、中々若党が旦那さまの側などへはまいられませんのを、大藏は己の側へ来いと呼び附けました。

大「林藏、大きに御苦労く」

林「へえ、何か御用で」

大「いや独酌で飲んでもうまくないから、貴様と打解けて話をしようと思つて」

林「恐入りましてごさいます、何ともはや御同席では……」

大「いや、席を隔てゝは酒が旨くない」

林「こゝでは却つて気が詰りますから、階下で戴きとう存じます」

大「いや、酒を飲んだり遊ぶ時には主も家来も共々にせんければいかん、己の苦労する時には手前にも共々に苦労して貰う、これを主従苦楽を俱にするというのだ」

林「へえ、恐入ります、手前などは誠に仕合せで、御当家さまへ上りまして、旦那さまは誠に何から何までお慈悲深く、何様な不調法が有りましたも、お小言も仰やらず、斯ういう旦那さまは又とは有りません、手前が仕合で、此の間も吉村さまの仁介もお羨ましがつていましたが、私のような不行届の者を目え懸けて下さり何ともはや恐入りやす」

大「いや、然うでない、貴様ア感心な事には正直律義なり、誠に主思いだのう」

林「いえ、旦那様が目え懸けて下せえますから、お互に思えば思わろゝで、そりやア尊公  
あたりめえ  
当然の事て」

大「いやゝ然うでない、一体貴様の氣象を感服している、これ女中、下物を此処へ、又  
後で酌をして貰うが、早く家来共の膳を持つて来んければならん」

と林藏の前へも同じような御馳走が出ました。

大「のう林藏、是迄しみ／＼話も出来んであつたが、今日は差向いで緩くり飲もう、ま  
ア一盃酌いでやろう」

林「へえ恐入りました、誠ね有難い事で、旦那さまのお酌で恐入ります」

大「今日は遠慮せずにやれよ」

林「へえ恐入りました、ヒエゝゝ溢れますゝ……有難い事で、お左様なれば頂戴いた  
します、折角の事だアから誠にはや有難い事で」

大「今日は宜いよ、打解けて飲んでくれ、何かの事に遠慮はあつちやアいかん、心の儘に  
飲めよ」

林「ヒエゝゝ有難い事で」

大「さ己がひとつあい一盃合をする」

とグーと一いっばい盃飲み、又向うへ差し、林藏を酔わせないと話が出来ません。尤も愚もつとおろかだから欺だますには造作もない、お菊は船上忠助の妹ゆえ、渡邊織江へ内通を致しはせんかと、松蔭大藏も実に心配な事でございますから、林藏から先へ欺あざむく趣向でござります。林藏は段々宜よい心持に酔つて来ましたので仮名違いの言語ことばで喋ります。

大「遠慮なしに沢山飲やれ」

林「ヒエ有難い事で、大層酔めんでい酩酊致しやした」

大「いや／＼まだ酩酊めいていという程飲みやアせん、貴様は国にも余り親戚みより頼りのないという事を聞いたが、全く左様かえ」

林「ヒエ一人従弟えしこがありやすが、是は死んでしまエたか、生きているか分わきやたゝんで、今迄何とも音ずれの無い処を見ると、死んでしまうかと思ひやす、実ぜつにはや樹けから落ちた何とか同様で、心細い身の上でがす」

大「左様か、何うだ別に国に帰りたくもないかえ、御府内へ住すまつて生涯果てたいという志なら、また其の様に目を懸けてやるがのう」

林「ヒエ実じつに国くにというたところで、今いまになつて帰りましたところが、親戚めよりもなし、別びつに何

う仕ようという目途みあてもないものですから願わくば此こゝの繁盛さかる御府内ごふちでまア生涯せいはい朽果くはてれば、甘え物おまを喰たべ、面白おもしろえ物ものを見て暮くしますだけ人間ねんげんの徳とくだと思おもえやす、実じつに旦那だんなさまア御当地ごちちで朽果くはててたい心こゝろは充えつぱい分ぶんあります」

大「それは宜よろしい、それじやア何なにうだえ己おれは親戚みより頼たのり兄弟けいだいも何も無い、誠に心細こまい身の上みの上だが、まア幸さいい重役じゆうやくの引立ひきたてを以もつて、不相ふさ応おうな大祿だいりくを取とるようになって、誠まことに辱かたじけないが、人は出世しゅっしよをして歓樂かんらくの極きわまる時は憂うれいの端は緒ぐちで、何か間違まがいのあつた時には、それ／＼力ちからになる者がなければならぬ、己おれが増長ぞうぢやうをして何か心得こころえ違ちがひのあつた時には異見いけんを云いつてくれる者が無なければならぬ、乃そこで中々ちんぢん家来けらいという者は主従しゆじゆうの隔へてがあつて、どうも主人しゆじんの意いに背そむいて意見いけんをする勇氣ゆうきのないものだが、貴様きさまは何なにでもずか／＼云いつてくれる所の氣象きさうを看み抜ぬいているから、己おれは貴様きさまと親類しんるいになりたいと思おもうが、何なにうだ」

林「ヒエ／＼恐おそれ入いります、勿な体たい至し極ごくも……」

大「いや、然そうでない、只し主家しゆけ来けで居いちやアいかん、己おれは百石頂戴ひやくしやくていだい致いたす身の上みの上だから、己おれが生家せいけになつて貴様きさまを一人前ひとりまへの侍さむらいに取立とつてやろう、仮令たとえ当家たてえの内うちでなくとも、他たの藩中はんちゆうでも或あるは御家人ごけいじん旗はたもと下したのような処ところへでも養子やしよに遣やつて、一ひと廉かどの武士ぶしに成なれば、貴様きさまも己おれに向むかつて前々まへ／＼御高恩ごたうおんを得えたから申上まをぐるが、それはお宜よろしくない、斯ごとうなすつたら宜よろかる

うと云えるような武士に取立って、多分の持参は附けられんが、相当の支度をしてやるが、何うだ侍になる気はないか」

林「いや、是はどうも勿体ない事でござえます、是はどうもはや、私の様な者は迎もはや武士には成れません」

大「そりやア何ういう訳か」

林「第一劍術を知りませんから武士にはなれましねえ」

大「劍術を知らんでも、文字を心得んでも立派な身分に成れば、それだけの家来を使って、それだけの者に手紙を書かせなどしたら、何も仔細はなからう」

林「でござえますが、武士は窮屈ではありませんか、実は私は町人になって商いをして見たいので」

大「町人になりたい、それは造作もない、二三百両もかければ立派に店が出せるだろう」

林「なに、其様には要りませんよ、三拾両一資本で、三拾両も有れば立派に店が出せますからな」

大「それは造作ない事じゃ、手前が一軒の主人になって、己が時々往って、林藏一盃飲ませろよ、雨が降って来たから傘ア貸せよと我儘を云いたい訳ではないが、年来使った家

来が出世をして、其の者から僅かな物でも馳走になるは嬉しいものだ、甘く喰べられるものだ」

林「誠に有難い事で」

大「ま、もう一盃飲めく」

林「ヒエ大層嬉しいお話で、大分酔いました、へえ頂戴いたします、これははや有難いこととで……」

大「そこでな、どうも手前と己は主家来の間柄だから別に遠慮はないが、心懸けの悪い女房でも持たれて、忌な顔でもされると己も往きにくくなる、然うすると遂には主従の隔てが出来、不和になるから、女房の良いのを貴様に持たせたいのう」

林「へえ、女房の良いのは少ねえものでござえます、あの通り立派なお方様でござえますが、森山様でも秋月様でも、お品格といい御器量といい、悪い事はねえが、私ら目下の者がめえりますとつんとして馬鹿にする訳もありやしねえが、届かねえ、お茶も下さらんで」

大「それだから云うのだ、此の間から打明けて云おうと思っていたが、家にいる菊な」

林「ヒエ」

大「彼は手前も知っているだろうが、内々己が手を付けて、妾同様にして置く者だ」



林「えへ、それは旦那さまア、私も知らん振でいやすけれども、実は心得てます」

大「そうだろう、彼はそれ渡邊の家に勤めている船上の妹で、己とは年も違っているから、とても己の御新造にする訳にはいかん、不器量でも同役の娘を貰わなければならん、就ては彼の菊を手前の女房に遣ろうと思うが、気に入りませんかえ、随分器量も好く、心立も至極宜しく、髪も結い、裁縫も能くするよ」

林「ヒエ……冗談ばかり仰しやいますな、旦那さまアおからかいなすつちやア困ります、お菊さんなら好いの好くないのつて、から理窟は有りましたねえ、彼様な優しげなこつぽりとした方は少ねえもんでござえますな」

大「あは、何だえ、こつぽりと云うのは」

林「頬の処や手や何かの処がこつぽりとして、尻などはちまゝとしてなあ」

大「ちまゝ〜というのは小さいのか」

林「ヒエ誠にいらいお方さまでござえますよ」

大「手前が嫌いなれば仕方がない、気に入ったら手前の女房に遣りたいのう」

林「ひへ、御冗談ばかり」

大「冗談ではない、菊が手前を誉めているよ」

林「尤も旦那様のお声が、りで、林藏に世帯を持たせるが、女房がなくって不自由だから往つてやれと仰しやつて下さればなア……」

大「己が云やア否というのに極っている何故ならば衾を俱にする妾だから、義理にも彼様な人は厭でございませと云わなければならん、是は当然だ、手前の処へ幾ら往きたいと思つても然ういうに極つて居るわ」

## 二十

林藏はにこ／＼いたしまして、

林「成程むゝう」

大「だから、手前さえ宜いと極れば、直接に掛合つて見ろい、菊に」

林「是は云えません、間が悪うとてもはや冗談は云えませんな然うして中々ちま／＼としてえて、堅え気性でござえますから、冗談は云えましねえよ、旦那様がお留主の時などは、とつともう苦え顔をして居なせえまして、うっかり冗談も云えませんよ」

大「云えない事があるものか、じゃア云える工夫をしてやろう、こゝで余つた着を折へ詰

めて先へ帰れ、己は神原の小屋に用があるから、手前先へ帰って、旦那さまは神原さまの  
 お小屋で御酒が始まって、私だけ先へ帰りました、これはお土産でございませと云って、  
 折を出して、菊と二人で一盃飲めと旦那さまが仰しやつたから、一盃頂戴と斯う云え」  
 林「成程どうも：併しお菊さんは私二人で差向いでは酒を飲まねえと思いやすよ」  
 大「それは飲むまい、私は酒を飲まんからお部屋へ往つて飲めというだろうから、もし然  
 う云つたら、旦那様が此処で飲めと仰しやつたのを戴きませんでは、折角のお志を無にす  
 るようなものだから、私は頂戴いたしますと云って、茶の間の菊がいる側の戸棚の下の方  
 を開けると、酒の道具が入っているから、出して小さな徳利へ酒を入れて燗を付け、戸棚  
 に種々な食物がある、又は雲丹のようなものもあるから、悉皆出してずん／＼と飲ん  
 で、菊が止めても肯くな、然うして無理に菊に合をしてくれると云えば、仮令否でも一盃  
 ぐらいは合をするだろう、飲んだら手前酔つた紛れに、私は身を固める事がある、私は近  
 日の内商人に成るが、独身では不自由だから、女房になつてくれるかと手か何か押え  
 て見ろ」  
 林「ひえへ、是はどうも面白え、やりたいようだが、何分間が悪うて側へ寄附かれま  
 せん」

大「寄附けようが寄附けまいが、菊が何と云うとも構ったことはない、己は四つの廻りを合図に、庭口から窺と忍び込んで、裏手に待っているから、四つの廻りの拍子木を聞いたら、構わず菊の首玉へかじり付け、己が突然にがらりと障子を開けて、不義者見附けた、不義をいたした者は手討に致さねばならぬのが御家法だ、さ兩人とも手討にいたす」

林「いや、それは御免を……」

大「いやさ本当に斬るのじやアない、斬るべき奴だが、今迄真実に事えてくれたから、内聞にして遣わし、表向にすれば面倒だによって、永の暇を遣わす、また菊もそれ程までに思っているなら、町人になれ、侍になることはならんと三十両の他に二十両菊に手当をして、頭の飾身の廻り残らず遣る」

林「成程、有難い、どうも是ははや……併しそれでもいけませんよ、お菊さんが貴方飛んでもない事を仰しやる、何うしても林藏と私と不義をした覚えはありません、神かけてありません、夫婦に成れと仰しやつても私は否でござえます、斯んな忌な人の女房にはなりませんと云切つたら何う致します」

大「然うは云わせん、深夜に及んで男女差向いで居れば、不義でないと云わせん強つて強情を張れば表向にいたすが何うだ、それとも内聞に致せば命は助けて遣るといえば、命

が欲しいから女房になりますと云うだろう」

林「成程、これは恐おそれ入りましたな、成程承知しなければ斬えつてしまふか、命いのちが惜おしいから、そんなればか、どうも是は面白おもしろい」

大「これうかく浮うかれて手を叩たたくな、下おんなから下婢おんなが来る」

林「ヒエ有あ難がい事で、成程やります」

大「宜よいか、其の積たりでいろ」

林「ヒエ、そろおろく帰かりましょうか」

大「そんなせかに急せなくつても宜いい」

林「ヒエ有あ難がい事で」

とはからそここくに致いたして、余あつた下物さかなを折おに入れて、松蔭大藏は神原の小屋へ参まり、此方こちらは宜よい心持こころに折おを吊ぶらさげて自分の部屋へ帰かつてまいりまして、にここくしながら、

林「えい、人ねんげん間は何処どこで何なんう運おんが来るか分わらねえもんだな、畜生彼方あつちへ往えけ、己おれが折おを下くだげてるもんだから跡あとを尾おいて来きやアがる、もこ彼方あつちへ往えけ、もここくあはは、尻しりつ尾おを振ふつて来きやアがる」

下男「いや林藏何処れんぞうへ往えく、なに旦那えつしよと一いっ緒しょに、然そうかえ、一いっ盃ぱい飲いつたなア」

林「然うよ」

下男「それははや、左様なら」

林「あはゝゝ、何だか田舎漢えなかつべえのいう事は些ちやつとも解らねえものだなア、えゝお菊さん只今歸りました」

菊「おや、お帰りかえ、大層お遅いからお案じ申したが、旦那さまは」

林「旦那さまは神原様のお小屋で御酒ごしゆが始まつて、手前は先へ歸れと云いましたから、私わしだけ歸つてめえりました」

菊「大きに御苦労よ」

林「えゝ、此のお折の中のお肴は旦那様が手前に遣る、菊も不断骨を折つてるから、菊けくと二人で茶の間で一いっぱい盃飲めよと云うて、此のお肴を下くだせえました、どうか此処こゝで旦那さまが毎いっも召上る御酒を戴えたぐきてえもんで」

菊「神原さまのお小屋で御酒が始まつたら、またお歸りは遅かろうねえ」

林「えゝ、どうもそれは子刻こ、のつになりますか丑刻やつになりますか、様子が分らねえと斯ういう訳で、へえ」

菊「其の折のお肴はお前に上げるから、部屋へ持もて往つて、お酒も適よい程出して緩ゆっくりお

たべ」

林「ヒエ……それが然うでねえ訳なので」

菊「何をえ」

林「旦那さまの云うにア、手前は茶の間で酒を飲んだ事はあるめえ、料理茶屋で飲ませるのは当然の話だが、茶の間で飲ませるのは別段の馳走じゃ、へえ有難い事でござえますと、斯う礼を云つたような理由で」

菊「如何に旦那さまが然う仰しやっても、お前がそれを真に受けて、お茶の間でお酒を戴いては悪いよ、私は悪いことは云わないからお部屋でお飲べよ」

林「然うでござえますか、お前さん此処で飲まねえと折角の旦那のお心を無にするようなものだ、此の戸棚に何か有りやしよう、お膳や徳利も……」

菊「お前、そんな物を出してはいけないよ」

林「こゝにからすみと雲丹があるだ」

菊「何だよ、其様なものを出してはいけないよ、あらまア困るよ、お鉄瓶へお燗徳利を入れてはいけないよ」

林「心配しねえでも宜え、大丈夫だよ、少し理由があるだ、お菊さん、ま一盃飲めなせえ、

お前まえ今日は平日いっつもより別段おつこに美しいように思われるだね」

菊「何だよ、詰らんお世辞なんぞを云つて、早くお部屋へ往つて寝ておくれ、お願いだから、跡を片付けて置かなければならないから」

林「まえつぺい一盃飲めなアよ」

菊「私は飲みたくはないよ」

林「じゃア酌さくだけして下せえ」

菊「お酌しやくかえ、私にかえ、困るねえ、それじゃア一盃いっばいぎ切りだよ、さ……」

林「へえ有難ありがたえ是れは……ひえ頂戴えんたい致しやす……有難え、まアまるで夢見たような話だ

という事さ、お菊けくさん本当にお前さん、私が此処こゝへ奉公に來た時から、真ほんに思つて居るよ」

菊「其様そんなことを云わずに早く彼方あつちへお出でよ」

林「然そう邪魔にせなえでも宜ええが、是でちやんと縁えんづく附は極けまつているからね、知らずくして縁は異えな物味な物といつて、ちやんと極きまつているからね」

菊「何が縁なんだよ」

林「何でも宜えい、本当ね私わしが此方こつちやへ奉公に來た時始めてお前めえさんのお姿を見て、あゝ美おつこしい女中衆しゅだと思えました、斯おつこういう美しい人は何家どけえ嫁付かたづいて往ゆくか、何ういう人を亭主



に持ちおると思つてる内に、旦那さまのお妾さまだと聞きやしたから、抛ねえと諦らめて  
 るようなものゝ、寐ても覺てもお前さんの事を忘れたことアないよ」

菊「冗談をお云いでない、忌らしい、彼方へ往つてお寝よ」

林「往きアしない、亥刻までは往かないよ」

菊「困るよ、其様なに何時までもいちやア、後生だからよ、明日又旨い物を上げるから」

林「何うしてお前さんの喰欠けを半分喰うて見てえと思つてゝも、喰欠けを残した事がね  
 えから、密と台所にお膳が洗わずにある時は、洗つた振りをして甜めて、拭いてしまつ  
 て置くだよ」

菊「穢いね、私ア嫌だよ」

林「それからね、何うかしてお前さんの肌を見てえと思つても見る事が出来ねえ、すると  
 先達て前町の風呂屋が休みで、行水を浴つた事がありましたらう、此の時ばかり白い  
 肌が見られると思つてると、悉皆戸で困つて覗く事が出来ねえ、何うかしてと思つてると、  
 節穴が有つたから覗くと、意地の悪い穴よ、斜に上の方へ向いて、戸に大きな釘が出てい  
 て頬辺を搔裂きイした」

菊「オホ、忌だよ」

林「其の時使つた糠のかを貯つて置きたいと思つて糠のかぶくろ袋をあけて、ちやんと天日てんぴにかけて、乾かして紙袋かんぶくろに入れて貯つておいて、炊立たきたての飯の上へかけて喰うだ」

菊「忌だよ、穢い」

林「それから浴つかつた湯を飲もうと思つたが、飲切れなくなつて、どうも勿体ねえと思つたが、半分程飲めねえ、三日目から腹くだを下した」

菊「冗談を云うにも程がある、彼方あちらへお出でよ、忌らしい」

林「お菊けくさん、もう亥刻よつかな」

菊「もう直しきに亥刻だよ」

林「亥刻ならそろそろ始めねえばなんねえ」

とだん／＼お菊の側へ摺すり寄りました。

## 二十一

其の時お菊は驚おどいて容かたちを正し、

菊「何をする」

と云いながら、側に在りました烟管にて林藏の頭を打ちました。

林「あゝ痛え、何で打った、呆れて物が云われねえ」

菊「早くお前の部屋へおいで何ほ私が年が往かないと云つて、余り人を馬鹿にして、さ、出て行つておくれよ、本当に呆れてしまふよ」

林「出て往くも往かねえも要らねえ、否なら否で訳は分つてる、突然頭部にやして、本当に呆れてしまふ、何だつて打ったよ」

菊「打たなくてさ、旦那様のお留守に冗談も程がある、よく考えて御覧、私は旦那さまに別段御鼻屎になることも知つていながら、氣違じみた真似をして、直に出て往つておくれ、お前のような薄穢い者の女房に誰がなるものか」

林「薄穢けりアそれで宜えよ、本当に呆れて物が云われねえ、忌なら何も無理に女房になれとは云われねえ、私の身代が立派になれば、お前さんよりもっと立派な女房を貰うから、否なら否で分つてるのに、突然烟管で殴すてえことがあるか、頭へ傷が附いたぞ」

菊「打つたつて当然だ、さつさと部屋へおいで、旦那さまがお帰りになつたら申上げ  
るから」

林「旦那様がお帰りになりア此方で云うて暇ア出させるぞ」

菊「おや、何で私が……」

林「何も尿こそも要えらねえ、さつさと暇あ出させるように私わしが云うから、然そう思って居るが宜ええ」

と云い放つて立上る袖そでを捕とらえて引止め、

菊「何ういう理由わけで、まお待まちよ」

林「何だね袂たもとを押おえて何うするだ」

菊「私わが何でお暇いとまが出るんだえ、お暇あが出るといえば其の理由わけを聞きましよう」

林「エ、イ、聞けくも聞けかねえも要えらねえ、放はなさねえかよ、これ放はなさねえかてえにあれ着物けものが裂ひけてしまうじやアねえか、裂ひけるよ、放はなさねえか、放はなしやがれ」

と林藏はプツと腹はらを立たつて庭の方へ出る途端とたんに、チョンくチョンく、

○「四ツでござあい」

と云う廻りの声を合あいに、松蔭大藏は裏手の花壇の方から密そつと拔足ぬきあしをいたし、此方こちらへまいるに出会あいました。

大「林藏じやアねえか」

林「おや旦那様」

大「林藏出て来ちやアいかなア」

林「いかなたつて私には居られせんよ、旦那様、頭へ疵が出来ました、こんなに殴して何うにも斯うにも、其様な薄穢い田舎者は否だよって、突然烟管で殴しました」

大「ウフ、、菊が…：菊が立腹して、ウフ、、打ったか、それで手前腹を立て、出て来たのか」

林「ヒエ左様でござえます」

大「ウム至極尤もだ、少しの間己が呼ぶまで来るな、併し菊もまだ年がいかないから、死んでも否だと一度断るは女子の情だ、ま部屋に往つて寝ていろ」

林「部屋へ往つても寝られせんよ」

大「ま、兎も角彼方へ往け、悪いようにはしないから」

林「ヒエ左様なら御機嫌宜しゅう」

と林藏が己の部屋へ往く後、姿を見送つて、

大「え、ーい」

と大藏は態と酔つた真似をして、雪駄をチャラく鳴らして、井筒の謡を唄いながら玄関へかゝる。お菊は其の足音を存じていますから、直に駈出して両手を突き、

菊「お帰り遊ばせ」

大「あい、あゝーどうも誠に酔った」

菊「大層お帰りがお遅うございますから、また神原様でお引留ひきとめで、御迷惑を遊ばしていらつしやることゝ存じて、先程からお帰りをお待ち申して居りました」

大「いや、どうも無理に酒を強しられ、神原も中々の酒家のみかで、飲まんというのを肯きかずに勧めるには実に困ったが、飯も喫たべずに帰つて来たが、嘸待遠さぞまちとおであつたらう」

菊「さ、此方こちらへ入らしつてお召換めしかえを遊ばしまし」

大「あい、衣類きものを着替かえようかの」

菊「はい」

とお菊は直すぐに乱箱みだればこの中に入つて居ります黄八丈の袷小袖あわせこそでを出して着換かさせる、袴しとねが出る、烟草盆たばこばしが出ます。松蔭大藏は自分の居間へ坐りました。

菊「御酒ごしゆは召上つていらつしやいましたらうが、御飯ごはんを召上りますか」

大「いや勧めの酒はの幾許いんぐら飲んでも甘うまくないので、宅へ帰ると矢張また飲みたくなる、一寸よつと盃爛ばいけんか」

菊「はい、お湯も沸いて居りますし、支度もして置きました」

大「じゃア此処へ持つて来てくれ」

菊「はい畏まりました」

と勝手を存じていますから、嗜みの物を並べて膳立をいたし、大藏の前へ盃盤が出ました。お菊は側へまいりまして酌をいたす。大藏は盃を執つて飲んでお菊に差す。お菊は合に半分ぐらいずつ忌でも飲まなければなりません。

大「はあ……お菊先程林藏が先へ歸つたろう」

菊「はい、何だかも大層飲酔つてまいりまして、大変な機嫌でございましたが、も漸く欺して部屋へ遣りましたが、彼には余り酒を遣されますといいけませんから、加減をしてお遣し下さいまし」

大「ウム左様か、何か肴の土産を持つて参つたか」

菊「はい、種々頂戴致しましたが、私は宜いからお前持つて往くが宜い、折角下すつたのだからと申して皆彼に遣しました」

大「あゝ然うか、あゝ好い心持だ、何処で酒を飲むより宅へ歸つて氣儘に座を崩して、菊の酌で一盃飲むのが一番旨いのう」

菊「貴方また其様な御容子の好いことばかり御意遊ばします、私のような此様なはしたな

い者がお酌をしては、御酒もお旨くなかうかと存じます」

大「いや、どうも実に旨い、はア……だがの、菊、酔って云うのではないが、表向、  
ま手前は小間使の奉公に來た時から、器量と云い、物の云い様裾捌き、他々の奉公  
人と違い、自然に備わる品というものは別だ、実に物堅い屋敷にいなながら、仮令己が昇進  
して、身に余る大祿を頂戴するようなことになれば、尚更慎まねばならん、所がどうも慎  
み難く、己が酔った紛れに無理を頼んだ時は、手前は否であつたろう、否だらうけれども  
性來<sup>せいらい</sup><sup>りんとう</sup>、<sup>せいらい</sup><sup>りんとう</sup>の生れ付ゆえ、否だと云つたらば奉公も出来難い、辛く当られるだらうと云う  
ので、ま手前も否々ながら己の云うことを聞いてくれた処は、夫りア己も嬉しゆう思う  
て居るぞよ」

菊「貴方また其様な事を御意遊ばしまして、あのお話だけは……」

大「いゝえ、誰にも聞かす話ではない、表向でないから、もう一つ役替でも致したら、  
内々は若竹の方でも己が手前に手を付けた事も知っているが、己が若竹へ恩を着せた事  
が有るから、彼も承知して居り、織江の方でも知って居ながら聊かでも申した事はない、  
手前と己だけの話だが手前は嘸厭だらうと思つて可愛相だ」

菊「あなた、何ぞと云うと其様な厭味なことばかり御意遊ばします、これが貴方身を切ら



れる程厭で其様なことが出来ずものではございませぬ」

大「だが手前は己に物を隠すの」

菊「なに私は何も隠した事はございませぬ」

大「いんにや隠す、物を隠すというのも畢竟主従という隔てがあつて、己は旦那

様と云われる身分だから、手前の方でも己を主人と思えば、軽卒の取扱いも出来ず、斯

う云つたら悪かろうかと己に物を隠す処が見えると云うのは、船上忠平は手前の兄だ、そ

れが渡邊織江の家に奉公をしている、其処に云うに云われん処があろう」

菊「何を御意遊ばすんだか私には少しも分りませぬ、是迄私は何でも貴方にお隠し申した

事はございませぬ」

大「そんなら己から頼みがある、併し笑つてくれるな、己が斯くまで手前に迷つたと云う

のは真実惚れたからじゃ、己も新役でお抱になつて間のない身の上で、内妾を手許へ

置いては同役の聞えもあるから、慎まなければならぬのだが、其の慎みが出来んという程

惚れた切なる情を話すのだが、己は何も御新造のある身の上でないから、行々は話をし

て表向手前を女房にしたいと思つてゐる」

菊「どうも誠にお嬉しゅうございます」

大「なに嬉しくはあるまい……なに……真に手前嬉しいと思うなら、己に起請を書いてくれ」

菊「貴方、御冗談ばかり御意遊ばします、起請なんてえ物を私は書いた事はございませんから、何う書くものか存じません」

大「いやさ己の気休めと思つて書いてくれ、否でもあろうが其れを持つておれば、菊は斯ういう心である、末々、まで己のものと安心をするような姿で、それが情だの、迷つたの、笑つてくれるな」

菊「いゝえ、笑うどころではございませんが、起請などはお止し遊ばせ」

大「ウゝム書けんと云うのか、それじゃ手前の心が疑われるの」

菊「だつて私は何もお隠し申すことはありませんし、起請などを書かんでも……」

大「いや反古になつても心嬉しいから書いてくれ、硯箱をこれへ……それ書いてくれ、文面は教えてやる……書かんとしようと手前の心が疑られる、何か手前の心に隠している事が有ろう、然うでなければ早く書いてくれ」

菊「はい……」

とお菊は最前大藏が飴屋の亭主を呼んで、神原四郎治との密談を立聞をしたが、其の

事でこれを書かせるのだな、今こゝで書かなければ尚疑われる、兄の勤めている主人方へお屋敷の一大事を内通をする事も出来ん、先方の心の休まるように書いた方が宜かろうと、<sup>はず</sup>差かしそうに筆を執りまして、大藏が教ゆる通りの文面をすらく書いてやりました。

大「まア待て、待てく、名を書くのに松蔭と書かれちやア主人のようだ、何処までも恋の情でいかんければならん、矢張ぶつつけに大藏殿と書け」

菊「貴方のお名を……」

大「ま書けく、字配りは此<sup>こ</sup>処から書け」

と指を差された処へ筆を当て、ちやんと書いた<sup>のち</sup>後、自分の名を差かしそうにきくと書き終り、

菊「あの、起請は神に誓いまして書きますもので、血か何か附けますのですか」

大「なに血は宜しい、手前の自筆なれば別に疑うところもない、あゝ有難い」

押<sup>おしいたゞ</sup>戴<sup>まきおさ</sup>いて卷<sup>いっばい</sup>納<sup>いっばい</sup>めもう一<sup>いっばい</sup>盃。と酒を飲みながら如何<sup>いか</sup>なることをか工<sup>たく</sup>むらん、続けて三<sup>さんばい</sup>盃<sup>ばい</sup>ばかり飲みました。

大「あゝ酔った」

菊「大層お色に出ました」

大「殺して居た酒が一時に出ましたが、あの花壇の菊は余程咲いたかの」

菊「余程咲きました、咲乱れて居ります」

大「一寸見たいもんだの」

菊「じゃアお雪洞を点けましょう」

大「然うしてくれ」

菊「お路地のお草履は此処にあります、飛石へお躓き遊ばすと危うございますよ」

大「お、宜い〜〜」

と蹠けながらぶらり〜行くのを、危いからお菊も後から雪洞を提げて外の方へ出ると花壇があります。此の裏手はずつと崖になって、下ると谷中新幡随院の墓場此方はお馬場口になって居りますから、人の往来は有りません。

大「菊々」

菊「はい」

大「其処へ雪洞を置けよ」

菊「はい置きます」

大「灯火があつては間が悪いのう」

菊「何を御意あそばします」

大「これ菊、少し蹲んでくれ」

菊「はい」

左の手を出して……お母が二歳三歳の子供を愛するようにお菊の肩の処へ手をかけて、

お菊の顔を視詰めて居りますから、

菊「あなた、何を遊ばしますの、私は間が悪うございますもの……」

大藏は四辺を見て油断を見透し、片足挙げてポーンと雪洞を蹴上げましたから転がって、灯火の消えるのを合図にお菊の胸倉を捉つて懐に匿し持ったる合口を抜く手も見せず、喉笛へプツリーと力に任せて突込む。

菊「キヤー」

と叫びながら合口の柄を右の手で押え片手で大藏の左の手を押えに掛りまするのを、力に任せて捻倒し、乗掛つて、

大「ウゝー」

と抉つたから、

菊「ウーン」

パタリとそれなり息は絶えてしまい、大藏は血だらけになりました手をお菊の衣類で拭きながら、密と庭伝いに来まして、三尺の締のある所を開けて、密つと廻つて林藏という若党のいる部屋へまいりました。

## 二十二

大「林藏や、林藏寝たか林藏……」

林「誰だえ」

大「己だ、一寸開けてくれ」

林「誰だ」

大「己だ、開けてくれ、己だ」

林「いやー旦那さまア」

大「これく」

林「何うして此様な処へ」

大「静かにく」

林「ど何ういう事で」

大「静かに……」

林「はい、只今開けます、灯火あかりが消えて居りますから、只今……先刻さつきから種々いろく考えて居ちよつとて一寸も眠ねられません、へえ開けます」

がらくく。

林「先刻の事が気になつて眠ねむられませんよ」

大「一緒に来いく」

林「ひえく」

大「手前の手許てもとに小短い脇差で少し切れるのがあるか」

林「ひえ、ござえます」

大「それを差して来い、静かにく」

と是れから林藏の手を引いて、足音のしないように花壇もとの許もとまで連れて来まして、

大「これ」

林「ひえく」

大「菊は此の通りにして仕舞った」

林「おゝ……これは……どうもお菊さん」

大「これさ、しツく……主人の言葉を背く奴だから捨置き難い、どうか始終は林藏と添わしてやりたいから、段々話をして肯入れんから、已むを得ず斯の通り致した」

林「ひえゝ、したがまア、殺すと云うはえれえことになりました、可愛相な事をしましたな」

大「いや可愛相てえ事はない、手前は菊の肩を持つて未練があるの」

林「未練はありませんが」

大「なアに未練がある」

と云いながら、やつと突然林藏の胸倉を捉えますから、

林「何をなさいます」

と云う所を、押倒しざま林藏が差して居ました小脇差を引抜いて咽笛へプツリー突通す。

林「ウワー」

と悶搔く所を乗掛って、

大「ウゝーン」



と突貫く、林藏は苦紛れに柄元へ手を掛けたなり、  
林「ウ、ーン」

と息が止りました。是から大藏は伸上つて庭外を見ましたが人も来ない様子ゆえ、  
大「しめた」

と大藏は跡へ歸つて硯箱を取出して手紙を認め、是から菊が書いた起請文を取出して、  
大藏とある大の字の中央へ（「《ぼう》」）を通して跳ね、右方へ木の字を加えて、大藏  
を林藏と改書して、血をべつとりと塗附けて之を懐中し、又々庭へ出て、お菊の懐中を探  
して見たが、別に掛守もない、帯止を解いて見ますと中に守が入つて居ますから、  
其の中へ右の起請を納れ、元の様に致して置き、夜が明けると直に之を頭へ届けました。  
又た有助と云う男に手紙を持たせて、本郷春木町三丁目の指物屋岩吉方へ遣わしました  
が、中々大騒で、其の内に検使が到来致しまして、段々死人を検めますと、自ら死ん  
だように、ヒ首を握り詰めたなりで死んで居ります。林藏も刀の柄元を握詰め喉を貫  
て居ますから、如何いふ事かと調べになると、大藏の申立に、平素から訝しいように  
思つて居りましたが、予て密通を致し居り、痴情のやる方なく情死を致したのかも知れん、  
何か証拠が有ろうと云うので、懐中から守袋を取出して見ると、起請文が有りまし

たから、大藏は小膝を礎と打まして、

大「訝しいと存じて、咎めた時に、露顕したと心得情死を致しましたと見ゆる、不憫な事を致した、なに死なんでも宜いものを、彼までに目を懸けて使うてやったものを」

など、真しやかに陳べて、検使の方は済みましたが、今年五十八になります、指物屋の岩吉が飛んでまいり、船上忠平という二十三になる若党も、織江方から飛んでまいりました。

大「これく此処へ通せ、老爺此処へ入れ」

岩「はい、急にお使でございましたから飛んで参りました、どうも飛んだことで」

大「誠に何ともはやお気の毒な事で、斯ういう始末じゃ」

岩「はい、どうも此の度の事ばかりは何ういう事だか私には一向訳が分りません、貴方

様へ御奉公に上げましてから、旦那様がお目をかけて下さり、斯ういう着物を、やれ斯

ういう帯をと拵えて戴き、其の上お小遣いまで下さり、それから櫛簪から足の爪先まで貴

方が御心配下さるてえますから、彼様な結構な旦那さまをしくじつちやアならんよ、己は

職人の我雑者で、人の前で碌に口もきかれない人間だが、行々お前を宜い処へ嫁付け

てやると仰しやったというから、私はそれを楽しんで居りましたが、何ういうわけで林藏殿

と悪い事をするとうは……のう忠平、一つ屋敷にいるから手前は他の仲間衆の噂でも聞いていそうなものだったのう」

忠「噂にも聞いた事がございません、そんなれば林藏という男が美男という訳でもなし、彼の通りの醜男子、それと斯ういう訳になろうとは合点がまいりません、お父さん、ねえ少さいうちから妹は其様な了簡の女ではないのです、何か是には深い訳があるだろうと思います」

と互に顔を見合せましたが、親父の岩吉には尚お理由が分りませんから、岩「訳だつて私にはどうも分らん、林藏さんと斯ういう事になろう筈がないと申すは、旦那さま、此の間菊へ一寸お暇を下さいました時に、宅へまいりましたから、早く帰んなよ、然うしないと旦那様に済まねえよ、親元に何時までもぐずぐずして居てはならないと申したら、お父さん、私は何か云い難い事がある様子で、ぐずぐずして居ましたが、何方もいらつしやいせんからお話を致しますが、お父さん、私は浮気じゃアないが、私のような者でも旦那様が別段お目をかけて下さいますよと云いますから、お前を奉公人の内で一番目をかけて下さるのか、然うじゃアないよ、別段に目をかけて下さるの、何ういう事だと聞きましたら、私ア旦那さまのお手が附いたけれども、此の事が知れては旦那様の

お身の上に障るから、お前一人得心で居てくれろと申しますから手前は冥加至極な奴だ、彼様な好い男の殿様のお手が附いて……道理でお屋敷へ上る時から、やれこれ目を掛けて下さると思つた、併し他の奉公人の妬みを受けやアしないかと申しましたが、結構な事だ有難いことだと実は悦んで安心していました、菊も悦んで親へ吹聴致すくらいで、何うして林藏さんと……」

大「こらく大きな声をしては困りますな、併し岩や恋は思案の外という諺もあつて、是ばかりは解りませんよ、そんなら自宅にいて気振でも有りそうなものだったが、少しも気振を見せない、尤も主家来だから気を詰るところもあり、同じ朋輩同志人目を忍んで密会をする方が又楽みと見えて、林藏という者が来た時から、菊が彼に優しくいたす様子、林藏の方でもお菊さんくと親む工合だから、結構な事だと思つて居たが、起請まで取交して心中を仕ようとは思いません、実に憎い奴とは思ひながら、誠に不憚な事をして、お前の心になつて見れば、立腹する廉はない、お前には誠に気の毒で、忠平どもも未だ年若ではあるし、他に兄弟もなく、嘸と察する、斯うして一つ屋敷内に居るから、恥入ることだろうと思う、実に気の毒だが、斯の道ばかりは別だからのう」

忠「へえ、（泣声にて）お父さん何たる事になりましたらう、私は旦那様の処へ奉公をし

て居りましたも、他の足輕や仲間共に對して誠に顔向けが出来ません、一人の妹が此様な不始末を致し、御当家様へ申訳がありません」

大「いや、仕方がないから、屍体のところは直に引取つてくれるように」

岩「へえ畏りました」

と岩吉も忠平も本当らしいから、仕方がない、お菊の屍骸を引取つて、木具屋の岩吉方から野辺の送りをいたしました。九月十三夜に、渡邊織江は小梅の御中屋敷にて、お客来がござりまして、お召によつて出張いたし、お饗応をいたしましたので、余程夜も更けましたが、お客の帰つた跡の取片付けを下役に申付けまして、自分は御前を下り、小梅のお屋敷を出ますと、浅草寺の亥刻の鐘が聞えます。全体此の日は船上忠平も供をして参つておつたところが、急に渡邊の宅から手紙で、嬢様が少しお癩氣だと申してまいりました。嬢様の御病氣を看病致すには、慣れたものが居らんければ不都合ゆえ、織江が忠平に其の手紙を見せまして、先へ忠平を帰しましたから、米藏という老僕に提灯を持たして小梅の御中屋敷を立出で、吾妻橋を渡つて田原町から東本願寺へ突当つて右に曲り、それから裏手へまいり、反圍の海禅寺の前を通りまして、山崎町へ出まして、上野の山内を抜け、谷中門へ出て、直ぐ左へ曲つて是から只今角に石屋のあります処から又後

へ少し戻つて、細い横町よこちょうを入ると、谷中の瑞林寺ずいりんじという法華寺ほっけでらがあります、今三浦の屋敷へ程近い処まで来ると、突然だしぬけに飛出した怪しげなる奴が、米藏の持った提灯をばつさり切つて落す。

米「あつ」

と驚く、

織「何者だ、うぬ、狼藉ろうぜき……」

と後あとへ退さがるところを藪蔭からプツッリ繰出した槍先にて、渡邊の肋ひばらを深く突く

織「ム、ーン」

と倒れて起上ろうとする所を、早く大刀の柄つかに手をかけると見えましたが、抜打ぬきうちに織江の肩先深く切付けたから堪りません。

織「ウ、ーム」

と残念ながら大刀の柄へ手を掛けたまゝ息は絶えました。

渡邊織江が殺されましたのは、夜の子刻少々前で、丁度同じ時刻に彼の春部梅三郎が若江というお小姓の手を引て屋敷を駈落致しました。昔は不義はお家の御法度などと云つてお手打になるような事がございました。そんならと申して殿様がお堅いかと思ひますと、殿様の方にはお召使が幾人もあつて、何か月に六齋ずつ交る／＼とお勤めがあるなどという権妻を置散かして居ながら、家来が不義を致しますと手打にいたさんければならんとは、ちと無理なお話でございますが、其の時分の君臣の権識は大して違つて居ましたもので、若江が懐妊したようだというから、何うしても事露頭を致します、殊には春部梅三郎の父が御舎弟様から拝領いたしました小柄を紛失致しました。これも表向に届けては喧ましい事でありませぬ、此方も心配致している処へ、若江が懐妊したから連れて逃げて下さいというのと、そんなら……、とはから兩人共身支度をして、小包を抱え、若氣の至りとは云いながら、高も家も捨て、春部梅三郎は二十三歳で、其の時分の二十三は当今のお方のように智慧分別も進んでは居りませんから、落着く先の目途もなく、お馬場口から曲つて来ると崖の縁に柵矢来が有りまして、此方は幡随院の崖になつて居りまして、此方に細流があります。此処を川端と申します。お寺が幾らも並んで居ります。清元の浄瑠璃に、あの川端へ祖師さんへなどと申す文句のござりますのは、此の川端にある祖師

堂で、此の境内には俳優岩井家代々の墓がございます。夜に入つては別に往来もない処で、人目にかゝる氣遣いはないからというので、是から合図をして藪蔭へ潜り込み、

若「春部さま」

梅「あい、私は誠に心配で」

若「私も一生懸命に信心をいたしましたして、貴方と御一緒に此の外へ出てしまえば、何様な事でも宜しゅうございますけれども、お屋敷にいる内に私が捕りますと、貴方のお身に及ぶと存じて、本当に私は心配いたしました、宜く入らして下さいました」

梅「まだ廻りの来る刻限には些と早い、さ、これを下りると川端である、柵が古くなつて

いるから、直に折れるよ、裾をもつと端折らにやアいかん、危いよ」

若「はい、畏りました、貴方宜しゅうございますか」

梅「私は大丈夫だ、此方へお出でなさい」

と是から二人ともになだれの崖縁を下りにかゝると、手拭ですっぽり顔を包み、紺の看板に真鍮巻の木刀を差した仲間体の男が、手に何か持つて立つて居る様子、其所へ又一人顔を包んだ侍が出て来る。若江春部の兩人は忍ぶ身の上ゆえ、怖い恐ろしいも忘れて檜の植込の一叢茂る藪の中へ身を縮め、息をこらして匿れて居りますと、顔を包



んだ侍が大小を落おとし差さしにいたして、尻しりからげに草履ぞうりを穿はいたなり、つかくくと参り、大「これ有助」

有「へえ、これを彼かの人に上げてくれと仰おほしやるので、へいへい、首尾は十分でございましてな」

大「うん、手前は之を持つて、予かねての通り道どう灌山かんやまへ往いくのだ」

有「へい宜いしゆうございませぬ、文箱ふばこで」

大「うん、取落とさんように致いたせ、此の柵しほを脱ぬけて川を渡わたるのだ、水の中へ落おしてはならんぞ」

有「へえへ、大丈夫で」

大「仕損しとんずるといけんよ」

有「宜いしゆうございませぬ」

と低声こゝろえでいうから判はつ然つは分わりませぬが、怪あしい奴やつと思おもつて居ゐります内に、彼かの侍しやくはすつと何いれへか往いつてしまひました。チヨンチヨンくくく。

廻や「丑刻うしこくでございませぬ」

と云いう廻まわりの声こゑにて、先まの仲間なかまの男おとこは驚おどき慌あわて、柵くを潜ひそんで出でる。春部はるべは浮気うきをして

情婦おんなを連れ逃げる身の上ではありますが、一体忠義の人でございますから、屋敷内に怪しい奴が忍び込むは盗賊か何だか分りませんから、

梅「曲者待て」

と云いながら領上えりがみを捕える。曲者は無理に振払おうとする機はずみに文箱ふばこの太い紐に手をかけ、此方こなたは取ろうとする、彼の者かは取られまいとする、引合ひきあはずみにぶつりと封じは切れて、文箱ふたの蓋ふたもろともに落たる密書、曲者はこれを取られてはならんと一生懸命ちからに取返しにかゝる、遣やるまいと争あう機はみに、何ういう拍子なか手紙なの半なかば引裂ひついて、ずんと力ちから足あしを踏むと、男はころくくくと一いんと幡随院がけべりの崖縁がけべりへ転まがり落ちました。其の時耳みみ近く。

廻や「八つでございまアす」

と云う廻りの声に驚ひきき引裂ひきいた手紙を懐ひ中なして、春部梅三郎は若江の手を取つて柵さしを押分け、身体を横よこにいたし、漸よううの事ことで此処こゝを出て、川を渡り、一生懸命ちからにとつと、団子だんご坂かの方へ逃げて、それから白山はくさん通りへ出い出して、駕籠かごを雇いい板橋いたばしへ一泊して、翌日あした出立しゅつたつを致いたそうと思おもいますと、秋雨あきさめが大降おおふりに降り出してまいって、出立しゅつたつをいたす事が出来いませんから、仕方なしに正午ひるすぎ過すぎまで待つて居ゐりまして、午飯ひるはんを食たべると忽たちちに空あが

晴れて来ましたから、

梅「どうか此宿こを出る所だけは駕籠に仕よう」

と駕籠で大宮までまいりますと、もう人に顔を見られても氣遣いはないと、駕籠をよして互に手を引合い、漸々だん大宮の宿しゆくを離れて、桶川おけがわを通り過ぎ、鴻こうの巢すの手前の左は桑畠で、右手の方は杉山の林になつて居ります処までまいりました。御案内の通り大宮から鴻の巢までの道程みちのりは六里ばかりでございます。此処こまで来ると若江は躰しやがんだまゝ立ちません。

梅「何うした、足を痛めたのか」

若「いえ痛めやア致しません、只一体に痛くなりました、一体に草臥くたびれたので、股もがすくんで些ちつとも歩けません」

梅「歩けないと云われては誠に困るね、急いで往かんければなりません」

若「も往けません、漸ようう此処まで我慢して歩いて来ましたので、私わたくしは此様に歩いた事はなものですから、最もう何うしても往けません」

梅「往けませんたつて：誠に子供のようなことを云っているから困りますな、是から私わしの家来うちこの家へでも往くならまだしも、お前の親もとの許へ往つて、詫言わびごとをして、暫しばらく置いて貰

わなければなりません、それだのにお前が其処そこで草臥われたと云つて屈かんで、気樂きな事を云つてる場合ではありません」

若わたくし「私も実に心配ですが、どうも歩けませんもの、もう少しお駕籠をお雇い遊ばすと宜しゅうございましたのに」

梅「其様そんななことを云つたつて、今時分こゝらに駕籠はありませんよ、それでなくとも装なりはすっかり変えても、頭髪あたまの風ふうが悪いから、頭巾を被つても自然と知れます、誠に困りました」

若「困るたつて、どうも歩けませんもの」

梅「歩けんと云つて、そうして居ては……」

若「少し負おぶつて下さいませんか」

梅「何うして私わしも草臥われています」

先の方へぼく／＼行く人が、後うしろを振ふりかえ反かえつて見るようだが、暗いので分らん。

梅「えゝもし……其処そこにおいでのお方」

男「はつ……あゝ恠びつくりした、はあゝえら魂消たまげやした、あゝ怖おっかねえ……何かぼく／＼黒くえ物が居ると思つたが、こけえらは能よく貉むじなの出る処だから」

若「あれまア、忌な、怖いこと……」

男「まだ誰か居るかの……」

梅「いえ決して心配な者ではありません、拙者は旅の者でござるが、足弱連あしよわづれで難儀致して居るので、駕籠を雇いたいと存ずるが、此の辺に駕籠はありますまいか、然うして鴻の巣まではまだ何の位ありましよう、それに其方は御近辺のお方か、但し御道中のお人か」

男「私は鴻の巣まで帰るものでござえますが、駕籠を雇つて後へ帰つても、十四五丁入らねえばなんねえが、最う少し往けば鴻の巣だ、五丁半べえの処だアから、同伴でも殖えて、まアね少しは紛れるだ、私も怖ねえと思つて、年い老つてるが臆病でありやすから、追剥おいはでも出るか、狸でも出たら何うしべえかと考え、来たから、実に魂消たね、飛上つたね、いまだにどうく胸が鳴つてるだ……見れば大小を差しているようだ、お侍さんだな、どうか一緒に連れて歩いてくださいえ、私も鴻の巣まで参るもので」

梅「それは幸いな事で、然らば御同伴を願いたい」

男「え、……こゝで飯ア喰う訳にはまいりやせん、お飯を喰えつて」

梅「いえ、御同道をしたないので」

男「アハ、ハ、ハ、一緒に行くという事か、じゃア、御一緒にめえりますべえ……草臥れて歩

けねえというのは此の姉さんかね、それは困ったんべえ、江戸者ちゆう者は歩きつけねえから旅へ出ると意気地はねえ、私も宿屋にいます、時々客人が肉刺工踏出して、吹売ふきがらに糊のりつけいた付板を持って来うてえから、毎いっでも糊板を持って行くだが、足の皮がやつこいだからね、お待ちなせえ、私わしア独り歩くと怖えから、提灯を点けねえで此の通り吊ぶらさげているだ。同つれ伴が殖えたから点けやすべえ」

梅「お提灯は拙者が持ちましょう」

男「私わしア此こゝ処こゝに懐かいちゆうつけぎ中附木ちゆうたろうだまを持つてる、江戸見物に行つた時に山下で買つたゞが、赤い長太郎ちやうたろうだま玉たまが彼あれと一緒に買つただが、附木つけぎだつて紙きつ切きだよ、火ほくち絮ちがあるから造作もねえ、松の蔭はいへ入はいらねえじやア風がえら来るから」

と幾度もかち／＼やつたが付きません。

男「これは中々点かねえもんだね、燧いしが丸まるくなってしまつて、それに火絮ほくちが湿しつてるだから……漸やっの事ことで点ちいただ、これでこの紙かみの附木つけぎに付けるだ、それ能く点くべい、えら硫黄りゅうわう臭においが、硫黄りゅうわうで拵こしれた紙かみだと見える、南風なんふうでも北風ほくふうでも消えねえつて自慢こころして売うるだ、点ちけてしまつたあとあとは、手てで押おせて置おけば何日いっでも御重宝ごちゆうほうだつて」

梅「じゃア拙者が持ちましょう、誠にお提灯は幸さいひの事ことで、さ我慢まんして、五町ごちやうばかりだと

云うから」

若「はい、有難う存じます」

男「お草臥れかね、えへ、顔そつちを其方へ向けねえでも宜よい」

若江は頭巾を被つて居りますから田舎者の方では分りませんが、若江の方で見ると、旧来我家わがやに勤めている清藏せいぞうという者ゆえ、嬉しさの余り草臥れも忘れて前へすさり出まして、

若「あれまア清爺せいじいや」

清「へえ……誰だ……誰だ」

若「誰だつてまア本当に、頭巾を被っているから分るまいけれども私だよ」

と云いながらお高祖頭巾こぞずきんをとるを見て、

清「こりやア何とまア魂消たね、何うして……やアこれ阿魔ア……」

梅「何だ阿魔とは怪けしからん、知る人かえ」

若「はい、私の処わたくしの親父の存ぞん生しょう中ちゆうから奉公して居ります老僕じいやですが、こゝで逢いま

したのは誠に幸いな事で」

清「ま、どうして来ただアね、宿下りやじさがの時にア私わしは高崎まで行つて、留守で逢わなかつ

だが、大<sup>でか</sup>くなつたね、今年で十八だつて、今日も汝<sup>われ</sup>が噂<sup>わさ</sup>アしてえた処<sup>ところ</sup>だ、見<sup>み</sup>違<sup>ちが</sup>えるようになつて、何とはア立派な姿だアな、何うして来た、宿下りか」

若<sup>わか</sup>「いゝえ、私はまたお前に叱<sup>おこ</sup>られる事が出来たのだけれども、お母<sup>つか</sup>様に詫<sup>わが</sup>言<sup>ごと</sup>をして、どうか此のお方と一緒に宅<sup>うち</sup>へ置いて戴<sup>おん</sup>くようにしておくれな」

清「此のお方様てえのは」

と梅三郎を見まして、

「此のお方様が……貴方は岡田さまか」

梅「え、拙者は春部梅三郎と申す者で、以後別<sup>べつ</sup>懇<sup>こん</sup>に願<sup>ねが</sup>います」

清「へえ、余り固く云つちやア己がに分りやせん、ま何ういう訳で、あゝ是は失<sup>しく</sup>策<sup>じり</sup>でもして出て、貴<sup>あん</sup>方<sup>た</sup>が随<sup>つ</sup>いて参<sup>ま</sup>つたか」

梅「いや別に上<sup>かみ</sup>へ対<sup>たい</sup>して失<sup>しく</sup>策<sup>じり</sup>もござらんが、兩人とも心得違<sup>ちが</sup>いをいたし、昨夜屋敷を駈<sup>か</sup>落<sup>お</sup>いたしました」

清「え屋敷を出たア……」

若「此のお方様もお屋敷に居<sup>お</sup>られず、私<sup>わたくし</sup>も矢張居<sup>お</sup>られない理<sup>わけ</sup>由<sup>ゆ</sup>になつたが、お母<sup>つか</sup>さんは物堅<sup>もの</sup>い御<sup>ご</sup>気<sup>き</sup>性<sup>せい</sup>だから、屹<sup>きつ</sup>度<sup>と</sup>置<sup>お</sup>かないと仰<sup>おん</sup>しやるだろうが、此のお方も、何<sup>ど</sup>処<sup>こ</sup>へも行<sup>ゆ</sup>き所<sup>ところ</sup>のな



いお方で、後生だから何日までも宅に居られるようにしておくれな」

清「むゝう……此の人と汝がと二人ながら屋敷に居られねえ事を出来して仕様がなく、駈落をして来たな」

若「あゝ」

清「あ……それじゃア何か二人ともにまア不義アして居ただアな、いゝや隠さねえでも宜い、不義アしたつて宜い、宜いゝゝ能くした、大かくなるもんだアな、此間まで頭ア蝶々見たように結つて、柎の嫩つこい葉でパイゝゝを拵えて吹いてたのが、此様な大くなつて、綺麗な情夫を連れて突走つて来たか、自分の年い老つたのは分んねえが、汝が大くなつたで知れらア、心配せねえでも宜い、お母さまが置くも置かねえもねえ、何うしても男と女はわるさアするわけのものだ、心配せねえでも宜い、どうせ智養子をせねえばなんねえ、われが死んだ父さまの達者の時分からの馴染で、己が脊中で眠たり、脊中で小便垂れたりした娘子が、大くなつたが、お前さんもまんざら忌ならば此様な処まで手を引張つて逃げてめえる氣遣えもねえが、宿屋の婿になつたら何うだ、屎草履を直さねえでも宜いから」

梅「それは有難い事で、何の様な事でもいたしますが、拙者は屋敷育ちで頓と知己もござ

らず、前町まえまちに出入町人はございますが、前町の町人どもの方かたへも参られず、他人ひとの娘を  
唆そくかしたとお腹立もございませうが、お手前様から宜しくお詫びを願いたい、若もし寺へ  
まいるような子供でもあれば、四書五経ぐらいは教えましても好よし、何うしても困る時に  
は御厄介ごやくけいにならんよう、人家ひとの門かどに立ち、謡うたいを唄い、聊いさぐかの合ごうりよく力ちからを受けましても自分  
の喰たべるだけの事は致す心得

清「其そのん様な事をしねえでも宜ええ、見つともねえ、聾ろうになつてお母おふくろの厄介やくけいになりたくねえた  
つて、歌ア唄つて表え歩いて合力ごうりきでえ物を売つて歩いて、飴屋あめや見たような事はさせたくね  
え、あの頭かぶの上へ籠かごか何か乗のけて売つて歩くのだらう」

梅「いえ、左様な訳ではございません」

清「然そうで無ねえにしても其そのん様な事は仕ねえが宜えい、そろく参めえりましょう、提灯ていとうを持つて  
おくんせえ、先へ立つて」

若「お前ね、私は嬉しいと思つたら草臥ぬれが脱ぬけたから宜えいよ」

清「まあぶつされよ」

若「宜えいよ」

清「宜えいたつて大おほくなつていやらしく成つたもんだから、間まア悪わるがつて……早く負ぶつされ

よ、少ちいさえうちは大てい概げ私あしが負おぶつたんだ、情おとこ夫こが居ゐるもんだから見みえして、わわれれが友とも達の奥おく田くだの兼かね野の郎らうなア立た派はな若わえ衆しゆになつたよ、汝われがと同おねえどし年ねんだが、此この頃いたごじやア肥こ手いたご桶づも新あたらしいんでなけりや担かつぎやアがかんかねえ、其その様んに世よ話わア焼やかさずに負おぶされよ」

## 二十四

鴻つるぎの巢うの宿しゆく屋やでは女おんな主あるじ人にが清きよ藏ざうの帰かへりの遅おそいのを心こころ配あはいたして、

母はは「ああの清きよ藏ざうはまだ帰かへりませなかな……何なにううしたか長ながえ、他ほかの者ものを使つかいにやれば、今いままでまでにやア帰かへるだに……ここら、清きよ藏ざうが帰かへつたようじやアねえか、帰かへつたら直すぐに此こ処こへ来こうといいえ」

清きよ「へえ、只ただ今いま往ゆつて参まゐりました……もし、此この人ひとは何なにとか云いつけ、名なは……」  
若わ「春はる部ぶさま」

清きよ「ううん春はる部ぶ梅うめか成なり程ほど……梅うめさん、そそここな客きやく座ざ敷しきは六む畳じやうしかかないが、客きやくのええらある時ときにやア此こ処こへも入いれるだが常とこにア誰たれも来きねえから、其その処こに入いつて居ゐな、一ひと旦たん詫わをしねえ内うちは仕つか方かたがねえから……へえ往ゆつて参まゐりました」

母「余り長えじやアねえか」

清「長えつて先方で引留めるだ、まア一盃飲んで往けと云つて、どうか船の利かないところを、お前の馬に積んで二三帰り廻してくれと云つていたが、薪は百把に二十二三把安いよ」

主「それは宜かつけな」

清「何よ、それ何に逢いやした、それ…」

母「誰だ」

清「誰だつて大くなつて見違えたね、屋敷姿は又別だね、此処を斯ういう塩梅に曲げて、馬糞受見たように此処にぺらく下げて来たつけね、今日の髪ア違つて、着物も何だか知んねえ物を着て来たんだ、年い十八じやア形い大えな、それ娘のおわかよ、父さまに似てえるだ」

母「あれまア何処え」

清「六畳に居るだ」

母「あれまア早くそう云えば宜いじやアねえか」

清「遅く屋敷を出たゞよ」

母「何か塩梅でも悪くて下つて来たんじやアあんめえか、それとも朋輩同士揉めでも出来たか、宿下りか」

清「それがね、お屋敷内でね、一つ所で働く若え侍があつて、好え男よ、其方を掃いてく  
 んろ、私拭くべえていった様な事から手が触り足が触りして、ふと私通いたんだ、だん  
 く聞けば腹ア大きくなつて赤児が出来てみれば、奉公は出来ねえ、そんならばとつて男を  
 誘い出して、濟みませんから老僕や詫言をしてくんろつてよ、どうかまアね、本当に好い  
 お侍だよ」

母「むゝう……じやア何か情夫を連れやアがつて駈落いして来たか」

清「うん突走つて来ただ」

母「それから汝何処へ入れた」

清「何処だつて別に入れ処がねえから、新家の六畳の方へ入れて飯ア喰わして置いただ」

母「馬鹿野郎、呆れた奴だよ、何故宅へ引入れた、何故敷居を跨がしたよ、屋敷奉公をし  
 ていながら、不義アして走つて来るような心得違えな奴は、此処から勝手次第に何処へで  
 も往くが宜えと小言を云つて、何故追出してやらねえ、敷居を跨がして内へ入れる事はね  
 えよ」

清「それは然う云つたつて仕様がねえ、どうせ年頃の者に固くべえ云つたつていかねえ、お前だつて此処え縁付いて来るのに見合から仕て、婚禮したじやアねえ、彼を知つてるのは私ばかりだ、十七の時だね、十夜の歸りがけにそれ芋 畠に二人立つてたろう」

母「止せ……汝まで其様ことをいうから娘がいう事を肯かねえ、宜く考えて見ろよ、熊ヶ谷石原の悴を家へよぼる都合になつて居るじやアねえか、親父のいた時から決つて居るわけじやアねえか、それが今情夫を連れて逃げて来やアがつて、親が得心で匿まつて置いたら、石原の舎弟や親達に済むかよ」

清「お、違えねえ、是は済まねえ」

母「済まねえだつて、汝は何もかも知つていながら、彼の娘を連れて来て、足踏みをさせて済むかよ、只た今迫出してしめえ、汝ア幾歳になる、頭ア禿らかしてよ、女親だけに子に甘く、義理人情を考えねえで入れたと、石原へ聞えて済むか、汝も一緒に出て往け」

清「私が色事をしやアしめえし、出される訳はねえ、実ア私も家へ入れめえとは考えたけれども、お侍さんが如何にも優しげな人で、色が白いたつて彼様のはねえ、私ア白つ子かと思えやした、一体お侍なんてえ者は田舎へ来れば、こら百姓……なんて威張るだが、私のような者に手を下げて、心得違えをして屋敷を出しましたが、他に知つて居る者もねえ、

母「さ、まア腹も立とうが、厄介にはなりません、稼ぎがあります、何だっけ、え、歌ア唄  
つて合、力とかいう菓子売つて歩いて世話にならねえから、置いてやつて下せえな」  
母「だめだよ、さつさと追出せよ」

清「そう怒つたつて仕様がねえ、出せば行き所がねえが、娘、子が情夫に己ア家へ来うつ  
て連れて来たものを追出すような事になれば、誠に義理も悪い、他に行き所はねえ、仕様  
がねえから男女で身い投げておつ死んでしまおうとか、林の中へ入つて首でも縊るべえと  
いうような、途方もねえ考えを起して、とんでもねえ間違が出来るかも知んねえ、追出  
せなら追出しもするが、ひよつとお前らの娘が身い投げて、首を縊つても私を怨んでは  
なんねえよ、只た今追出すから…」

母「まア、ちよつくら待てよ」

清「なに……」

母「己を連れてつて若に逢わせろよ」

清「逢わねえでも宜かんべえ」

母「宜いよ、己ア只追出す心はねえから、彼奴に逢つて頭の二つ三つ殴返して、小鬢で  
もむしやぐつて、云うだけの事を云つて出すから、連れてつて逢わせろよ」

清「それは宜くねえ、少せえ子供じやアねえし、十七八にもなったものゝ横ぞつぽを打ぶんな殴くつたりしねえで、それより出すは造作もねえ」

母「まあ待てよ…打叩うちたきは兎も角も、娘むすめは憎くて置かれねえ奴だが、附いて来たお侍さむれえさんに義理があるから、己が会つて、云うだけの事を云つて聞かした其の上で、其の人へ義理だ、娘あまには草鞋わらしせん銭の少しもくれべえ」

清「うむ、それは沢山たんとや遣るが宜え、新家にいるだよ」

と清藏が先へ駈出してまいり、

清「今此処こけへお母ふくろが来るよ」

若「お母つかさんが怒おこつて何とか仰しやつたかえ」

清「怒るたつて怒らねえたつて訳が分らねえ、彼様あんなはア堅かてえ義理を立てる人はねえ、此の前彌次郎やしろうが家の鶏とりを喜八きはちが縊しめたつけ、あの時お母ふくろが義理が立たねえつて其の通りの鶏を買つて来こねえばなんねえと、幾ら探しても、あゝいう毛がねえで困こつたよ、あゝいう氣象だから、お前めえさまも其の積りで、田舎者が分らねえ事をいうと思つて、肝きもを焦いしちやアいけねえよ、腹立紛れに何を云うか知んねえ、来たゝ、さ此方こつちへお母」

母「あゝ薄暗い座敷だな、行灯あんどんを持つて来な…お若わかく、此方こつちへ出るよ、此処こけへ出る、



最も少し出てよ」

お若は間が悪いから、畳へびつたり手を突いて顔を上げ得ません。附いて来た侍は何様な人だか。と横目でじろりと見ながら、自分の方より段々前へ進み出まして

母「お若、今清藏に聞きまして魂消しましたぞ、汝は情夫を連れて此処へ走つて来たではねえか、何ともはア云様のねえ親不孝な奴だ、これ屋敷奉公に出すは何のためだよ、斯ういう田舎には行儀作法も覚えられねえ、なれども鴻の巣では家柄の岡本の娘だアから屋敷奉公に上げ、行儀作法も覚えさせたらで、金をかけて奉公に遣つたのに、良い事は覚えねえで不義アして、此処へ走つて来ると云うは何たる心得違えなア親不孝の阿魔だか、呆れ果てた、最う汝の根性を見限つて勘当してくるから、何処へでも出て往け、石原の舎弟に合わす顔が無え、彼が汝の婿だ、去年宿下りに来た時、石原へ連れて往くのに、先方は田舎育ちの人ゆえ、汝が屋敷奉公をして立派な姿で往くが、先方が木綿ものでいても見下げるな、汝が亭主になる人だよと、何度も云つて聞かせ、お父様が約束して固く極めた処を承知していながら、情夫を連れて参つちやア石原へ済まねえ事を知つていながら来るとは、何ともはア魂消てしまった、汝より他に子はねえけれども、義理という二字があつて何うしても汝を宅へ置く事は出来ねえ、見限つて勘当をするから何処へでも出て往

くが宜い、汝は此のお方様に見棄てられて乞食になるとも、首い縊つて死ぬとも、身を投げるとも汝が心がらで、自業自得だ、子のない昔と諦めますから」  
と両眼には一杯涙を浮めて泣いて居りました。

## 二十五

母は心の中では不憫でならんが、義理にからんで是非もなく、故と声をあらゝげまして、

母「これ若、もう物を云わずさつきと出て往け」

と云いながら梅三郎に向いまして、

「お前様には始めてお目にかゝりましたが、お立派なお侍さんが斯んな汚え処へお出でなすつたくれえだから、どうか此の娘を可愛がつて下せえまし、折角此処まで連れて逃げて来たものを、若い内には有りうちの事だ、田舎氣質とは云いながら、頑固な婆アだ、何の勘弁したつて宜えにとお前様には思つか知んねえけれども、只今申します通り義理があつて、どうも此の娘を宅へ置かれませんか只た今追出します、名主へも届け、九離断つて

勘当ゆきどこします、往ゆき処どこもなし、親戚みやより頼りもねえ奴でござえますから、見棄みやてずに女房にやぼうにして下くだせえまし、貴方あなたが見棄みやてゝも私わしやア恨うらみとも思おもいませんが、どうかお頼たのみ申まします、何なにや清藏きよざう、あのお若わかを屋敷奉公やしきほうこうさせて家うちへ歸かえらば、柔やわらけえ物も着きられめえと思おもつて、細つむぎ縞しまの手織ておりがえらく出来できている、あんな物が家うちに残のこつてると後あとで見て肝きもが焦いれて快よくねえから、帯おビも櫛くし笄がのようなものまで悉みんない皆みな要いらねえから汝われえ一風ひとふう呂敷ろしきに引ひ纏まとめて、表うらちへ打うち棄やつちまえ」

清「打棄うちらねえでも宜よかんべい、のう腹はらア立たとうけれど打棄うちつたつて仕様しやうがねえ」

母「チヨツ、分わらねえ奴やつだな、石原いしはらの親達おやぢへ対たいしても此これ娘むすめがに何なに一つ着きせる事ことア出来できねえ、そんならと云いつて家うちに置おけば快よくねえ、憎にくい親おやぢ不孝ふこうな娘むすめの着物きものを見るみるのは忌いやだから、打うち棄やつちまえと云いうだ」

清「打棄うちらずに取とつて置おいたら宜よかんべい」

母「雨あめも降りふりそうになつて居ゐるから、合羽あはひに傘かさに下駄くだでも何なにでも、汝われが心こころで附つけて、此これ娘むすめがに遣やることは出来できねえ、憎にくくつて、併しかし家うちに置おくことが出来できねえから打棄うちれといふのだ、雨あめが降りふりそうになつて居ゐるから」

清「うーむ然そうか、打棄うちるべえ、箆たんす筒すごと打棄うちつても宜よい、どつちり打棄うちるだから、誰たれで

も拾つて往くが宜い、はア〜どうも義理という二字は仕様のねえものだ」

と立ちにかゝるを引止めて、

梅「ま暫く……清藏どんとやら暫くお待ち下さい、只今親御の仰せられるところ、重々御尤もの次第で、御尊父御存生の時分からお約束の許嫁の亭主あることを存ぜず、

無理に拙者が若江を連れてまいりましたは、あなたに対しては何とも相済みません、若江は亡られた親御の恩命に背き、不孝の上の不孝の上塗をせんければならず、拙者は何処へも往き所はないが、男一人の身の上だから、何処の山の中へまいりましても喰うだけの事は出来ず、お前は此処に止まって聳を取り、家名相続をせんければならんから、拙者一人で往きます」

清「ま、お待ちなせえ……そんな義理立てして無闇に往つたつていけねえ、二人で出て来たものが、一人置いてお前さんが往つたら娘も快くねえ訳だア、宜く相談して往くが宜い、今草鞋錢をくれると云うから待てよ、えゝぐずぐ〜云つちやア分らねえ、判然云えよ、泣きながらでなく……彼の人ばかり追返しちやア義理が済むめえ、色事だつて親の方にも義理があるから追返す位なら首でも縊るか、身い投げておつ死ぬというだ」

母「篋棒……死ぬなんて威し言を云つたら、母親が魂消て置くべいかと思つて、死ぬ

なんてえだ、死ぬと云つた奴に是迄死んだ例はねえ、さ只た今死ぬ、己は義理さえ立てば  
 宜い、汝より他に子はねえが、死ぬなんて逆らやアがつて、死ぬなら死ぬ、さ此処に庖丁  
 があるから」

清「止せよ、困つたなア……うむ何うしたく」

若江は身の過りでございませうから、一言もないが、心底可愛い梅三郎と別れる気がない、  
 女の狭い心から差込んでまいる癩氣に閉じられ、

若「ウ、ーン」

と仰向けさまに反返る。清藏は驚いて抱き起しまして、

清「お前さま帰るなんて云わねえが宜い、さ、冷たくなつて、齒を咬しぼつておつ死んだ、  
 お前様が余り小言を云うからだ……ア痛え、己の頭へ石頭を打付けて」

と若江を抱え起しながら、

清「お若や……」

母「少しぐらい小言を云われて絶息するような根性で、何故斯んな訳になつたんだかなア、  
 痛え……此方へ顔を出すなよ」

清「お前だつて邪魔だよ、何か薬でもあるか、なに、お前さま持つてる……む、う是は巻

いてあつて仕様がねえ、何だ印籠か……可笑しなものだな、お前さん此の薬を娘の口の中へ押つぺし込んで……半分嚙んで飲ませるよ、なに間が悪い……横着野郎め」

梅三郎は間が悪そうに薬を含んで飲ませますと、若江は漸くうゝんと気が付きました。

清「気が付いたか」

母「しつかりしろ」

清「大丈夫だ、あゝ、魂消た余り小言を云わねえが宜えよ、義理立をして見すゝ子を殺すようなことが出来る、もう其様に心配しねえが宜えよ」

若「あの爺や、私は斯んなわるさをしたから、お母さまの御立腹は重々御道理だが、春部さまを一人でお帰し申しては済まないから、私も一緒に此のお方と出して下さるよう、またほとぼりが冷めて、石原の方の片が附いたら、お母さまの処へお詫をする時節もあるから、一旦御勘当の身となつて、一度は私も出して下さるよう願つておくれよ」

清「困つたね、往処のねえ人を、お若が家まで誘い出して来て置かないと云うなら、彼の人を何うかしてやらなければなんねえ、時節を待つて詫言をするてえが、何うする」  
母「汝と違つてお義理堅え殿さまで、往く処のねえ者を一人で出て往くと仰しやるは、己がへの義理で仰しやるだ、憎くて置かれねえ奴だが、此の旦那さまも斯なお義理堅えか

ら、此の旦那様に免じて当分家へ置いてくれるから、此処に隠れているが宜い」

清「そんなれば早く然う云えば宜いに、後でそんな事を云うだから駄目だ、石原の子息がぐずぐずして居て困る事ができたら、私が殴殺しても構わねえ」

と是から二人は此の六畳の座敷へ足を止める事になりますと、お屋敷の方は打つて變つて、渡邊織江は非業に死し翌日になつて其の旨を届けると、直ぐさま検視も下り、遂に屍骸を引取つて野辺の送りも内証にて済ませ、是から悪人穿鑿になり、渡邊織江の長男渡邊祖五郎が伝記に移ります。

## 二十六

さて其の頃はお屋敷は堅いもので、当主が他人に殺された時には、不憫だから高を増してやろうという訳にはまいりません、不束だとか不覚悟だとか申して、お暇になります。彼の渡邊織江が切害されましたのは、明和の四年亥歳九月十三夜に、谷中瑞林寺の門前で非業な死を遂げました、屍骸を引取つて、浅草の田島山誓願寺へ内葬を致しました。其の時検使に立ちました役人の評議にも、誰が殺したか、織江も手者だから容易な者に討

たれる訳はないが、企たくんでした事か、どうも様子が分らん。死屍しがいの傍わきに落ちてありましたのは、春部梅三郎がお小姓若江と密通をいたし、若江から梅三郎へ贈りました文と、小柄こづかが落ちてありましたが、春部梅三郎は人を殺すような性質の者ではない、是も変な訳、何ういう訳で斯様かような文が落ちてあつたか頓と手掛りもなく、詰り分らず仕舞でござりました。織江には姉あねむすめ娘のお竹と祖五郎という今年十七になる倅せがれがあつて、家督かどくにん人でございませぬ。此これ者が愁傷しゆうしょういたしまして、昼は流石さすがに人もまいりませんが、夜分は訪とう者もござりませんから、位牌に向つて泣いてばかり居りますと、同どうげつ月二十五日の日に、お上屋敷からお呼出しでありますから、祖五郎は早速あさ麻上下あさがみしもで役所へ出ますと、家老寺島兵庫差さしそ添えの役人も控えて居り、祖五郎は恐入つて平伏して居りますと、

寺島「祖五郎も少し進みますように」

祖「へえ」

寺島「此たびの度は織江儀不束の至りである」

祖「はっ」

寺島「仰せ渡されをそれ…」

差添のお役人が懐から仰せ渡され書がきを取とり出して読上げます。



一其の方父織江儀御用に付き小梅中屋敷へ罷り越し帰宅の途中何者とも不知切害被致候段不覚悟の至りに被思召無余儀永の御暇差出候上は向後江戸お屋敷は不及申御領分迄立廻り申さざる旨被仰出候事

家老名判

祖五郎は

「はつ」

と頭を下げましたが、心の中では、父は殺され、其の上に又此のお屋敷をお暇になるとかと思ひますと、年が往きませんから、只畳へ額を摺付けまして、残念の余り耐えかねて男泣きにはら／＼と涙を落す。御家老は膝を進めて言葉を和らげ、

寺「マ、役目は是だけじゃが、祖五郎如何にもお気の毒なことで、お母さまには確か早く別れたから、大概織江殿の手一つで育てられた、其の父が何者かに討たれ剩え急にお暇になつて見れば、差向何処と云つて落着く先に困ろうとお察し申すが、まゝ又其の中に御帰参の叶う時節もあるうから、余りきなく思つては宜しくない、心を大きく持つて父の仇を報い、本意を遂げれば、其の廉によつて再び帰参を取計らう時節もあるう、急いては事を仕損ずるといふ語を守らんければいかん、年来御懇意にもいたした間、お屋敷近い処に

もいまいが、遠く離れた処にいても御不自由な事があつたら、内々で書面をおよこしなさい」

祖「千万有難う存じます……志摩殿、幸五郎殿御苦勞さまで」

志摩「誠にどうも此の度は何とも申そうようもない次第で、実にえゝ御尊父さまには一方ならぬ御懇命を受けました、志摩などは誠にあゝいうお方様がと存じましたくらいで、へえどうか又何ぞ御用に立つ事がありましたら御遠慮なく……此処は役所の事ですから、小屋へ帰りまして仰せ聞けられますように」

祖「千万有難う」

と仕方なく、祖五郎は我小屋へ立帰つて、急に諸道具を売払い、奉公人に暇を出して、弥々此処を立退かんければなりません。何処と云つて便つて往く目途もございませんが、彼の若江から春部の処へ送つた文が残つていて、春部は家出をした廉はあるが、春部が父を殺す道理はない、はて分らん事で……確か梅三郎の乳母と云う者は信州の善光寺にいるという事を聞いたが、梅三郎に逢つたら少しは手掛りになる事もあるかと考えまして、前々勤めていた喜六という山出し男は、信州上田の在で、中の条村にいますというから、それを訪ねてまいろうと心を決しまして、忠平という名の如く忠実な若党を呼びまして、

祖「忠平手前は些とも寝ないのう、ちよいと寝なよ」

忠「いえ眠くも何ともございません」

祖「姉様と昨夜のう種々お話をしたが、屋敷に長くいる訳にもいかんから、此の通り

諸道具を引払ってしまった、併し又再び帰る時節もあろうからと思ひ、大切な品は極別懇

にいたす出入町人の家へ預けて置いたが、姉様と俱に喜六を便つて信州へ立越る積りだ、

手前も長く奉公してくれたが、親父も彼の通り追々老る年だし、菊はあゝ云う訳になつた

し、手前だけは別の事だから、こりやア何の足しにもなるまいが、お父さまの御不断召だ、

聊か心ばかりの品、受けて下さい、是まで段々手前にも宜く勤めて貰ひ、お父さまが亡

後も種々骨を折つてくれ、私は年が往かんのに、姉様は何事もお心得がないから何うして

宜いかと誠に心配していたが、万事手前が取仕切つてしてくれ、誠に辱ない、此品はほん

の志ばかりだ……また時が来て屋敷へ帰ることもあつたら、相変らず屋敷へ来て貰いたい、

此品だけを納めて下さい」

忠「へえ誠に有難う……」

竹「手前どうぞ岩吉にも会いたいけれども、立つ時はこつそりと立ちたいと思うから、よ

く親父にそう云つておくれよ」

と云われて、忠平は祖五郎とお竹の顔を視詰めて居りました。忠平は思い込んだ容子で、忠「へえ……お嬢さま、私だけはどうかお供付け下さいますように願いたいもので、またア斯うやって私も五ヶ年御奉公をいたして居ります、成程親父は老る年ですが、まだ中々達者でございます、旦那様には別段に私も御鼻頂を戴きましたから、忠平だけはお供をいたし、御道中と申しても若旦那様もお年若、又お嬢様だつて旅慣れんでいらつしやいますから、私がお供をしてまいりませんと、誠にお案じ申します、宅で案じて居りますくらいなら、却つてお供にまいつた方が宜しいので、どうかお供を」

竹「それは私も手前に供をして貰えば安心だけれども、親父も得心しまし、また跡でも困るだろう」

忠「いえ困ると申しても職人も居りますから、何うぞ斯うぞ致して居ります、なまじ親父に会いますと又右や左申しますから、立前に手紙で委しく云つてやります、どうか私だけはお邪魔でもお供を」

竹「誠に手前の心掛感心なことで……私も往つて貰いたいというのは、祖五郎も此の通りまだ年は往かず……併しそれも気の毒で」

忠「何う致しまして、私の方から願つても、此の度は是非お供を致そうと存じて居るので、

どうか願います」

竹「そんなら岩吉を呼んで、宜く相談ずくの上にしましよう」

忠「いえ相談を致しますと、訳の分らんことを申してとても相談にはなりません、それより立つ前に書面を一本出して、ずっとお供をしてまいっても宜しゅうございます、心配ございませぬ」

そんならばと申すので、是から段々旅支度をして、いよく翌日立つという前晩に、忠平が親父の許へ手紙を遣りました。親父の岩吉は碌に読めせんから、他人に読んで貰いましたが、驚いて渡邊の小屋へ飛んでまいりました。

岩「お頼ん申します」

忠「どうれ……おやお出でかえ」

岩「うん……手紙が来たから直に来た」

忠「ま此方へお出で」

岩「手前何かお嬢様方のお供をして信州とかへ行くてえが飛んだ話だ、え飛んだ話じゃアねえか、そんなら其の様にちゃんと己に斯ういう訳でお供を仕なければならぬがと、宜く己に得心させてから行くが宜い、ふいと黙つて立つちまつては大変だと思つたから、遅く

なりましてもと御門番へ断つて来たんだ、え、おい」

忠「お供してまいらなければならんだよ、お嬢様は脾弱ひよわいお体、若旦那さまは未だお年がいけないから、信州までお送り申さなければなりません、お屋敷へ帰る時節があれば結構だが、容易に御帰参は叶うまいと思うが、長々ながく留守になりますから、お前さんも身をお厭いといなすつて御大切ごたいせつに」

岩「其様そんなことを云つたつて仕様がな、己は他に子供はない、お菊と手前てめえばかりだ、ところが菊は彼あんな訳になつちまつて、己おらもう五十八だよ」

忠「それは知つてます」

岩「知つてるたつて、己おれを置いて何処どこかへ行つてしまふと云うじゃアねえか、前の金太きんたの野郎でも達者でいれば宜いいが、己も此の頃じゃア眼が悪くなつて、思うように難かしい物は指せなくなつて居るから困る」

忠「困るつて、是非お供をしなくつちやアなりません」

岩「成らねえたつて己を何うする」

忠「私いが行つて来るうち、お前は年を老とつたつて丈夫な身体だから死ぬ氣遣いはありません」

岩「其様な事を云つたつて人は老少不定だ、それも近え処ではなし、信州とか何とか五十里も百里もある処へ行くのだ、人間てえものは明日も知れねえ、其の己を置いて行くように宜く相談してから行け、手紙一本投込んで黙つて行つちまつては親不孝じゃアねえか」

忠「それは重々私が悪うございましたが、相談をして又お前に止めたり何かされると困るから……これは武家奉公をすれば当然然のことで」

岩「なに、武家奉公をすれば当然然だと、旦那さまが教えたのか」

忠「お教えがなくなつても当然然だよ」

岩「然ういうことを手前は云うけれども、親父を棄て、田舎へ一緒に行けと若旦那やお嬢様は仰しやる訳はあるめえ」

忠「それは送れとは仰しやらんのだ、若旦那様や嬢様の仰しやるには、老る年の親父もあるから、跡に残つた方が宜かろう、と云つて下すつたが、多分にお手当も戴き、形見分けも頂戴し、殊に五ケ年も奉公した御主人様が零落れて出るのを見棄て、は居られませんか、何処までもお供をして、俱に苦勞をするのが主従の間だから、悪く思つて下さるな」

と説付けました。

## 二十七

段々訳を聞いても岩吉はまだ腑に落ちないので、

岩「主従はそれで宜かろうが、己を何うする」

忠「屋敷奉公をすりやア斯ういう場合にはお供をするが、あたりまえ当然さ、お前さんには済まな  
いが忠義と孝行と両方は出来ません、忠孝全まったからずというは此の事さ」

岩吉にはまだ言葉の意味が分りませんから、怪訝けげんな顔をして、

岩「何なんだア、忌いやに理窟を云やアがつて、手前てめえ近ちかえ処いじゃアなし、えおう五十里も百里もあ  
る処へ行くものを、まったからずつて待たずに居いられるか」

忠「然そうじゃアありません、忠義をすれば孝行が出来ないという事です」

岩「それは親に孝行主人に忠義をしろてえ事は己も知っている、講釈や何かで聞いたよ」  
忠「それですから孝行と忠義と両方は出来ませんよ」

岩「出来ねえつて……骨を折つてやんなよ」

忠「うふ、骨を折つてやれと云つたつて出来ませんよ」



岩「手前は生意氣に變なことを云つて人を困らせるが、己は他に子供が無し、手前たった一人だ、年を老とつた親父を置いて一緒に行けと旦那様が仰しやりアしめえし、跡へ残れ、可愛相だからと仰しやるのに、手前の了簡で己を棄て、行く氣になつたんだ、親不孝な野郎め」

忠「なに親不孝ではありませんがね、私は御当家様へ奉公に来て、一文不通の木具屋の俸せがれが、今では何うやら斯うやら手紙の一本も書け、十露盤そろばんも覚え、少しは劍術も覚えたのは、皆大旦那のお蔭、今日の場合にのぞんで年のいかない若旦那様やお嬢様のお供をして行かないと、忠義の道が立ちませんよ」

岩「それは分つているよ」

忠「分つているなら遣やつて下さいな」

岩「分つてはいるが、己を何うするよ」

忠「其そん様な分らないことを云つては困りますな、何うするたつて私が帰るまで待つて下さい」

岩「待つてねえ、己おれ待つてねえ（さめ／＼と泣きながら）婆さんが死んでから己ア職人の事で、思ふように育てることが出来ねえからつてんで、御当家様へ願つたんだ、それは御

恩にはなつたけれども、旦那様が何も手前てめえを連れてつて下さる事アねえ、何う考かんげえても」

忠「分らん事をいうね、自分の御恩になつた御主人様が斯ういう訳になつたからだよ」

岩「何ういう訳に」

忠「他人ひとに殺されてお暇いとまになつたんだよ」

岩「お暇……てえのは……お屋敷を出るんだらう」

忠「然そうさ」

岩「出て……」

忠「分らんね、零おちぶれ落おちてしまふんだよ、御浪人になるんだよ、それだから私が従ついて行か

なければならぬ、仮令たとえ私が御免ごめんを蒙こうむると云つてもお前まへが己おれが若ければお供ごをして行ゆくと

こだが、手前てめえ何処どこまでもお供申ごせんして御先途ごせんを見届けなければならぬと云いうのが当あたり然まな

話だ、其そののくらしいな覚悟かくごが無ければ、頭あたまで武家奉公ぶけほうこうをさせなければ宜いいや、然そうじゃアあ

りませんか、お前まへさんは屹度野暮きつとやぼに止めるに違ちがいなと思つたから、手紙てがみを上げたんだ、

分りませんかえ」

岩「む……分つた、む……成程侍さむらいてえものは其様そのようなものか……だから最初てんで武家奉公ぶけほうこうは止

そうと思つた」

祖「忠平、親父が来たのじやアないか」

忠「へい、親父がまいりました」

祖「おやく、宜くおいでだ、岩吉はい入んな」

岩「御免なせえまし、誠にお力落しきまで……今度急に悴を連れてお出でなさる事になつたんで、まゝ是はどうも武家奉公をすればあたりまえ然えのことで、へえ私わたくしも五十八で」

祖「貴様も老る年で親父も困ろうから跡へ残っているが宜よいと云つても、彼あれが真実に何処までも随ついて行つてくれるという、その志を止められもせず、貴様には誠に気の毒でね」

岩「どうも是もまア武家奉公で、へゝゝ私わたくしは五十八でげす」

忠「お父とつさん、一つ事ばかり云つてゝ困るね其そん様な事を云うものではない、明日あしたお立ただらお餞はなむけ別べつをしなければなりませんよ」

岩「え」

忠「お餞はなむけ別べつをしなさいよ」

岩「なんだ……お花……は供あげて来たよ」

忠「分らないよ、お餞せんべつ別べつ」

岩「え……煎餅せんべいを……なんだ」

忠「旅へ入らつしやるお土産をよ」

岩「うんく……何ぞ上げましょう、烟草盆の詠えがありますから彼品を」

忠「其様な大きなものはいけない」

岩「じゃア火鉢を一つ」

忠「いけないよ」

岩「それでは何か途中で喰る金米糖でも上げましょう、じゃア明日私が板橋までお送り申しましょう」

祖「そんな事をしないで宜しい、忙しい身体だから構わずに」

岩「へえ、悴を何卒何分お頼み申します、へ々々誠にもう私は五十八でござえます」

と一つ事ばかり云つて、人の善い、理由の分りません人だから仕方がない。翌朝板橋まで送る。下役の銘々も多勢ぞろろくと渡邊織江の世話になつた者が、祖五郎お竹を送り立派な侍も愛別離苦で別れを惜んで、互に袖を絞り、縁切榎の手前から別れて岩吉は帰りました。祖五郎お竹等は先ず信州上田の在で中の条村という処へ尋ねて行かんければなりません。こゝで話二つに分れまして、彼の春部梅三郎は、奥の六畳の座敷に小隠れをいたして居り、お屋敷の方へは若江病氣に就て急にお暇を戴きたいという願を出し、

老女の計いはからで事なく若江はお暇の事になりましたは御慈悲ごじひでござります。さて此の若江の  
家へ宗桂そうけいという極感ごくの悪い旅按摩たびあんまがまいりまして、私は中年で眼が潰つぶれ、誠に難渋い  
たしますから、どうぞ、御当家様はお客さまが多いことゆえ、療治をさせて戴きたいと頼  
みますと、慈悲なげけ深い母だから、

母「療治は下手だが、家にいたら追々得意も殖ふえるだろう、清藏丹誠をしてやれ」  
清「へえ」

と清藏も根が情深い男だから丹誠をしてやります所から、療治は下手だが、廉やすいのを売  
物りものに客へ頼んで療治をさせるような事になりました。其の歳の十一月二十二日の晩に、  
母が娘のお若を連れまして、少々用事があつて本庄宿ほんじょうじゆくまで参りました。春部梅三郎  
は件の隠家かくれがに一人で寝て居り、行灯あんどうを側へ引寄せて、いっぞや邸やしきを出る時に引裂いた文  
は、何事が書いてあつたか、事に取紛れて碌々読まなかつたが、と取出して慰なぐさみ半分に繰  
披りひらき、なに／＼「予かねて申合せ候一儀大半成就致し候え共、絹と木綿の綾は取とりにく悪き物ゆ  
え今晚の内に引裂き、其の代りに此の文を取落し置候おきえば、此の花は忽たちまち散果ちりはて可もうすく申  
茎じくは其許そこさまへ蓄つぼみのまゝ差送候さしおく」はて：分らん：「差送候間御安意ごあんい之為め申上候、  
好文木こうぶんぼくは遠からず枯れ秋の芽出しに相成候事、殊ことに安心つかまつ仕り候、余は拝面之上そう／＼々々

已上、別して申上候は」…という所から破れて分らんが、これは何の手紙だろう、少しも訳が分らん…どうも此の程から重役の者の内、殊に神原五郎治、四郎治の兩人の者は、どうも心良からん奴だ、御舎弟様のお為にもならん事が毎度ある、伯父秋月は容易に油断をしないから、神原の方へ引込まれるような事もあるまいが、何の文だろう、何者の手跡だか頓と分らん、はてな。と何う考えても分りませんから、又巻納めて紙入の間へ挟んで寝ましたが、寝付かれません。其の内に離れて居りますけれども、宿泊人の躰がぐうぐう、往来も大分静かになりますと、ボンボン、ばらくぐくと簷へ当るのは霏でも降つて来たように寒くなり、襟元から風が入りますので、仰臥に寝て居りますと、廊下をみしりぐと抜足をして来る者があります。廊下伝いになつては居るが、締りが附いて、別に人の来られないようになって居りますから、

梅「誰が来たろう、清藏ではあるまいか、何だろう」

と態と睡つた振で、ぐうぐうと空躰をかいて居りますと、廊下の障子を密と音のしないように開けて這込む者を梅三郎が細目を開いて見ますと、面部を深く包んで、尻ツ端折を致しまして、廊下を這つて来て、だん／＼行灯の許へ近づき、下からふつと灯を消しました。漸々探り寄つて春部が仰臥けざまに寝ている鼻の上へ斯う手を当て、

寢息を伺いました。

梅「す……はてな……何だろうか知ら、気味の悪い奴だ、どうして賊が入ったか、盗るものもない訳だが……己を殺しにでも来た奴か知らん」

とそこは若いけれども武家のことだから頓と油断はしません。眼を細目に開いて様子を  
見て居りますと、布団ふとんの間に挟んであつた梅三郎の紙入を取出し、中から引出した一封の  
破れた手紙を透して、披ひらげて見て押お戴いたき懐ふところ中へ入れて、仕すましたり……と行きにかゝ  
る裾すそを、梅三郎うゝんと押えました。

## 二十八

姿は優しゆうございますが、柔術やわらに達した梅三郎に押えられたから堪たまりません。

曲者「御免なさい」

梅「黙れ……賊だな、さ何処どっから忍び込んだ」

曲者「何卒どうぞ御免なすつて」

梅「相成らん……何だ逃げようとして」

と逆に手を取つて押付け。

梅「怪しい奴だ、清藏どん、泥坊が入りました。清藏どんく聞えんか、困つたものだ、清藏どん」

少し離れた処に寝て居りました清藏が此の声を聞付け、

清「あい、はア……あい……何だといえ、泥坊が入つたとえあれま何うもはア油断のなんねえ、庭伝えに入つたか、何にしろ暗くつて仕様がねえ、店の方へ往つて灯を点けて来るから、逃してはなんねえ」

梅「何だ此奴……動かすものか、これ……灯を早く持つて来んかえ」

清「何だ此奴……動かすものか、これ……灯を早く持つて来んかえ」

清「泥坊は何処にく」

梅「清藏どん、取押えた、なかく勝手を知つた奴と見えて、廊下伝いに入つた、力のあ  
る奴だが、柔術の手で押えたら動けん、今暴れそうにしたからうんと一当あてたから縛  
つて下さい」

清「よし、此奴細っこい紐じやア駄目だ、なに麻繩が宜い」

とぐるく巻に縛つてしまいました。



曲者「何卒御免なすつて……実は何でございます、へえ全く貧の盗みでございますから、何卒御免なすつて」

清「貧の盗みなんてえ横着野郎め」

此の中下女などが泥坊と聞いて裸蠟燭などを持ってまいりました。

清「これもつと此方へ灯を出せ、あゝ熱いな、頭の上へ裸蠟燭を出す奴があるかえ、行灯を其方へ片附ちめえ、此の野郎頬被りいしやアがつて、何処から入った」

と手拭をとつて曲者の顔を見て驚き、

清「おや、此の按摩ア……汝は先月から己ア家へ来て、俄盲で感が悪くつて療治が

来ねえと云うから、可愛相だと思つて己ア家へ置いてやつた宗桂だ、よく見りやア虚

盲で眼が明いてるだ、此の狸按摩汝、よく人を盲だつて欺しアがつた、感が悪くつて泥

坊が出来るかえ、此の磔めえ」

と二つばかり続けて撲ちました。

曲「御免なさい、誠にどうも番頭さん、実ア盲じゃアござえませんが、けれども旅で災難に遭いまして、後へは帰れず、先へも行かれず、仕様が有りませんから、実は喰方に困つて此方はお客が多いから、按摩になつてと思ひまして入つたんでございますが、漸々銭が

無くなつちまいましたから、江戸へ帰つても借金はあり、と云つて故郷忘じ難く、何うかして帰りてえが、借金方の附くようにと思ひまして、ついふらくくと出来心で、へえ、沢山金え盗るといふ了簡じやアござえません、貧の盗みでございますから、お見遁しを願います」

清「此の野郎……此奴のいふ事ア迂濶本当にア出来ねえ、嘘を吐く奴は泥坊のはじまり、最う泥坊に成つてゐるだ此の野郎」

曲「どうか御免なすつて」

梅「いや／＼手前は貧の盗みと云わせん事がある、貧の盗みなれば何故紙入れの中の金入れか銭入れを持って行かぬ、何で其の方は書付ばかり盗んだ」

曲「え……これはその何でございます、あゝ慌てましたから、貧の盗みで一途にその私は、へえ慌てまして」

梅「黙れ、手前はどうも見たような奴だ、此奴を確り縛つて置き、殴つ挫いても其の訳を白状させなければならん、さ何ういう理由で此の文を盗つた、手前は屋敷奉公をした奴だろう、谷中の屋敷にいた時分、どうも見掛けたような顔だ……手前は三崎の屋敷にいた事があつたらうな」

曲「いえ……どう致しまして、私は麻布十番の者でござえます、古河に伯父がござえまして、道具屋に奉公して居りましたが、つい道楽だもんでげすから、お母が死ぬとぐれ出し、伯父の金え持逃げをしたのが始まりで、信州小室の在に友達が行って居りますから無心を云おうと思ひまして参つたのでござえますが、途中で災難に遭ひ、金子を……」

梅「いや／＼幾ら手前が陳じても、書付を取るといふは何か仔細があるに相違ない、清藏どん打つて御覽、云わなければ了簡がある、真実に貧の盗みなれば金を取らなければならん、書付を取るといふはどうも理由が分らんから、責めなければならん」

清「さ云えよ、云わねえと痛えめをさせるぞ、誰か太つけえ棒を持って来い、角のそれ六角に削つた棒があつたつけ、なに長え……切つて来う……うむ宜し……さ野郎、これで打つが何うだ」

と続け打ちに打ちますと、曲者は泣声を致しまして、

曲「御免なすつて、貧の盗みで」

清「貧の盗みなんて生虚ア吐きやアがつて、家へ来た時に汝何と云つた、少せえ時に親父が死んで、お母の手にかゝっている内に、眼が潰れたつて、言うことが皆な出たらめばかりだ、此の野郎（打つ）」

曲「あ痛くく痛うござえやす、どうか御勘弁を…悪い事はふつり止めますから」

清「止るたつて止めねえたつて、何で手紙を盗んだ（又打つ）」

曲「あ痛うござえやす、何う云う訳だつて、全く覚えが無んでござえやす、只慌て、私が…」

梅「黙れ、何処までも云わんといえば殺してしまうぞ、此方が先程から此の手紙が分らんと、幾度も読んで考えていたところだ、これは何か隠し文で、お屋敷の大事と思えば棄置かれん、五分試しにしても云わせるから左様心得ろ…」

と

「脇差を取つて来る間逃げるとならんから」

清「なに縛つてあるから大丈夫だよ」

梅「五分だめしにするが何うだ、云わんければ斯うだ」

とすつと曲者の眼の先へ短刀いのを突付ける。

曲「あ、危うござえやす、鼻の先へ刀を突付けちやア…どうぞ御勘弁を」

梅「これ、手前が幾ら隠してもいかん事がある、手前は谷中三崎の屋敷で松蔭の宅に居た奴であらうな」

曲「へえ」

梅「もういけん、此書これは松蔭から何者へ送るところの手紙か、又他わきから送った手紙か、手前は心得て居おるか」

曲「へえ」

梅「いやさ、云わんければ手前は嬲なぶり殺ころしにしても云わせなければならん、其の代り云いさえすれば小遣こづかいの少しぐらいは持たして免ゆるしてやる」

清「そうだ、早く正直に云つて、小遣を貰え、云わなければ殺されるぞ、さ云えてえば  
(又打うつ)」

曲「あゝ痛うござえます、あ危あぶうございます、鼻の先へ……えゝ仕方がないから申上げますが、実はなんでござえます、私わたくしが主人に頼まれて他ほかへ持つていく手紙でござえます」

梅「むゝ何処どこへ持つて行く」

曲「へえ先方さきは分りませんけれども持つて行くので」

梅「これゝ先方さきの分らんということがあるか、何処へ……なに、先方が分っている、種い々な事を云い居おるの、先方が分つてれば云え」

曲「へえ、その何なんでござえます、王子の在りにお寮りやうがあるので、その庵あん室しつ見たような所の

側の、些とばかりの地面へ家を建て、楽に暮していた風流の隠居さんが有りまして、王子の在へ行つて聞きやア直に分るてえますから、実は其処は池の端仲町の光明堂という筆屋の隠居所だそうで、其家においてなさる方へ上げれば宜いと云付かつて、私が状箱を持つてお馬場口から出ようとすると、今考えれば旦那様で、貴方に捕まつたので、状箱を奪られちやアならんと思いやして一生懸命に引張る途端、落ちた手紙を取ろうとする、奪られちやア大變と争う機みに引裂かれたから、屋敷へ帰ることも出来ず、貴方の跡を尾けて此方へ入つた限り影も見え、だんく聞けば、あのお小姓のお家だとの事ですから、俄盲だと云つて入り込んだのも只其の手紙せえ持つて行けば宜いんで、是を落すと私が殺されたかも知れねえんで」

梅「うん、わかつた、いや大略分りました」

清「大略つてお前さんの心に大概分つたかえ」

梅「少し屋敷に心当りの者もある、此の書面は其の方の主人松蔭が書いたのか」

曲「いえ……誰が書いたか存じませんが、大切に持つて行けよ、落したり失したりする事があると斬つちまうと云われて恟りしたんで、其の代り首尾好く持つて行けば、金を二十両貰う約束で」

梅「むゝう……清藏どん、今に夜が明けてから一詮議しましようから、冷飯でも喰わして物置へ棒縛りにして入れて置いて下さい」

## 二十九

清藏は曲者を引立てまして、

清「これ野郎立たねえか、今冷飯喰わしてやる、棒縛り程楽なものねえぞ」

と是から到頭棒縛りにして物置へ入れて置きました。翌日梅三郎は曲者から取返した書面を出して見ると、再び今一つの裂端も一緒になつていたので、これ幸いと曲者の持つていた書面と継合せて見まして、

梅「中田千早様へ常磐よりと……常磐の二字は松蔭の匿名に相違ないが、千早と云うが分らん、彼の下男を縛つてお上屋敷へ連れて往こう、それにしても八州の手に掛け、縛つて連れて行かなければならん」

と是から物置へまいり、曲者を曳出そうと思ひますと、何時か縄脱をして、彼の曲者は逐電致してしまいました。そこで八州の手を頼み、手分をいたして調べましたが、何う

しても知れませんが、なか／＼な奴でございます。さて明和の五年のお話で……此の年は余り良い年ではないと見えまして、三月十四日に大阪會根崎新地の大火で、山城は洪水でございまして。続いて鳥羽辺が五月朔日からの大洪水であつた、などという事で、其の年の六月十一日にはお竹橋へ雷が落ちて火事が出ました、などと云う余り良い事はございせん。二月五日、桑野のお下屋敷では午祭の宵祭で大層賑かでございます。なれども御舎弟様御不例に就きまして、小梅のお中屋敷にいらしつて、お下屋敷はひっそり致して居りますが、例年の事で、大して賑かな祭と申す方ではないが、ちら／＼町人どもがお庭拝見にまいます。松蔭大藏の家来有助は姿を変え、谷中あたりの職人体に扮え、印半纏を着まして、日の暮々に屋敷へ入込んで、灯火の点かん前にお稻荷様の傍に設けた囃子屋台の下に隠れている内に、段々日が暮れましたから、町の者は亥刻になると屋敷内へ入れんように致します。灯火も忽ち消しまして静かになりました。是から人の引込までと有助は身を潜めて居りますと、上野の丑刻の鐘がポーン／＼と聞える、そつと脱出して四辺を見廻すと、仲間衆の歩いている様子も無いから、有「占めた」

と呟きながらお馬場口へかゝつて、裏手へ廻り、勝手は宜く存じている有助、主人松蔭



大藏方へ忍び込んで、縁側の方へ廻つて来ると、烟草盆を烟管きせるでぼん／＼と叩く音。有「占めた」

と云うので有助が雨戸の所を指先でとん／＼と叩きますと、大藏が、大「今開けるぞ、誰も居らんから心配せんでも宜よい、有助今開けるぞ」

と云われて有助は驚きました。

有「去年の九月屋敷を出てしまい、それつきり帰らない此の有助が戸を叩いた計ばかりで、有助とは実に旦那ちえしやは智者ちえしやだなア：これだから悪い事も善い事も出来るんだ」

松蔭大藏は寐衣姿ねまきすがたで縁側へまいり、音をさせないように雨戸を開け、雪洞ほんぼりを差出して、透すかし見まして、

大「此方こつちへ入れ」

有「へえ、旦那様うち其の中は、面も被かぶらずのめ／＼上あがられた義理じゃアござえませんが、何うにも斯うにも仕方なしに又お屋敷へ帰けえつてまいりました、誠に面目次第もありません」

大「さ、誰も居らんから此方へ入れ／＼」

有「へえ／＼」

大「構わず入れ」

有「へえ、足が泥ぼつけえで」

大「手拭をやろう、さ、これで拭け」

有「此様な綺麗な手拭で足を拭いては勿体ねえようで……さて私わたくしも、ぬつと帰けえられた義理じゃアござえませんが、帰けえらずにも居おられませんかから、一通りお話をして、貴方に斬られるとも追出されるとも、何うでも御了簡に任せようと、斯う思いやして帰けえつてまいりましたので」

大「彼あれ限りで音沙汰が無いから、何うしたかと実は心配致していた、手前は彼あの手紙を何者かに奪とられたな」

有「へえ、春部に奪とられたので、春部の彼奴あいつが若江という小姓いたずらと不義いたずらをして逃げたんで、其の逃げる時にお馬場口から柵さく矢来やらいの隙間の中の広い処から、身体を横わたにして私わたくしが出ようと思ひます途端でつくわに出で会あひして、実にどうも困りました」

大「手紙を何うした奪とられたか」

有「それがお前さん、鼻を摘つままれるのも知れねえ深更よふけで、突いきなり然状箱へ手を掛けやアがツたから、奪とられちやアならねえと思ひやして、引張ると紐ひもが切れて、手紙おつが落おこちる、ととう半分引裂ひっさかれたから、だん／＼春部の跡つを尾いて行くと、鴻の巣の宿屋へ入りやし

たから、感が悪い俄盲ツてんで、按摩に化けて宿屋に入込み一度は旨く春部の持つていた手紙の裂を奪つたが、まんまと遣り損なつて、物置へ棒縛りにして投込まれた、所で漸く縄脱けえして逃出しましたが、近辺にも居られやせんから、久しく下総の方へ隠れていやしたが、春部にあれを奪られて何う致すことも出来やせんので、へえ」

大「いや、それは宜しい、心配致すな、手前は己の家来ということを知るまい」

有「ところが知つてます、濟まねえけれどもお前さん、ギラ／＼するやつを引こ抜いて私の鼻つ先へ突付け云わねえけりやア五分だめにしちまう、松蔭の家来だろう、三崎の屋敷に居たろう、顔を知つてるぞ、さア何うだと責められて、つい左様でござえますと申しやした」

大「なにそれは云つても宜い、彼の晩には実ア神原も酷い目に遭つた、何事も是程の事になつたら幾らも失策はある、丸切りしくじつて、此の屋敷を出てしまつたところが、有助貴様も己と根岸に佗住居をしていた時を思えば、元々じやアないか」

有「それは然うでござえます」

大「彼処に浪人している時分一つ鍋で軍鶏を突き合つていたんだからのう」

有「旦那のように然う小言を云わずにおくんなさるだけ、一倍面目無うござえます」

大「だによつて行る処までやれ、今までの失策も許し、何もかも許してやる、それに手前此処に居ては都合が悪い、就ては金子が二十両有るからこれをやろう」

有「へえ、是は有難うござえます」

大「其の代り少し頼みがある、手前小梅のお中屋敷へ忍び込んで、お居間近く踏込み……いや是は手前にア出来ん、夜詰の者も多いが、何かに付けて邪魔になる奴は、彼の遠山権六だ、彼がどうも邪魔になるて」

有「へえー、あの国にいて米搗をしてえた、滅法界に力のある……」

大「うん、彼奴が終夜廻るといので、何うも邪魔だ」

有「へえー」

大「彼を手前殺して、ふいと家出をしてしまえ、何処へでも宜いから身を隠してくれ」

有「彼は殺せやせん、それはお前さん御無理で、からどうも彼のくれえ無法に力のある奴ア沢山有りません、植木屋が十人もよつて動かせねえ石を、ころ／＼動かしませ、天狗見たような奴で、それじやアお前さん私を見殺しにするようなもので」

大「いや、通常じやア敵わない、欺すに手なしだ、あゝいう剛力な奴は智慧の足りないもので、それに一体彼奴は侠客氣が有つてのう、人を助けることが好きだ、手前何うか

して田圃たんぼ伝たいに行つて、田圃の中へ入らなければならんが、彼所あそこにも柵があるから、其の柵矢来の裏手から入つて、藪の中にうんく呻うなつていろ」

有「私わつしがですかえ」

大「うん、藪の中に泥だらけになつて呻うなつていろ」

有「へえ」

大「すると忍び廻りで權六がやつて来て何だと咎とがめるから、構わずうんく呻うなれ」

有「気味の悪い、そいつア御免を蒙こうむりやす、お金は欲しいが、彼奴あいつの側へ無闇に行くのは危険けんけんです、汝おのれは何だと押え付けられ、えくと打ぶたれりやア一ひとつ打うちで死にやすから」

大「そこが欺すに手なしだ、私は去年の九月松蔭いとまを暇いとまになりまして、行き所ゆれどころがございません、何うかして詫にまいりたいが中々主人は一旦言出すと肯ききません、あなたはお国からのお馴染だそうでございませぬが、貴方が詫わびごと言ことをして下すつたら否いやとは云いますまいから、何分お頼み申しますと、斯う手前泣付け」

有「然そうすりやア殺ころしませんか」

大「うん、只手前が悪い事をしたと云つて、うんく呻うなつていろ、何うして此処こゝへ来たと聞いたら、実はお下屋敷の方へ参られませんかから、此方こちらへ参つたのでございませぬ、旅で種い

ろく々難行苦行をして、川を渉り雪に遇い、霏に遭い風に梳り、実に難儀を致しましたのが  
身体へ当って、疝癰が起り、少しも歩けませんからお助け下さいましと云え、すると  
彼奴は正直だから本当に思つて自分の家へ連れて行つて、粥ぐらいは喰わしてくれるから、  
大きに有難う、お蔭さまで助かりましたと云うと、彼奴が屹度己の処へ詫に来る、もし詫  
に来たら、彼は使わん、怪しからん奴だ、これくの奴だと手前の悪作妄作を云つてぴつ  
たり断る」

有「へえ、それは詰ねえ話で、其様な奴なら打殺してしまつてんで…」

大「いやく大丈夫だ、まア聞け、とてもいかんくという中に、段々味いを附けて手前  
の善い所を云うんだ」

有「成程」

大「正直の人間……とも云えないが、働くことは宜く働き、口も八丁手も八丁ぐらいな事  
は云う、手前を殺さないように、そんなら己の家へ置くと云つたら幸い、若し世話が出来  
ん出て行けと云つたら仕方が有りませんと泣くく出れば、小遣いの一分や二分はくれる、  
それを貰つて出てしまつた所が元々じやアないか、もし又首尾好く權六の方へ手前を置い  
てくれたら、深更に權六の寢間へ踏込んで權六を殺してくれ、また其の前にも己の処へ詫

びに来る時にも、隙すきが有つたら、藪に倒れて、歩けない、担かついでやろうとか手てを引いてやろうとか云つた時にも隙すきがあつたら、懐ふちから合あいくち口くちを出して殺やっちまえ、首尾しゅび好く仕し遂おせれば、神原かみはらに話をして手前てまへを土分さむらいに取立とて、やろう、首尾しゅび好く殺して、ポンと逃にげてしまえ、十分に事成ことつた時には手前てまへを呼よんで三さん百石ひゃくいしのものは有あるのう。手前てまへが三さん百石ひゃくいしの侍さむらいになれる事だが、どうか工夫くわふをして行やつて見ろ、もし己おのれのいう事ことを胡ご乱らんと思おもうなら、書しよ附づをやつて置おいても宜よろしい、お互たがひに一つ鍋なべの飯いひを食くひ、爛らん徳とく利りが一本いっぽん限りかぎで茶碗ちやわん酒しよを半はん分ぶんずつ飲のんだ事こともある仲なだ、しくじらせる事ことも出来こえよ、旨よく行ゆけば此この上うへなしだ、出来こ損とねたところが元々もともとじゃアないか」

有「成程……行やつて見みましようが、彼あの野郎やを殺やすには何か刃物やいばが無なければいけませんな」

大「待まちてよ、人の目に立たたん証しやう拠きにならん手前てまへの持もちそんな短刀たんたうがある、さ、これをやろう、見掛みかは悪わるくつても中々なかなか切きれる、関せきの兼かね吉よしだ、やりそくなつてはいかんぞ」

有「へえ宜よろしゆうござえます」

大「闇やみの晩ばんが宜よろいの」

有「闇やみの晩ばん、へえ〜」

大「小遣をやるから手前今晚の中屋敷を出てしまえ」

有「へえ」

と金と短刀を受取つて、お馬場口から出て行きました。

三十

さて二の午も済みまして、二月の末になりまして、大きに暖気に相成りました。御舎弟紋之丞様は大した御病氣ではないが、如何にも癩が昂ぶつて居ります。夜詰の御家来も多勢附いて居ります、其の中には悪い家来が、間が宜くば毒殺をしようか、或は縁の下から忍び込んで、殺してしまう目論見があると知つて、忠義な御家来の注意で、お畳の中へ銅板を入れて置く事があります。是は將軍様のお居間には能くあることで、これは間違いの無いようにというのと、今一つは湿けて宜しくないから、二重に遊ばした方が宜しいと二重畳にして御寝なる事になる。屏風を建廻して、武張つたお方ゆえ近臣に勇ましい話をさせ昔の太閤とか、又眞田は斯う云う計略を致しました、楠は斯うだといふようなお話をすると、少しは紛れておいでございませう。悪い奴が多いから、庭前の



忍び廻りは遠山權六で、雨が降っても風が吹いても、嵐でも巡廻るのでございます。天氣の好い時にも草鞋を穿いて、お馬場口や藪の中を歩きます。袴の裾を端折って脊割羽織を着し、短かいのを差して手頃の棒を持って無提灯で、だんく御花壇の方から廻りまして、畠岸の方へついて参りますと、森の一叢ある一方は業平竹が一杯生えて居ります処で、

男「ウーン、ウーン」

と呻る声がありますから、權六は怪しんで透して見て、

權「何だ……呻ってるのは誰だ」

男「へえ、御免下さい、どうかお助けなすつて下さいまし」

權「誰だ……暗い藪の中で……」

男「へえ、疔癩が起りましたて歩くことが出来ません者で……」

權「誰だ……誰だ」

男「へえ、あなたは遠山様でございますか」

權「何うして己を……汝は屋敷の者か」

男「へえ、お屋敷の者でござえます」

權 「誰だ、判然分らん、待てく」

と懐から手丸提灯を取出し、懐中附木へ火を移して、蠟燭へ火を点して前へ差出し、

權 「誰だ」

男 「誠に暫く、御機嫌宜しゆう……だん／＼御出世でお目出度うござえます」

權 「誰だ」

有 「え、お下屋敷の松蔭大藏様の所に奉公して居りました、有助と申す中間でござえます」

權 「ウン然うか、碌に会った事も無い、それとも一度か二度会った事があるかも知れんが、忘れた、それにしても何うしたんだ」

有 「へえ、あなたは委しい事を御存じありますめえが、去年の九月少し不首尾な事がありまして、家へは置かねえとつて追出され、中々詫言をしても肯かねえと存じまして、友達を頼つて田舎へめえりましたところが、間の悪い時にはいけねえもんで、其の友達が災難で牢へ行くことになり、留守居をしながら家内を種々世話をしてやりましたが、借金もある家ですから漸々行立たなくなつて、居候どころじゃアござえませんか、出てくれろ

と云われるのは道理もつともと思つて出ましたが、他に親類身寄ほかもありませんから、詫言わごをして  
 歸りてえと思ひましても、主人は彼の氣象あだから、詫びたところが置く氣遣きづかいは有りませ  
 ん、種々考えましたが、あなたは確か美作のお国からのお馴染でいらつしやいますな」  
 權「然そうよ」

有「あなたに詫言わごをして戴おんこうと斯ごとう思ひやして、旅から考へて参りましたところが、中  
 々入れませんで、此の田の中をずぶ／＼入つて此処こゝへ這はい込みやしたが、久しく喰くわずにい  
 たんで腹すが空すいて堪たまりません、雪に當あたつたり雨に遭あつたりしたのが打うつて出て、疝癩せんが起  
 つて、つい呻うりました、何分にも恐入おそりますが何うか主人に詫言わごをお願い申まします」

權「むう、余程よほど悪い事をしたな、免ゆるすめえ、困こつたなア、なに物を喰くわねえ」

有「へえ、実は昨日きのうの正午ひるから喰くいません」

權「じゃア、ま肯きくか肯きかねえか分わらんけれど、話しても見ようし、お飯まんまは喰くわしてやろ  
 う」

有「有難ありがたうござえます」

權「屋敷やしきへつか／＼無沙汰むさたに入いつて呻うつたりししないで、門かどから入れば宜いいに……何なにしろ然そ  
 う泥どろだらけじゃア仕方しほうがねえから小屋こやへ来きい」

有「有難うござえます」

權「さ行け」

有「貴方ね、疝癩で腰が彎つって歩けません」

權「困った奴だ、何うかして歩け、此の棒を杖つけ」

有「へえ、有難うござえます」

權「それ確しつかりしろ」

有「へえ」

權「提灯を持って」

有「へえ」

と提灯の光ですかし見ると、去年見たよりも尚なお肥ふとりまして立派になり、肩幅が張たつて、何うも凜り々しい男で、怖いから、

有「へえ参ります」

權「さ行ゆけ」

有「旦那さま、誠に恐入りますが、片かた方くに杖を突ついても、此方こつちの腰が何分起たちませんか、左の手をお持ちなすつて」

權「世話アやかす奴だな、それ捉まれ」

と右の手を出して、

有「へえ有難う」

とひよろ／＼蹠けながら肩へ捉まる。

權「確かりしろい」

有「へえ」

と云いながら懐よりすらりと短刀を抜いて權六の肋を目懸けてプツ／＼突掛けると、早くも身を躲して、

權「此の野郎」

と其の手を押えました。手首を押えられて有助は身体が痺れて動けません力のある人はひどいもので。併し直に役所へ引いて行かずに、權六が自分の宅へ引いて来たは、何か深い了簡あつてのことゝ見えます。此のお話は暫く措きまして、是から信濃国の上田在中の条に居ります、渡邊祖五郎と姉の娘お竹で、お竹は大いびょう病で、田舎へ来ては勝手が變り、何かにつけて心配勝ち、左なきだに病身のお竹、遂に癩の病を引出しました。大した病気ではないが、キヤキヤと始終痛みます。祖五郎も心配致しています所へ手紙が届きま

した。披ひらいて見ますと、神原四郎治からの書状でございます。渡邊祖五郎殿という表書うわがき、只今のようにならぬに二日目に来るなどという訳にはまいりません。飛脚屋へ出しても十日二十日とおかはつかぐらいずつかゝります。読よみ下して見ると、

一簡奉啓上候余寒未難去候得共益々御壯健恐悦至極に奉存候然いっかんけいじょうそうろうよかんいまだざりがたくそうらえども

者当屋敷御上始め重役の銘々少しも異状無之御安意可被下候就ては昨年九月かれは者当屋敷御上始め重役の銘々少しも異状無之御安意可被下候就ては昨年九月

只今思だい出候ても誠に御氣の毒に心得候御尊父を切害致し候者は春部梅三郎と若江と

これくにて目下鴻ノ巢の宿屋に潜ひそみ居る由確かに聞込み候間早々彼の者を討果され

候えば親の仇あだを討たれ候廉を以て御帰参相叶あいかない候様共に尽力可仕候右の

者早々御取押え有つて可然候云々おんとりおさしかるべくそろしかく

と読よみ了り、飛立つ程の悦び、年若でありますから忠平や姉とも相談して出立する事に

なりましたが、姉は病気で立つことが出来ません。

祖「もし逃げられてはならん、あなたは後あとから続ついて、私一人わたくしひとりでまいります」

と忠平にも姉の事を呉々くれぐれ頼たのんで、鴻の巢を指して出立致しました。五日目に鴻の巢の岡本に着きましたが、一人旅ではございませぬが、お武家のことだから宿屋でも大切にしておいて、床の間のある座敷へ通しました。段々様子を見たが、手掛りもありません、宿屋の下

婢んなに聞いたが頓とんと分りません、

祖「はてな……こゝに隠れていると云うが、まさか人出入ひとではいりの多い座敷ざしきに隠れている氣遣きぢいはあるまい、此処こゝにいるに相違ちがひない」

と便所へ行つて様子を見廻みまわしたが、更に訳わけが分りません。

三十一

渡邊祖五郎わたべそごろうは頻しきりに様子を探りますが、少しも分りません、夜半よなかに客きやくが寢静ねしずまつてから廊下こりやうで小用こようを達たしながら唯見ただますと、垣根かきねの向うに小家こやが一軒いっけんありました。

祖「はてな……一つ庭にわのようだが」

と折戸おりどを開けて、

祖「彼あの家に隠れて居ゐりはしないか」

と手水場ちようずばの上草履うわぞうりを履はいて庭へ下おり、開戸ひらきを開け、折戸おりどの許もとへ佇たゞんで様子を見ますと、本ほんを読んでいる声が聞える。何処どこから手を出して掛金かんぬきを外すのか、但したゞ栓張しんばりを取つて宜いいか訳わけが分りません、脊伸せいのびをして上から搜さぐつて見ると、門かどがあるようだが、手が届

きません。やがて庭石を他から持つてまいりまして、手を伸べて門を右の方へ寄せて、ぐいと開けて中へ入り、まるで泥坊の始末でございます。縁側から密と覗いて見ますと、障子に人の影が映つて居ります。

祖「はてな、此方こつちにいるのは女のような声柄こえがらがいたす」

と密と障子の腰へ手をかけて細目に明けて、横手から覗いて見ますと、見違える氣遣いはない春部梅三郎なれば、

祖「あゝ有難い、神かみほとけ 仏のお引合せで、凶はからず親の仇かたきめぐに廻り逢つた」

と心得ましたから、飛上つて障子を引開け、中へ踏込んで身構えに及び、声を暴あらげ、祖「実父の仇覚悟かたきをしろ」

と叫びましたが、梅三郎の方では祖五郎が来ようとは思いませんから驚きました。

梅「いやこれはく〜思い掛ない……斯か様な処でお目にかゝり面目次第もない、まア何ういう事で此方こつちへ」

祖「汝なんじも立派な武士だから逃にげ隠れはいたすまい、何の遺恨あつて父織江を殺せつ害がいして屋敷を出た、殊ことに当家の娘と不義をいたせしは確かに証拠あつて知る、汝もの許もとへ若江から送つた艶書が其の場に取落してあつたが、よもや汝は人を殺すような人間でないと心得て居



つたる処、屋敷から通知によつて、確かに汝が父織江を討つて立退いたる事を承知致した、斯くなる上は逃隠れはいたすまいから、届ける処へ届けて尋常に勝負を致せ」

と詰かけました。

と詰かけました。

梅「御尤もでござる、まアくお心を静められよ、決して拙者逃隠れはいたしません、何も拙者が織江殿に意趣遺恨のある理由もなし、何で殺害をいたしましょうか、其の辺の処をお考え下さい、何者が左様な事を申したか、実に貴方へお目にかゝるのは面目次第もない心得違い、此処へ逃げてまいりまして、当家の世話になつて居ります程の身上の宜しくない拙者ゆえ、何と仰せられても、斯様な事もいたすであらうと、さ人をも殺すかとおぼしめ思召しましょうが、何者が……」

祖「エーイ黙れ、確か証拠あつて知る事だ、天命れ難い、さ直にまいれ」

梅「と何ういう事の……」

祖「何ういう事も何もない、父の屍骸の傍に汝の艶書を遺してあつたのが、汝の天命である」

梅「左様なれば拙者打明けて恥を申上げなければ成りませんが、お笑い下さるな、小姓若江と若氣の至りとは申しながら、二人ともに家出を致しましたは、昨年よの九月十一日の夜

で、あゝ濟まん事、旧来御恩を受けながら其のお屋敷を出るとは、誠に不忠不義のこと、存じたなれども、御拝領の品を失い、殊ことに若江も妊娠こいたし奉公が出来んと申すので、心得違いの至りではあるが、拙者若江を連出し、当家へまいって隠れて居りましたなれども、不義淫いたずら奔ゆうをして主家を立退しゆかくくらの不埒ふちちもの者では有りますけれども、お屋敷に対しては忠義を尽したい心得、拙者がお屋敷を逃去にげる時に……手に入りました一封の密書、それを御覧に入れますから、少々お控えを願います、決して逃隠いれは致しません、拙者も厄やつか介人いびとのこと、当家を騒がしては母が心配いたしますから、何卒どうぞお静かに此の密書を……如何いかにも若江から拙者へ遣つかわしましたところの文ふみを其の場所に落して置き、此の梅三郎に其の罪を負わする企たくみの密書、織江殿を殺せつが害がいいたした者はお屋敷内うち他にある考えであります」

祖「ム、一証拠とあらば見せろ」

梅「御覧下さい」

と例の手紙を出して祖五郎に渡しました。祖五郎はこれを受取り、披ひらいて見ましたところ、頓と文意が分りませんから、祖五郎は威丈いたけだか高たかになつて、

祖「黙れ、何だ斯か様のものを以て何の云い訳わけになる、これは何たることだ、綾とりにくが取と悪くい

とか絹を破るとか、或は綿を何うとかすると些とも分らん」

梅「いえ、拙者にも匿名書で其の意味が更に分りませんが、拙者の判断いたしまする所では、お屋敷の一大事と心得ます」

祖「それは何ういう訳」

梅「左様、絹木綿は綾操にくきものゆえ、今晚の中に引裂くという事は、御尊父様のお名を匿したのかと心得ます、渡邊織江の織というところの縁によつて、斯様な事を認いたのでも有りましょうか、此の花と申すは拙者を差した事で、今を春辺と咲くや此の花、という古歌に引掛けて、梅三郎の名を匿したので、拙者の文を其処へ取落して置けば、春部に罪を負わして後は、若江に心を懸ける者がお屋敷内にあると見えます、それを青茎の蕾の儘貴殿の許へ送るといふのは若江を取持いたす約束をいたした事か、好文木とは若殿様を指した言葉ではないかと存じますと申すは、お下屋敷を梅の御殿と申しますからので、梅の異名を好文木と申せば、若殿紋之丞様の事ではないかと存じます、お秋の方のお腹の菊之助様をお世嗣に仕ようと申す計策ではないかと存ずる、其の際此の密書を中ば引裂いて逃げましたところの松蔭大藏の下人有助と申す者が、此の密書を奪られてはと先頃按摩に姿を窺し、当家へ入込み、一夜拙者の寢室へ忍び込み、此の密書を盗まんと

致しましたところを取押えて棒縛りになし翌朝取調ぶる所存にて、物置へ打込んで置きましたら、いつか縄脱けをして逃去りましたから、確と調べようもござらんが、常磐というのは全く松蔭の匿名で大藏の家来有助が頼まれて尾久在へ持つてまいるとまでは調べました、またそれに千早殿と認めてあるのは、頓と分りませんが、多分神原の事ではござらんかと拙者考えます、お屋敷の内に斯様な悪人があつて御舎弟紋之丞様を亡い、妾腹の菊之助様を世に出そうという企みと知つては棄置かれん事、是は拙者の考えで容易に他人に話すべき事ではござらんが、御再考下さるよう……拙者は決して逃隠れはいたしません、お互に年来御高恩を蒙った主家の大事、証拠にもならんような事なれども、お国家老へ是からまいつて相談をして見とう存じます、是は貴方一人でも拙者一人でもならんから、兩人でまいり、御城代へお話をして御意見を伺おうと存じますが如何でござる」と段々云われると、予て神原や松蔭はお妾腹附で、どうも心懸が善くない奴と、父も頻りに心配いたしていたが、成程然うかも知れぬ、それでは棄置かれんと、それから二人が手紙を志す方へ送りました。祖五郎は又信州上田在中の条にいる姉の許へも手紙を送る。一度お国表へ行つて来るとのみ認め、別段細かい事は書きません。さて兩人は美作の国を指して発足いたしました。此方は入違つて祖五郎の跡を追掛けて、姉のお

竹が忠平を連れてまいるという、行違ゆきちがいに相成り、お竹が大難だいなんに出合いまするお話に移ります。

## 三十二

祖五郎は前席ぜんせきに述べました通り、春部梅三郎を親の敵かたきと思ひ詰めた疑いが晴れたのみならず、悪者わるものの密書の意味で、略ほぼお家を押領おうりようするものが有るに相違ないと分り、私の遺恨わたくしどころでない、実に主家しゅうかの大事だから、早くお国表へまいろうと云うので、急にふたり二人梅三郎と共にお国へ出立いたしましたが、其の時姉のお竹の方へは、これ／＼で梅三郎は全く父を殺害せつがいいたしましたものではない、お屋敷の一大事があつて、細かい事は申上げられんが、一度お国表へまいり、家老に面会して、どうかお家の安堵あんどになるようと、梅三郎も同道してお国表へ出立致しますが、事さえ極きまれば遠からず帰宅いたします、それまで落着いて中の条に待つていて下さい、必ずお案じ下さらぬようにとの手紙がまいりました。なれどもお竹は案じられる事で、竹「何卒どうぞして弟に会いたい、年齒としはもいかなない事であるから、また梅三郎に欺あざむかれて、途中

で不慮の事でも有つてはならん」

と種々心配いたしても、病中でございますから立つことも出来ず、忠平に介抱されまして、段々と月日が経つばかり、其の内に病氣も全快いたしました但其の後国表から一度便りがござりまして、秋までには帰る事になるから、落着いて居てくれという文面ではあります、其の内に六月も過ぎて七月になりました時に、身体も達者になり、こんな山の中に居たくもない、江戸へ帰つて出入町人の世話に成りたい、忠平の親父も案じているであらうから、岩吉の処へ行つて厄介になりたいと、常々喜六という家来に云つて居りました。然るに此の喜六が亡くなつた跡は、親戚ばかりで、別に恩を被せた人ではないから、氣詰りで中の条にも居られませんので、忠平と相談して中の条を出立し、追分沓掛輕井沢碓氷の峠も漸く越して、松枝の宿に泊りました、其の頃お大名のお着きがございまして、いゝ宿屋は充満でございます。お大名がお一方もお泊りが有りますと、小さい宿屋まで塞がるようなことで、お竹は甲州屋という小さい宿屋へ泊りまして、翌朝立とうと思ひますと、大雨で立つことも出来ず、其の内追々山水が出たので、道も悪し、板鼻の渡船も止り、其の他何処の渡船も止つたらうと云われ、仕方がなしに足を止めて居ります内に、心配致すのはいかんもので、船上忠平が風を引いたと云つて寝たのが

始りで、終つひに病が重くなりまして、どつと寝るような事になりました。お医者と云つても良いのはございませぬ、開ひらけん時分の事で、此こゝの宿しゆくでは第一等の医者だというのを宿やどの主あ人が頼たのんでくれましたが、まるで虚空蔵こくうざうさま様の化物ばけもの見たようなお医者さまで、脈みやくを診とつて薬と云つても、漢家かんかの事だから、草をむしつたような誠まことに効能きゑんの薄いようなものを吞くませる中うちに、終つひに息も絶え／＼になり、八月上旬はじめには声こゑも噎しやがれて思うように口も利きけんようになりました。親おやの仇あだでも討うとうという志のお竹でありますから、家来はなはにも甚はなはだ慈悲じひの  
あることで、

竹「あの忠平や」

忠「はい」

竹「お薬の二番が出来たから、お前我慢して嫌でもお服たべ、確しつかりして居ゐておくれでないと困まどるよ」

忠「有難ありがたう存ぞんじますがお嬢様わたくし私の病し気も此こゝの度たびは死病しびやうと自分も諦あきらめました、とても御丹誠ごたんじやうの甲斐かひはございませぬから、どうぞもお薬も服のまして下さいませぬ、もう二三日ちの内にちむずかしいかと思おもいます」

竹「お前そんなことを云いつておくれじゃア私が困まどるじゃアないか、祖五郎はお国くにへ行き、

喜六は死に、お前より他に頼みに思う者はなし、一人ではお屋敷へ帰ることも出来ず、江戸へ行つてもお屋敷近い処へ落着けない身の上になつて、お前を私は家来とは思わない、伯父とも親とも力に思う其のお前に死なれ、私一人此処に残つてはお前何うする事も出来ませんよ」

忠「有難う……勿体ないお言葉でございます、僅か御奉公致しまして、何程の勤めも致しませんのに、家来の私を親とも伯父とも思うという其のお言葉は、唯今日を眠りまして冥土へ参るにも好い土産でございます、併し以前とちがつて御零落なすつて、今斯う云うお身の上におなり遊ばしたかと存じますと、私は貴方のお身の上が案じられます、どうぞ私の亡い後は、他に入つしやる所もございません故、昨夜貴方が御看病疲れで能く眠つていらつしやる内に、私が認めて置きました手紙が此処にございます、親父は無筆でございますから、仮名で細かに書いて置きましたから、あなたが江戸へ入らつしやいまして、春木町の私の家へ行つて、親父にお会いなさいましたら、親父が貴方だけの事はどうかまア年は老つても達者な奴でございますから、お力になろうと存じます、此処から私が死ぬと云う手紙を出しますと、驚いて飛んで来ると云うような奴ゆえ、却つて親父に知らせない方が宜いと存じますから、何卒お嬢さん、はッはッ、私が死にましたら此処の寺へ投込みに



なすつて道中も物騒ぶつそうでございますから、お気をお付けなすつて、あなたは江戸へ入いらつしやいまして親父の岩吉にお頼みなすつて下さいまし」

竹「あい、それやア承知をしました、もし其様そんなことでもあると私はまア何うしたら宜よろかろう、お前が死んでは何うする事も出来ませんよ、何うか癒なほるようにね、病は気だといいうから、忠平確しつかりしておくれよ」

忠「いえ何うも此度こんどはむずかしゆうございます」

と是こゝが主しゆうじゆう従じゆうの別れと思おもいましたからお竹の手を執とつて、

忠「長らく御恩になりました」

と見上げる眼なみだに泪なみだを溜ためて居ゐりますから、耐こらえかねてお竹も、

竹「わア」

と枕元へ泣伏なみだしました。此こゝの家の息子うちが誠まことに親切しんせつに時々ときどき諸ほう方がへ往いつちやア、旨旨い物ものと云いつて田舎いんげの事ことだから碌ろくな物ものありませんが、喰くい物ものを見附みづけて来きては病人びやうじんに遣やります。宿屋しゆくやの親父おやは五平ごへいと云いつて、年五十九ごじゅうきゅうで、江戸えどを喰く詰め、甲州かうしゅうあたりへ行いつて放蕩はうたうをやつた人間にんげんでござごいます。悴せがれは此こゝの地ちで生おいたつた者ものゆえ質朴しつぱくなところがああります。

悴「父とつさま、今帰いまつたよ」

五「何処へ行つてた」

悴「なに医者の処へ薬を取りに行つて聞いたが、医者殿が彼の病人はむずかしいと云つただ」

五「困つたのう、二人旅だから泊めたけれども、男の方は亭主だか何だか分らねえが、彼がお前死んでしまえば、跡へ残るのは彼の小娘だ、長え間これ泊めて置いたから、病人の中へ宿賃の催促もされねえから、仕方なしに遠慮していたけれど、医者様の薬札から宿賃や何かまで、彼の男が亡くなつてしまつた日にやア、誠に困る、身ぐるみ脱だつて、碌な荷物も無えようだから、宿賃の出所があるめえと思つて、誠に心配だ、とんだ厄介者に泊られて、死なれちやア困るなア」

悴「それに就て父に相談打とうと思つていたが、私だつて今年二十五に成るで、何日まで早四郎独身で居ては宜くねえ何様者でも破鍋に綴蓋というから、早く女房を持てと友達が云つてくれるだ、乃で女房を貰おうと思うが、媒妁が入つて他家から娘子を貰うというと、事が臆劫になつていかねえから、段々話し聞けば、あの男が死んでしまつと、私は年が行かないで頼る処もない身の上だ、浪人者で誠に心細いだと云つちやア、彼の娘子が泣くだね」

五「浪人者だと…うん」

早「どうせ何処どこから貰うのも同じ事だから、彼の男がおつ死ちんだら、彼の娘を私わしの女房に貰もれてえだ、裸じやアあろうけれども、他人頼ひとたのみの世話がねえので、直すぐにずる／＼べつたりに嫁よめつ子こに来きようかと思う、彼あれを貰もつてくんねえか父ちやん」

五「馬鹿野郎、だから仕様がねえと云うのだ、これ、父ちやんはな、江戸の深川で生れて、腹はらい一杯いっぱい悪い事をして喰く詰めつちまい、甲州へ行つて、何うやら斯うやら金が出来る様になつたが、詰めり悪い足が有つたんで、此処こゝへ逃げて来た時に、縁があつて手前てめえの死んだ母おふく親ろと夫婦になつて、手前と云う子も出来て、甲州屋という、ま看板を掛けて半旅はんりょ籠かご木ぎ賃ちん宿やど同様な事をして、何うやら斯うやら暮している事は皆みんななも知っている、手前は此方こつちで生立おいたつて何も世間の事は知らねえが、家うちに財産かねは無くとも、旅籠という看板で是だけの構かまえをしているから、それ程貧乏だと思ふ人はねえ何処どこから嫁を貰つても筆筒たんすの一個ひとつや長持ひとさおの一棹ひとさおぐらい附屬くついて来る、器量きりやうの悪いのを貰もえば田地でんじぐらい持つて来るのは当あたり然えだ、面つらがのつぺりくつぺりして居るつたつて、あんな素性わけも分らねえ者を無闇むげんに引張ひっぱ込りこんでしまつて何うするだ、医者様の薬礼やくれいまで己しよが負おわなければなんねえ」

早「それは然そうよ、それは然そうだけれど、他家ほかから嫁よめ子こを貰もやア田地でんじが附ついて来る、金

が附いて来るたつて、自宅へ呼ばつて、後で己が気に適らねえば仕様がねえ訳だ、だから己が気に適つたのを貰やア家も治まつて行くと、夫婦仲せえ宜くば宜いじやアねえか、貰つてくんろよ」

五「何を馬鹿アいう手前が近頃種々な物を買つて詰らねえ無駄銭を使うと思つた、あんな者が貰えるか」

早「何もそんなに腹ア立てねえでも宜い相談打つだ」

五「相談だつて手前は二十四五にも成りやアがつて、ぶらく遊んで、親の脛ばかり咬つていやアがる、親の脛を咬っている内は親の自由だ、手前の勝手に気に適つた女が貰えるか」

早「何ぞという脛咬るくつてえが、父の脛ばかりは咬つていねえ、是でもお客がえら有れば種々な手伝をして、洗足持つてこ、草鞋を脱がして、汚え物を手に受けて、湯う沸して脊中を流してやつたり、皆家の為と思つてしているだ、脛咬りだくつてえのは止してくんろえ」

五「えゝい喧しいやい」

と流石に鶴の一声で早四郎も黙つてしまいました。此の甲州屋には始終極つた奉公人

と申す者は居りません、其の晩の都合によつて、客が多ければ村の婆さんだの、宿外  
 れの女などを雇います。七十ばかりになる腰の曲つた婆さんが

婆「はい、御免なせえまし」

五「おい婆さん大きに御苦労よ、お前又晩に来てくんろよ、客の泊りも無いが、又晩には  
 遊んで居るだろうから、まあなよ」

婆「はい、あの只今ね彼処のそれ二人連の病人の処へめえりました」

五「おゝ、お前が行つてくれねえと、先方でも困るんだ」

婆「それが年のいかない娘一人で看病するだから、病人は男だし、手水に行くたつ  
 て大騒ぎで、誠に可愛想でがんですが、只た今おつ死にましたよ」

五「え、死んだと……困つたなアそれ見ろ、だから云わねえ事じやアねえ、何様な様子だ」  
 婆「何様にも何にも娘子が声をあげて泣いてるだよ、あんた余り泣きなすつて身体へ障  
 るとなんねえから、泣かねえが宜うがंसよ、諦めねえば仕様がねえと云うと、私は彼に  
 死なれると、年もいかないで往く処も無え、誠に心細うがंस、あゝ何うすべいと泣くだ  
 ね、誠に気の毒な訳で」

五「はアー困つたもんだな」

早「私え、ちよつくら行つて来よう」

五「なに手前は行かなくつても宜い」

早「行かなくつても宜いたつて、悔みぐらいに行つたつて宜かんべい」

五「えゝい、何ぞというと彼の娘の処へ計り行きたがりやアがる、勝手にしろ」

と大かすでございましてから早四郎は頬を膨らせて起つて行く。五平は直にお竹の座敷へ参りまして。

五「はい、御免下せえ」

と破れ障子を開けて縁側から声を掛けます。

竹「此方へお入んなさいまし、おやゝ宿の御亭主さん」

五「はい、只今婆アから承わりまして、誠に恟りいたしましたがお連さまは御丹誠甲斐もない事で、お死去になりましたと申す事で」

竹「有難う、長い間種々お世話になりました、殊に御子息が朝晩見舞つておくれで、親切にして下さるから何ぞお礼をしたいと思つて居ります、病人も誠に真実なお方だと悦んで居りました、私も丹誠が届くならばと思いましたが、定まる命数でございします、只今亡くなりまして、誠に不憫な事を致しました」

五「いやどうも、嘸お力落しでございましょう、誠にお気の毒な事でございませ、時に、あゝそれでもつて伺いますが、お死去りなすつた此の死骸は、江戸へおいでなさるにしても、信州へお送りになるにしても、死骸を脊負つて行く訳にもいかなから此の村へ葬るより他に仕方はございませまいが、火葬にでもなすつて、骨を持って入らつしやいますか、其の辺の処を伺つて置きたいもので」

竹「はい、何処と云つて知己もございませんから、どうか火葬にして此の村へ葬り、骨だけを持ってまいりとう存じますが、御覽の通り是からは私一人でございませから、何かと世話のないように髪の毛だけでも江戸の親元へ参れば宜しゆうございませから、殊に当人は火葬でも土葬でも宜いと遺言をして死去りましたから、どうぞ御近処のお寺へお葬り下さるよう願いたいもので」

五「左様でございますか、お泊り掛のお方で、何処の何という確かりとした何か証がないと、お寺も中々厳しくつて請取りませんが、私どもの親類か縁類の人が此方へ来て、死んだような話にして、どうか頼んで見ましよう」

と此の話の中にいつか悴の早四郎が後へまいりまして、早「なに然うしねえでも宜い、此の裏手の洪願寺さまの和尚様は心安くするから頼んで

上げよう、まことに手軽な和尚様で、中々道楽坊主だよ、以前は叩ちやんぎり鉦さばを叩いて飴を売  
つてた道楽者さ、銭が無ければ宜えい、たゞ埋めて遣やんべえなど、いう捌さばけた坊様だ、其の  
代りお経なんどは読めねえ様子だが、銭ぜにかね金の少しぐれえ入いるような事があつて困るなら、  
沢山はねえが些ちつとべいなら己が出して遣るべえ」

五「何だ、これ、お客様に失礼な、お前まえがお客様に金を出して上げるとは何だ、そんな  
馬鹿な事をいうな」

早「父ちやんは何ぞという和小言をいうが、無ければ出してくれべえと云うだから宜よかつぺえじ  
やアねえか」

五「其そん様な事ア何うでも宜いいから、早く洪願寺へ行つて願つて来い」

是から息子がお寺へ行つて和尚に頼みました。早速得心でございますから、急に人を頼  
んで、早四郎も手伝つて穴を掘り、真実にくれく働いて居ります。丁度其の晩の事でご  
ざいますが、宿屋の主人あるじが、

五「へえ娘ねえさん、え、今晚の内にお葬りになりますように」

竹「はい、少し早いようでございますが、何分宜しゆう……多分に手のかかりませんよう  
に」



五「宜しゆうございます、其の積りに致しました、何も多勢和尚様方を頼むじやアなし、お手軽になすつた方が、御道中ゆえ宜しゆうございましょう」

と親切らしく主人が其の晩の中に、自分も随いて行つて野辺送りを致してしまいました。

## 三十三

其の晩に脱出して、彼の早四郎という宿屋の忪が、馬子の久藏という者の処へ訪ねて参り、

早「おい、トン／＼／＼久藏眠つたかな、トン／＼／＼眠つたかえ。トン／＼／＼」

余りひどく表を敲くから、側の馬小屋に繋いでありました馬が驚いて、ヒーン、バタ／＼と羽目を蹴る。

早「あれまア、馬めえ暴れやアがる、久藏眠つたかえ……あれまア締りのねえ戸だ、叩いてるより開けて入る方が宜い、酔はれえになつて仰向にぶっくり反つて寝ついていやアがる、お／＼顔に虻が附着いて居るのに痛くねえか、起ろ／＼」

久「あは……眠つたいに、まどうもアハー（あくび）むにや／＼／＼、や、こりやア甲

州屋の早四郎か、大層遅く来たなア」

早「うん、少し相談打ちに来たアだから目え覚せや」

久「今日は沓掛まで行つて峠え越して、帰りに友達に逢つて、坂本の宿はずれで一盃やつて、よっぱれえになつて帰つて来たが、馬の下湯を浴わねえで転轍えつて寝ちまつた、眠たくつてなんねえ、何だつて今時分出掛けて来た」

早「ま、眼え覚せや、覚せてえに」

久「アハー」

早「大え欠伸いするなア」

久「何だ」

早「他のことでもねえが、此間汝かに話をしたが、己家の客人が病氣になつて、娘が一人附いているだ、好い女子よ」

久「話し聞いたつけ、好い女子で、汝がねらつてゐるつて、それが何うしただ」

早「その連の病人が死んだだ」

久「フーム気の毒だのう」

早「就ては彼の娘を己の嫁に貰えてえと思つて、段々手なずけた処が、当人もまんざらで

も無えようで、謎をかけるだ、此の病人が死んでしまえば、行 処もねえ心細い身の上でございますと云うから、親父に話をした処が、親父は慾張つてるから其様な者を貰つて何うすると、頓と相手になんねえから、汝が己ア親父に会つて話を打つて、彼の娘を貰うようにしちやアくんめえか」

久「然うさなア、どうもこれはお前ん処の父さまという人は中々道楽をぶつて、他人のいう事ア肯かねえ人だよ、此の前荷い馬へ打積んで、お前ん処の居先で話をしていると、父さまが入り口へ駄荷い置いて氣の利かねえ馬方だつて、突 転ばして打 転ばされたが、中々強い人で、話いしたところが父さまの氣に入らねえば駄目だよ、アハー」

早「欠伸い止せよ……これは少しだがの、汝え何ぞ買つて来るだが、夜更けで何にもねえから、此錢で一盃飲んでくんろ」

久「氣の毒だのう、こんなに差し吊べたのを一本くれたか、氣の毒だな、こんなに心配されちやア済まねえ、此間あの馬十に聞いたゞが、どうも全体父さまが宜くねえ、息子が今これ壯んで、丁度嫁を娶つて宜い時分だに、男振も好し何処からでも嫁は来るだが、何故嫁を娶つてくれねえかと、父さまを悪く云つて、お前の方を皆な誉めている、男が好いから女の方から来るだろう」

早「来るだろうって……どうも……親父が相談ぶたねえから駄目だ」

久「相談ぶたねえからって、お前は男が好いから娘を引張込んで、優しげに話をして、色事になっちまえ、色事になつて何処かへ突走れ……己の家へ逃げて来う、其の上で己が行つて、父さまに会つてよ、お前も氣に入るめえが、若え同志で斯ういう訳になつて、おなご女子を連れて己の家へ来て見れば、家も治らねえ訳で、是も前の世に定まつた縁だと思つて、あんな余り喧ましく云わねえで、己が媒妁をするから、あれ彼をよめっこ媳子にして遣つてくろえ、家に置くのが否いやなら、別に世帯しやたいを持たしても宜えいじやアねえかという話になれば、仕方がねえと親父も諦めべえ、色事になれや」

早「成れたつて……成る手がゝりがねえ」

久「女に何とか云つて見ろ」

早「間まが悪くつて云えねえ、客人だから、それに真面目な人だ、己が座敷へ入ると起上つて、誠に長く厄介になつて、お前には分けて世話になつて、はア氣の毒だなんて、中々お侍さむらいさんの娘おつかねだけに怖おそえように、凛りん々しい人だよ」

久「口で云い難にくければ文ふみを書いてやれ、文をよ、袂たもとの中へ放り込むとか、枕の間へ挟はさむとかして置けい、娘あまっこ子が読んで見て、宿屋の息子さんが然そういう心なれば嬉しいじやアな

いか、どうせ行廻ゆきどじがないから、彼あの人と夫婦になりてえと、先方さきで望んでいたら何うする」  
 早「何だか知んねえが、それはむずかしそうだ」

久「そんな事を云わずにやって見ろ」

早「ところが私わしは文ふみい書いた事がねえから、汝われ書いてくんろ、汝は鎮守様の地口じぐちあんどう行灯いを  
 捲こしえたが巧うめえよ、それ何とかいう地口が有ったつけ、そうく、案山子かかしのところにか居  
 るのよ」

久「然そうよ、己おらがやったつけ、何か己われえ……然たゞうさ通常たゞの文をやっても、これ面白くねえ  
 から、何か尽づくし文もんでやりてえもんだなア」

早「尽し文てえのは」

久「尽しもんてえのは、ま花の時なれば花尽しよ、それからま山尽しだとか、獸類けだもの尽し

だとかいう尽しもんで贈やりてえなア」

早「それア宜えいな、何なんういう塩梅あんべいに」

久「今時いまだから何なんだえ虫尽しか何なんかでやれば宜えいな」

早「一つ捲こしえてくんろよ」

久「紙かみがあるけえ」

早「紙は持つている」

久「其処そこに帳面を付ける矢立の巨えでけのがあるから、茶でも打つ垂たして書けよ、まだ茶ア汲んで上げねえが、其処に茶碗があるから勝手に汲んで飲めよ、虫尽しだな、その女子おなごが此の文ふみを見て、あゝ斯ういう文句を拵こしらえる人かえ、それじゃアと惚れるように書かねえばなんねえな」

早「だから何ういう塩梅あんべいだ」

久「ま其処へ一つ覚おぼえと書け」

早「覚……おかしいな」

久「おかしい事があるものか、覚えさせるのだから、一つ虫尽しにて書記かきしるし※よ」

早「一虫尽しにて書記かきしるし※」

久「えゝ女子おんなの綺麗きれえな所を見せなくちやアなんねえ……綺麗な虫は……ア玉虫たまむしが宜えい、女の美しいのを女郎屋じよらやなどでは好い玉だてえから、玉虫のようなお前ひ様をひと目見るより、いなご、ばつたではないが、飛とびつかえるほどに思そう候うらうと書け」

早「成程いなご、ばつたではないが、飛とびつかえるように思そう候うらう」

久「親父やかまの厳かましいところを入れてえな、親父はガチャ／＼虫むしにてやかましく、と」

早「成程……やかましく」

久「お前の傍そばに芋虫いもむしのごろ／＼してはいられねえが、え……みのむし 簀虫すいむしを着き草鞋虫わらじむしを着はき、と」

早「何の事だえ」

久「汝われが野らへ行く時にア、簀そろを着たり草鞋わらじを穿いたりするだから」

早「成程……草鞋虫わらじむしを穿はきい」

久「かまぎつちよを腰こしに差し、野らへ出てもお前様の事は片時忘れるしま蛇いまたまもなく」

早「成程……しま蛇いまたまもなく」

久「え、お前様の姿すがたが赤蜻蛉あかとんぼの眼まなこの先へちらくいたし候さう」

早「何ういう訳だ」

久「蜻蛉とんぼうの出る時分に野良のらへ出て見ろ、赤蜻蛉あかとんぼが彼方あつちへ往いつたり此方こつちへ往いつたり、目まぐらしくつて歩あけねえからよ」

早「成程……ちらくいたし候さう」

久「え、と、待てよ……お前と夫婦みょうとになるなれば、私わしは表おもてで馬追むまおい虫むし、お前は内うちで機はたお織虫りむしよ」

早「成程……私は馬を曳いて、女子が機を織るだな」

久「え、股へ蛭の吸付いたと同様お前の側を離れ申さず候、と情合だから書けよ」

早「成程……お前の側を離れ申さず候か、成程情合だね」

久「え、虻蚊馬蠅屁放虫」

早「虻蚊馬蠅屁放虫」

久「取着かれたら因果、晚げえ私を松虫なら」

早「……晚げえ私を松虫なら」

久「藪蚊のように寢床まで飛んでめえり」

早「藪蚊のように寢床まで飛んでめえり」

久「直様思いのうおつ晴し候、巴蛇の長文句蠅々※」

早「成程是りやア宜いなア」

久「是じゃア屹度女子がお前に惚れるだ、これを知れねえように袂の中へでも投り込むだ

よ」

と云われ、早四郎は馬鹿な奴ですから、右の手紙を書いて貰って宅へ帰り、そつとお竹



の袂へ投込んで置きましたが、開けて見たつて色文いろぶみと思う気遣いきづかはない。翌朝よくあさになり  
ますと宿屋の主人あるじが、

五「お早うございます」

竹「はい、昨夜は段々有難う」

五「え、段々お疲れさま………続ついてお淋さみしい事でございましょう」

竹「有難う」

五「え、お嬢さん、誠まことに一国いっこくな事を申すようですが、私わたくしは一体斯ごとういう正直うまればつな性質しやうで、

私わたしどもはこれ本陣ほんじんだとか脇本陣わきほんじんだとか名の有る宿屋ではございせん、ほんの

木賃宿もぢしゆくの毛けの生なえた半旅籠はんりゆう同様どうがうで、あなた方が泊とつたところが、さしてお荷物にものも無し、お

連れんの男衆おとこは御亭主ごていしゅかお兄あにいさま様さまか存ぞんじませんが、お死去かくれになつてあなた一人残り、一人旅

は極ごく厳げんましゆうございまして、え、横よこ川かわの関所とこの所とこも貴方あなたはお手形てがたが有りまして、越

えて入いらつしやいましたから、私わたしどもでも安心あんしんはして居ゐりますが、何なにしろ御病氣ごびやうきの中なかだか

ら、毎朝まいあさ宿賃しゆくぢんを頂戴ちやうたいいたす筈はずですが、それも御遠慮ごえんりよ申まして、医者いしやの薬礼やくれいお買物かひものの立替たがひえ、

何なにや彼かやの御勘定ごかんじやうが余程あまた溜たまつて居ゐります、それも長旅ながりの事で、無いと仰おほしやれば仕方しほうが

無いから、へえと云いうだけの事で、宿屋しゆくやも一晩いちばん泊とれば安いやすいもので、長く泊とれば此こんな高い

ものはありません、就ては一國なことを申すようですが、泊つて入らつしやるよりお立ちになった方がお徳だろうし、私も其の方が仕合せで、どうか一先ず立つて戴きたいもので」竹「はい、私はさつぱり何事も家来どもに任して置きました内に病氣附きましたので、つい宿賃も差上げることが失念致した理由でもございませぬが、病人にかまけて大きに遅うなりました、嘸かし御心配で、胡乱の者と思召すかは知りませぬが、宿賃ぐらいな金子は有るかも知れませぬ、直に出立いたしますから、早々御勘定をして下さい、何の位あれば宜いか取つて下さいまし」

とお屋敷育ちで可なりの高を取りました人のお嬢さんで、宿屋の亭主風情に見くびられたと思つての腹立ちか、懐中からずる／＼と納戸縮緬の少し汚れた胴巻を取出し、汚れた紙に包んだ塊を見ると、おおよそ七八十両も有りはしないかと思うくらいな大きさだから、五平は驚きました。泊つた時の身装も余り好くなし、さして、着換の着物もないようでありました、是れは忠平が、年のいかなない娘を連れて歩くのだから、目立たんように態と汚れた衣類に致しまして、旅※れの姿で、町人体にして泊り込みましたので、五平は案外ですから驚きました。

竹「どうか此の位あれば大概払いは出来ようかと思ひますが、書付を持って来て下さい」

と云われたので、流石さすがの五平も少し気の毒になりましたが、

五「はい、え、お嬢さま、誠に私わたくしはどうも申訳のない事をいたしました、あなた御立腹でございましたようが、あなたを私が見くびった訳でもなんでもない、実はその貴方にお費りかひのかゝらんように種々いろくと心配致しまして、馬子や昇夫かじかきを雇いまして宿屋の方で値切つて、なるだけ廉やすくいたさせるのが宿屋の亭主の当あたりまえ然さでへえ見下げたと思おぼしめ召めしては恐入ります、只今御勘定を致します、へい、どうぞ御免なすつて」

と帳場へまいりまして、

五「あゝ大層金子かねを持つている、彼あれは何者か知らん」

と暫しばらくお竹の身の上を考えて居りましたが、別に考えも附きません。医者いしやの薬礼から旅籠料、何や彼かやを残らず書付にいたして持つて来ましたが、一ヶ月居つたところで僅かな事ことでございます。お竹は例の胴巻から金を出して勘定をいたし、そこへ手廻りを取片附け、明日あすは早く立とうと昇夫かじやや何かを頼んで置きました。其の晩にそつと例の早四郎が忍んで来まして、

早「お客さん……お客さん……眠ねむつたかね、お客さん眠つたかね」

竹「はい、何方どなた」

早「へえ私わしでがすよ」

竹「おやく御子息さん、さ此方こちらへ……まだ眠りねむはいたしません、蚊帳かやの中へ入りましたよ」

早「え、嘸さぞまア力に思う人がおつ死ちんで、あんたは淋さみしかろうと思つてね、私わしも誠に案じられて心配しんぱいしてえますよ」

竹「段々お前さんのお世話になつて、何なんぞお礼がしたいと思つてもお礼をする事も出来ません」

早「先刻さつき親父とけが処あんたえ貴方が金え包んで種々いろく厄介やくわいになつてるからつて、別に私わしが方へも金をくれたが、そんなに心配しんぱいしねえでも宜ええ、何も金が貰もらいてえつて世話アしたんでねえから」

竹「それはお前の御親切は存じて居ります誠に有難う」

早「あのー昨夜よんべねえ、私わしが貴方あんたの袂たもとの中へ打投ぶつぽり込んだものを貴方あんた披ひらいて見たかねえ」

竹「何を……お前さんが……」

早「あなたの袂たもとの中へ書なけたものを私わしが投ほうり込んだ事があるだ」

竹「何どん様な書ないたもの」

早「何様どんなたつて、丹誠たんじやうして心のたけを書いただが、あんたの袂たもとに書いたものが有つたんべ  
い」

竹「私は少しも知らないので、何か無駄書むだがきの流行唄はやりうたかと思ひましたから、丸めて打棄うつちや  
つてしまいました」

早「あれ駄目だね、流行唄はやりうたじゃアねえ、尽つくしもんだよ、艶書いろぶみだよ、丸めて打棄うつちや  
つては仕様がねえ、人が種々いろく丹誠たんじやうしたのによ」

と大きに失望をいたして鬱ふさいでいます。

### 三十四

お竹は漸々ようくに其の様子を察して、可笑おかしゆうは思ひましたが、また気の毒でもありません  
からにつこり笑つて、

竹「それは誠にお気の毒な事をしましたね」

早「お気の毒ひとりつたつて、まア困つたな、どうも私わしはな……実アな、まア貴方あんたも斯うやつて  
独身ひとりみで跡へ残つて淋さびしかろうと思ひ私も独身ひとりみでいるもんだから、友達が汝われえ早く女房を

貰つたら宜かろうなんてつて嬲られるだ、それに就いては彼の優気なお嬢さんは、身寄頼りもねえ人だから、病人が死なば己がの女房に貰いてえと友達に喋つただ、馬十てえ奴と久藏てえ奴が、ぽつくと此れを方々へ触れたんだから、忽ち宿中へ広まつただね

竹「そんな事お前さん云立てをしておくれじやア誠に困ります」

早「困るたつて私もしたくねえが、冗談を云つたのが広まつたのだから、今じやア是非ともお前さんを私の女房にしねえば、世間へ対して顔向が出来ねえから、友達に話をしたら、親父が厳ましくつて仕様がねえけんども、貴方と己と怪しな仲になつちまえば、友達が何うでも話をして、親父に得心のうさせる、どうせ親父は年い老つてるから先へおつ死んでしまふ、然うすれば此の家は皆己のもんだ、貴方が私の女房に成つてくれれば、誠に嬉しのだが、今夜同志に此の座敷で眠つても宜かんべえ」

竹「怪しからん事をお云いだね、お前はま私を何だと思いだ、優しいことを云つていれれば好い氣になつて、お前私が此処へ泊つていれば、家の客じやアないか、其の客に対して宿屋の忤が然んな無礼なことを云つて済みますか、浪人して今は見る影もない尾羽打枯した身の上でも、お前たちのようなはしたない下郎を亭主に持つような身の上ではありませ

ん、無礼なことをお云いでない、彼方へ行きなさい」

早「魂消たね……下郎え……此の狸女め……そんだら宜え、そうお前の方で云やア是まで親父の眼顔を忍んで銭を使って、お前の死んだ仏の事を丹誠した、また尽しものを書いて貰うにも四百と五百の銭を持つて書いて貰ったわけだ、それを下郎だ、身分が違ふと云えば、私も是までになつて、あなたに其んなことを云われ、ば友達へ顔向が出来ねえから、意気張ずくになりやア敵同志だ、可愛さ余つて憎さが百倍、お前の帰りを待伏して、跡を追かけて鉄砲で打殺す氣になつた時には、とても仕様がねえ、然うなつたら是までの命だと諦めてくんろ」

竹「あらまア、そんな事を云つて困るじやアないか、敵同志だの鉄砲で打つのと云つて」

早「私は下郎さ、お前はお侍の娘だろう、併し然う口穢く云われ、ば、私だつて快くねえから、遺恨に思つてお前を鉄砲で打殺す心になつたら何うするだえ」

竹「困るね、だけでも私はお前に身を任せる事は何うしても出来ない身分だもの」

早「出来ないたつて、病人が死んでしまえば使りのない者で困るといふから、家へ置くべいと思つて、人に話をしたのが始まりだよ、どうも話が出来ねえば出来ねえで宜いから覺悟をしろ、親父が厳ましくつて家にいたつて駄目だから、やるだけの事をやつちまう、棒

鼻うばなあたりへ待伏せて鉄砲で打ぶつてしまふから然そう思いなせえ」

竹「まアお待ちなさい」

と止めましたのは、此こ様な馬鹿な奴に遇あつては仕様がな、鉄砲で打うちかねない奴なれど、斯かる下郎かに身を任せる事は勿論出来ず、併しか世に馬鹿程怖い者はありませんから、是は欺だますに若しくはない、今の中うちは心を宥なめて、ほとぼりの脱ぬけた時分に立とうと心を決しました。

竹「あの斯かうしておくれな私わたしのようなものをそれ程思おもつてくれて、誠に嬉しいけれども、考かんえても御覽ごらん、たとえ家来けらいでも、あゝやつて死し去なつてまだ七日も経たたん内に、仏ぶつへ対たいして其そのんな事の出来るものでもないじやアないか」

早はや「うん、それは然そうだね、七日の間は陰いん服ふくと云いつて田舎いんなどではえらやかかましくつて、蜻蛉せいてい一つ鳥とり一つ捕とることが出来ねえ訳わけだから、然そういう事ことがある」

竹「だからさ七日でも済すめば、親御おやも得心おんのううえでお話わになるまいものでもないから、今夜けだけの処ところは歸かえつておくれ」

早はや「然そうお前まえが得心おんなれば歸かえる、田舎いんの女子おんなのように直すぐ挨拶あいさつをする訳わけには往いくめえが、お前まえのように否いやだといいうから腹はらア立たつたただい、そんなら七日が済すんで、七日の晩ばんげえに來き



るから、其の積りで得心して下さいよ」

とにこくくして、自分一人承知して帰つてしまいました。斯様な始末ですからお竹は翌朝立つことが出来ません、既に頼んで置いた昇夫も何も断つて、荷物も他所へ隠してしまいました。主人の五平は、

五「お早うございます、お嬢さま、え、只今洪願寺の和尚様が前をお通りになりましたから、今日お立ちになると申しましたら、和尚様の言いなさるには、それは情ない事だ、遠い国へ来て、御兄弟だか御親類だか知らないが、死人を葬り放しにしてお立ちなさるのは情ない、せめて七日の速夜でも済ましてお立ちになったら宜かろうに、余りと云えば情ない、それでは仏も浮まれまいとおっしゃるから、私も氣になつてまいりました、長くいらつしやつたお客様だ、何は無くとも精進物で御膳でもこしらえ、へ、へ、へ、宅へ働きにまいります、媼達へお飯ア喰わして、和尚様を呼んで、お経でも上げてお寺参りでもして、それから貴方七日を済まして立つて下されば、私も誠に快うございます、また貴方様も仏様のおためにもなりましようから、どうか七日を済ましてお立ちを」

竹「成程私も其の辺は少しも心付きませんでした、大きに左様で、それじゃア御厄介序に七日まで置いて下さいますか」

というので七日の間泊ることになりました。他に用は無いから、毎日洪願寺へまいり、夜は回向えっこうをしては寝ます。宵よいの中に早四郎うちが来て種々いろくなことをいう。忌いやだが仕方がないから欺だまかしては帰してしまふ。七日までくと云い延べている中に早く六日経ちました。丁度六日目に美濃なんせんじの南泉寺なんせんじの末寺まつじで、谷中の随ずい応おう山さん南泉寺なんせんじの徒弟とだで、名を宗そう達たつと申し、十六才とくざいの時に京都きょうとの東福寺とうふくじへまいり、修業しゆぎやうをして段々だんぜん行脚あんぎやをして、美濃路あたり辺へ廻まわつて帰つて来たので、まだ年は三十四五にて色白いろしろにして大柄おほびらで、眉毛まゆげのふつさりと濃い、鼻筋はなぢの通りました品の好よい、鼠無地ねずみなしに麻あしの衣ぎを着、鼠ねずみの頭陀ずだを掛け、白しろの甲こう掛がけ脚きゃ半はん、網代あじろの深い三度笠さんだがさを手に提たげ、小さな鋼鉄くろがねの如意にぎを持ちまして隣座敷りんざしきへ泊つた和尚わしやう様が、お湯ゆに入り、夕飯ゆふはんを喰たべて夜よに入いりますと、禅宗坊主ぜんじゆうぼうしゆだからちやんと勤こめだけの看經かんきんを致いたし、それから平生へいぜい信心しんじんをいたす神さまを拜まがんでゐる。何なにと思おもつたかお竹たけは襖ふすまを開ひらけて、

竹「御免なさいまし」

僧「はい、何方どこなたじゃ」

竹「私わたくしはお相あい宿やどになりました、直じき隣りんに居いりますが、あなただ様さまは最前つぎお著つの御様子ごようしで」

僧「はい、お隣座敷りんざしきへ泊とつてな、坊主ぼうしゆは経きやうを誦よむのが役やくで、お喧やかましいことですが、夜更よふけ

まで誦みはいたしません、貴方も先刻から御回向をしていらつしたな」

竹「私は長らく泊つて居りますが、供の者が死去しまして、此の宿外れのお寺へ葬りました、今日は丁度七日の速夜に当ります、幸いお泊り合せの御出家様をお見掛け申して御回向を願いたく存じます」

僧「はい、いや、それはお気の毒な話ですな、うん、成程此の宿屋に泊つて居る中、煩うてお供さんが、おう、それはお心細いことで、此の村方へ御送葬になりまして、たかえ、それは御看経をいたしましょう、お頼みはななくとも知ればいたす訳で、何処へ参りますか」

竹「はい、こゝに机がありました、戒名もございます」

僧「あゝ成程左様ならば」

と是から衣を着換え、袈裟を掛けて隣座敷へまいり、机の前へ直りますと、新しい位牌があります、白木の小さいので戒名が書いてあります。

僧「あゝ、是ですか、えゝ、むう八月廿四日にお死去になったな、うむ、お気の毒な事で南無阿弥陀仏々々々々々々、宜しい、えゝ、お線香は私が別に好いのを持って居りますから、これを薰きましよう」

と頭陀ずたの中から結構な香を取出し、火入ひいれの中へ入れまして、是から香を薫き始め、禪宗の和尚様の事だから、懇ねんごろに御回向がありまして、

僧「え、お戒名は如何いかさま好いお戒名で、う、光岸浄達信士こうがんじょうたつしんし」

竹「え、是は只心ばかりで、お懇ねんごろの御回向を戴きまして、ほんのお布施で」

僧「いや多分に貴方、旅の事だから布施物ふせもつを出さんでも宜しい、それやア一文ずつ貰つて歩く旅僧たびそうですから、一文でも二文でも御回向をいたすのは当あたりまえ然しかで、併しし布施のない

経は功德にならんと云うから、これは戴きます、左様ならば私わしは旅疲れゆえ直すぐに寝ます、ま御免なさい」

と立ちかけるを留とめて、

竹「あなた少々お願いがございます」

僧「はい、なんじやな」

と又坐すわる。お竹はもじくして居りましたが、応やがて、

竹「おつな事を申上げるようでございますが、当家の悴わたくしが私を女あなごと侮あなごりまして、毎晩私の寝床へまいって、怪けしからん事を申しかけまして、若もし云うことを肯きかなければ殺してしまふの、鉄砲で打つのと申します、馬鹿な奴と存じますから、私も好よい加減に致して、七

日でも濟んだら心に従うと云い延べて置きました、今晚が丁度七日の逮夜で、明朝早く此の宿を立とうと存じますから、屹度今晚まいって兎や角申し、又理不尽な事を致すまいものでもあるまいと存じます、誠に困りますが、幸い隣へお相宿になりましたから、事に寄ると私が貴方の方へ逃込んでまいりますかも知れません、其の時には何卒お助け遊ばして下さるようにな

僧「いや、それは怪しからん、それは飛んだ事じや私にお知らせなさい、押えて宿の主人を呼んで談じます、然ういう事はない、自分の家の客人に対して、女旅と侮り、恋慕を仕掛けるとは以ての外、事に馬鹿程怖い者はない、宜しい、来たらお知らせなさい」

竹「何卒願います」

と少し憤つた気味で受合いましたから、大きにお竹も力に思つて、床を展つて臥りました、和尚さまは枕に就くと其の儘旅疲れと見え、ぐうぐうと高軒で正体なく寝てしまいました。お竹は軒の音が耳に附いて、どうも眠られません、夜半に密と起きて便所へまゐり、三尺の開きを開けて手を洗いながら庭を見ると、生垣になつてゐる外は片方は畠で片方は一杯の草原で、村の人が通るほんの百姓道でございます。秋のことだから尾

花萩女郎花ばなげしのような草花が咲き、露が一杯に下りて居ります。秋の景色は誠に淋しいもので、裏手は碓氷の根方ねがたでございますから小山こやま続きになって居ります。所々ところくちらくくと農家の灯火あかりが見えます、追々戸を締めて眠た処ねもある様子。お竹が心うちの中で。向うに幽かすかに見えるあの森は洪願寺様であるが、彼処あそこへ葬り放しで此処こゝを立つのは不本意とは存じながら、長く泊つていれば、宿屋の悴が来て無理無体に恋慕を云い掛けられるのも忌いやな事であると、庭の処から洪願寺の森を見ますと、生垣の外にぬうと立っている人があります。男か女か分りませんが、頻しきりと手を出してお出いでくをしてお竹を招く様子、腰を屈かめて辞儀をいたし、また立上つて手招ぎをいたします。

竹「はてな、私を手招ぎをして呼ぶ人はない訳だが……男の様子だな、事によつたら敵かたきの手係りが知れて、人に知れんように弟おとが忍んで私に会いに来たことか、それとも屋敷から内々ないくたより音信でもあつた事か」

と思わず褌つまを取りまして、其処そこに有合せた庭草履を穿はいて彼の生垣の処へ出て見ると、十間ばかり先の草原くさばらに立つて居りまして、頻りと招く様子ゆえお竹は、はてな……と怪しみながら又跡を慕つてまいりますと、又男が後あとへ退さつて手招ぎをするので、思わず知らずお竹は畠は続きに洪願寺の墓場まで参りますと、新墓しんぼかには光岸浄達信士という卒塔婆そとばが立

つて櫛しきみが上あがつて、茶碗に手向たむけの水がありますから、あゝ私やア何うして此こ処いまで来たことか、私の事を案じて忠平が迷つて私を救い出すことか、ひよつとしたら私が気を落してゐる所へ附込んで、狐狸きつねが化すのではないか、もし化されて此こ様んな処へ来やアしないかと、茫然として墓場へ立止つて居りました。

## 三十五

此方こなたは例の早四郎が待ちに待つた今宵こよいと、人の寝ね静しずまるを窺うかがうてお竹の座敷へやつて参り、

早ねぶ「眠ねぶつたかねく、お客さん眠ねぶつたかえ……居いねえか……約束かやだから来ただ、の中へ入ひえつても宜えいいかえ入ひえるよ、入ひえつても宜えいいかえ」

と理不尽かやに捲まくつて中へ入り。

早ねぶ「眠ねぶつたか……あれやア居いねえわ、何ど処けへ行いつただな、私わしが来る事を知しっているから逃げたか、それとも小便垂れえ行いつたかな、ア小便垂れえ行いつたんだ、逃げたつて女一人かぶで淋ひえしい道中かぶは出来いねえからな、私わしア此この床の中へ入ひえつて頭かぶから搔かぶ卷まきを被かぶつて、ウフ、

屈つなんであると、女子おなじは知んねえからこけえ来る、中へお入ひえんなさいましと云つたところで、男おとこが先へ入ひえつていりやア間まを悪わるがつて入れひえめえから、小さちっくなつてると、誰もいねえと思つてすつと入ひえつて来ると、己おらアこゝにいたよつて手を押つかめえて引入ひえれると、お前めえ来ねえかと思つたよ、なに己おらア本当まことに是まで苦勞くるうをしたゞもの、だから中なへ入ひえるが宜いい、入ひえつても宜いいかえと引張ひ込めば、其そのの心こゝろがあつても未まだ年としい行いかないから間まを悪わるがるだ、屹きつ度と然そうだ、こりやア息いきい屏こらして眠ねつた真ま似にえしてくれべえ

と止とせば宜いいのに早四郎はやしろうはお竹たけの寢床ねどの中で息いきを屏こらして居ゐりました。暫しばく経たつと密そつと抜ぬきあし足あしをして廊下らうかをみしり〜と来る者ものがあります。古ふるい家うちだから何なんなに密ひそと歩あいても足音あしなが聞きえます、早四郎はやしろうは床とこの内うちで来たなと思つていますと、密ひそと障子しょうじを開ひらけ、スウー。早四郎はやしろうは障子しょうじを開ひらけたなと思つていますと、ぷつり〜と、吊つりつてありましたかやの吊手つりてを切落きりおし、寝ねている上うへへフワリと乗のつたようだから、

早「何だこれははてな」

と考かんえて居ゐりますと、片方かたつでは片手かたてで探さぐり、此こゝ処あたりりが喉のど笛ふえと思おもう処ところを探さがり当あたて、懐なつかしから取と出したつぎらつく刃物やいばを、逆手さかてに取とつて、ウーンと上うへから力ちからに任まかせて頸窩骨ぼんのくぼへ突つ込んだ。



早「あゝ」

と悲鳴を上げるのを、ウーンとえぐりました。苦しいから足をばたくやる拍子に襖がふすま外れたので、和尚が眼を覚して、

僧「はゝ、夜這よばいが来たな」

と思いましたが起きて来て見ると、灯火あかりが消えている。

僧「困つたな」

と慌あわて、手探りに枕元にある小さな鋼鉄くろがねの如意にょいを取って透すかして見ると、判然はつきりは分りませんが、頬被ほつかぶりをした奴が上へ乗しかゝっている様子。

僧「泥坊」

と声をかける大喝だいかつ一声、ピーンと曲者の肝きもへ響きます。

曲者「あつ」

と云つて逃げにかゝる所へ如意で打つてかゝつたから堪たまらんと存じまして、刃物で切つてかゝるのを、胆たんの据すわつた坊さんだから少しも驚かず、刃物の光が眼の先へ見えたから引ひ外つばすし、如意で刃物を打落し、猿臂えんびを延して逆に押おさえ付け、片膝を曲者の脊中へ乗掛のつかけ、僧「やい太い奴だ、これ苟かりそめにも旅籠はたごを取れば客だぞ、其の客へ対して恋慕を仕掛けるの

みならず、刃物などを以て脅して情慾を遂げんとは不埒至極の奴だ、これ宿屋の亭主は居らんか、灯火あかりを早く……」

という処へ歸つて来ましたのはお竹で。

竹「おや何で」

僧「む、お怪我はないか」

竹「はい、私は怪我はございませんが、何でございます」

僧「恋慕を仕掛けた宿屋の忤が、刃物を持つて来て貴方に迫り、わつという声に驚いて眼をさまして来ました、早く灯火あかりを……廊下へ出れば手水場ちようずばに灯火がある」

という中に雇うち婆やといばあさんが火を点とほして来ましたから、見ると大の男が乗掛のつかつて床とこが血みどりになつて居ります。

僧「此奴こいつかぶ被り物ものを脱れ」

と被つている手拭を取ると、早四郎ではありませんで、此処こゝの主人あるじ、胡麻塩ごましおまじ交りのぶつ  
つり切つたような鬚まげの髪はげ先の散ちらばつた天窓あたまで、お竹の無事な姿を見て、えゝと驚おどいてし  
かみ面つらをして居ります。

僧「お前は此の宿屋の亭主か」

五「はい」

竹「何うしてお前は刃物を持って私の部屋へ来て此様な事をおしだか」

五「はいく」

とお竹に向つて、

五「あゝ貴方はお達者でいらつしやいますか、そうして此の床の中には誰がいますの」

と布団を引剥いで見ますと、今年二十五になります現在己の实子早四郎が俯伏になり、血に染つて息が絶えているのを見ますと、五平は驚いたの何のではありません、真蒼になつて、

五「あゝ是は悴でございます、私の悴が何うして此の床の中に居りましたろう」

僧「何うして居たもないものだ、お前が殺して置きながら、お前はまア此者が何の様な悪い事をしたか知らんが、本当の子か、仮令義理の子でも無闇に殺して済む理由ではない、何ういう理由じゃ」

五「はいく、お嬢さま、あなたは今晚くにお休みはございませんのですか」

竹「私はくゝに寝ていたのだが、不図起きて洪願寺様へ墓参りに行って、今帰つて来ましたので」

五「何うして忤が此処へ参つて居りましたろう」

僧「いや、お前の忤は此の娘さんの所へ每晚来て怪しからんことを云掛け、云う事を肯ければ、鉄砲で打つので、刃物で斬るのと云うので、娘さんも誠に困つて私へお頼みじや、娘さんが墓参りに行つた後へお前の子息が来て、床の中に入って居るとも知らずお前が殺したのじや」

五「へえ、あゝ、お嬢さま真平御免なすつて下さいまし、実は悪い事は出来ないもんでございます、忽ちの中に悪事が我子に報いました、斯う靦面に罰の当るといふのは実に恐ろしい事でございます、私は他に子供はございません、此様の田舎育ちの野郎でも、唯た一粒者でございませぬ、人間は馬鹿でございませぬ、私の死水を取る奴ゆえ、母が亡りましてから私の丹誠で是までにした唯た一人の忤を殺すといふのは、皆私の心の迷い、強慾非道の罰でございませぬ」

僧「土台呆れた話じやが、何ういう訳でお前は我子を殺した」

五「はい、申上げにくい事でございますが、此の甲州屋も二十年前までは可なりな宿屋でございました処が、私は年を老りまして、酒や博奕が好きでございまして、身代を遂に痛め、此者の母も苦勞して亡りました、斯うやって表を張ては居りますが、実は苦しい身

代でございます、ところが此のお嬢様が先<sup>せん</sup>達<sup>だつ</sup>て宿賃をお払いなさる時に、懐から出した  
 胴巻には、金が七八十両あろうと見た時は、面匏<sup>にきび</sup>の出る程欲しくなりました、あゝ此の金  
 があつたら又一<sup>ひと</sup>山興<sup>やまおこし</sup>して取附く事もあろうかと存じまして、無理に七日までお泊め申し  
 ましたが、愈々<sup>いよく</sup>明日<sup>あした</sup>お立ちと聞きましたゆえ、思い切つて今晚<sup>そつ</sup>密と此のお嬢様を殺して  
 金を奪<sup>と</sup>ろうと企<sup>たく</sup>みました、死骸は田圃<sup>たのぼ</sup>伝えに背負<sup>しよい</sup>出して、墓場へ人知れず埋めてしまえば、  
 誰にも知れる氣遣<sup>きづか</sup>いと存じまして、忍んで参りました、道ならぬ事をいたした悪事は、  
 忽<sup>たち</sup>ち報<sup>ま</sup>い、一人の悴<sup>せ</sup>を殺しますとは此の上もない業<sup>ごうざら</sup>曝<sup>さら</sup>しで、実に悪い事は出来ないとい  
 りました、私<sup>わたくし</sup>も最<sup>も</sup>う五十九でございます、お嬢さま何とも申し訳がございせんから、私  
 は死んでしまい、貴方に申訳をいたします」

と云切るが早い、出刃庖丁を取つて我が咽<sup>のど</sup>に突立てんとするから、

僧「あゝ暫く待ちなさい、まア待ちなさい、お前がこれ死んだからって言訳が立つじやア  
 なし、命を棄てたつて何の足しにもなりやアせん、嬢さんの御迷惑にこそなれ、宜<sup>よ</sup>いか先<sup>せ</sup>  
 非<sup>んぴ</sup>を悔<sup>い</sup>い、あゝ悪い事をした、唯<sup>ただ</sup>一人の子を殺したお前の心の苦しきというものは一通  
 りならん事じや、是も皆罰<sup>みなばち</sup>だ、一念の迷いから我子を殺し、其の心の苦しきを受け、一旦  
 の懺悔<sup>ざんげ</sup>によつて其の罪は消えている、見なさいお嬢様の一命は助かり、お前の子はお嬢様

の身代りになつたんじや、誠に氣の毒なは此の息子さん、嬢さん何事も此の息子さんに免じてお前さんも堪<sup>かんべん</sup>弁<sup>べん</sup>なさい、何日<sup>いっ</sup>までも仇<sup>あだ</sup>に思つていと却<sup>かえ</sup>つてお前さんの死んだ御家来さんの為にもならん、宜<sup>い</sup>いか、又御亭主は客に対して無礼をしたとか、道楽をして棄<sup>すてお</sup>置<sup>か</sup>れん、親に苦勞をかけて堪<sup>たま</sup>らんから殺しましたと云つて尋常に八州へ名告<sup>なの</sup>つて出なさい、なれども一人の子を私<sup>わたくし</sup>に殺すのは悪い事じやから髪の毛を切つて役所へ持つて行<sup>ゆ</sup>けば、是には何か能<sup>よく</sup>々<sup>く</sup>の訳があつて殺したという廉<sup>かど</sup>で、お前さんに甚<sup>ひど</sup>く難儀もかゝるまいと思<sup>そ</sup>う、然<sup>そ</sup>うして出家を遂<sup>と</sup>げ、息子さんの為<sup>ため</sup>に四国西国を遍歴して、其の罪<sup>つみ</sup>滅<sup>ほろ</sup>しをせんければ、兎<sup>と</sup>ても尋常<sup>なみ</sup>の人に成れんぞ」

五「はい〜」

僧「是から陰徳を施し、善事を行うが肝心、今までの悪業を消すは陰徳を積むより他に道はないぞ」

五「有難うございます」

僧「あゝ何うも氣の毒な事じやなア、お嬢さん」

お竹は不思議な事と心の内で忠平の靈に回向をしながら、

竹「ま、私は助かりましたが、誠に思い掛けない事で」

僧「いや、世間は無常のもので、実に夢幻泡沫で実なきものと云つて、実は真に無いものじゃ、世の人は此の理を識らんによつて諸々の貪慾執心が深くなつて名聞利養に心を焦つて貪らんとする、是らは只今生の事のみを慮り、旦暮に妻子眷属衣食財宝にのみ心を尽して自ら病を求める、人には病は無いものじゃ、思う念慮が重なるによつて胸に詰つて来ると毛孔が開いて風邪を引くような事になる、人間元来病なく、薬石尽く無用、自ら病を求めて病が起るのじゃ、其の病を自分手に拵え、遂に煩惱という苦惱も出る、之を知らずに居つて、今死ぬという間際の時に、あゝ悪いことをした、あゝせつない何う仕よう、此の苦痛を助かりたいと、始めて其の時に驚いて助からんと思つても、それは兎ても何の甲斐もない事じゃ、此の理を知らずして破戒無慚邪見放逸の者を人中の鬼畜といつて、鬼の畜生という事じゃ、それ故に大梅和尚が馬祖大師に問うて如何なるか是れ仏、馬祖答えて即心即仏という、大梅が其の言下に大悟したという、其の時に悟つたじゃ、此の世は実に仮のものじゃ、只四縁の和合しておるのだ、幾らお前

が食物たべものが欲しい、著物きものが欲しい、金が欲しい、斯ういう田地ちがが欲しいと云つた処ところが、ぴたりと息が絶えれば、何一つ持つて行くゆことは出来やアしまい、四縁ちすいとは地水火風かふう、此の四つで自然しぜんに出来ておる身体しんたいじや、仮かに四大しだい（地水火風）が和合わがして出来て居おるものなれば、自分の身体しんたいも有りはせん、実は無いものじや、自然しぜんに是は斯うする物ものじやという処ところへ心が附つかんによつて、我心わがこころがあるとと思われ、我わが身体しんたいを愛し、自分に従したがうて来る人ひとのみを可愛がつて、宜よう訪ねて来てくれたと悦よろこび、自分に背そむく者は憎にくい奴やつじや、彼奴あいつはいかんと云うようになる、人を憎む悪い心が別わかにあるかというに、別わかにあるものでもない、即すなはち仏ぶつじや、親父おやが娘むすめを殺して金子かねを奪とろうとした時の心こころは実に此の上うへもない極重悪人ごくじゆうあくにんなれども、忽たちまち輪りん回應んえおうほう報ほうして可愛かわいい我子わがこを殺し、あゝ悪い事ことをしたと悔悟かいごして出家しゅつがになるも、即すなはち即心じくしん即すなはち仏ぶつじや、えゝ他人たにんを自分の身体しんたいと二つあるものと思わずに、欲ほしい惜おししいの念ねんを棄すてゝしまえば、争まいもなければ憤おこる事こともない、自他じたの別わかを生なずるによつて隔意かくいが出来る、隔意かくいのある所ところから、物ものの争まいが出来るものじや、先方むこうに金かねがあるから取とつてやろうとすると、先方むこうでは私わしの物ものじやから遣やらん用ようを勤こめたら金かねを遣やるぞ、勤こめをして貰もらうのは当あたり然まだから、先方さきへくれる、それを此方こつちで只取ただろうとする、先方さきでは渡わたさんとする、是こゝが大きいううなると戦争いくさじや、実に仏ぶつも心配しんぱなされて西方極樂世界さいほうごくらくせかい阿弥陀仏あみだぶつを念ねんじ、称しょう名みょうして感想かんじょう



を凝こらせば、臨終の時に必ず浄土へ往生すと説と給たまえり、南無阿弥陀仏く」

圓朝が此こ様なことを云つてもお賽さい錢せんには及びません、悪くすると投げける方があります。段々と有難い事を彼の宗達かという和尚さんが説と示しめしたからお竹も五平を恨む念は毛頭ありません。

竹「お前此の金が欲しければ皆みなな上げよう」

五「いえく、金は要いりません、私わたくしは剃てい髪はつして罪滅しの為ために廻か国こくします」

というので剃か刀みそりを取寄せて宗達かが五平をくりく坊主にいたしました。早四郎の死骸は届ける所へ届けて野辺の送りをいたし、後あとは他人へ譲り、五平は罪滅しのため四国西国へ遍歴へんれきに出ることになり、お竹は是より深い事は話しませんが、

「私わたくしは糸野美作守の家来渡邊という者の娘で、弟は祖五郎と申して、只今は美み作さか国くにへまいって居ります、弟にも逢いたいと存じますし、江戸屋敷の様子も聞きたし、弟もお国表へまいって家老に面会いたし、事の仔細が分りますれば江戸屋敷へまいる筈はずで、何どの道便りをするとは申して居りましたが、案じられてなりませんから、家来の忠平という者を連れてまいる途みちで長く煩わづりました上、遂に死し別わかれになりました、心細い身の上で、旅慣れぬ女のこと、どうか御出家様私を助けると思おぼ召しめし、江戸までお送り遊ばして下さいま

すれば、何の様にもお礼をいたしましょう、お忙しいお身の上でもございませうが、お連れ遊ばして下さいまし」

と頼まれて見ると宗達も今更見棄てる事も出来ず、

宗「それは気の毒なことで、それならば私と一緒に江戸まで行きなさが宜い私は江戸には別に便る処もないが、谷中の南泉寺へ寄つて已前共に行脚をした玄道という和尚がおるから、それでも尋ねたいと思う、ま兎も角もお前さんを江戸屋敷まで送つて上げます」

と云うので漸うの事にて江戸表へまいりましたが、上屋敷へも下屋敷へもまいる事が出来んのは、予てお屋敷近い処へ立寄る事はならんと仰せ渡されて、お暇になつた身の上ゆえ、本郷春木町の指物屋岩吉方へまいり、様子を聞くと、岩吉は故人になり、職人が家督を相続して仕事を受取つて居りますことゆえ、逆も此処の厄介になる事は出来ません。仕方がないので、どうか様子を下屋敷の者に聞きたいと谷中へ参りますと、好い塩梅に佐藤平馬という者に会つて、様子を聞くと、平馬の申すには、

平「弟御は此方へおいでがないから、此の辺にうろくしておいでになるはお宜しくない、全体お屋敷近い処へ入らっしゃるのは、そりやアお心得違いな事で、ま貴方は信州においで、時節を待つてござつたら御帰参の叶う事もありませう、御舎弟も春部殿も未

だ江戸へはお出いでがない、仮令たとえ御家老に何どんなお頼みがありましたしても無駄な話でございませ  
と撥付はねつけられ、

竹「左様なら弟は此方こちからへまいつては居りませんか」

平「左様、御舎弟は確たしかにお国においでだという話は聞きました、多分お国へ行つて、お  
国家老へ何かお頼みでもある事でございませう、併しか大殿様は御病氣の事であるが、  
事に寄つたら御家老の福原様ふくはらさまが御出府ごしゅつぷになる時も、お暇になつた者を連れてお出いでにな  
る筈がないから、是は好よい音信たよりを待つてお国にお出いででございませう、殿様は御不快で、  
中々御重症だという事でございまして、私わたくしども共は下役ゆえ深い事は分りませんが、此の  
お屋敷近い処へ立廻るはお宜しくない事で」  
という。此の佐藤平馬という奴は、内々ないく神原五郎治四郎治の二人から鼻薬をかわれて  
下に使われる奴、提灯持ちようちんもちの方の悪い仲間でございませうから、斯かく訳の分らんように云  
いましたのは、お竹にお屋敷の様子が聞かしたくないから、真実まことしやかに云つてお屋敷近  
辺へ置かんように追おつぽら払いましたので、お竹はどうも致いたしかた方がない、旧来馴染の出入町  
人の処へまいりまして、長く泊つても居おられませんが、又一緒にまいった宗達も、長くは  
居いられませぬ理由わけがあつて、或時お竹に向い、

宗「私は何うしても美濃の南泉寺へ帰らんければならず、それに又私は些と懇意なものが有つて、田舎寺に住職をしている其の者を尋ねたいと思うが、貴方は是から何処へ参らるゝ積りじゃ」

竹「何処へも別にまいる処もありませんが、お国へまいれば弟が居ります、成程御家老も弟を連れて、お出は出来ませぬ、御帰参の叶う吉左右を聞くそれまではお国表にいる事でございますようから、私もどうかお国へ参りとうございます」

宗「併しどうも女一人では行かれんことで、何ともお気の毒な事だ、じゃアまア美作の国といえは是れ百七十里隔つた処、私が送る訳にはいかんが、今更見棄てることも出来ないが、美濃の南泉寺までは是非行かんければならん、東海道筋も御婦人の事ゆえ面倒じゃ、手形がなければならんが、何うか工風をして私がお送り申したいが、困つた事で、兎に角南泉寺まで一緒に行きなさい、彼方の者は真実があつて、随分俗の者にも仏心があつてな、寺へ来て用や何かするからそいらに頼んだら美作の方へ用事があつてまいる者があるまいとも云えぬ、其の折に貴方を頼んでお国へ行かれるようだと私も安心をします、私は坊主の身の上で、婦人と一緒に歩くのは誠に困る、衆人にも見られて、忌な事でも云われると困る、けれども是も仕方がないから、ま行きなざるが宜い、私は本庄宿の海

禅寺へ寄つて一寸玄道という者に会つて、それから又美濃までは非行きますから御一緒まいろう、それには木曾路の方が銭が要らん」

と御出家は奢らんから、寒くなつてから木曾路を引返し本庄宿へまいりまして、婦人ではあるけれどもこれくの理由だ、と役僧にお竹の身の上話をして、其の寺に一泊いたし、段々日数を経てまいりましたが、元より貯え金は所持している事で、漸く碓氷を越して軽井沢と申す宿へまいり、中島屋という宿屋へ宿を取りましたは、十一月の五日でござります。

三十七

木曾街道でも追分沓掛軽井沢などは最も寒い所で、誰やらの狂歌に、着て見れば綿がうすい（碓氷）か軽井沢ゆきたけ（雪竹）あつて裾の寒さよ、丁度碓氷の山の麓で、片方は浅間山の裾になつて、ピーという雪風で、暑中にまいりましても砂を飛ばし、随分半纏でも着たいような日のある処で、恐ろしい寒い処へ泊りました。もう十一月になると彼の辺は雪でございます、初雪でも沢山降りますから、出立をすることが出来ません、

詮せん方かたがないから 逗とうりゆう留ゆうという事になると、お竹は種いろく々心配いたしている。それを宗達という和尚さまが真実にしてくれても何とのう氣詰り、便りに思う忠平には別れ、弟祖おとこ五郎の行方は知れず、お国にいる事やら、但しは途中で煩わづらつてゞもいやアしまいか、などと心細い身の上で何卒どうぞして音信たよりをしたいと思いますと思つても何処どこにいるか分らず、御家老様の方へ手紙を出して宜よいか分りませんが、心配のあまり手紙を出して見ました。只今の郵便のようではないから容易には届かず、返事も碌に分らんような不都合の世の中でございます。お竹は過越すぎこし方を種々思うにつけ心細くなりました、これが胸に詰しやくつて癩しかくとなり、折々差込みますのを宗達が介抱いたします、相あい宿やどの者も雪のために出立する事が出来ませんか、多勢おおぜい囲炉裡いろりの周囲まわりへ塊かたまつて茫然ぼんやりして居ります。中には江戸子えどっこで土地を食詰くいめまして、旅稼りくぎに出て来たというような職人なども居ります。

○「おい鐵てつう」

鐵「えゝ」

○「からまア毎日めいにちく降込められて立つことが出来ねえ、江戸子が山の雪を見ると驚いちまうが、飯を喰う時にずうと並んで膳ぜんが出て、誰も碌ろくに口をきかねえな」  
鐵「そうよ、黙もくつていちやア仕様がなから挨拶えいさつをして見よう」

○「えゝ」

鐵「挨拶えいさつをして見ようか」

○「しても宜いいが、きまりが悪いな」

鐵「えゝ御免ごめんねえ……へえ……どうも何でござえやすな、お寒いことで」

△「はア」

鐵「お前まえさん方は何ですかえ、相宿のお方でげすな」

△「はア」

鐵「何を云やアがる……がアゝゝって」

○「手前てまえが何か云うからはアというのだ、宜いいじやアねえか」

鐵「変へいだな、えゝゝ毎めい日膳にちぜんが並ぶとお互たがひに顔を見合せて、御飯おまんまを喰つてしまふと部屋

へ入いつてごろゝ寝るくれえの事で仕様がござえやせんな、夜になると退てい屈くつで仕様が有

りませんが、なんですかえお前まえさん方は何処どこかえお出でなすつたんでげすかえ」

△「私わしはその大和路の者であるが、少し仔細しじゆあつて、えゝ長らく江戸表にいたが、故郷こきやう

忘ぼうじ難がたく又また歸りたくなつて歸つて来ました」

鐵「へえゝ然そうで……其方そちらのお方はお三人連さんにんづれで何方どちらへ」

□ 「私わしは常陸ひたちの竜ヶ崎りゅうさきで」

鐵 「へえ」

□ 「常陸の竜ヶ崎です」

鐵 「へえー何ういう訳で此こん様な寒さむい処ところへ常陸ひたちからおいでなされたんで」

□ 「種いろく々く信心しんじんが有ありまして、全体まいねん毎年ごうじゅう講こう中ちゆうが有ありまして、五六人ごぐらいで木曾きその御獄おんたけさま様さんけいへ参詣さんけいをいたしますが、村むらの者ものの申まをし合あわせて、先達せんだつさんもお出いでになつたもんだから、同道どうだいしてまいりやした、実は御獄おんたけさんへ参まをるにも、雪ゆきを踏ふんで難儀なんぎをして行くゆくのが信心しんじんだね」

鐵 「へえー大變たいへんでげすな、御獄おんたけさんてえのは滅法めつぽうけえ高たけえ山やまだつてね」

□ 「高たかいたつて、それは富士ふじより高たかいと云いいますよ、あなた方も信心しんじんをなすつて二度にどもお登のぼりになれば、少すこしは曲まつた心こころも直ただりますが」

鐵 「えへへ、私わちどもは曲まつた心こころが直ただつても、側そばから曲まつてしままうから、旨まく真直まっすぐにならねえので……え、其方そなたにおいでなされる方どなたは何方どなたで」

此この客きやくは言葉ことばが余程よほど鼻はなにかゝり、

× 「私わしは奥州おくしゅう仙台せんたい」



鐵「へえ…仙<sup>しんでい</sup>台<sup>たい</sup>てえのは」

×「奥州で」

鐵「左様ですがか、えゝ衣を着てお頭<sup>つむり</sup>が丸いから坊<sup>ぼう</sup>さんでげしよう」

×「いしやでがす」

鐵「へ何ですと」

×「<sup>いしや</sup>医者<sup>いしや</sup>でがす」

鐵「<sup>いしや</sup>石工<sup>いしや</sup>だえ」

×「いゝや<sup>いどう</sup>医道<sup>いどう</sup>でがす」

鐵「へえー井戸掘にア見えませんね」

×「井戸掘ではない、<sup>いしや</sup>医者<sup>いしや</sup>でがす」

鐵「へえーお医者で、<sup>わっち</sup>私<sup>わっち</sup>どもはいけぞんぜえだもんだから、お医者と相宿になつてると皆も氣丈夫でござえます、<sup>ちっ</sup>些<sup>ちっ</sup>とばかり<sup>はっか</sup>薄荷<sup>はっか</sup>があるなら<sup>な</sup>甜<sup>な</sup>めたいもんで」

×「左様な薬は所持しない、なれども相宿の方に御病氣でお困りの方があつて、薬をくれろと仰しやれば、<sup>なほ</sup>癒<sup>なほ</sup>る癒らないは、それはまた薬<sup>しやう</sup>が<sup>しやう</sup>性に合うと合わん事があるけれども、盛るだけは盛つて上げるて」

鐵「へえー、斯う皆さんが大勢寄つて只茫然ほんやりしても面白くねえから、何か面白え百物語でもして遊ぼうじゃアありやせんか、大勢寄っているのですから」

医「それも宜うがすが、ま能く大勢寄ると阿弥陀の光りという事を致します、鬮引くじびきをして其の鬮に当たつた者が何か買つて来るので、夜中でも厭いといなく菓子を買けえに行くとか、酒を買けえに行くとかして、客の鬮を引いた者は坐つて、少しも動かずに人の買つて来る物を食しよくして楽しむという遊びがあるのです」

鐵「へえーそれは面白えが、珍らしい話か何かありませんかな」

医「左様でげす、別に面白い話ありませんですな」

鐵「氣のねえ人だな何か他に」

○「手前てめえ出て先へ喋しゃべるがいゝ」

鐵「喋るたつて己ア喋る訳には行かねえ、何かありませんかな、お医者さまは奥州仙台だてえが、面白おもしろえ怖おっかねえ化物ばけものが出たてえような事はありませんかな」

医「左様で別に化物が出たという話もないが、奥州は不思議のあるところだな」

鐵「へえー左様でござえやすかな」

医「貴方は何ですかえ、松島見物にお出いでになつた事がありますかえ」

鐵「いや何処へも行つたことはねえ」

医「松島は日本三景の内だな、随分江戸のお方が見物に来られるが此のくらい景色の好い所はないと云つてな、船で八百八島を巡り、歌を詠じ詩を作りに来る風流人が幾許もあるな」

鐵「へえー松島に何か心中でもありましたかえ」

医「情死などのあるところじゃアないが、差当つて別にどうも面白い話もないが、医者  
は此様な穢い身装をして居てはいけません、医者は居なりと云うて、玄関が立派で、身装  
が好つて立派に見えるよう、風俗が正しく見えるようでなければ病者が信じません、  
随つて薬も自から利かんような事になるですが、医者は頓知頓才と云つて先ず其の薬より  
病人の氣を料る処が第一と心得ますな」

鐵「へえー何ういう……氣を料る処がありますな」

医「先年乞食が難産にかゝつて苦しんでいるのを、所の者が何うかして助けて遣りたいと  
立派な医者を頼んで診て貰うと、是はどうも助からん、片足出ていなければ宜いが、片手  
片足出て首が出ないから身体が横になつて支えて、仕様がな、細かに切つて出せば命が  
ないと途方に暮れ、立合つた者も皆な可愛そうだと云つている処へ通りかゝつたのが愚老

でな」

鐵「へえ……それからお前さんが産うましたのかえ」

医「それから療治にかゝろうとしたが、道具を宅たくへ置いて来たので困ったが、此処こゝが頓智頓才で、出ている片手を段々と斯う撫なでましたな」

鐵「へえ」

医「撫なでている中うちに掌てを開けました」

鐵「成程」

医「それから愚老が懷中から四文錢を出して、赤児あかごの手へ握にぎらせますと、すうと手を引込ひっこまして頭の方から安やす々と産れて出て、お辞儀をしました」

鐵「へえ呪まじないでげすか」

医「いや乞食の児こだから悦よろこんで」

鐵「ふゝゝ人を馬鹿にしちやアいけねえ、本当だと思つたのに洒落者しゃれもんだね、田舎者だつて迂濶うっかりした事は云えねい……えゝ其方そちらの隅すみにおいでなさるお方、あなたは何ですかえ、矢張お医者さままでごぜえやすか」

僧「いや、私わしは斯ういう姿で諸方を歩く出家でござる」

鐵「え、御出家さんで、御出家なら幽霊などを御覧なすった事がありましたよ」

僧「幽霊は二十四五度見ました」

鐵「へえ、此奴あ面白え話だ、二十四五度……ど何んのが出ました」

僧「種々なのが出ましたな、嫉妬の怨霊は不実な男に殺された女が、口惜いと思つた

念が凝つて出るのじやが、世の中には幽霊は無いという者もある、じやが是はある」

鐵「へえ、ど何んな塩梅に出るもんですな」

僧「形は絵に描いたようなものだ、朦朧として判然其の形は見え、只ぼうと障子や

襖へ映つたり、上の方だけ見えて下の方は烟のようで、どうも不気味なものじやて」

鐵「へえー貴方の見たうちで一番怖いと思つたのはどういふ幽霊で」

僧「え、左様さ先年美濃国から信州の福島在の知己の所へ参つた時の事で、此の知己

は可なりの身代で、山も持つてゐる者で、其処に暫く厄介になつていた、其の村に蓮光

寺という寺がある、其の寺の和尚が道楽をしていかん彼は放逐せねばならんと村中が騒

いで、急に其の和尚を追出すことになつたから、お前さん住職になつてくれないかと頼ま

れましたが、私は住職になる訳にはゆかん、行脚の身の上で、併し葬式でもあつた時に

は困ろうから、後住の定るまで暫くいて上げようと云うんで、其の寺に居りました」

鐵「へえー」

僧「すると私の知己しるべの山持の妾が難産をして死んだな」

鐵「へえー」

僧「それがそれ、ま主人あるじが女房に隠して、家うちにいた若い女に手を付け、それがま懐妊したによつて何時いつか家内の耳に入ると、悋氣りんき深い本妻ほんつまが騒ぐから、知れぬうちに墮胎おろしてしまおうと薬を飲ますと、ま宜いい塩梅しんばいに墮おりましたが、其の薬の余毒よどくのため妾は七転八倒の苦しみをして、うーんうんと夜中に唸うなるじやげな」

鐵「へえー此奴こいつア怖こわえなア」

僧「怨みだな、斯う云う事になつたのも、私わたしは奉公人の身の上相あいたい対たいずくだから是非もな  
いが、内儀おかみさんが悋氣りんき深ふかいために私わたしに斯ういう薬を飲ましたのじや、内儀おかみさんさえ悋氣りんきせ  
ずば此の苦しみは受けまい、あゝ口惜くやしい、私わたしは死に切れん、初めて出来た子は墮胎おろされ、  
私も死に、親子諸共に死ぬような事になるも、内儀おかみさんのお蔭かげじや、口惜くやしい残念と十一日  
の間云い続けて到頭死にました、その死ぬ時な、うーんと云つて主人の手を握つてな」

鐵「へえ」

僧「目を半眼にして齒をむき出し、旦那さま私わたしは死に切れませんよ」

○「やア鐵う、もつと此方へ寄れ……気味が悪い、どうもへえー成程……そこを閉めねえ、風がびゅー／＼入るから……へえー」

僧「気の毒な事じやが、仕方がない、そこで私がいた蓮光寺へ葬りました、他に誰も寺参りをするものがないから、主人が七日までは墓参りに来たが、七日後は打棄りばなしで、花一本供げず、寺へ附届もせんという随分不人情な人でな」

○「へえー酷い奴だね、其奴ア怨まア、直に幽的が出ましたかえ」

僧「私も可愛そうじやアと思つた、斯ういう仏は血盆地獄に墮るじや、早く云えば血の池地獄へ落るんじや」

○「へえー」

僧「斯ういう亡者には血盆経を上げてやらんと……」

○「へえー……けつ……なんて……けつを……棒で」

僧「いや血盆経というお経がある、七日目になア其の夜の亥刻前じやつたか、下駄を履いて墓場へ行き、線香を上げ、其処で鈴を鳴し、長らく血盆経を讀んでしもうて、私がすうと立って帰ろうとすると」

○「うん、うん」

僧「前が一面乱塔場で、裏はずうと山じやな」

○「うんく」

僧「其の山の藪の所が石坂の様になつて居るじや、其の坂を下りに掛ると、後でぼーずと呼ぶじやて」

○「ふーん、これは怖えな、鐵もつと此方へ寄れ、成程お前さんと呼んだ」

僧「何も私に怨みのある訳はない、縁無き衆生は度し難しというが、私は此の寺へ腰掛ながら住職の代りに回向をしてやる者じや、それを怨んで坊主とは失敬な奴じやと振向いて見た、此方の勢が強いので最う声がせんな」

○「へえー度胸が宜うござえやすな、強いもんだね、始終死人の側にばかりいるから怖くねえんだ、うーん」

僧「それから又行きにかゝると、また皺枯た声で地の底の方でぼーずと云うじやて」

○「早桶を埋ちまつた奴が桶の中でお前さんと呼んだのかね」

僧「誰だと振向いた」

○「へえ……先方で驚いて出ましたか、穴の中から」

僧「振向いて見たが何んにも居ないから、墓原へ立帰つて見たが、墓には何も変りがな



い、はて何じやろうと段々探すと、山の根方の藪やまいもの中に大きな薯蕷やまいもが一本あったのじゃ、  
 之これが世いに所謂坊主いく山の芋いもじやて」

○「何の事ことた、人を馬鹿にして、併しかし面白おもしろえ、何か他に、あゝ其方そつちにいらつしやるお侍さん、えへゝゝ、旦那何か面白おもしろえお話をありませんか」

侍「いや最前から各々方おののお話を聞いていると、可笑おかしくてたまらんの、拙者も長旅で表おもてむむきむらさきちりめんの服紗包ふくさづを斜はすに脊負しよい、裁着たつつけを穿はいて頭むすびを結むす髪がみにして歩く身の上ではない、形は斯かくの如ごとく襪ぼろ袴はかまを穿はいている剣道修行の身の上、早く云うと武者修行で」

○「これはどうも、左様ですか、武者修行で、へえー然そう聞けばお前さんの顔に似てえる」侍「何が」

○「いえ、そら久しい以前あ絵とに出た芳年よしとの画かいたんで、鰐わに鮫ぎめを竹槍つっこで突殺つっこしている、鼻びが柘榴鼻ざくろつばなで口が鰐口で、眼まなこが金壺眼かなつぼまなこで、えへゝゝ御免ねえ」

侍「怪けしからん事をいう、人の顔を讒訴ざんそをして無礼至極」

○「なに、お前さんは左様そんなでもねえけれども、些ちつと似てえるという話だ」侍「貴公らは江戸のものか、職人か」

○「へえ」

侍「成程」

○「旦那、皆は嘘つぺいばかりでいけません、何ぞ面白え話はありませんかね」

侍「貴公先にやったら宜かろう」

○「私どもは面白い話が無えんで、火事のあつた時に屋根屋の徳の野郎め、路地を飛越し損なやアがつて、どんと下へ落ると持出した荷の上へ尻餅を搗き、鞆丸を打ち、目をまわし、囊が綻びて中から丸が飛出して」

侍「然ういう尾籠の話はいけんなア」

○「それから乱暴勝てえ野郎が焚火に烘つて、金太という奴を殴る機みにぼつぽと燃えてる燼木杭を殴つたから堪らねえ、其の火が飛んで金太の腹掛の間へ入つて、苦しがつて転がりやアがつたが、余程面白うござえました」

侍「其様な事は面白くない」

○「そんなら旦那何ぞ面白え話を」

侍「先刻から空話ばかり出たので、拙者の話を信じて聞くまいから、どうもやりにくい」

向座敷むこうざしきにてぼん／＼と手を打ち、

宗「誰たれも居ぬかな」

下婢「はい」

此の座敷に寝ているのは渡邊お竹で、宗達が看病を致して居りますので、

婢「お呼びなさいましたかえ」

宗「一寸ちよつとこゝへ入つてくれ」

婢「はい」

宗「序ついでに水を持って来ておくれ、病人がうと／＼眠ね附つかと思つたと向座敷で時々大勢がわ

アと笑うので誠に困る」

婢「誠まことにお喧やかましゆうござりやしよう」

宗「其処そこをびつたり閉めておくれ」

婢「畏かしこまりやした」

と立つて行つて大勢の所へ顔を出しまして、

「どうかあの皆さん相宿の方に病人がありやすから、余り大え声をして、わア〜笑わな  
いように、喧しいと病人が眠り付かねえで困るだから、静になさえましよ」

侍「はい〜宜しい…病人がいるなら止しましょう」

○「小声でやつてくたせえ、皆は虚つぺえ話で面白くねえ、旦那が武者修行をした時の、  
蟒蛇を退治たとか何とかいう剛いのを聞きたいね」

侍「左様さ拙者は是迄恐ろしい怖いというものに出会つた事はないが、鼯鼠に両三度出  
会つた時は怖いと思つたね」

○「ど何処で」

侍「南部の恐山から地獄谷の向へ抜ける時だ」

○「へえー名からして怖ねえね恐山地獄谷なんて」

侍「此処は一騎打の難所で、右手の方を見ると一筋の小川が山の麓を繞つて、どう  
どうと小さい石を転がすように最と凄まじく流れ、左手の方を見ると高山峨々として実  
に屏風を建てたる如く、誠に恐ろしい山で、樹は生茂り、熊笹が地を掩うている、道な  
き所を踏分け〜段々下りて来たところが、人家は絶てなし、雨は降ってくる、困つたこ

とだと思ひ、暫く考へたが路は知らず、深更に及んで狼にでも出られちやア猶更と大きに心配した、時は丁度秋の末さ、すると向うにちらく〜と見える」

○「へえー、出たんでござえやすか、狼の眼は鏡のように光るてえから、貴方がうんと立止つて小便をなすつたらう」

侍「なに、小便などを為やアせん」

○「それから」

侍「これは困つたものじや、彼処に誰か焚火でもして居るのじやアないかと思つた」

○「成程山賊が居て身ぐるみ脱いでけてえと、お前さん引こぬいて斬つたんで」

侍「まゝ黙つてお聞き、そう先走られると何方が話すのだから、山賊が団樂坐になつていたのでない、一軒の白屋があつた」

○「へえー山ん中に……問屋でしよう」

侍「なに茅屋」

○「え、油屋」

侍「油屋じゃアない、壊れた家をあばらやという」

○「確かにした家は脊骨屋で」

侍「そう先走つては困る、其家へ行つて拙者は武辺修行の者でござる、斯かる山中に路に踏み迷い、且此の通り雨天になり、日は暮れ、誠に難渋を致します、一樹の蔭を頼むと云つて音ずれると、奥から出て来た」

○「へえー肋骨が出て、齒のまばらな白髪頭の婆が、片手に鉈見たような物を持つて出たんだね、一つ家の婆で、上から石が落ちたんでげしよう」

侍「然うじやアない、二八余りの賤女が出たね」

○「それじやア気が無え、雀が二三羽飛出したのかえ」

侍「賤女」

○「え、味噌汁の中へ入れる汁の実」

侍「汁の実じやアない、二八余り十六七になる娘が出たと思いなさい」

○「へえー家に居たんだね、容貌は好うござえやしたろうね、容貌は」

侍「そんな事は何うでも宜しいが、能く見ると乙な女さ」

○「へえー、おい鐵、此方へ寄れ、ちよいと見ると美しい女だが、能く見ると眇目で横つ面ばかり見た、あゝいう事があるが、矢張其の質なんでしょう」

侍「足下が喋つてばかり居つては拙者は話が出来ぬ」

○「じゃア黙つてますから一つやつて下せえ」

侍「それから紙燭しそくを点つけて出て来て、お武家さま斯やまなか様な人も通らん山中へ何うしてお出でなさいました、拙者は武術修業の身の上ゆえ、敢あえて淋しい処を恐れはせぬが如何にも追々夜は更けるし、雨は降つて来る、誠に難渋いたすによつて一泊願ねいたいと云うと、何事も行ゆき届ときません、召上る物も何もございませぬし、着せてお寐ねかし申す物もございませぬ、それが御承知なれば見苦しけれども御遠慮なくお泊り遊ばせと、親切な女で汚たらひい盥たいへ谷水を汲んで来て、足をお洗いなさいというので足を洗いました」

○「へえー其の娘の親父か何かいましたらう」

侍「親父もない、娘一人で」

○「へえー……母おふくろ親おふくろもいませんか」

侍「そう喋つては困りますな」

○「もう云いませぬ、それから」

侍「ところが段々聞くと両親もなく、只一人斯かる山の中に居つて、躬みづから自然薯じねんじよを掘つて来るとか、或あるは菌いきのこを採るとか、薪たぎを採るとか、女ながら随分荒い稼かせぎをして微かすかに暮しておるといふ独身者ひとりものさ、見れば器量もなかく、好よい、色が白くて目は少し小さいが、眉毛

が濃い、口元が可愛らしく、髪の毛の光艶も好し、山家に稀な美人で

○「へえー、ふう成程」

侍「何とも云やアしない、まア黙つてお聞き」

○「へえ」

侍「拙者は修業の身の上で、好い女だとは思いましたけれど、猥らしい事を云い掛けるなどの念は毛頭ない」

○「それは何年頃の事ですか」

侍「丁度五年以前の事で」

○「あなたは幾歳だえ」

侍「其様な事を聞かなくとも宜い、三十九才じや」

○「老けているね……五年以前、じやア未だア壮な時でござえやすな」

侍「左様」

○「へえ、それから何うしました」

侍「拙者の枕元へ水などを持つて来て、喉が渴いたら召上れと種々手当をしてくれる、蕎麦搔を拵えて出したが、不味かつたけれども、親切の志有難く旨く喰いました」



○「蕎麦粉は宜うござえやしたろうが、醬油したじが悪かったに違えちげねえ、ぷんと来るやつで、此方こつちの醬油したじを持って行きたいね」

侍「何を云っている」

○「へえ、それから」

侍「娘は向うの方へ一人で寝る、時は丁度秋の末の事、山冷やまびえでどうも寒い、雨はばら／＼降る」

○「成程くうんくうん」

侍「娘は何うしたか何時いつまでも寝ないようで」

○「うん（膝へ手を突き前へ乗出し）それから」

侍「拙者に夜具を貸してしまい、娘は夜具無しで其処そこへごろりと寝ているから、どうも其方なたの着る物を貸して、此の寒いのに其方が夜具無しで寝るような事じゃア気の毒じゃ、風でも引かしては宜しくないというと、いえ宜しゆうございます、なに宜しい事はない、掛か蒲団けぶとんだけ持つて行つてください、拙者は敷蒲団をかけて寝るから、いゝえ何う致しましせんかと云つた」

○「へえー、ふう鐵もつと此方へ出る、面白い話になつて来た、旦那は真面目になつてるが、能く見ると助平そんな顔付だ、目尻が下つてて、旨く女をごまかしたね、中々油断は出来ねえ、白状おしなさい」

侍「ま、黙つてお聞きなさい、苟めにも男女七才にして席を同じゆうせずで、一つ寢床へ女と一緒に寝て、他に悪い評でも立てられると、修行の身の上なれば甚だ困ると断ると、左様ならば御足でも擦らして下さいましと云つた」

○「へえー、女の方で、えへ〜、矢張山の中で男珍らしいんで、えへ〜〜成程うん」  
侍「どうも様子が訝しい、変だと思つた」

○「なに先で思つていたんでしよう」

侍「それから拙者は此方の小さい座敷に寝ていると、改めて又枕元へ来てぴたりと跪いて」  
○「其の女が蹴躓きやアがつたんで」

侍「蹴躓いたのではない、丁寧 hands を突いて、先生私は何をお隠し申しませう、親の敵を尋ねる身の上でございます」

○「うん、其の女が…成程」

侍「敵は此の一村隔いて隣村に居ります、僅に八里山を越すと、現に敵が居りながら、

女の細腕で討つことが出来ません、先方は浪人者で、私の父は杣をいたして居りましたが、  
 山界やまぎかいの争い事から其の浪人者が仲裁なかに入り、掛合かけあいに来ましたのを恥はづかshめて帰した  
 事があります、其の争いに先方の山主やまぬしが負けたので、礼も貰えぬ所から、それを遺恨に  
 思いまして、其の浪人が私の父を殺害せつがいいたしたに相違ないという事は、世間の人も申せ  
 ば、私も左様に存じます、其の傍そばに扇子せんすが落ちてありました、黒骨の渋扇しぶせんへ金で山水が  
 描かいて有つて、確たしかに其の浪人が持つて居りました扇子おうぎで見覚えが有ります、どうか先生を  
 武術修行のお方とお見受け申して、お頼み申しますが、助太刀をなすつて敵かたきを討たして下  
 さいませんか、始めてお泊め申したお方に何とも恐入りますが、助太刀をなすつて本意を  
 遂げさせて下されば、何どの様な事でも貴方のお言葉は背きません、不束ふつゝな者で、迎とてもお  
 側にいるという訳には参りませんが、御飯焚ごはんたきでもお小間使いでも、お寝間の伽とぎでも仕よ  
 うという訳だ」

○「へえー、此奴こいつア矢張やっぱり然そういう事があるんでげしよう、へえー、なア……鐵やい、左官  
 の松まつの野郎が火事の時に手伝つて、それから御家ごけさま様の処とけえ出入でへえりをし、何日いつか深い訳にな  
 ったが、成程然そういう事がありましよう、それから何うしました」

侍「然そういう訳なれば宜しい、助太刀をして慥たしかに本意を遂げさせて遣ろうと受合うと、

女は悦んで、あゝ有難う草葉の蔭において両親も嘸悦びましよう、綺麗な顔で真に随喜の涙を流した」

○「へえー芋いもがら売見たような涙を」

侍「なに有難ありがたなみだ涙を」

○「へえ成程それから何うしました」

侍「ところで同衾ひとつに寝たんだ」

○「へえー甚ひどいなア……成程、鐵ウもつと前へ出る、大変な話になって来た」

向座敷で手をぼんくと打つと、又またぞろ候下女がまいって、

下婢「皆さんお静かになすつて、なるたけわア〜云わねえように願います」

○「へえ〜……それから何うしました、先生」

侍「いや止そう」

○「其処そこまで遣つて止すてえ事はありません、お願ねげえだから後あとを話しておくんなせえ」

侍「病人があると云うから止そう」

○「だつて先生、こゝで止めやちやア罪です」

侍「こゝらで止める方が宜かろう」

○「落話家や講釈師たア違えます」

侍「此処が丁度宜い段落だ」

○「おい、よ話しておくんねえなく」

侍「困るな…すると其の女にこう□□められた時には、身体痺れるような大力であつた」

○「へえー、それは化物だ、面白い話だね、それから」

侍「もう止そう」

○「冗談じゃアない、これで止められて堪るものか…皆さん誰か一つ旦那に頼んでおくんせえな、是から面白え処なんで、今止められちやア寝てから魅されらア」

侍「やるかなア」

○「うん成程、其の女が貴方の顔をペロ〜甜めたんで」

侍「なに甜めるものか、うーんと振解して、枕元にあつた無反の一刀を引抜いて、斬付けようとすると、がら〜と家鳴震動がした」

○「ふうん」

侍「ばら〜表へ逃げる様子、尚追掛けて出ると、這は如何に、拙者が化されていた

のじや、茅屋あばらやがあつたと思う処が、矢張野原で、片方かたはどうどうと溪間たにまに水の流れる音が聞え、片方は恐ろしい巖がんせき石せき峨々がたる山にして、ずうつと裏手は杉や縦もみなどの大樹だいじゆばかりの林で、其の中へばら／＼と追込んだな」

○「へえー成程、狐狸きつねは尻しつぽを出して何かに見せると云うが、貴方それから何うしました」

侍「追掛けて行つて、すうと一刀浴あびせると、ばたり前へ倒れた：化物が：拙者も疲れてどた／＼其処そこへ尻餅しつぽを搗ついた」

○「成程是は尤もつともです、痛いたうござえましたろう、其処に大きな石があつたんで」

侍「なに石も何もありません、余計な事を云わずに聞きなさい」

○「な何の化物でげす」

侍「善よく善く其の姿を見ると、それが伸餅のしもちの石に化かしたのさ」

○「へえ、何故だろうなア」

侍「だから何うしてもちぎる訳にいかん」

○「冗談じやアない、真面目な顔をして嘘うそばかり吐ついてる、皆みんなな嘘うそつべい話ばなしでいけねえ、己おれのは本当だ、此うちの中に聞いた人もあるだろう、何なんの話わき、大変だな、己ア江戸の者だ、谷中の久米野美作守様の屋敷へ出入の職人だったが、其処そこに大変な悪人がいて、渡邊様で

え人を斬つて、其の上に女を連れて逃げたは、え、何とかいう奴だっけ、然うよ、春部梅三郎よ、其奴は甚い奴で、重役の渡邊織江様を斬殺したんで、其の子が跡を追掛けて行くど、旨く言いくろめて、欺して到頭連出して、何とかいう所だっけ、然う、新町河原の傍で欺し討に渡邊様の子を殺して逃げたというんだが、大騒ぎよ、八州が八方へ手配りをしたが、山越をして甲府へ入ったという噂で」

鐵「止しねえ、うっかり喋るな、冗談じゃアねえぜ、若し八州のお役人が、是れは何う云う訳だ、他人に聞いたんでと云つても追付くめえ」

と一人が止めるのを、一人の男が頻りに知つたふりで喋つて居ります。

## 三十九

別座敷に寝て居りましたお竹が、此の話を洩れ聞き大きに驚き、

竹「もし、宗達様、（揺起す）」

宗「あい、つい看病疲れで少し眠ました、はあ」

竹「よく御寝なつていらつしやいますから、お起し申しましては誠に恐入りますが、少

し気になることを向座敷で噂をしております、他の者の話は嘘のように存じますが、中に江戸屋敷へ出入る職人とか申す者の話は、少し心配になりますから、お目を覚ましてくださいまし」

宗「あい……はア……つい何うも……はア大分まだ降つてる様子で、ばらく雨が戸へ当りますな」

竹「何卒あなた」

宗「はい……はア……何じや」

竹「其の話に春部と申す者が私の弟を新町河原で欺討にして甲府へ逃げたと云う事でございますが、何卒委しく尋ねて下さいまし、都合に寄つては又江戸へ帰るような事にもなろうと思えますから」

宗「それは怪しからん、図らず此処で聞くといは妙なことじや、江戸の、うんく職人体の下屋敷へ出入る者、宜しい……え、御免ください」

と宗達和尚が向座敷の襖を開けて、大勢の中に入りました。見ると矢立を持つて鼠無地の衣服に、綿の沢山入っております半纏を着て居り、月代が蓬々として看病疲れで顔色の悪い坊さんでございますから、一座の人々が驚きました。



○「はい、おいでなさい」

宗「あゝ江戸のお方は何方どなたで」

○「江戸の者は私わっちで、奥州仙台や常陸の竜ヶ崎や何か集つてるんで、へえ」

宗「只今向座敷で聞いておつた処が、その江戸に久米野殿の屋敷へ出入りをなさる職人というはあなた方か」

○「えゝ私わっちでござえやす」

鐵「えおい、だから余計なことを言うなつて云うんだ、詰らねえ事を喋るからお互たげえに掛か合りあひになるよ」

宗「で、その久米野殿の御家来に渡邊織江と申す者があつて人手にかゝり、其の子が親の敵かたきを尋ねに歩いた処、春部梅三郎と申す者に欺かれて、新町とかで殺されたと云う話、八州が何うとかしたとの事じやが、それを委くわしく話してください」

鐵「だから云わねえ事じやアねえ、先方むこうは彼あんな姿で来たつて八州の隠密だよ」

と一人の連つれの者に云われ、一人は真蒼まつさおになり、ぶるゝと顛ふえ出し、碌々口もきけません様子。

○「なに本当に知つている訳じやアござえやせん、朦朧ぼんやりと知つてるんで、へえ一寸人ちよつと

に聞いたんで」

宗「聞いたたら聞いたゞけの事を告げなさい、新町河原で渡邊祖五郎を殺害した春部梅三郎という者は何れへ逃げた」

○「あ彼方へ逃げて……それから秩父へ出たんで」

宗「うん成程、秩父へ出て」

○「それからこ甲府へ逃げたんで」

宗「秩父越しをいたして甲府の方へ八州が追掛けたのか」

鐵「お、お、仕様がねえな、本当に手前は饒舌だな」

○「饒舌だつて劍術の先生や何かも皆な喋つたじゃアねえか……何でござえやす……え、其の八州が追掛けて何したんで、当りを付けたんで」

宗「何ういう処に当りが付きましたな」

○「そりやア何でござえやす、鴻の巣の宿屋でござえやす」

宗「は、一鴻の巣の宿屋……（紙の端へ書留め）それは何という宿屋じゃ」

○「私ア知りやせん、其の宿屋へ女を連れて逃げたんで、其の宿屋が春部とかいう奴が勤めていた屋敷に奉公していて、私通いて連れて逃げた女の親里とかいう事で」

宗 「うん…それから」

○ 「それっ切り知りやせん」

宗 「知らん事は無かろう、知らんと云つても知らんでは通さん」

○ 「へえ…（泣声）御免なせえ、真平御免下さい」

宗 「あなた方は江戸は何処だ」

○ 「真平御免…」

宗 「御免も何もない、言わんければなりませんよ」

○ 「へえ外神田金沢町で」

宗 「うん外神田金沢町…名前は」

○ 「甚太つ子」

宗 「甚太つ子という名前がありますか、甚太郎かえ」

○ 「慥か然うで」

宗 「甚太郎…其方にいるお方は」

鐵 「私は喋つたんでもねえんで」

宗 「言わんでも宜い、名前が宿帳と違ふとなりませんぞ、宜いかえ」

鐵「へえ、下谷茅町二丁目で」

宗「お名前は」

鐵「ガラ鐵てえんで」

宗「ガラ鐵という名はない、鐵五郎かえ」

鐵「へえ」

宗「宜しい」

鐵「御免なさい」

と驚いて直に其の晩の内此処を逃出して、夜通し高崎まで逃げたという。其様なに逃げなくとも宜しいのに。此方はお竹が病苦の中にて此の話を聞き、どうか直に此処を立ちたいと云う。

宗「何うして今から立たれるものか、碓氷を越さなければならん」

と稍くの事で止めました。翌朝になると、お竹は尚更癩気が起つて、病気は益々重体だが当人が何分にも肯きませんから、駕籠を備い、碓氷を越して松井田から安中宿へ掛り、安中から新町河原まで来ますと、とつぷり日は暮れ、往來の人は途絶えた処で、駕籠から下りてがっかり致し、お竹はまたキヤク差込んで来ました。宗達は驚いて抱起し

たが、昇夫かじやは此処こゝまでの約束だといふので不人情にも病人を見棄て、其の儘ままずん／＼往つてしまいました。宗達は持合せた薬のを服のませ、水を汲んで来ようと致したましたが、他に仕方がないから、ろはつという禪宗坊主の持つ碗わんを出して、一杯流れの水を汲んで持つて来ましました。漸ようやくお竹に水を飲ませ、頻しきりと介抱を致しましたが、中々はげ烈ししい事で、

竹「ウ、ーン」

と河原の中へ其の儘そり反かえりました。

宗「あゝ困つたものじや、何うか助けたいものじや」

と又薬を飲まし、口移しに水を啣ふくませ、お竹を□□めて我肌わがの温あたかみで暖めて居ります内に、雪はぱつたり止み、雲が切れて十四日かの月が段々と差異つてまいる内に、雪明りと月光つきあかりとで熟つく々々、お竹の顔を見ますと、出家でも木竹きたけの身では無い、忽たちまち起る煩惱ぼんごに春情しゆんじやうが発動はつどういたしました。御出家の方では先まず飲酒おんしゆかい戒かいと云つて酒を戒め、邪淫戒じやういんかいと申して不義の淫事を戒めてあります。つまり守り難いのは此の戒かいでございませう。此の念ねんを断切たちきる事は何うも難かたい事です、修業中の行脚を致しましても、よく宿場女郎しゆくじやうを買い、或あるいは宿屋しゆくやの下婢おんなに戯れ、酒のためについ墮落して、折角積上げた修業も水の泡に致してしまう事ことがあります、未だま壯さかんな宗達和尚、お竹の器量きりやうと云い、不断つたの心こゝろ懸がけといひ、実に惚

れ／＼するような女、其の上侍の娘ゆえ中々凜々しい氣象なれども、また柔しい処のあ  
るは真に是が本当の女で、斯かる娘は容易に無いと疾から惚込んで、看病をする内にも度  
々起る煩惱を断切り／＼公案をしては此の念を払って居りましたが、今は迷の道に踏入  
つて、我ながら魔界へ落ちたと、ぐつとお竹を□□める途端に、温みでふと気が附いたお  
竹が、眼を開いて見ますと、力に思う宗達和尚が、常にもない不行跡、髭だらけの頬を  
我が顔へ当て、肌を開いて□□めて居りますから、驚いて、

竹「アレー、何を遊ばします」

と宗達和尚を突退けて向うへ駆出しにかゝる袖を確かり押えて、

宗「お竹さん御道理じゃ、どうも迷うた、もうとても出家は遂げられん、私はお前の看  
病をして枕元に附添い、次の間に寝ていても、此の程はお前の身体が利かんによつて、便  
所へ行くにも手を引いて連れて行き、足や腰を撫てあげると云うのも、実は私が迷いを起  
したからじゃ、とても此の煩惱が起きては私は出家が遂げられん、真に私はお前に惚れた、  
□□□□私の云う事を肯いてくだされば、衣も棄て珠数を切り、生えかゝった月代を幸  
いに一つ竈とやらに前を剃こぼつて、お前の供をして美作国まで送つて上げ、敵を討  
つような話も聞いたが、何の様な事か理由は知らんが、助太刀も仕ようし、又何の様な事

でも御舎弟と俱ともに力を添える、誠に面目ない恥入った次第じゃが、何うぞ私の言う事を肯  
いてくださいれ」

と云われ、呆れてお竹は宗達の顔を見ますと、宗達の顔色は変り、眼の色も変り、少し  
狂ようつ気すしている容子で、掴つかみ付きにかゝるのを突退つぎのけて、お竹は腹立紛れに懐へ手を入れて、  
母の形見の合口の柄つかを握つかつて、寄らば突殺すと云うけんまくゆえ、此方こちらも顔の色が違いま  
した。

竹「宗達さん、あなたは怪けしからぬお方で、御出家のお身みのうえ上うで……御幼年の時分から御  
修業なすつて、何年の間行脚をなすつて、私わしは斯う云う修業をした、仏法は有難いものじ  
や、斯ういうものじやによつて、お前も迷いを起してはならないと、宿に泊つて居りまし  
ても臥床ふせる迄は貴方の御教導、あゝ有難いお話で、大きに悟ることもありました、美作ま  
で送つて遣ろうとおっしゃつても、他の方なれば断る処なれど、御出家様ゆえ安心して願  
いました甲斐もなく、貴方が然そう云うお心になつてはなりません、何卒どうぞ迷いを晴らして……  
：憤おこりはしませんから、元々通り道連れの女と思召して、美作までお送り遊ばしてください  
いまし、是迄の御真実わたくしは私わたくしが存じて居りますから」  
宗「むゝう、是程に云つてもお聞き、ず濟ずみはありませんか」

竹「どうして貴方大事を抱えている身の上で其様な事が出来ませぬものか」

宗「然うか……そうお前に強う云われたらもう是までじゃ、私もどうせ迷いを起し魔界に墮ちたれば、飽までも邪に行く、私はこれで別れる、あなたは煩うている身体で鴻の巢まで行きなさい、それも宜いが、道の勝手を知って居るまい、夜道にかゝつて、女の一人旅は何の様な難儀があろうも知れぬ、さ、これで別れましょう」

竹「お別れ申しても仕方がございませぬけれども、貴方の迷いの心を翻えしてさえくたされば、私に於てはお恨みとも何とも存じませぬから」

宗「いや、お前は何ともあるまいが、此方に有るのじゃ、私は還俗してお前のためには力を添えて、何の様にも仕よう、長旅をして、お前を美作まで送って上げようとは、今迄した修業を水の泡にしてしまうのも皆なお前のためじゃ、何うぞ私の願を叶えてください、それとも肯かんければ詮方がない、もう此の上は鬼になって、何の様な事をしても此の念を晴さずには置かん、仕儀によつては手込にもせずばならん」

と飛付きに掛りますから、お竹は慌て、跡へ飛退つて、

竹「迷うたか御出家、寄ると只は置きませぬぞ」

と合口をすらりと引抜いて振上げ、けんまくを変えたから、



宗「おまえは私を斬る気になったのじやな、最う此の上は可愛さ余って憎さが百倍、さ斬っておくれ」

と云いながら身を躲して飛付きにかゝる。

竹「そんなれば最う是迄」

と引払って突きにかゝる途端に、ころり足が這つて雪の中へ転ぶと一杯の血で、

宗「おゝ何処か怪我アせんか」

竹「私を斬つたな、法衣を着るお身で貴方は恐しい殺生戒を破つて、ハツく、お前さんは鬼になった処じゃアない蛇になった、あゝ宗達という御出家は人殺しイ」

と云うが、ピーンと川へ響けます。

宗「あゝ悪い事をした、お竹さんが此様な怪我をする事になったのも畢竟我が迷い、実に仏罰は恐ろしいものである」

と思つたので宗達はカアと取逆上せて、お竹が持っていた合口を捻取つて、

「お前一人は殺しはせん、私も一緒に死んで、地獄の道案内をしましょう」

と云いながら我腹へプツリ。

宗「ウゝーンく」

竹「もしく……宗達さま」

宗「あいく……あい……はア」

竹「あなたは大層うな覽されていらつしやいました」

宗「あいく、あ……お、お竹さま」

竹「はい」

宗「あなたはお達者で」

竹「あなた怖い夢でも御覽なすつたか、大層うな覽されて、お額へ汗が大変に」

宗「はいく……お前は何うしたえ」

竹「はい、私は大きに熱あつが退とれましたかして少し落着おちきました」

宗「左様か、ウ、ン……煩惱ぼんねう經にある睡眠、あ、夢むちゆう中の夢ゆめじゃ、実に怖いものじゃの、

あ、悪い夢を視みました、悪い夢を視みました」

と心こゝろの中に公案こうあんを二十ばかり重ねて云いながら、手拭てふきを出して額かぶと胸むねの辺あたりの汗あせを拭ぬいて、

ホツと息いきを吐つき、

宗「あ、迷まよいというものは甚ひどいものじゃ」

さて又桑野の屋敷では丁度八月の六日の事でございます。此の程は大殿様が余程御重症でございます。お医者も手に手を尽して種々の妙薬を用いるが、どうも効能が薄いことで、大殿様はお加減の悪い中にまた御舎弟紋之丞様は、只今で云えば疝労とか肺労とかいうような症で、漸々お痩せになりまして、勇気のお方がお咳が出るようになり、お手当は十分でございますが、どうも思うように薬の効能が無い、唯今で申せば空氣の異つた所へと申すのだが、其の頃では方位が悪いとか申す事で、小梅の中屋敷へいらつしやるかと思ふと、又お下屋敷へ入らつしやいまして、谷中のお下屋敷で御養生中でありまして、若殿の御病氣は変であるという噂が立つて来ましたので、忠義の御家来などは心配して居られます。五百石取りの御家来秋月喜一郎というは、彼の春部梅三郎の伯父に当る人で、御内室はお浪と云つて今年三十一で、色の浅黒い大柄でございますが、極柔なお方でございます。或日良人に対し、

浪「いつもの婆がまいりました、あの大きな籠を脊負つてお芋だの大根だの、菜や何かを売りに来る婆でございます」

秋「あ、田端<sup>たばたへん</sup>辺からまいる老婆か、久しく来んで居ったが、何<sup>なん</sup>ぞ買ってやつたら宜かるう」

浪「貴方<sup>あつら</sup>がお誂<sup>あつら</sup>えだと申して塵<sup>ごみ</sup>だらけの瓢<sup>ぶくべ</sup>を持ってまいりましたが、彼<sup>あれ</sup>はお花<sup>はな</sup>活<sup>いけ</sup>に遊ばしましても余り好<sup>よ</sup>い姿ではございませぬ」

秋「然<sup>そ</sup>うか、それはどうも……私<sup>わし</sup>が去年頼んで置いたのが出来たのだろう、それでも能く丹誠<sup>たんせい</sup>して……早速<sup>さつそく</sup>此<sup>こゝ</sup>処へ呼ぶが宜<sup>よ</sup>い、庭へ通した方が宜<sup>よ</sup>かろう」

浪「はい」

と是から下男が案内して庭口へ廻しますと、飛<sup>とび</sup>石<sup>いし</sup>を伝<sup>つた</sup>ってひよこくと婆<sup>ばあ</sup>さまが籠<sup>かご</sup>を脊<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>つて入<sup>い</sup>つて来<sup>き</sup>ました。縁<sup>えん</sup>先<sup>せん</sup>の敷<sup>敷</sup>物<sup>もの</sup>の上<sup>うへ</sup>に座<sup>ざ</sup>蒲<sup>ふ</sup>団<sup>だん</sup>を敷<sup>敷</sup>き、前<sup>まへ</sup>の処<sup>ところ</sup>へ烟<sup>えん</sup>草<sup>そう</sup>盆<sup>ぼん</sup>が<sup>が</sup>出<sup>で</sup>て<sup>い</sup>る、秋月<sup>しゅうげつ</sup>殿<sup>でん</sup>は黒<sup>くろ</sup>手<sup>て</sup>の細<sup>こ</sup>かい縞<sup>しま</sup>の黄<sup>わう</sup>八<sup>はち</sup>丈<sup>ぢょう</sup>の单<sup>ひとえ</sup>衣<sup>い</sup>に本<sup>ほん</sup>献<sup>けん</sup>上<sup>じょう</sup>の帯<sup>おビ</sup>を締<sup>ひ</sup>めて、下<sup>した</sup>襦<sup>じゆ</sup>袷<sup>あ</sup>を着<sup>き</sup>て居<sup>ゐ</sup>られま<sup>し</sup>た。誠<sup>まこと</sup>にお堅<sup>かた</sup>い人<sup>ひと</sup>でございませぬ。目<sup>め</sup>下<sup>げ</sup>の者<sup>もの</sup>にまで丁<sup>てい</sup>寧<sup>ねい</sup>に、

秋「さアく婆<sup>ばあ</sup>こゝへ来<sup>き</sup>い」

婆「はい、誠<sup>まこと</sup>に御<sup>ご</sup>無<sup>む</sup>沙<sup>さ</sup>汰<sup>た</sup>をしましてま<sup>ま</sup>今<sup>こん</sup>日<sup>にち</sup>は<sup>は</sup>お庭<sup>にわ</sup>へ通<sup>と</sup>れと<sup>と</sup>おし<sup>し</sup>や<sup>や</sup>つて、此<sup>こ</sup>様<sup>よう</sup>な<sup>な</sup>は<sup>は</sup>ア結<sup>むす</sup>構<sup>かま</sup>な<sup>な</sup>お庭<sup>にわ</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>容<sup>ゆる</sup>易<sup>い</sup>に<sup>に</sup>ア出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ね<sup>え</sup>事<sup>こと</sup>だ<sup>だ</sup>か<sup>か</sup>ら、ま<sup>ま</sup>遠<sup>とほ</sup>慮<sup>り</sup>申<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>ね<sup>え</sup>ば<sup>ば</sup>なん<sup>ん</sup>ね<sup>え</sup>が、御<sup>ご</sup>遠<sup>とほ</sup>慮<sup>り</sup>申<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>ず<sup>ず</sup>に<sup>に</sup>見<sup>み</sup>て、媳<sup>よめ</sup>つ子<sup>こ</sup>や<sup>や</sup>倅<sup>せ</sup>に<sup>に</sup>話<sup>わ</sup>して<sup>して</sup>聞<sup>き</sup>か<sup>か</sup>せ<sup>せ</sup>べ<sup>い</sup>と思<sup>おも</sup>つて<sup>て</sup>参<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>した、皆<sup>みな</sup>様<sup>さま</sup>お<sup>お</sup>変<sup>へ</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>ご<sup>ご</sup>ぜ<sup>え</sup>え<sup>え</sup>ま

せんで」

秋「婆ばやア丈夫じゆうぶだの、幾歳いくつになるの」

婆「はい、六十八になりますよ」

秋「六十八、左様か、アハ、いやどうも達者たつしやだな田端たんぱんだっけな」

婆「はい、田端たんぱんでござえます」

秋「名は何なという」

婆「はい、お繩なわと申まをします」

秋「妙な名なだな、お繩なわ：フ、余り聞かん名なだの」

婆「はいあの私わしの村むらの鎮守ちんしゆう様さまは八幡はちまん様さまでござえます、其そのの別当べつたうは真言宗しんげんしゆうで東覚寺とうかくじと申

します、其そのの脇わきに不動ふどう様さまのお堂だうがござえまして私わたくしの両親ふたおやが子こが無ねえつて其そのの不動ふどう様さまへ心しん

願ねがを掛かけました処ところが、不動ふどう様さまが出てござらつしやつて、左ひだりの手てで母親おふくろの腹はらア緊縛しつちばつ

て、せつないと思おもつて眼めえ覚さめた、申子もうしこでゞもありませうかえ、それから母親ははがおつ妊ばらん

で、だん／＼腹でかが太ふくなつて、当あたる十月とつきに私わしが生なれたてえ話わでござえます、繩なわで腹はらア縛しば

られたからお繩なわと命いのちけたら宜よかんべえと云いつて附つけたでござえますが、是こゝでも生なれた時ときに

やア此こ様な婆ばやアじゃアござえません」

秋「アハ、田舎の者は正直だな、手前は久しく来なかつたのう」

婆「はい、ま、ね、秋は一番忙がしゆうござえまして、それになに私などは田地を沢山持つて居ねえもんだから、他人の田地を手伝をして、小島で取上げたものを些とべえ売りに参ります、白山の駒込の市場へ参つて、彼処で自分の物を広げるだけの場所を借りれば商いが出来ます」

秋「成程左様か、娘が有るかえ」

婆「いえ嫁つ子でござえます、是が心懸の宜いもので、忪と二人で能く稼ぎます、私は宅にばかり居ちやア小遣取りが出来ましねえから、斯うやって小遣取りに出かけます」

秋「そうか、茶ア遣れ、さ菓子をやろう」

婆「有難う：おや／＼まア是れだけおくんなさいますか、まア此様に沢山結構なお菓子を」  
秋「宜いよ、また来たたら遣ろう」

婆「はい、此の前参りました時、巨え御紋の附いたお菓子を戴きましたつけ、在所に居ちやア迎も見ることも出来ねえ、お屋敷様から戴えた、有りがたい事だつて村中の子供のある処へ些とずつ遣りましたよ、毎度はや誠に有難い事でござえます」

秋「どうだ、暑中の田の草取りは中々辛いだろうのう」

婆「はい、熱いと思つちやア兎ても出来ませんが、草が生えると稲が痩せますから、何うしても除とつてやらねえばなりません、此間儲こねえけもんでござえまして、蝦夷虫一疋取えどむしいつびきれば錢い六百ずつくれると云うから、大概の前栽物せんざいものを脊負しよい出すより其の方が楽だから、おまえさま捕とつつかめえて、毒なア虫でござえますから、籠かごへ入れて蓋ふたをしては持つて参めえります」

秋「ム、ウ、それは何ういう虫だえ」

婆「あの斑はん猫みょうてえ虫で」

秋「ム、ウ斑猫……何か一疋で六百文ずつ……どんな処にいるものだえ」

婆「はい、豆の葉たかに集たかつて居ります、在所じやア蝦夷虫えどむしと云つて忌いやがりますよ」

秋「何なんにいたすのだ」

婆「何だかお医者いしやが随ついて来まして膏藥こうやくに練ねると、これが大でえ薬になる、毒と云うものも、使つかいようで薬くすりに成なるだてえました」

秋「ム、ウ、何なんの位捕とつまった」

婆「左様さやうでござえます、沢山たくさんでなければ利かねえつて、何なんにするんだか沢山たんとい入いるつて、えら捕とつめえましたつけ」

秋「そりやア妙だ、医者は何処どこの者だ」

婆「何処の者だか知んねえで、一人男を連れて来て、其の虫を捕つかまって置きさえすれば六百ずつ置いては持つて往いきます、其の人は今日お前様白山へ参めえりますと、白山様の門の坂の途中とこの処とこにある、小金屋という飴屋にいたゞよ、私わしは懇ちかづき意いだからお前様の家うちは此こゝ処とこかえと何気なしに聞くと、其の男が言つては悪いというように眼附をしましたっけ」

秋「はて、それから何う致した」

婆「私わしも小声で、今日は虫たぐさんが沢山とは捕れましねえと云うと、明日あした己おれが行くから今日は何も云うなつて銭たもとい袂とへ入れたから、幾許いくらだと思つて見ると一貫呉れたから、あゝ是は内儀かみさんや奉公人に内証ないしようで毒虫を捕るのだと勘かづきましたよ」

秋「ム、ウ白山前の小金屋という飴屋か」

婆「はい」

秋「あれは御当家の出入でいりである……茶の好よいのを入れてください、婆ア飯を馳走をしようかな」

婆「はい、有難う存じます」

秋「婆ア些ちつと頼たのみたい事があるが、明日あした手前うちの家へ私わしが行くがな、其の飴屋という者を内な



い  
々で私に会わしてくれんか」

婆「はい、殿様は彼の飴屋の御亭主を御存じで」

秋「いや、知らんが、少し思うことがある、それゆえ貴様の家へ往くんだが、貴様の家は二間あるか、失礼な事を云うようだが、広いかえ」

婆「店の処は土間になって居りまして、折曲つて内へ入るんですが、土間へは、薪を置いたり炭俵を積んどくですが、二間ぐれえはごぜえます、庭も些とばかりあつて、奥が六畳になつて、縁側附で爐も切つてあつて、都合が宜うごぜえます、其の奥の方も畳を敷けば八畳もありましょうか、直に折曲つて台所になつて居ります」

秋「そんなら六畳の方でも八畳の方でも宜いが、その処に隠れていて、飴屋の亭主が来た時に私に知らしてくれ、それまで私を奥の方へ隠して置くような工夫をしてくれ、ば辱けないが、隠れる処があるかえ」

婆「はい、狭うごぜえますし、それに殿様が入らつしたつて、汚くつて坐る処もないが、上の藤右衛門の処に屏風が有りますから、それを立廻してあげましょう」

秋「それは至極宜かろう、何でも宜しい、私が弁当を持って行くから別に厄介にはならん」  
婆「旨えものは有りませんが、在郷のことですから焚立の御飯ぐらいは出来ず、畑物

の茄子なすぐらい煮て上げましようよ」

秋「然そうしてくれ、ば千万かたじ辱けないが、事に寄ると私わしひとり一人で往ゆくがな、飴屋の亭主に知れちやアならんのだが、何時なんじきぐらいに飴屋の亭主は来るな」

婆「左様さ、大概お昼を喫あがつてから出て参りますが、彼あれでも未刻やつすぎ過ぐらいにはまいりましようか、それとも早く来ますかも知れませんよ」

秋「そんなら私わしは正午前ひるまえに弁当を持ってまいる、村方の者にも云つちやアならん」

婆「ハア、それは何ういう理由わけで」

秋「此この方に少ほし訳があるんだ、注文をして置いた瓢ひょうたん 罎たんを持って来たとな」

婆「誠に妙な形なりでお役に立つか知りませんが」

と差出すを見て、

秋「斯かういう形かたちじゃア不都合じゃが」

婆「其の代り無代たゞで宜うがなす、口を打欠ぶつけえて種子たねえ投込んで、担のへ釣下げて置きましたから、錢も何も要いらねえもんでござえますが、思召おぼしめしが有るなら十六文でも廿四文でも戴かきたいもんで」

秋「是はほんの心ばかりだが、百疋ひき遣る」

婆「いや何う致しまして、殿様此様なに戴いては済みません」

秋「いや、取とけく、お飯を喫べさせてやろう」

と是からお飯を喫べさせて歸しました。さて秋月喜一郎は翌日野掛の姿になり、弁当を持たせ、家来を一人召連れて婆の宅を尋ねてまいりました。彼の田端村から西の方へ深く切れてまいると、丁度東覚寺の裏手に当ります処で。

秋「此処かの、……婆は在宅か、此処かの、婆はいないか」

婆「ホーイ、おやおいでなせえましよ、さ此処でござえますよ、ままだうも……今朝つから悴も悦んで、殿様がおいでがあると云うので、待に待つて居りました処でござえます、何卒直にお上んなすつて……お供さん御苦労さまでござえました」

秋「其の様に大きな声をして構つてくれては困る、世間へ知れんように」

婆「心配ござえませんかからお構えなく」

秋「左ようか……其の包を其の儘此方へ出してくれ」

婆「はい」

秋「これ婆ア、是は詰らんものだが、ほんの土産だ、是れは御新造が婆アが寒い時分に江戸へ出て来る時に着る半纏にでもしたら宜かろう、綿は其方にあると云つて、有合せ

の裏をつけてよこしました」

婆「あれアア……魂消ますなア、此様なに戴きましては済みませんでござえます、これやい此処へ来う忪や」

忪「へえ御免なせえまし……毎度ハヤ婆が出まして御鼻肩になりまして、帰つて来ましちやア悦んで、何とハア有難え事で、己ような身の上でお屋敷へ出て、立派なアお方さまの側で以てからにお飯ア戴いたり、直接にお言葉を掛けて下さるてえのは冥加至極だと云つて、毎度帰りますとお屋敷の噂ばかり致して居ります、へえ誠に有難い事で」

秋「いや〜婆に碌に手当もせんが、今日は少し迷惑だろうが、少しの間座敷を貸してくれ、弁当は持参してまいつたから、決して心配をしてくれるな、兎や角構つてくれては却つて困る、これは貴様の妻か」

嘉「へえ、私の鼻でござえます、ぞんぜえもので」

妻「お入来なせえまし、毎度お母が参りましては種々御厄介になります、何うかお支度を」

秋「いやもう構つてくれるな、早く屏風を立廻してくれ」

婆「畏りました、破けて居りますが、彼でも借りてめえりましょう、其処な家では自慢で

ごぜえます、村へ入る画工が描いたんで、立派というわけには参りません、お屋敷様のよ  
うじやアないが、丹誠して描いたんだてえます」

秋「成程是は妙な画だ、福祿寿にしては形が変だな、成程大分宜い画だ」

婆「宅で拵えた新茶でがんす、嘉八や能くお礼を申上げろ」

嘉「誠に有難うごぜえます、貴方飴屋が参りますと、何かお尋ねなせえますで」

秋「其様なことを云つちやアいけない」

嘉「実はその去年から頼まれて居りますが、婆さまの云うにア、それは宜えが訝しいじや  
アなえか、何ういう理由か知んねえ、毒な虫を捕つて六百文貰つて宜えかえ、なに構ア事  
はなえが、黒い羽織を着て、立派なア人が来るです」

秋「まゝ其様なことを云つちやアいけない」

嘉「へえく、なに此処は別に通る人もごぜえませんけれども、梅の時分には店へ腰をか  
けて、草駄足を休める人もありますから、些とべえ駄菓子置いて、草履草鞋を吊下げ  
て、商いをほんの片手間に致しますので、子供も滅多に遊びにも参りません、手習をし  
まつて寺から帰つて来ると、一文菓子をくれせえと云つて参りますが、それまでは誰も参  
りませんから、安心して何でもおつしやいまし、お帰りに重とうごぜえましようが、芋莖

がでか大きく成りましたから五六把引ばひつこ抜いてお土産にお持ちなすつて」

供「旦那さま、芋莖のお土産は御免を蒙りとうございます……御亭主旦那様は芋莖がお嫌いだからお土産は成るだけ軽いものが宜い」

嘉「軽いものと仰しやつても今上げるものはござえませぬ、南瓜とうなすがちつと残つて居ますし、柿は未だ少し渋が切れないようですが、柿を」

供「柿の樹はお屋敷にもあります」

秋「今日は来ないかの」

嘉「いえ急度きつとめえ参るに相違ござえませぬ」

と云つている内に、只今の午後三時とおもう頃に遣つてまいりましたのは、飴屋の源兵衛でございます。

源「あい御免よ」

婆「はい、お出でなせえまし、さ、お上あがんなせえまし」

源「あゝ何うも草臥くたびれた、此処こゝまで来るとがつかりする、あい誠に御亭主此間こないだは」

嘉「へえ、是はいらつしやいまし、久しくお出いでがござえませんでしたな、漸々だん／＼秋も末になつて参めえりまして、毒虫も思うように捕とれねえで」

源「これ〜大きな声をするな、是れは毒の氣を取つて膏藥を拵えるんだ、私は前に藥種屋だと云つたが、昨日婆さんに会つた、隠し事は出来ねえもんだ、これは口止めだよ、少しばかりだが」

嘉「どうもこれは…」

源「其の代り他人に云うといけないよ」

嘉「いえ申しませんでござえます」

源「私も十露盤を取つて商いをする身だから、沢山の礼も出来ないが、五両上げる」

嘉「え、五両…魂消ますな、五両なんて戴く訳もなし、一疋捕まえて六百文ずつにな

れば立派な立前はあるのに、此様なに、大く戴きますのは止しましょうよ」

源「いや〜其様なことを云わないで取つてお置き、事に寄ると為めになる事もあるから、決して他人に云つちやア成りませんよ、私が頼んだという事を」

婆「それは忤も嫁も心配打つていますが、他の者じやアなし、毒な虫をお前様に六百ずつで売つて、何ういう事で間違えでも出来やアしねえかと心配してえます」

源「其様な事は有りやアしないよ、此の虫を沢山捕えて医者様が壇の中へ入れて製法すると、烈しい病も癒るといは、藥の毒と病の毒と衝突うから癒るといので、ま其様なに

心配しないでも宜い」

婆「お金は戴きませんよ、なア忪」

嘉「え、これは戴けません、此間こねえだから一疋で六百ずつの立前たちめえになるんでせえ途方も無ねえ事だと思つてゐるけれど、これが玉虫とか冨角虫さいかちむしとかを捕とるのなれば大変だが、一豆の葉たかに集たかつて、誰にでも捕れるものを大金てえきんを出して下さるだもの、其様そんなに戴いちやア済みません」

源「これ、其様そんな大きな声を出しちやアいけない」

嘉「これは何うしても戴きません」

源「そこに種いろく々理由わけがあるんだ、其様そんなことを云つては困る、これは取つて置いてくれ」  
嘉「へえ立前たちめえは戴きます、ま此方こつちへお上あがんなすつて、なに其処そこを締めろびつたり締めて置け、砂いが入いつていかねえから……え、風いが入いりますから、ま此方こつちへ……何もござえませんがお飯まんまでも喰たべてつておくんせえまし」

源「お飯は喰たべたくないが、礼を受けてくれんと誠に困るがな、受けませんか」

嘉「へえ」

と何う有つても受けない、百姓は堅いから何うしても受けません。源兵衛も困つて、



源「そんなら茶代に」

と云つて二分出しますと、

嘉「お構い申しもしませんのに……お茶代と云うだけに戴きましよう、誠にどうも、へえ」

源「今日は帰ります、婆さん又彼方へ来たらお寄り、だが、私が此処へ来たことは家内へ知れると悪いから、店へは寄らん方が宜い、店には奉公人もいるから」

婆「いえ、お寄り申しませんよ、はい左様なら、氣を付けてお帰んなせえましょ」

源「あい」

是から麻裏草履を穿いて小金屋源兵衛が出にかゝる屏風の中で。

秋月「源兵衛源兵衛」

と呼ばれ、源兵衛は不審な顔をして振り反り、

源「誰だ……何方でげす、私をお呼びなさるのは何方ですな」

秋「私じゃ、一寸上れ、ま此方へ入つても宜い、思い掛ない処で会つたな」

源「何方でげす」

と屏風を開けて入り、其の人を見ると、秋月喜一郎という重役ゆえ、源兵衛は肝を潰し、胸にぎつくりと応えたが、素知らぬ体にて。

源「誠に思い掛ない処で、御機嫌宜しゅう」

秋「少し手前に尋ねたい事があつて、急ぐか知らんが、同道しても宜しい、暫く待つてくれ、少し問う事がある、源兵衛其の方は何ういう縁か、飴屋風情でお屋敷の出入町人となつてゐる故、殿様の有難い辱ないという事を思うなら、又此の方が貴様を引廻しても遣わすが、真以て上を有難いと心得てお出入をするか、それから先へ聞いて、後は緩くり話そう」

源「へえ誠にどうも細かい商いでございますが、御用向を仰付けられて誠に有難いことだ、冥加至極と存じまして、へえ結構な菓子屋や其のお出入もある中にて、飴屋風情がお出入とは実に冥加至極と存じて居ります、殿様が有難くないなど、誰が其様なことを申しました」

秋「いや然うじやアない、真に有難いと心得て居るだろう」

源「それは仰しやるまでもございませぬ、此の後ともお引廻しを願ひとう存じます」

秋「それでは源兵衛、手前が何の様に隠しても隠されん処の此方に確かな証拠がある、隠さずに云え、じやが手前は何ういう訳で斑猫という毒虫を婆に頼んで一疋六百ずつで買うか、それを聞こう」

と源兵衛の顔を見詰めている中に、顔色が變つてまいると、秋月喜一郎は態とや  
く笑いかけました。

## 四十一

さて秋月喜一郎は、飴屋源兵衛を柔らかに欺して白状させようという了簡、其の頃お武  
家が暴い事をいたすと、町人は却つて驚いて、云うことも前後致したり、言いたいことも  
言い兼ね、それがために物の分らんような事が、毎度町奉行所でもあつた事でございます。  
源兵衛は何うして知れたかと思つて、顔色を変え、突いていた手がぶる／＼震える様子  
ゆえ、喜一郎は笑を含みまして、物柔らかに、  
秋「いや源兵衛何か心配をして、これを言つてはならんとか、彼を言つては他役人の身の  
上にも拘わるだろうと深く思い過して、隠し立てを致すと却つて為にならんど、定めし上  
役の者が其の方に折入つて頼んだ事も有るであらうが、其の者の身分柄にも障るような  
事があつてはならんから、これは秋月に言つては悪かろうと、斯う手前が考えて物を隠す  
と、却つて悪い、と云うのは元來お屋敷へ出入を致すのには、殿様を大事と心得なければ

ならん、そりやアまた出入町人にはそれ／＼係りの者もあるから、係り役人を粗末にしろと云うのではないが、素より手前は上の召上り物の御用を達す身の上ではないか、なア」  
源「へえ誠にどうも其の、えゝゝ何うも私がその、事柄を弁えませぬものでございまして、唯飴屋風情の者がお屋敷へお出入を致しまして、お身柄のあります貴方様を始め、皆様に直々斯う遣つてお目通りをいたし、誠に有難い事と心得まして、只私はえゝ何うも其の有難くばかり存じますので、へえ自然に申上げます事もその前後に相成ります」

秋「なに有難く心得て、言う事が前後になるといふのは可笑しい一体何ういう訳で手前は当家の婆に斑猫を捕つてくれると頼んだか、それを云えというんだ」

源「それはその私が懇意にいたします近辺に医者がございます、その医者がどうも其の薬を……薬は一体毒なもので、癰疔根太腫物のようなものに貼けます、膏薬吸出しのようなものは、斑猫のような毒が入りませぬければ、早く吹切りませぬ、それゆえ欲しいと申されました事でございまして」

秋「其の人は何処の者か」

源「へえ実はその……私が平常心易くいたしますから、どうかお前頼んでくれまいかと云われて、私が其の医者同道いたしてまいりまして、当家の婆に頼みましたのでござ

います」

秋「ム、ウ、其の医者は何処の者だえ、いやさ近辺にいますというが、よもやお抱えの医者ではあるまい、町医か外療げりようでもいたすものかえ」

源「へえ、その……大概その外療をいたしましたり、ま其の風かぜつ引きぐらいを治すような工合ぐあいで」

秋「何と申す医者だえ」

源「へい、その誠にその、雑ざつといたした医者で」

秋「雑と致した、そんな医者はありません、名前は何とこのだえ」

源「名前はその、え、……実はその何でございます、山路と申します」

秋「山路……山路宗庵と云うか」

源「へえ、好よく御存じさまで」

秋「是は殿様のお部屋お秋の方かたの父で、お屋敷へまいる事もあるで、存じて居おる、其の者に頼まれて、貴様が此処こゝの婆おに斑猫とを捕とれと頼んだのか、薬に用いるなれば至極道理もつともの事だ……当家の主人は居おるの、一寸ちよつとこゝへ出てくれ」

嘉「はい」

秋「婆も一寸こゝへ」

婆「はい」

と兩人とも秋月喜一郎の前へまいりました。

秋「お前方は何かえ、此の飴屋の源兵衛は前から懇意にいたして居るものかえ、毎度此の飴屋方へも行き、源兵衛も度々此方へ参るような事があるかえ」

嘉「いえなに私が処へお出でなすつた事も何も無い、私は御懇意にも何にもしません、私が商いに出ました先でお目にかゝつたのが初り、それから頼まれましたんで、のうお母」

婆「はい、なに心易くも何とも無えので、お得意廻りに歩き、商いをしべえと思つて籠を脊負つて出て、お前さま、谷中へかゝろうとする途で会つたゞね、それから斯ういう理由だが婆、何うだかと云うから、ま詰らん小商いをするよりもこれ、一疋虫を捕めえて六百ずつになれば、子供でも出来る事だから宜かろうと頼まれましたんで」

秋「左様か、源兵衛当家の嘉八という男も婆も手前は懇意じゃア無いと云うじゃアないか」  
源「へえ、別に懇意という……：なにもこれ親類というわけでも何でもないので」

秋「親類かと問やアせん、手前が当家の婆とは別懇だから、山路が手前に斑猫を捕る事を頼んだと只今申したが、然らば手前は当家の婆は別懇でも何でもなく、通りかゝりに頼ん

だか山路も何か入用があつて毒虫を捕る事を手前に頼んだ事であろうと考えるが、これは誰か屋敷の者の中で頼んだ者でもありませんか」

源「へえ左様でございませうかな」

秋「左様でございませうかな、と申して此の方が手前に聞くんだ」

源「へえ……どうか真平御免遊ばして下さいまし、重々心得違で」

秋「只心得違いでは分らん、白状をせんか、此の程御舎弟様が御病氣について、大分夜分お咳が出るから、水飴を上げたら宜かろうというのでお上屋敷からお勧めに相成つて居る、その水飴を上げる処の出入町人は手前じゃから、手前の処で製造して水飴が上る、其の水飴を召上つて若し御病氣でも重るような事があれば、手前が水飴の中へ毒を入れた訳ではあるまいけれども、手前が製した水飴を召上つた、めに病氣が重り、手前が頼んで斑猫を捕らしたという事実がある上は、左様な訳ではなくても、手前が水飴の中へ毒虫でも製し込んで上へ上げはせんかと、手前に疑ぐりがかゝる、是は当然の事じゃアないか、なア、決して手前を咎にはせん、白状さえすれば素々通り出入もさせてやる、此の秋月が刀にかけても手前を罪に落さんで、相変らず出入をさせた上に、お家の大事なれば多分に手当をいたして遣るように、此の秋月が重役等と申合せて計らつて遣わす、何も怖い事はない

から有体ありていに言つてくれ、殿様のお為じや、殿様が有難いと心得たら是を隠してはなりませんよ、のう源兵衛」

源「へえ、私が愚昧わたくしぐまいでございまして、それゆえ申上げますことも前後あとさきに相成ります事でございまして、何かとお疑ぐりを受けますことに相成りましたが、なか／＼何う致しまして、水飴の中へ毒などは入れられません、透すいて見えます極製ごくせいでございしますから、へえ、なか／＼何う致しまして、其様そんなことは……御免遊ばして下さいまし」

と泣声を出し涙を拭ぬぐう。

秋「何故泣く」

源「私わたくしは涙つぽろうございます」

秋「涙つぽろいと云つても何も泣くことはない、別段仔細は無いから……左様な事は致すまいなれども、また御舎弟様付とお上屋敷の者と心を合せて、段々手前も存じて居ろうが、どうも御舎弟さまを邪魔にする者があると云うのは、御癩癖ごかんぺきが強く、聊いさかな事にも暴あ々しくお高こうせい声を遊ばして、手打にするなどという烈はげしい御気性、乃そこでどうも御舎弟様には附つきが悪いので上屋敷へ諂へつらう者も多いが、今大殿様もお加減の悪い処であるから、誠に心配で、万もしも一の事でもありませんか、有つた時には御順家督ごじゆんかどくで、何うしても御舎弟紋之



丞様を直さねばならん、ところがその、此処こゝに婆ばあが居いつては……他聞ほかを憚はげることじゃ……  
 婆ばあが聞いても委くわしいことは分わるまいが……、婆嘉八ばかとも暫ざん時じ彼方あつちへ退のいてくれ」

婆「はい」

と立つてゆく。後見あと送りて、

秋「手前も存じて居おる通り、只今其の方が申した医者かたの娘、お秋の方が儲もつけられた菊さま  
 という若様がある、其の方かたを御家督ごけとくに立てたいという慾心よくしんから、菊様の重役じゆうやくやお附おつのもの  
 が皆心みなこころを合せて御舍弟ごせてい様を亡なき者にせんと……企たくむのでは有りはすまいが、重役じゆうやくの者一統いつとう  
 心配しんぱいして居おる、御舍弟ごせてい様は大切たいせつのお身みの上うへ、万まん一いち間違まちがでもあつては公儀こうぎへ対たいしても相濟あいきま  
 んことだが、そりやア手前も心得こころえて居おるだろう、只山路やまぢが頼たのんだというと、山路やまぢはお秋の  
 方の実父じつふだから、左様さやうなこともありはせんかと私わしは疑うたがぐる、併しかし然そうで有あるか無ないか知れ  
 んものに疑念ぎねんを掛かけては濟いまんけれども、大切たいせつのことゆえ有ありて体ていに云いつてくれ、其の方ほう御  
 舍弟ごせてい様を大切たいせつに思おもうなれば云いつてくれ、秋月あきづきが此この通り手てを突ついて頼たのむ……な……決けつして  
 手前てまへの咎とがめにはせんよ、出入しゅつにんも元々もともとどおりにさせ、また事に寄よつたら三人さんにん扶持ふぢか五人ごにん扶持ふぢ  
 ぐらいは、若殿わかにん様の御世ごよになれば私わしから直じき々に申ま上げて、其の方ほう一代いちだいぐらいのお扶持ふぢは  
 頂戴ていだいさしてやる」

と和らかに言わるゝ程気味が悪うございますから、源兵衛は恐るゝ首を上げ、

源「へえ、有難う、恐入りますことで、貴方さまのような御重役が、私ごととき町人風情に手を突いてお頼みでございましては、誠に恐入ります、私も実はその、えゝゝゝ始めは驚きましてございますが…：…実はその、へえ、お立派なお方さまのお頼みでございまして、斑猫てえ虫を捕つて水飴の中へ入れてくれるというお頼みでございまして、初めは山路というお医者が、何とかいう、えゝゝ、※にいたして、その毒気を水飴の中へ入れたら、柔かになつて宜かろうというお頼みで、迂濶りお目通りをして其の事を伺い、これは意外な事と存じまして、お断りを申上げましたら、其の事が不承知と申すなら、一大事を明したによつて手打に致すとおっしゃつて、刀の柄へ手を掛けられたので、恟り致しまして、否と云えば殺され、応と云えば是迄通り出入をさせ、其の上多分のお手当を下さるとの事、お金が欲くはございませんでしたが、全く殺されますのが辛いので、はいと止むを得ずお受けをいたしました、真平御免下さいまし」

秋「うむ、宜く言つてくれた、私も然うだろうと大概推察致して居つた、宜く言つてくれた」

源「えゝ、私が此の事を申上げましたことが知れますと、私は斬られます」

秋「いや〜手前が殺されるような事はせん、決して心配するな、あゝ誠に感心、宜く言ってくれた、これ当家の主人」

嘉「はい」

秋「今私わしが源兵衛に云った事が逐ちくいち一分ちつたかえ、分わつたら話して見るが宜よい」

嘉「なにか仰しやったようでごぜえますが、むずかしくつて少しも分りませんが、若わえ殿様に水飴を甜なめさせて、それから殿様にも甜めさせて、それを何ですかえ両方へ甜めさせるような事にして御扶持ごふちをくれるんだつて」

秋「あはゝゝ分らんか、宜しい、至極宜しい、分らんければ」

嘉「それで何ですかえ、飴屋さんが御扶持を両方から貰つて」

秋「宜しい〜、分らん処が妙だ、どうぞな私わしが貴様の家うちへ来て、飴屋と話をした事だけは極内々ごくないくでいてくれ、宜よいか、屋敷の者に……婆ばあが又籠かごを脊負しよつて、大根や菜などを売うりに來た時に、秋月様が入いらつたと長家の者に云つてくれちやア困る、是だけは確しつかと口留くちどめをいたして置く、いうと肯きかんよ、云うと免ゆるさんよ、何処どこから知れても他に知る者は無いのだから、其の儘にしては置かんよ」

嘉「はい……どうか御免を」

秋「いや、云いさえしなければ宜しいのだ」

嘉「いう処じやアありません、婆さんお前は口がうるせえから」

婆「云うつて云わねえつて何だか知んねえものそれじやア誰が聞いても、殿様は己ア家へおいでなすつた事はごぜえません、飴屋さんとお話などはなせえせん」と

秋「そんな事を云うにも及ばん、決して云つてはならんぞ」

婆「はい、畏まりました」

秋「源兵衛、毒虫を入れた水飴は大概もう仕上げであるかの」

源「へえ、明後日は残らず出来ます」

喜「明後日出来る……よし宜く知らせてくれた辱ない、源兵衛手前に何ぞ望みの物を取らしたく思う、持合せた金子も少ないが、是はほんの手前が宅への土産に何ぞ買つて行つてくれ、私が心ばかりだ」

源「何う致しまして、私がこれを戴きましては」

秋「いや、遠慮をせず取つて置いてくれ、就ては、源兵衛大概此の方に心当りもある、手前に頼んだ侍の名前は、これ誰が頼んだえ」

源「へえ、是だけは、それを言えば斬ると仰しやいました、へえ、何うかまア種々その

お書物かきものの中へ、私わたくしにその、血で爪印をしろと仰しやいましたから、少し爪の先を切りました」

秋「左様か、云つては悪いか、併しかし源兵衛斯こう打明けてしまった事じゃから云つても宜かろう」

源「何卒どうぞそれだけは御勘弁を」

秋「云えんかえ」

源「へえ、何うもそれは御免を蒙こうむります」

秋「併し源兵衛、是までに話を致して、依頼者の姓名が云えんと云うのは訝おかしい、まだ手前は悪人へ与くみ致して居おるように思われる、手前が云わんなら私わしの方で云おうか」

源「へえ」

秋「神原五郎治兄弟か、新役の松蔭かな」

源兵衛は仰天して、

源「よ好よく御存じさまで」

喜一郎は態わざと笑えみを含みまして、

秋「何うも其辺そこらだろうと鑑定が附ついていた、ま宜しいが、彼の松蔭並びに神原兄弟の者はなく、悪才に長たけた奴ゆえ、種々いろく罫くをかけて、私わしが云ったことを手前に聞くまいものでもないが、手前決して云うな」

源「何う致しまして、云えば直すぐに私わたくしが殺ころされます、貴方様も仰しやいませんように」

秋「私わしは決して云わん、首尾しゆびよ好く悪人を見出みだして御当家安堵の想いを為すような事になれば、何うか願ねがつて手前に五人扶持も遣やりたいの」

源「何う致しまして、悪人へ与くみ致あしました罪で、私わたくしはお手打になりましても宜しいくらいで、私は命さえ助かりますれば、御扶持は戴かきませんでも宜しゆうございます、お出入りだけは相変からず願ねがいます」

秋「うむ、承知いたした、一緒に帰ろうか、いや、途中で他人ひとに見られると悪いから、早く行ゆけ」

源「有難ありがたうございます」

ほっと息を吐ついて、ぶる／＼震えながら出て、後あとを振返り／＼二三丁行って、それから

ふうと駈出して向うへ行く様子を見て、  
秋「何も駈出さんでも宜さそうなものだ」

と笑いながら心静かに身支度をいたし、供を呼んで、是から嘉八親子にもくれ／＼礼を陳べて帰りましたが、丁度八月九日のことで、川添富彌という若様附でございませ、御舎弟様は夜分になりますとお咳が出て、お熱の差引がありますゆえ、お医者も側に附切りでございませ。一統が一通りならん心配で、お夜話をいたし、明番になりませと丁度只今の午前十時頃お帰りになるのですが、御容態が悪いと忠義の人は残っている事がありますので、富彌様はお留守勝だから、御新造はお留守を守つて、どうかお上の御病氣御全快になるようにと、頻りに神信心などを致して居ります。御新造は年三十で名をお村さんといい、大柄な美しい器量の方で、お定という女中が居ります。

村「定や〜」

定「はい」

村「あの此処だけを少し片付けておくれ、何だか今年のように用の遅れた事はない、おち〜土用干も出来ずにしまつたが、そろ〜もう綿入近くなつたので、早く綿入物を直し遣らなければならぬ、それに袷も大分汚れたから、お襟を取換えて置かなければなる

まい」

定「左様でございます、矢張やはり旦那様がお忙せわしくつて、日にちく々御出勤になりましたり、夜もお帰りは遅し、お留守勝ですから夜業よなべが出来ようかと存じますが、何だか矢張やっぱりせかく致しまして、なんでございますよ、御用が段々遅れに遅れてまいりました」

村「あの今日はお明あけぼん番だから、大概お帰りだろうとは思うが、一時いっときでも遅れると又案じられて、お上かみがお悪いのではないかと、何だか私は気が落着かないよ、旦那のお帰り前に御飯を載いてしまおうか」

定「何もございませんが、いつもの魚屋が佳よい鰈かれいを持ってまいりました、珍しい事で、鰈を取つて置きました」

村「然そうかえ、それじゃアお昼の支度をしておくれ」  
定「畏かしこまりました」

と是から午飯ひるはんの支度を致して、午飯を喫たべ終り、お定が台所で片付け物をして居ります処へ入つて来ましたのは、茶屋町に居りますお縫ぬいという仕立物をする人で、好よくは出来ないが、袴はかまぐらいの仕立が出来るのでお家かちゆう中へお出入りをいたしている、独り暮しの女で、



縫「御免遊ばして」

定「おや、お縫さん、よくお出掛け……さ、お上んなさい」

縫「誠に御無沙汰をいたしました、此間は有難う……今日は御新さんはお宅に」

定「はア奥にいらつしやるよ」

縫「実はたった一人の妹で、私が力に思っていました其の者が、随分丈夫な質でございまして、加減が悪くつて、其方へ泊りがけに参つて居りまして、看病を致してやったり、種々の事がありまして大分遅くなりました、尤もお綿入でございませうから、未だ早いことは早いと存じまして」

定「出来ましたかえ」

縫「はい、左様でございます」

定「御新造様、あの茶屋町のお縫どんがまいりました」

村「さ、此方へお入り」

縫「御免遊ばしまし……誠に御無沙汰をいたしました」

村「朝晩は余程加減が違ったの」

縫「誠に滅切御様子が違いました、お変り様もございませんで」

村「有難う」

縫「御意に入るか存じませんが、お悪ければ直します」

村「大層好く出来ました、誠に結構……お前のは仕立屋よりか却って着好いと旦那も仰しやつて、誠に好く出来ました、大分色気も好くなったの」

縫「これは何でございます、お洗い張を遊ばしましたら滅切りお宜しくなりました、尤もお物が宜しいのでございますから、はい仕立栄がいたします」

村「久しく来なかつたの」

縫「はいなんでございます、直に大門町にいる妹ですが、平常丈夫でございましたが、長

がわづら

煩

いを致しましたので、手伝いにまいりまして、伯母が一人ございますが、其の伯母

わたくし

は私のためには力になつてくれました、長命で八十四で、此の間死去りましたが、あな

た其の歳まで眼鏡もかけず、齒も好し、腰も曲りませんような丈夫でございましたが、月夜の晩に縁側で裁縫を致して居りましたが、其処へ倒れたなり、ほっくり死去りましたので、それゆえ種々取込んで……お小袖ですから間に合わん氣遣いはないと存じまして、

御無沙汰をいたしました、今年が悪い時候で、上方辺は大分水が出たという話を聞きました、お屋敷の大殿様も若殿様もお加減がお悪いそうで」

村「あゝ誠にお長引きで」

縫「私は毎も然う申しますので、伯母が死去<sup>なくな</sup>りましても悔む<sup>くや</sup>ことはない、これ／＼のお屋敷の殿様が御病気で、お医者<sup>なほ</sup>の五人も三人も附いて、結構なお薬を召上り、お手当は届いても癒<sup>なほ</sup>る時節にならなければ癒らんから、くよく／＼思う事はないと申して、へえ」

村「何分未だお宜しくないのです、実に心配しているよ、夜分はお咳が出ての」

縫「然うでございませうか、それはまア御心配でございませうね、併<sup>しか</sup>しまだお若様でいらつしやいますから、もう程無<sup>ほど</sup>う御全快になりませう」

村「御全快にならなくつちやア大変なお方さまで、一時も早くと心配しているのさ」

縫「えゝ御新造様え、こんな事をお勧め申すと、なんでございませうが、他<sup>わき</sup>から頼まれて、余<sup>あんま</sup>りお安いと存じまして持つて出ましたが、二枚小袖の払い物が出ましたので、ま此<sup>こん</sup>様な物を持つて出たり何かして、済みませんが、出所<sup>でどころ</sup>も確かな物ですから、お目にかけますが、それに八丈の唐<sup>もろこし</sup>手の細いのが一枚入つて居ります、あとは縞縮緬<sup>しまちりめん</sup>でお裏が宜しゅうございます、お平常着<sup>ふだんぎ</sup>に遊ばしても、お下着に遊ばしても」

村「私は古着は嫌いだよ」

縫「左様でございませうが、出所<sup>でどころ</sup>が知れているものですから」

村 「じゃア出してお見せ」

縫 「畏まりました」

とお次つぎから包を持つてまいり、取出して見せました。唐手の縞柄は端手はででもなく、縞縮は縮は細格子ほそこうしで、色気も宜うございます。

村 「大層好い縞だの」

縫 「誠に宜うございます」

村 「これは何の位どというのだえ」

縫 「これで先方むこうじゃア最少もうし値売ねうりをしたいように申して居りますが、此の書付でと申すので」

村 「二枚で此の値段ねだんが書では大層に安い物だの」

縫 「へい、お安うございます、貴方お裏は新しいものでございます」

村 「何ういう訳で此これを払うというのだえ」

縫 「先方むこうはよくく困っているのでございます」

村 「丈たけや身巾みはぎが違うと困るね」

縫 「左様ならお置き遊ばしては何うでございます、一日ぐらいお置きあそばしても宜しゆ

うございます」

村「余り縞柄が好いから、欲しいような心持もするから、置いてっておくれ」

縫「左様でございますか、じゃ私が今日の暮方までに参りませなければ、明朝伺いに上ります」

村「では後でよく検めて見よう」

是をお世話いたせば幾許か儲かるのだから先ず氣に入ったようだとお縫は悦んで帰ってしまう、後でお定を呼んで、

村「手伝っておくれ、解いて見よう、綿は何様なか」

と段々解いて見ると。不思議なるかな襟筋に縫込んでありました一封の手紙が出ました。

村「おや、定や」

定「はい」

村「此様な手紙が出たよ」

定「おや、襟ん中から奇態でございますね、何うして」

村「私にも分らんが、何ういう訳で襟の中へ……訝しいの」

定「女物の襟へ手紙を入れて置くのは訝しい訳でございませうが、情夫の処へでも遣るのでございませう」

村「だつてお前それにしても襟の中へ……訝しいじゃアないか」

定「左様でございませうね、開けて御覽遊ばせよ、何と書いてあるか」

村「無闇に封を切つては悪かろう」

定「これを貴方の物にして、此の手紙を開けて御覽なすつて、若し入用の手紙なれば先方へ返したつて宜いじゃア有りませんか」

村「本当に然うだね、封が固くしてあるよ、何と書いてあるだろう」

定「お禁厭でございませうか知らん、随分お守を襟へ縫込んで置く事がありますから、疫病除に」

村「父上様まいる菊よりと書いてある、親の処へやったんで」

定「だつて貴方親の処へ手紙をやるのに、封じを固くして襟の中へ縫付けて置くのは訝しいございませうね、尤も芸者などは自分の情郎や何かを親の積りにして、世間へ知れないようにお父様とごまかすてえ事を聞いて居りますよ」

村「開けて見ようかの」

定「開けて御覽遊ばせよ」

村「面白いことが書いてあるだろうの」

定「屹度惚気が種々書いてありましようよ」

悪いようだが封じが固いだけに、尚お開けて見たくなるは人情で、これから開封して見ますと、女の手で優しく書いてあります。

村「…文して申上※…、極っているの」

定「へえ、それから」

村「…益々御機嫌能御暮し被成候御事蔭ながら御嬉しく存じ上※」

定「定文句でございますね、併し色男の処へ贈る手紙にしちやア改り過ぎてるよう存じますね」

村「然うだの、左候えば私主人松蔭事ス…：神原四郎治と申合せ渡邊様を殺そうとの悪だくみ…：おや」

定「へえ…：何ういう訳でございましょう」

村「黙っていないよ、…：そのみならず水飴の中へ毒薬を仕込み、若殿様へ差上候よう両人の者謀し合せ居り候を、図らず私が立聞致し驚き入り候」

定「呆れましたね、誰でございますえ」

村「大きな声をおしでないよ、世間へ知れるとわるいわ……一大事ゆえ文に認め差上候わんと取急ぎ認め候え共、若し取落し候事も有れば、他の者の手に入っては尚々お上のために相成らずと心配致し、袷の襟へ縫込み差上候間、添書の通りお宅にてこれを解き御覧の上渡邊様方に勤め居り候御兄様へ此の文御見せ内々御重役様へ御知らせ下され候様願あげ、申上度事数々有之候え共取急ぎ候まゝ書残しな尚おお目もじの上委しく可うしあげべくそうろう申上候、芽出度かしく、父上様兄上様、菊……と、……菊というのは何かの、彼の新役の松蔭の処に奉公していた女中は菊と云つたつけかの」

定「私は存じませんよ」

村「松蔭の家にいた女中が殺されたような事を聞いたから、旦那様に聞いてもお前などは聞かんでも宜い事だと仰しやるから、別段委しくお聞き申しもしなかったが、是は容易な事ではないよ」

と申している処へ一声高く、玄関にて、

僕「お帰りの」

村「旦那がお帰り遊ばした」



と慌あわて、お玄関へ出て両手を支つかえ、

村「お帰り遊ばしまし」

定「お帰り遊ばせ」

富「あい、直すぐに衣服きものを着換えよう」

村「お着換遊ばせ、定やお召換だよ、お湯を直すぐに取って、さぞお疲れで」

富「いやもう大きに疲れしました、ハア―どうも夜眠ねられんでな、大きに疲れしました、眠ねむれんと云うのは誠にいかんものだ」

是から衣服きものを着替えて座蒲団の上に坐ると、お烟草盆に火を埋いけて出る、茶台に載せてお茶が出る。

村「毎日くお夜話よつめは誠にお苦勞な事だと、蔭ながら申して居りますが、貴方までお加減がお悪くなると、却かえってお上かみのお為になりませんから、時々は外村様とむらとお替り遊ばす訳にはまいりませんので」

富「いや、外村と代っているよ」

村「今日こんにちの御様子は如何いかゞで」

富「少しはお宜しいように見受けたが、どうもお咳せきが出てお困り遊ばすようだ」

定「御機嫌宜しゆう、お上は如何でございます」

富「あい、大きに宜しい、定まで心配して居るが、どうも困ったものじゃ」

村「早速貴方に申上げる事がございます、茶屋町の縫がまいりまして」

富「うん」

村「彼が払い物だと云つて小袖を二枚持つてまいりましたから、丈は何うかと存じまして、改める積りで解きましたところが、貴方襟の中から斯様な手紙が出ました、御覧遊ばせ」

と差出すを受取り、

富「襟の中から、はて」

と披いて読み下し、俄に顔色を変え、再び繰返し読直して居ります内に、何と思つたか、

富「定」

定「はい」

富「茶屋町の裁縫をいたす縫というものは何かえ、彼は亭主でも有るのか」

定「いえ、亭主はございません、四年已前に死去りまして、子供もなし、寡婦暮しで、只今はお屋敷やお寺方の仕事をいたして居りますので、お召縮緬の半纏などを着まし

て、芝居などへまいりますと、帰りには屹度お茶屋で御膳や何か喫べますつて」  
 富「其様な事は何うでも宜い、御新造松蔭の家うちにいた下婢は菊と云ったつけの」

村「私は名を存じませんが、其の下女が下男と不義をいたして殺されたという話を聞きま  
 したから、只今考えて居りますので」

富「只松蔭とのみで名が分らんと、他にない苗字でもなし、尤も神原四郎治は当家の御家  
 来と確かに知れている、その四郎治と心を合せる者は大藏の外にはないが、先方の親の名  
 が書いてあると調べるに都合も宜しいが、ス……これ定、其の茶屋町の縫という女を呼び  
 に遣れ、直に……事を改めていうと胡乱うろんに思つて、何処かへ隠れでもするといかんから、  
 貴様一寸行つて来い、先刻の衣服きものの事について頼みたい事がある、他に仕立物もある、  
 置いてまいった衣服二枚を買取るに都合もあるから、旦那様もお帰りになり、相談をする  
 からと申してな、それに旨い物が出来たで、馳走をしてやる、早く来いと申して、直に呼  
 んでまいれ」

定「じやア私がまいりますようか」

富「却つて貴様の方が宜かろう、女は女同志で、此の事を決するというな」

定「何う致しまして、決して申しは致しません」

と急いで出てまいりました。

## 四十三

お縫は迎いを受けて、衣服きものが売れて幾許いくらかの口銭になることゝ悦んで、お定と一緒にま  
いりました。

定「旦那さま、あのお縫どんを連れてまいりました」

富「お、直すぐに連れて来たか、此方こつちへ通せ」

縫「旦那様御機嫌宜しゅう」

富「其処そこでは話が出来ん、此方こつちへ這入れ構わずうつと這入れ」

縫「はい……毎度御鼻屑はなぶしさまを有難う……毎度御新造様には種々いろく頂戴物を致しまして有  
難う存じます」

富「毎度面倒な事を頼んで、大分裁縫しごとが巧うまいと云うので、大きに妻さいも悦んでいる、就つては  
忙しい中を態々わざ呼んだのは他の事じゃアないが、此の払物はらいものの事だ」

縫「はい、誠に只お安うございまして、古着屋などからお取り遊ばすのと違って、出で

所も知れて居りますから上げました、途々もお定どんに伺いましたが、大層御意に入つて、黄八丈は旦那様がお召に遊ばすと伺いましたが、少しお端手かも知れませんが、誠に宜いお色気でございます」

富「それじゃア話が出来んから此方へ這入れ」

縫「御免遊ばして……恐入ります」

富「茶を遣れよ」

縫「恐入ります……これは大層大きなお菓子でございますねえ」

富「それは上からの下されたので」

縫「へえ中々下々では斯ういう結構なお菓子を見る事は出来ません、頂戴致します、有難う存じます」

富「あゝ此の二枚の着物は何処から出たんだえ」

縫「そりゃアあの何でございます、私が極心安い人でございまして、その少し都合が悪いので払いたいと申して、はい私の極心安い人なのでございます」

富「何ういう事で払うのだ」

縫「はい、その何でございます、誠に只もう出所が分つて居りまして、古着屋などからお

取り遊ばしますと、それは分りません事で、もしやそれが何でございますね、ま随分お寺へ掛無垢かけむくや何かに成つてまいったのが、知らばつくれて払いに出ます事が幾許いくばもございませぬ、左様な不祥ふしょうな品と違ひまして、出所も分つて居りますから何かと存じまして」

富「それは分つているが、何ういう訳で払いに出たのだえ」

縫「まことに困ります、急にその災難で」

富「むゝう災難……何ういう災難で」

縫「いえ、その別に災難と申す訳もございせんけれども、急に嫁にまいるつもりで拵こしらえしました縁が破談になりまして、不用になつた物で」

富「はゝア、これは何と申す婦人のだえ、何屋の娘か知らんけれども、何と申す人の着物だえ」

縫「そりやアその何でございます、私わたくしのような名でございますね」

富「手前のような……矢張縫という名かえ」

縫「いゝえ、縫という名じやアございせんが、その心安くいたす間柄の者で」

富「心安い何という名だえ」

縫「それはどうも誠に何でございますね、その人は名を種々いろくに取換とりかえる人なんで、最初

はきんと申して、それから芳よしとなりましたり、またお梅なんとなったり何か致なしました」

富「むゝう、今の名は何という」

縫「芳と申します」

富「隠しちやアいかんぜ、少し此方こつちにも調べる事があるから、お前を呼んだのじゃ、此の着物を着た女の名は菊といやアせんか」

縫「はい」

富「左様だろいな」

お縫もみで揉手をしながら、

縫「菊という名に一寸ちよつとなつた事もあります」

富「一寸成つたとは可笑おかしい隠しちやアいかん、その菊という者は此方こちらにも少し心当りがあがるが、親の家いえは何処どこだえ」

縫「はい」

富「隠しちやアならん、お前に迷惑は掛けん、これは買入れるに相違ない、今代金を遣るが、菊という者なればそれで宜しいのだ、菊の親元は何処だえ」

縫「はい、誠にどうも恐入ります」

富「何も恐入る事はない、頼まれたのだから仔細はなからう」

縫「親元は本郷春木町三丁目でございます、指物屋の岩吉と申します、其の娘の菊ですが、その菊が死なく去なりましたんで」

富「うん、菊は同家中に奉公していたが、少々仔細有つて自害致した」

縫「でございますけれども、これはその自害した時に着ていた着物ではございません」

富「いや、自害した女の衣類きものだから不縁起だというのではない、買つても宜よい」

縫「有難う存じます、その親も死なく去なりました、其の跡は職人が続いて法事をいたして、石塔なんや何かを建てたいという心掛なので」

富「左様か、それで宜しい、もう帰れ〜……お、馳走をすると申したつけ、欺だましちやアならん、私わしは直すぐに上あるから」

と川添富彌は急に支度をして御殿へ出ることになりました。御殿ではお夜詰よつめの方々が次第ついでにお疲つかれでございませぬ。お医者いしやは野村のむら覺江かくえ、藤村ふじむら養庵ようあんという二人が控ひかえて居ゐります。お夜詰には佐藤平馬さとうへいば、外村とむら惣衛そうゑと申してお少ちひさい時分ときぶんからお附つき申ました御家来おやか中田なかた千股ちまた、老女らうにょの喜瀬川きせがわ、お小姓こせう繁しげるなどが交こも々々／＼お薬あけを上あげ、なれどもどつとお悪いのではない、床とこの上に坐まつておいで、庭の景色を御覽遊ごらんばしたり、千股ちまたがお枕元まくらもとで軍書ぐんしよを読よん



だり、するをお聞きなさる。お熱の工合ぐあいでお悪くなると、ころりと横になる。甚ひどく寒い、もそつと掛けるよと御意があると、綿の厚い夜着よぎを余計に掛けなければなりません。お大名様方は釣夜具だとか申しますが、それほど奢つた訳ではない。お附の者も皆心配して居られます。いまだお年若で、今年二十四五という癩かんしゃく癩かざかりでございませう。老女喜瀬川が生まして、

喜「上……上」

紋「うむ」

喜「お上屋敷からお使者がまいりました」

紋「うむ、誰が来た」

喜「上かみのお使いに神原五郎治がまいりました、御病気伺いに出ました、お目通りを仰付けられたいと申します、御面倒でございませうが、お使者ではお会いが無ければなりません、まい、如何致いかゞしましょうか」

紋「うむ、神原五郎治か……彼あれは嫌いな奴じやが、此処こゝへ通せ」

喜「畏かしこましてございます……若殿がお会いが有りますから、これへ直すぐ」

と中田千股という人が取次ぎますと、結構な蒔絵まきえのお台の上へ、錦手にしぎでの結構な蓋物ふたもの

へ水飴を入れたのを、すうつと持つて参り、

喜「お上屋敷からのお遣い物で」

とお枕元に置く。お次の隔を開けて両手を支え、

五「はア」

と懇懃に辞儀をする。

五「神原五郎治で、長の御不快蔭ながら心配致して居りました、また上に置かせられてもお聞き及びの通り御病中ゆえ、碌々お訪ね申さんが、予の病気より梅の御殿の方が案じられると折々仰せられます、今日は御病気伺いとして御名代に罷り出しました、是れは水飴でございますが、夜分になりますとお咳が出ますとのこと、其の咳を防ぎますのは水飴が宜しいとのことで、これは極製の水飴で、これを召上れば宜くお眠られます、上が殊の外御心配なされ、お心を入れさせられし御品、早々召上られますように」

紋「うむ五郎治、あゝ予の病気は大した事はない、未だ壮年の身で、少し位の病魔に負けるような事はない、快い時は縁側ぐらゐは歩くが、只お案じ申上げるのはお兄様の御病気ばかり、誠に案じられる、お歳といい、此の程はお悪いようじゃが、何うじゃな」

五「はア」昨日は余程お悪いようでしたが、昨日よりいたして段々御快気に赴

き、今朝などはお粥を三椀程召上りました、其の上お力になる魚類を召上りましたが、彼  
 の分では遠からず御全快と心得ます」

紋「うむ悦ばしい、予が夜分咳の出るは余程せつないがの、其のせつない中にもお兄様を  
 お案じ申上げて、予の病気は兎も角、どうか早くお兄上様の御病気御全快を蔭ながら祈り  
 居ると申せ」

五「はア、はア、そのお言葉を上がお聞きでござつたら、嘸お悦びでございましょう、御  
 病苦を忘れ、只お上のことのみ思召さるゝというのは、あゝ誠にお使者に参じました五  
 郎治俱に辱のう心得ます、只今の御一言早々帰りまして、上へ申上げるでございましょう、  
 実に斯様な事を承わりますのは、誠に悦ばしい事で」

紋之丞殿は急に気色を変え、声を暴らげ、  
 紋「五郎治、申さんでも宜しい、お兄様に左様な事を申さんでも宜しい、弟が兄を思  
 うは、当前の事じゃ、お兄様も亦予を思うて下さるのは何も珍らしい事はない、改めて  
 左様申すには及ばん、然るを事珍らしく左様の事を申伝えずとも、よも斯様の事は御存じ  
 で有ろう、左様に媚諂った事を云うな」

五「はア……誠にどうも」

老女「左様なお高声こうせいを遊ばすと却かえつて御病氣に障ります、左様な心得で五郎治が申した訳ではありません」

紋「一体斯様な事をいう手前などはな主人を常思つねわんからだ、主人を思わん奴が偶々たま胸に主人の為になる事を浮うかぶと、あゝ忠義な者じやと自ら誇みづかる、家来が主人を思うは当あたり然えの事だ、常思わんから偶たまに主人を思う事があると、私わしは忠義だなどと自慢を致す、不忠者の心と引較べて左様に申す、白痴たわけもの者め、早々帰れ」

と以もつての外不首尾でございますから、

五「ホ、」

と五郎治は手持不沙汰で、

五「今日は上の御名代として罷出まかりでましたが、性せい来愚昧いらいぐまいでございまして、申上げる事も遂ついにお氣に障り、お腹立に相成つたるかは存じませんが、偏ひとえに御容赦の程を願います」

紋「退さがれ」

五「はっ」

老「五郎治殿御病氣とは申しながら誠に御癩癪ごかんべきが強く、時々斯ういうお高声があります事で、悪あしからず……あなた、左様なことを御意遊ばすな、それがお悪い、お高声を遊ば

すとお動悸が生まして、却つて、お悪いとお医者が申しました」

紋「うむ、今日はお兄上様からお心入の物を下され、それを持参いたしたお使者で、平生の五郎治では無かつた、誠に使者太儀」

ごろりと直に横つ倒しになり、搔卷を鼻の辺まで揺り上げてしまふ。仕方が無いから五郎治はそろり〜と跡へ退る。一同気の毒に思い、一座白け渡りました。

千「神原氏、余程の御癩癥お気に支えられん様に、我々はお少さい時分からお附き申していてさえ、時々お鉄扇で打たれる様な事がある、御病中は誠に心配で、腫物に障るよ  
うな思いで、此の事は何卒上へ仰せられんように」

五「宜しゅうございます」

老「五郎治殿、誠に今日は遠々の処御苦労に存じます、只今の事は上へ仰せ上げられんように、何もござりませんが一献差上げる支度になつて居りますから、あの紅葉の間へ」

と言われて五郎治は是を機会に其の座を退きました。暫く経つと紋之丞様がばと起上つて、

紋「惣衛〜」

惣衛「はア」

紋「惣衛、何は帰ったか五郎治は」

惣「え、慥かお次に扣え居りましよう、上のお使でございますから、紅葉の方へ案内致しまして、一献出しますように膳の支度をいたして居ります」

紋「じゃが何じやの、何故お兄様は彼な奴を愛して側近く置かかの、彼はいかん奴じや」

惣「左様な事を今日は御意遊ばしません方が宜しゆうございます」

紋「云つても宜しい、彼は諂い武士じや、佞言甘くして蜜の如しで、神原或は寺島等をお愛しなさるの、勧める者が有るからじやの、惣衛」

惣「御意にござります」

紋「心配じや」

惣「御病中何かと御心配なされては相成りません、程無うお国表から福原數馬も出仕致しますから」

紋「あ、數馬が来たら何うか成るか、あ、逆上せて来た、折角お兄様から下すつた水飴、甜めて見ようか」

惣「召上りませ、お湯を是へ」

是から蓋が附いて高台に載せてお湯が出ました。側に在ります銀の匙を執つて水飴を掬おうとしたが、旨くいきません。

紋「これは思うようにいかんの」

惣「極製の水飴ゆえ金属ではお取り悪うございます、矢張木を裂いた箸が宜しいそう  
で」

紋「然うかの、箸を持って」

と箸を二本纏めて漸々沢山捲き上げ、老女が頻りに世話をいたして、

老「さア〜お口を」

紋「うむ」

と今箸を取りにかゝる処へ駈込んで来たのは川添富彌、物をも云わず紋之丞様が持つていた箸を引奪つて、突然庭へ棄てた時には老女も驚き、殿様も肝を潰しました。

紋「何じやく」

富「ハツ富彌で」

紋「白痴……何をいたす」

富「ハア」

と胸を撫下し、

富「誠に幸いな処へ駈付けました、どうか水飴を召上る事はお止りを願います、決して召上る事は相成ません」

老「はアどうも私は恚りました、これは何という事です、御無礼至極ではござりませんか、殊に只今お上屋敷からお見舞として下されになった水飴、お咳が出るから召上ろうとする所を、奪つてお庭へ棄てるとは何事です」

富「いえ、これは棄てます」

紋「富彌、此の水飴はお兄様がな咳が出るからと云つて養いに遣わされた水飴を、何故其の方は庭へ棄てた」

富「いえ仮令お上屋敷から参りましても、天子將軍から参りましても此の水飴は富彌屹度棄てます」



紋「何うか致したな此奴は……これ其の方は予が口へ入れようとした水飴を庭へ棄てた上からは、取りも直さず予とお兄様を庭へ投出したも同様であるぞ、品物は構わんが、折角お心入れの品を投げ棄てたからは主人を投げたも同じ事じゃ」

富「へえ重々恐入ります、其の段は誠に恐入りましたが、水飴を召上る事は決して相成りません」

紋「何故ならん」

富「何でも相成りません」

紋「余程此奴は何うかいたして居る、無礼至極の奴じゃ」

富「御無礼は承知して居ります、甚だ相済みません事と存じながら、お毒でござるによつて上げられませんか」

紋「何故毒になる、若し毒になるなら、水飴を上げて咳の助けには相成らん、却つて悪いから止せと何故止めん」

富「左様な事を口でぐずぐず申している内には召上ってしまいます、召上つては大変と存じまして、お庭へ投棄てました」

紋「余程変じゃ……」

富「先ますま外村氏安心致しました」

外「安心じゃアない、粗そ忽しつ千万な事じやないか、手前は只驚いて何とも申上げ様がない、お上屋敷から下すつたものを無闇にお庭へ投棄てるといふは何ういう心得違いで」

紋「外村彼是云うな、此奴は君臣の道を弁わえんからの事じや、予を嘲ちやうろつ弄致すな、年若の主人と侮あなり何の様な事ようを致しても宜しいと存じておるか、幼年の時から予の側近く居おるによつて、いまだに予を子供のようように思つて馬鹿に致すな」

富「いえ、中々もちまして」

紋「いや容赦ようしやは出来ん、棄置かれん、今日こんにちの挙動ふるまいは容易ならんことじや」

富「お棄置きに成らんければお手打になさいますか」

紋「尤もつとも左様」

富「私わたくしも素しもより覚悟の上、お手打になりましよう」

外「これく、何だ、何を馬鹿を申す、少々逆上のぼせて居おる様子、只今御酒を戴きましたので、惣衛彼かれに成代なりかわつてお詫をいたします、富彌儀ひしぎやく太く逆上さかをして居おる様子で」

富「いゝえ私わたくしはお手打に成ります」

紋「お、手打にしてやる是へ出え」

富「いゝえお止めなすつても私は出る」

と大變騒々しくなつて来た処へ、這入つて来ましたのは秋月喜一郎という御重役で、お茶台の上へ水飴を載せてスーと這入つて来ながら此の体を見て。

喜「何を遊ばすの、御病中お高声はお宜しく有りません、富彌如き者をお相手に遊ばしてお論じ遊ばすのはお宜しくない、富彌も控えよ」

富「へえ〜」

と云つたが心の中で、此の秋月は忠義な者と思つたから。

富「何分宜しく、併し水飴はお止め申します」

紋「えゝ喜一郎、今日は富彌の罪は免さんぞ、幼年の折から側近くいて世話致してくれたとは申しながら、余りと云えば予を嘲弄いたす、予を蔑にする富彌、免し難い、斬るぞ」

喜「これは又大した御立腹、全体何ういう事で」

紋「予が咳を治さんとて、上屋敷から遣わされたお心入れの別製の水飴を甜めようとする処へ、此奴が駈込んで参り突然予が持っていた箸を引奪つて庭へ棄てた、これ取も直さず兄上を庭へ投げたも同じ事じゃから免さん、それへ直れ、怪しからん奴じゃ」

喜「これは怪しからん、富彌、何ういう心得だ、上から下された水飴というものは一通り

ならんと、梅の御殿様の思召すとところは御情合で、態々仰附けられた水飴を何で左様な事をいたした」

富「お毒でございますから、お口に入らん内にと口でお止め申す間合がございせんから、無沙汰にお庭へ棄てました」

喜「それは又何ういう訳で」

富「何ういう訳と申して、只今申上げる訳にはまいりませんが、至つてお毒で」

喜「ム、ウ、是は初めて聞く水飴は周の世の末に始めて製したるを取つて柳下恵がこれを見て好い物が出来た、齒のない老人や乳のない子供に甜めさせるには妙である、誠に結構なものが出来た、後の世の仕合であると申したという、お咳などには大妙薬である、斯る結構な物を毒とは何ういう理由だ尤も其の時に盗跖という大盗賊が手下に話すに、是れは好いものが出来た、戸の枢に塗る時は音がせずに関く、盗みに忍び入るには妙である至極宜い物であると申したそうだ、同じ水飴でも見る人によつては然う違う、拙者もお見舞いに差上る積りで態々白山前の飴屋源兵衛方から持参いたしました此の水飴」

富「これは怪しからん秋月の御老人に限つて其様なことは無いと存じていたが、是は怪しからん、あなたは何うかなすつたな」

喜「其の方こそ何うかして居る、お咳のお助けになり、お養いになる水飴を」

富「ス……はてな」

と心の中で川添富彌が忠義無二の秋月と思いの外、上屋敷の家老寺島或は神原五郎治と与して、水飴を上へ勧めるかと思いましたが、顔色を変えてジリ、と膝を前へ進め。

富「相成りません」

紋「白痴……喜一郎あのような事を申す、余程訝しい変になった」

喜「余程變に相成りましたな」

富「御老臣が献ずる水飴でも決して相成りません、私はお手打に成ります、上のお手打は元より覚悟、お手打になつても聊か厭いはございせんが、水飴は毒なるものと思召しまして此の後も召上らんように願います、仮令喜一郎が持つて参りましようとも、水飴を召上る事は相成りません」

紋「何じゃ何の事じゃ、白痴め」

喜「拙者が持つて参つた水飴が毒じやと申すのか、ム、ウ……それじゃア斯う致そう、拙者がお毒味を致そう。上お匙を拝借致します」

と入物の蓋を取り除けて水飴を取りにかゝるから、川添富彌がはてなと見て居ります。

秋月は富彌の顔を見ながら、水飴を箸の端さきへ段々と巻揚まきあげるのを膝へ手を置いて御舎弟紋之丞殿が見詰めて居りましたが、口の処へ持つて来るから。

紋「喜一郎、毒味には及ばん」

喜「はっ」

紋「もう宜しい、予は水飴は嫌いになった、毒味には及ばん、水飴は取棄てえ」

喜「はッ」

紋「喜一郎が勧めるのも忠義、富彌が止とどむるも忠義、二人して予を思うてくれる志辱かたじけなく思うぞ」

喜「ほう」

富「ほう」

御懇ごこんの御意で喜一郎富彌は落涙らくるい致しました。

喜「富彌有難く御挨拶を申せ……有難うございます」

富「あゝ有難うございます」

と涙を払い

富「無礼至極の富彌、お手打になつても苦しからん処、格別のお言葉を頂戴いたし、富彌

死んでも聊か悔む所はございません」

紋「いや喜一郎と富彌の兩人へ何か馳走をして遣れ、喜瀬川は料理の支度を」

老女「はい」

と鶴の一声で、忽ち結構なお料理が出ました。水飴を棄ると、お手飼の梅鉢という犬が来てペロ／＼皆甜めてしまいました。それなりに夜に入りますとお庭先が寂と致しました。尤も御案内の通り谷中三崎村の辺は淋しい処で、裏手はこう／＼とした森でございました。所へ頭巾目深に大小を無地の羽織の下に落差しにして忍んで来る一人の侍、裏手の外庭の林の前へまいると、グツクと云うものがある。はて何だろうと暗いから、透して見ると、お手飼の白班の犬が悶いて居ります。怪しの侍が暫く視て居る。最前から森下の植込みの蔭に腕を組んで様子を窺うて居るのは彼の遠山権六で、曩に松蔭の家来有助を取つて押えたが、松蔭がお羽振が宜いので、事を問糺さず、無闇に人を引括り、上へ手数に掛け、何も弁えん奴だと権六は遠慮を申付けられました。遠慮というのは禁錮の事ですが、権六些とも遠慮をしません、相変らず夜々のそ／＼出てお庭を見巡つて居りますので、今権六が屈んで見て居りますと、犬がグツク／＼と苦しみ、ウンワン／＼と忌な声で吠える、暫く悶いて居りましたが、ガバ／＼と泡のような物を吐いて土をむし

り木の根方へ頭をこすり附けて横つ倒しに斃れるのを見て、怪しの侍が抜打にすうと犬の首を斬落して、懷から紙を取出し、すつかり血を拭い、鏝鳴をさせて鞆に収め、血の附いた紙を藪蔭へ投込んで、すうと行きに掛るから權六は怪しんですうツと立上り、

權「いやア」

と突然に彼の侍の後から組附いた時には、身体も痺れ息も止るようですから、侍は驚きまして、

曲者「放せ」

權「いや放さねえ、怪しい奴だ、何者だ、何故犬う斬った、さ何者だか名前を云え」

曲「手前たちに名前を申すような者じゃアねえ、其処放せ」

權「放さねえ、さ役所へ行け」

曲「役所へ行くような者じゃア無え」

權「黙れ、頭巾を深く被りやアがつて、大小を差して怪しい奴だ、此のまア御寝所近え

奥庭へ這入りやアがつて、殊に大切な犬を斬つてしまやアがつて、さ汝何故犬を斬った」

曲「何故斬った、此の犬は己に咬付いたから、ム、咬付かれちゃアならんから斬ったが何うした」



權「黙れ、己ア見ていたぞ、咬付きもしねえ犬を斬るには何か理由があるだろう、云わなければ汝絞殺すが何うだ」

曲「ム、せつないから放せ」

權「放せたつて容易にア放さねえ、さ歩べ、え行かねえか」

と大力無双の權六に捉えられたのでございませから身動きが出来ません。引摺られるようにしてお役所へ参り、早々届けに成りました事ゆえ、此の者を縛し上げてまして、其の夜罪人を入れ置く処へ入れて置き、翌日お調べとあるのでお役所へ呼出しになりました。時には、信樂豊前というお方がお目付役を仰付けられて、掛りになりました。此の信樂という人は左したる宜い身分でもないが、理非明白な人でありませから、お目付になつて、内々叛謀人取調べの掛りを仰付けられました。差添は別府新八で、曲者は森山勘八と申す者で、神原五郎治の家来であります。呼出しになりました時に、五郎治の弟四郎治が罷り出ます事になりお縁側の処へ薄縁を敷き、其の上に遠山權六が坐つて居ります。お目付は正面に居られます。また砂利の上に蓆を敷きまして、其の上に高手小手に縛されて森山勘八が居りますお目付が席を進みて。

目付「神原五郎治代弟四郎治、遠山權六役目の儀ゆえ言葉を改めますが、左様に心得ませ

え」

四「はつ」

權「ほう」

目付「權六其の方昨夜外庭見廻りの折、内庭の檜木山の蔭へまいる折柄、面部を包みし怪しき侍体のものが、内庭から忍び出で、お手飼の梅鉢を一刀に斬りたるゆえ、怪しい者と心得て組付き、引立て来たと申す事じゃがそれに相違ないか」

權「はい、それに相違ございません、どうも眼ばかり出して、長え物を突差しまして、あの檜木山の間から出て来た……、怪しい奴と思えやして見ているうち、犬を斬りましたから、何でも怪しいと思えやしたから、ふん捕めました」

目付「うん……神原五郎治家来勘八、頭を上げえ」

勘「へえ」

目「何才になる」

勘「三十三でございます」

目「其の方陪臣の身の上でありながら、何故に御寝所近い内庭へ忍び込み、殊には面部を包み、刃物を掲げ、忍び込みしは何故の事じゃ、又お手飼の犬を斬ったと申すは如何な

る次第じゃ、さ有ありてい体に申せ」  
と睨ねめつけました。

#### 四十五

勘八は凶太い奴でございますから、態わざと落著おちつきはら振りまして、

勘「へえ、誠に恐入りましてございます。お庭内へ参りましたのは、此の頃は若殿様御病気でございまして、皆さんが御看病なすつていらつしやるので、どうもお内庭はお手薄でございましょうから、夜々よるく見廻みまわつた方が宜いいと主人から言いつかりました、それにお手飼の犬とは存じませんで、檜木山の脇わたくしへ私が参りましたら、此の節の陽気で病やみつ付いたと見えまして、私に咬かみつ付きそうにしましたから、咬付かれちやア大変だと一生懸命で思わず知らず刀を抜いて斬りましたが、お手飼の犬だそうで、誠にどうも心得んで、とんだ事を致しました、へえ重々恐入りましてございます」

目「そりやアお手飼の犬と知らず、他ほかの飼犬にも致せ、其の方陪臣の身を以もつて夜中やちゆう大小を帯たいし、御寝所近い処へ忍び入つたるは怪しい事であるぞ、さ何者にか其の方頼まれたの

で有ろう、白状いたせ、拙者<sup>きつとしらべ</sup>屹度調るぞ」

勘「へえ、何も怪しくも何ともないんでございます、全く気を付けて時々お庭を廻れと云われましてんでございます、それゆえ致しました、此<sup>こゝ</sup>処においでなさいます主人の御舎弟四郎治様も爾<sup>そ</sup>う仰しやつたのでございます」

目「うむ、四郎治其の方は此の者に申付けたとの申<sup>もうしたて</sup>立じやが、全く左様か」

四「え、お目付へ申上げます、実は兄五郎治は此の程お上屋敷のお夜詰<sup>よづめ</sup>に参つて居ります、と申すは、大殿様御病氣について、兄も心配いたしましたして、え、番でない時も折々は御病氣伺いに罷<sup>まか</sup>り出<sup>い</sup>で又御舎弟様も御病氣に就<sup>つ</sup>きお夜詰の衆、又御看護のお方々もお疲れでありましょう、又疲れて何事も怠り勝の処へ付<sup>つけ</sup>入つて、狼藉<sup>ろうぜきもの</sup>者が忍入るような事もあれば一大事じやから、其の方己<sup>われ</sup>がお上屋敷へまいつて居<sup>お</sup>る中は、折々お内庭を見廻れ、御寝所近い処も見廻るようにと兄より私<sup>わたくし</sup>が言付<sup>いい</sup>かつて居ります、然<sup>しか</sup>る処昨日御家老より致しまして、火急のお呼出しで寅の門のお上屋敷へ罷<sup>まかりで</sup>出ましたが、私は予<sup>かね</sup>々、兄より言付かつて居りますから、是なる勘八に、其の方代つてお庭内を廻るが宜<sup>よ</sup>いと申付けたに相違ござらん、然るに彼がお手飼の犬とも心得んで、吠<sup>ほ</sup>えられたに驚き、梅鉢を手打にいたしました段は全く彼何<sup>わきま</sup>も弁えん者ゆえ、斯様な事に相成つたので、兄五郎治に於<sup>おい</sup>ても迷惑い

たします事でござる、併し何も心得ん下人の事と思召しまして、幾重にも私が成代つてお詫を申し上げます、御高免の程を願ひとうござる、全く知らん事で」

目「むう、そりや其の方兄五郎治から言付けられて、其の方が見廻るべき所を其の方がお上屋敷へまいって居る間、此の勘八に申付けたと申すのか、それは些と心得んことじやアないか、うん、これ申付けても外庭を見廻らせるか、又はお馬場口を見廻るが当然、陪臣の身分で御寝所近い奥庭まで夜廻りに這入れと申付けたるは、些と訝しいようだ、左様な事ぐらいは弁えのない其の方でもあるまい、殊に又帯刀をさせ面部を包ませたるは何う云う次第か」

四「それは夜陰の儀でござるで、誠にお馬場口や何か淋しくてならんから、彼に見廻りを申付ける折に、大小を拝借致したいと申すから、それでは己の積で廻るが宜いと申付けましたので、大小を差しましたる儀で、併し頭巾を被りましたことは頓と心得ません……これ勘八、手前は何故目深い頭巾で面部を包んだ、それは何ういう仔細か、顔を見せん積りか」

勘「え、誠にどうも夜になりますと寒うございますんで、それゆえ頭巾を被りましたんで目「なに寒い……当月は八月である、未だ残暑も失せず、夜陰といえども蒸れて熱い事が」

あるのに、手前は頭巾を被りたるは余程寒がりと見ゆるな」

勘「へえ、どうも夜は寒うございますので」

目「寒くば寒いにもせよ、一体何ういう心得で其の方が御寝所近くへ這入った、仔細があらう、如何様に陳じても遁れん処であるぞ、兎や角陳ずると厳しい処の責めに遇わんければならんぞ、よく考えて、逆も免れん道と心得て有体に申せ」

勘「有体たつて、私は何も別に他から頼まれた訳はございませんで、へえ」

目「中々此奴しぶとい奴だ、此の者を打ちませえ」

四「いや暫く……四郎治申し上げます、暫くどうぞ、彼は陪臣でござつて、お内庭へ這入りました段は重々相済まん事なれども、五郎治から私が言付けられますれば、即ち私が、兄五郎治の代を勤むべき処、御用あつて御家老からお呼出しに相成りましたから、止むを得ず家来勘八に申付けましたので、取も直さず勘八は兄五郎治の代でござる、何も強いて之を陪臣と仰せられては誠に夜廻りをいたし、上を守ります所の甲斐もない事でございます、勘八のみお咎が有りましたは偏頗のお調べかと心得ます」

目「それは何ういう事か」

四「え、是れなる遠山權六は、当春中松蔭大藏の家来有助と申す者を取押えましたが、

有助は何分にも怪しい事がないのを取押えられ堪り兼て逃にげどころ所を失い、慌あわて、權六に斬付けたるを怪しいという処から、お調べが段々長く相成つて、再度松蔭大藏もお役所へ罷ま出かりでました。其の折おりは御用多端の事で、御用の間まを欠き、不取調べをいたし、左様な者を引いてまいり、上役人かみやくにんの迷惑に相成る事を仕出しでかし、御用の間まを欠き、不届ふとどぎの至りと有つて、權六は百日の遠慮を申付かりました、未だいま其の遠慮中の身をも顧かえりみず、夜なくお屋敷内を廻りまして宜しい儀でござるか、權六に何のお咎めもなく、私わたくしの兄へお咎めがあると云うのは、更に其の意を得んことゝ心得ます、何ういう次第で遠慮の者が妄みだりに外出をいたして宜しいか、其の儀のお咎めも無くつて宜しい儀でござるなれば、陪臣の勘八がお庭内を廻りましたのもお咎めはあるまいかと存じます」

目「うむ：權六其の方は百日遠慮を仰付けられていると、只今四郎治の申す所である、何な故にゆえに其の方は遠慮中妄りにお庭内へ出た」

權「えゝ」

目「何故に出た」

權「遠慮というのは何ういう訳だね」

目「何う云う訳だとは何だ、其の方は遠慮を仰付けられたであろう」

權「それは知つてゐる、知つてゐるが、遠慮と云うのは何を遠慮するだ、私が有助を押えてお役所へ引いて出ました時は、お役人様が貴方と違つて前の菊田様でえ方で、悪人の有助ばかり鼻眞いして私をはア何でも彼んでも、無理こじつけに遣り込めるだ、さっぱり訳が分らねえ、其の中に御用の間を欠いた、やれ何の彼のと廉を附けて長え間お役所へ私は引出されただ、二月から四月までかゝりましたよ、牢の中へ入つてゐる有助には大層な手当があつて、何だか御重役からお声がゝりがあるつて榮うしている、私は押込められて遠慮だゝと何を遠慮するだ私の考では遠慮というものは芽出度い事があつても、宅で祝う所は祝わねえようにし、又見物遊山非番の時に行きたくても、其様な事をして榮耀をしちやアならんから、遠慮さ、又旨え物を喰おうと思つても旨え物を喰つて楽しんでやアどうも濟まねえと思つて遠慮をして居ります、何も皆遠慮をしているが私が毎晩〱御寢所近えお庭を歩いているは何の為だ、若殿様が御病気ゆえ大切に思えばこそだ、それに御家来の衆も毎晩のことだから看病疲れて眠りもすりやア、明方方には疲れて眠る方も有るまい者でもねえ、其の時怪しい者が入つちやアならねえと思うからだ、此の程は大分貴方顔なんど隠しちやア長い物を差した奴がうろつか〱して、御寢所の縁の下などへ入る奴があるだ、過般も私がすうと出たら魂消やアがつて、面か横つ腹か何所か打つたら、犬



う見たように漸ようよう這上よつたから、とつ捕つかめえて打うつてやろうと思うう中に逃にげちまつたが、爾そうして氣を付けたら私はこれを忠義かと心得ほかます、他の事ほかは遠慮を致しますが、忠義の遠慮は出来ねえ、忠義というものは誠だ誠の遠慮は何うしても出来ません、夜巡よしまわることは別段誰にも言付いかつたことはない、役目の外ほかだ、私も眠いから宅うちで眠れば楽だ、楽だが、それでは済みませんや、大恩のある御主人様の身あたりへ氣を付けて、警護けいごをしていることを遠慮は出来ませんよ、無理な話だ、巡まわつたに違ちがえねえ、それでもまだ遠慮して外庭げいばかり巡めぐつて居りました、すると勘八の野郎が……勘八とは知んねえだ初まりは……犬いぬう斬きつたから野郎と押おえべいと出たわけさ、それに違ちがえねえでございますよ、はいそれとも忠義を遠慮をしますかな」

と弁舌べんじや爽さわかに淀よどみなく述立のてる処は理の当然なれば、目付めづも少し困こつて、其の返答こたに差さ支しえた様子ようすであります。

目「むゝう、權六の申す所一応は道理じやが、殿様より遠慮を仰いせ出いされた身分身分で見れば、それを背そむいてはならん、最も外出がいしつ致いたすを遠慮せんければならん」

權「外がいしつ出しだつて我儘うめに旨うめえ物を喰くいに往ゆくとか、面白おもしろいものを見みに往いくのならば遠慮えんりょうないたしますが、殿様のお側そばを守るな遠慮は出来ねえ、外がいしつ出しするなつて其様そのんな殿様も無な

えもんだ」

四「え、四郎治申上げますあの通り訳の分らん奴で、然るをお目付は權六のみを鼻負いたされ、勘八一人唯悪い者と仰せられては甚だ迷惑をいたします事で、殊にお目付も予てお心得でござろう、神原五郎治の家は前殿様よりお声掛りのこれ有る家柄、殊に遠山權六が如き輕輩と違つて重きお役をも勤める兄でござる、權六と同一には相成りません、權六は上の仰せ出されを破り、外出を致したをお咎めもなく、格別の思召のこれ有る所の神原五郎治へお咎めのあるとは、実に依怙の御沙汰かと心得ます、左様な依怙の事をなされては御裁許役とは申されません」

目「黙れ四郎治、不束なれども信樂豊前は目付役であるぞ、今日其の方らを調ぶるは深き故有つての事じや、此の度御出府に成られた、御国家老福原殿より別段のお頼みあつて目付職を勤めるところの豊前に対して無礼の一言であるぞ」

四「ではございますが、余り片手落のお調べかと心得ます」

目「其の方は部屋住の身の上で、兄の代りとはいえども、其の方から致して内庭へ這入るべき奴では無い、然るを何んだ、其の方が家来に申付けて内庭を廻れと申付けたるは心得違いの儀ではないか、前殿様より格別のお声がりのある家柄、誠に辱ない事と主恩を

弁わきまえて居おるか、四郎治」

四「はい、心得居ります」

目「黙れ、新参の松蔭大藏と其の方兄五郎治兄弟の者は心を合せて、菊之助様をお世嗣よつぎにせんが為ために御舎弟様を毒殺いたそうという計策たくみの段々は此の方心得て居おるぞ」

四「むゝ」

目「けれども格別のお声がゝりもこれ有る家柄ゆえ、目付の情を以て柔和に調べ遣つかわすに、以ての外ほかの事を申す奴だ、疾とくに証拠あつて取調べが届いて居おるぞ、最早遁のがれんぞ、兄弟共に今日物頭へ預け置く、勘八其の方は不埒至極の奴、吟味中入牢じゅうろう申付ける、権六」

権「はい私も牢へ入りますかえ」

目「いや其の方は四月の二十八日から遠慮になつたな」

権「えゝ」

目「二十八日から丁度昨夜が遠慮明けであつた」

権「あゝ然そうでございますか」

目「いや丁度左様に相成る、遠慮が明けたから、其の方がお庭内を相変らず御主君のお身の上を案じ、御当家を大切と思ひ、役目の外に夜廻りをいたす忠義無二のことと、上かみにも

御存じある事で、後してはまた格別の御褒美もあろうから、有難く心得ませい」

權「有難うございます、なにイ呉れます」

目「何を下さるかそれは知れん」

權「なに私は種々な物を貰うのは否でございます、どうかまあ悪い奴と見たら打殺しても構わないくらいの許しを願えてえもので、此の頃は余程悪い奴がぐるぐる廻つて歩きます、全体此の四郎治なんという奴は打殺して遣りてえのだ」

目「これこれ控えろ、追つて吟味に及ぶ、今日は立ちませえ」

と直に神原兄弟は頭預けになつて、宅番の附くような事に相成り、勘八という下

男は牢へ入りました。權六は至急お呼出しになつて百日の遠慮は免りて、其の上お役が一つ進んで御加増となる。遠山權六は君恩の辱ないことを寝ても覚めても忘れやらず、それ

から毎夜ぐるぐる廻るの廻らないのと申すのではありません。徹夜寝ずに廻るといふは、

実に忠義なことでございます。此の事を聞いて松蔭大藏が不審を懐き、どうも神原兄弟が

頭預けになつて、宅番が附いたは何ういう調べになつた事かは困つたものだ、彼奴らに

聞きたくも聞くことも出来ん自分の身の上、あゝ案じられる、国家老の出たは容易ならん

事、どうか国家老を抱込みたいものだ、素より悪才に長けた松蔭大藏種々考えまして、

濱名左傳次にも相談をいたし、国家老を引出しましたのは市ヶ谷原町のお出入町人秋田屋清左衛門という者の別荘が橋場にありますが、庭が結構で、座敷も好く出来て居ります。これへ連出し馳走ということで川口から立派な仕出しを入れて、其の頃の深川の芸者を二十人ばかり呼んで、格別の饗応になると云うのであります。

## 四十六

時は八月十四日のことで、橋場の秋田屋の寮へ国家老の福原數馬という人を招きまして何ぞ隙があつたらば……という松蔭が企み、濱名左傳次という者と謀し合せ、更けて遅く帰るようでもつたらば隙を覗つて打果してしまふか、或は旨く此方へ引入れて、家老ぐるみ抱込んでしまふかと申す目論見でございます。大藏は悪才には長け弁も能し愛敬のある男で、秋田屋に頼んで十分の手当でございます。此の寮も大して広い家ではございませんが客席が十五畳、次が十畳になつて、入側も附いて居り誠に立派な住居でございます。普請は木口を選んで贅沢なことで建て、から五年も経つたろうという好い時代で、落着いて、なか／＼席の工合も宜しく、床は九尺床でございます、探幽の山水が懸り、唐

らもの物の籠かごに芙蓉ふように桔梗ききよう刈萱かりかやなど秋草を十分に活いけまして、床脇の棚等とこにも結構な飛び青磁の香炉かうろがございまして、左右に古代蒔絵こたいまきえの料紙箱りょうしちばこがあります。飾り付けも立派でございまして、庭からずうと見渡すと、潮入りの泉せんすい水みづになつて、模様を取つて土橋どばしが架り、紅白の萩其の他の秋草あかが盛りで、何とも云えん好い景色でございまして。饗応を致しますに、丁度宜しい月の上りを見せるという趣向。深川へ申付けました芸者は、極頭ごくあたまだった処の福吉ふきち、おかね、小芳こよし、雛吉ひなきち、延吉のぶきち、小玉こたま、小さん、などという皆其の頃の有名の女計めづかり、鳥羽屋五蝶とばやごちように壽樂じゆらくと申します。幫間たいごもちが二人、是れは一寸萩江節ちよつとおぎえぶしもやります。萩江喜三郎おぎえきさぶろうの弟子だといふので、皆美々しく着飾つて深川の芸者は只今の芸者と違ちがひまして、長箱ながばこで入りましたもので、大概橋場あたりで言付ければ残らず船でまいりまして、着換んわらえなど沢山着換かえまして、髪は油気なし、潰つぶしという島田に致しまして、丈長たけながと新藁あらをかけまして、笄こうがいは長さ一尺で、厚み八分も有つたといふ、長い物を差して歩いたもので、狭い路地などは通れませんが、恐ろしい長い笄で、夏縞ろを着きても皆肌襦袢はだじゆばんを着きませんで、深川の芸者ばかりは素肌へ着たのでございまして。裾模様すそもようが付いて居ります、紅べにかけ花色、深川鼠、路考茶ろこうちやなどが流行はやりまして、金緞子きんどんすの帯を締め、若い芸者は縞縺子しまじゆすの間に緋鹿ひがの子こをたゝみ、畳み帯、挟み帯はさなど申して華やかなこしらえ、大

勢並んで、次の間にお客様のおいでを待つて居ります。秋田屋清左衛門の番頭も、其の頃大名の御家老などが来ると家の誉れ名ほま みょうもん聞だといひので、庭の掃除などを厳しく言付けぐるく見廻つて居ります。さらおいでだと云つてお出迎いをいたし、

番「え、いらつしやいまし」

數「あ、これは成程どうも好い庭で、松蔭好い庭だの」

大「はい誠にその、当家の亭主が至つて茶人で、それゆえ此の庭や何かは、更に作りませんで、自然の様を見せました、実に天然のような工合で」

數「うん余程好い庭である、むう、これは感心……岩越何うだえ」

岩「へえ、私は斯様な処へ参つたのは始めてござすな、国にいては逆も斯ういふ処は見られません、う、ん、これはどうも」

數「お前は何だ」

大「え、これなるは当家の番頭、伊平と申します不調法者で」

番「え、今日は宜うこそ御尊来有難い事で、貴所方のお入来のございますのは実に主人も悦び居りまして、此の上ない冥加至極の儀で、土地の外聞で、私においても、誠に有難いことで」

數「いや其様そんなに、大層おほいに云わんでも宜よろい、土地の外とちの外聞きなんて、亭主ていしゅは余程ことうずか好事家こうじかのよう  
だな」

番「え、鬼ほおずき灯とうなどは植うえんように致いたしてございます」

數「うふ、鬼灯ほおずきじゃアない、風流人ふうりゅうじんと申まをすことじゃ」

番「でございますか、なにほうずは出来できます」

數「何を申まをす」

番「へい、船ふねの上うへをずる、何時いつまでも曳ひいているような長いものをほうずと申まをしますそ  
うで」

數「いや中々ものしりの博識はくしきじゃ、うふ、面白い男おとこだの、此こゝの泉水せんすいは潮しお入いりかえ」

番「へえ何と…」

數「いやさ此こゝの泉水せんすいは潮しおが入いるかえ」

番「へえ、何と御意ごい遊あそばします」

數「潮入しほいりりかというのじゃ」

番「へえ、只今ただいま差さ上げますあの誰たれかお盆ひらへ塩しほを持って来きて上げな、どうも御ご癩かん癖ぺきだか  
ら、お手てをお洗せんい遊あそばすのだろう、へえお塩しほを」



數「何を持って来るのだ、此の泉水は潮入かと申すのだ」

番「へえ、左様でございます」

大「何卒これへ入らつしやいまし」

數「うん岩越、ひよろ／＼歩くと危いぞ池へ落こちるといかん、あゝ妙だ、家根は惣体  
ふきや 葺屋だな、とんと在体ざいていの光景ありさまだの」

大「外面そとから見ますと田舎家いなかやのようで、中は木口を選んで、なか／＼好事こうずに出来て居りま  
 す」

數「其の許もとは斯ういう事も中々くわ委しい、私わしはとんと知らんが、石灯笼いしどうろうは余りなく、木の  
 灯笼が多いの」

大「えゝ、これはその、野原のような景色を見せました心得でございましょうか」

數「あ成程、これは面白い／＼……此処こゝから上あがるのか、成程玄関の様子が面白く出来たの、  
 入り口いりぐちかえ」

大「これからお上り遊あがばしませ、お履物はきものは私わたくしがしまい置きます」

數「これは好よい席だ」

大「さゝ、是へどうぞ／＼」

と松蔭が段々案内をいたし、座敷の床の前へ褥しとねを出し、烟草盆や何か手当が十分届いて居ります。

大「どうぞ此これ処へお坐りを願います」

數「余り好よい月だによつて、縁先で見るのが至極宜しい、これは妙だ、此の辺は一体隅田川の流れて……あれに見ゆるのは橋場の渡しの向うかえ、如何いかにも閑地かんちだから、斯ういう処は好よいの、え、一寸秋田屋をこれへ」

大「え、御家老これが当家の主人秋田屋清左衛門と申します、年来お屋敷へお出入を致すもので、染しみ々々未だお目通りは致しません、日外いつぞやあの五六年以前、大夫たいふが御出府の折おりにお目通りを致した事がありますと申し、斯様な見苦しい処ではござるが、一度御尊来を願ねがひたいと申して居つたので、当人も悉ことごとく今日は悦よろこび居ります、どうかお言葉を」

數「は、あ、秋田屋か」

清「へえ、え、今日は宜ようこそ、御尊来で、誠に身に取りまして有難い事でございます、え、年来お屋敷さまへお出入をいたします不調法者で、此の後のちとも何分御贖あがりお引廻しを願ねがひます」

數「あい、秋田屋か、成程、貴公は知らんが、貴公の親父の時分であつたか、江戸詰の時

種々世話になつた事もあつた、中々立派な好い家だ、至極面白い」

清「いえ、見苦しゅうございまして、此の通り粗木を以て拵えましたので、中々大夫さまなどがお入来と申すことは容易ならんことで、此の家に箔が付きます事ゆえ、誠に有難いことで」

數「いや、格別の手当て辱ない、あい、成程、これは中々立派な茶碗だな、余程道具好きだと見えるな」

大「はい、好い道具を沢山所持して居る様子でございます、今日は御家老のお入来だと、何か大切な品を取出した様子で、なに碌なものもございますまいがほんの有合で」

數「いや中々好い茶碗だ」

大「え、道具は麓末でござるが、主人が心入れで、自ら隅田川の水底の水を汲上げ、砂漉にかけ、水を柔かにして好い茶を入れましたさうで」

數「成程それは有難い、其処が親切というもので、茶はたとえ番茶でも水を柔かにして飲ませる積りで、自身に川中まで船で水を汲みに往く志というものは、千万金にも替えがたく好い茶を飲ませるより福原辱なく飲む」

大「え、恐入りました事で」

數「大藏、立派な菓子を取ったの」

大「いえ、どうも甚だ何もございませんで、此の辺は誠にどうも……市ヶ谷から此処へ出張りますことで、好い道具や何かは皆此方の蔵へ入れ置きますという事で」

數「成程、火事がないから道具の好いのを運んで置くか、それは宜かろう」

大「今日は何も御馳走は有りませんが、御家老へ此の向うから月の上ります景色を……これは御馳走でございませぬ、求めず天然の樂みで、幸い今宵は満月の前夜で」

數「お、成程な、いやかけ違つて染々、挨拶もしなかつたが、段々と上屋敷の事も下屋敷の事も、貴公が大分に骨を折つて大きに殿様にも格別に思召し、新参でありながら、存外の昇進で、えらいものだ」

大「えへへ、不束の大藏格別上のお思召しをもちまして、重きお役を仰付けられ、冥加至極の儀で、此の上とも卒御家老のお引立を蒙りたく存じます」

數「其様な出世をしては往く処があるまい、中々どうして男は好し、弁に愛敬を持ち、武芸も達しておるから自然と昇進をする質だ」

大「えへ、恐入りました事で」

數「手前も壮年の折柄は一体虚弱だが、大きに老年に及んで丈夫になつたが、どうも齒

が悪くなつて、旨い物を喰べても余り旨いとは思わん、楽しみと云つても別になし、国に居れば田舎侍だから美食美服は出来んばかりでは無い、一体若い時分からそういう事は嫌いじゃ、斯ういう清々とした処を見るが何よりの楽しみじやの」

大藏は座を進ませまして、

大「え、どうも今日は何もお慰みもなく、お叱りを受けるかは存じませんが、亭主が深川の芸者を呼び置きましたと申すことで、一寸お酌を取りましても、武骨な松蔭や秋田屋がお酌をいたしましたしては、池田伊丹の銘酒も地酒程にも飲めんようなことで、甚だ御無礼ではございますが、お目通りへ其の深川の芸者どもを呼寄せることに致します」

數「お、成程その噂は聞いている、深川には大分美人も居り、芸の好いものも居るといふ事だが、それは宜いの、手前は芸者に逢つた事はない、武骨者で殊に岩越という男が是非一緒に往きたい、何でも連れてつてくれ、未だ碌に御府内を見たことが無いというから同道して来たが、起倒流の奥儀を究めあるだけあつて、膂力が強いばかりで、頓と風流気のない武骨者じや」

岩越「え、拙者は岩越賢藏と申す至つて武骨者で此の後ともお見知り置かれて御別懇に」大「今日は図らず御面会を致しました、手前は松蔭大藏で……好い折柄、此の後とも御別

懇に……御家老此れは濱名左傳次と申す者で、小役人でございましたが、図らず以上に仰付けられ、今日は何うかお目通りを致しまして、何かのお話を承われれば身の修行だと申して居ります、武骨ではござるが洒落た口もき、皺枯つ声で歌を唄い、面白い男ゆえお目をお掛け遊ばして、何分お引立を」

數「はいく、中々様子の好い男、なれども近い処だと宜いのが、上屋敷までは遠いから、どうか些と早く帰りたいがの」

大「いえ、今晚は小梅のお中屋敷へ御一泊遊ばしては如何、寺家田の座敷が手広でござる、彼へ御一泊遊ばしますように、是から虎の門までお帰りになつては余り遅うなりますから」  
數「それは宜かろう」

大「じやア早く〜」

と是からお吸物に結構な膳碗で、古赤絵の向付けに搔鯛のいりぎけのようなものが出ました。続いて口取焼肴が出る。数々料理が並ぶ。引続いて出て来ましたのは深川の別嬪でございます。

大「さ、これへ」

芸「今日は」

數「いや〜大勢呼んだの」

大「さ、これへ来てお酌を、大夫様から」

芸「へえ、大夫様お酌をいたしましょう」

數「いや成程これは綺麗、あい〜、成程松蔭年を老<sup>と</sup>つても酌はたぼと云つて幾<sup>いくつ</sup>歳になつても婦人は見て悪くないもんだの、む〜う、中々どうも……何<sup>なん</sup>てえ名だなに、小玉か成程、どんずり奴<sup>やつこ</sup>の男がいる、あれは何だ」

幫間「え〜手前は鳥羽屋五蝶と申します幫<sup>たいこ</sup>間で」

數「ほ〜う、なに太鼓を叩くか」

五「いえ、只口で叩きます」

數「口で太鼓を…唇でかえ」

五「いえ、なに、太鼓持で、えへ〜」

數「うん成程、口<sup>くちがる</sup>軽なことをいう、幫<sup>ほうかん</sup>間か、成程聞いていた、中々面白い頭だの」

五「へ〜、どうも未<sup>ま</sup>だどんずり奴<sup>やつこ</sup>でございます」

數「太鼓持の頭は、皆<sup>みな</sup>此<sup>こ</sup>様なかえ」

五「皆<sup>みんな</sup>お揃いと云う訳ではございませんが、自然と毛が薄くなりましたので」

數「いや形が變つて妙だ、幫間たいこもちは口軽だというのが、何か面白いことを云いなさい」

五「これは恐入りましたな、御家老さま、改まつてこれを云えと仰せられますと困りますが……喜三郎こゝへ出なよ、金公きんこうや此処これへ出なよ」

喜「口軽なんぞ迎とてもお目通りは出来ないというのは何うだ」

五「何だえ、それは」

喜「足軽という洒落しゃれだ」

五「縁が遠いの、口軽と足軽では」

數「私わしは酒が頓とんといかん、岩越いわこし一盃いっぱいやれ」

岩「私わたくしは斯ういう形かたちのものは始めて見ました、余程違つて居ります、云うことも中々面白いようようで」

五「これから追々おいくく繰出します」

四十七

幫間ほうかんの五蝶ごてつが、



五 「大夫様、此のお庭は好いお庭でございますな」

數 「なかく〜好いの」

五 「大きな緋鯉ひいが居ります、更紗さらざや何か亀井戸もよろしく申すので」

數 「何ういう訳で、誰が亀井戸でよろしくと申した」

五 「いえなに、然そういう訳ではありません、これはどうも恐入りましたな」

數 「私も一つ洒落せようかな」

五 「これは恐入ります、皆みんなな此処ここへ来て伺いな、大夫様がお洒落遊ばすと、お上屋敷の御

家老様が」

數 「貴公うまは甘い物で洒落せるから、私も一つ洒落せよう」

五 「改かまつて洒落せようというお声こゑがかりは恐入ります」

數 「私わしが国は美作で」

五 「へえ成程」

數 「私わしは城代家老じゃ」

五 「へえ〜」

數 「そこで洒落せるのだ」

五「大層どうもお洒落の御玄関ごげんかんから大広間おおびろまは恐入りました、へえ、成程」

數「美作城代家老私みまさかじょうだいからうわし、というのは何うだ」

五「へえ、恐入りましたな、それは何ういう訳なんで」

數「分らんの、いまさか羊羹鹿ようかんかの子餅こもち」

五「へゝえ、成程が付きません、美作城代家老私、いまさか羊羹鹿の子餅、これは恐入りました……どうも恐入ったね」

喜「恐入りました、御家老様からお洒落がお菓子で出たから、可笑おかしな洒落と云うのをやろうかね、さアと云うと一寸ちよいと出ないものでげすが」

みの吉「私がちよいと一つやるよ」

喜「や、これはみの吉さん感心」

みの「私が赤飯あこわを喫たべたんだよ」

喜「可笑おかしな洒落だね」

みの「汁粉屋で赤飯を出したのだよ」

喜「此の節は汁粉屋で赤飯を売るよ」

みの「だから白木屋しろきやお駒こまというのを汁粉屋しるこや赤飯あこわさ」

喜「前に本文を断つて後から云うのは可笑しい」

岩越「手前が一つ洒落ようかの」

五「岩越さま、あなた様のお洒落は」

岩「手前は考えたが余程むずかしいで、これはム、ウ、待ってくれ、えー阿部川餅というのが有るの」

五「へえ〜ございます」

岩「一つ八文で」

五「阿部川、へい、一つは八文で」

岩「あべ川の八錢では本当の直だといふのは何うだ」

五「へえー、変なお洒落で、それは何う云う訳なんで」

岩「姉川の合戦、本多が出たというのだ」

五「それは余りお固いお洒落でげすな、私が洒落ましよう、斯ういふのは何うでございませ、大黒様が巨燧に烘つてるのでございます、大黒暖かいと」

數「うん、成程是は分つた、大福暖かいか」

五「御家老様の御意に入りましたか」

數「私が最<sup>も</sup>う一つ洒落<sup>しやう</sup>ようか、是は何うだの、松風は固い岩おこしは柔らかいと云うのは」  
五「へえ、それは何ういう訳で」

數「松蔭は堅い男、岩越は柔術<sup>やわらとり</sup>家」

五「へえ成程中々ちよつくら分りませんが誠に恐入りました事で、早くお三味線を」

とお座付<sup>ざつき</sup>が済み、後は深川の端唄<sup>はうた</sup>で賑<sup>にぎや</sup>かにやる大分興に入<sup>い</sup>った様子、御家老も六十近いお年で、初めて斯ういう席に臨みましたので快く大分に召上りました。

數「お前のお蔭で私は斯<sup>わし</sup>様な面白<sup>おもしろ</sup>い事に逢<sup>あ</sup>つたのは初めてだ、実に堪<sup>たま</sup>らんな、又<sup>また</sup>た其<sup>うち</sup>の中<sup>うち</sup>来<sup>き</sup>たいものだ」

大「何うか御在府中御遠慮なくおいで下されば、清左衛門は如何<sup>いか</sup>ばかりの悦びか知れません、芸者は孰<sup>どれ</sup>がお氣に入りました」

數「皆宜<sup>よ</sup>いの、其<sup>うち</sup>の中にも彼<sup>あれ</sup>が好<sup>よ</sup>いの、小まんに雛吉か」

大「彼<sup>あれ</sup>が御意に入りましたら、今度はお相手に前<sup>ぜん</sup>々々から頼み置きまして、呼寄せるように致<sup>いた</sup>しましょう」

數「それは誠に辱<sup>かたじけ</sup>ない、大きに酔うたな、殿様は御病氣での」

大「へえ、私<sup>わたくし</sup>も大きに心配を致して居ります」

數「併し私が顔を御覽があつてから、大きにお力が附いて大分に宜しいと、殊の外お悦びでお食も余程進むような事で」

大「大夫、何ぞお慰みを」

數「いや私は誠に武骨な男で、音曲や何かはほとんど分らん、能が好きじゃ」

大「はア、左様でございますか、それでは能役者を」

數「いや連れて来たよ、二人次の間に居るが、せめて鼓ぐらいはなければなるまいと思つて、婦人で鼓を能く打つ者があつて、幸いだから、私が其の婦人を連れてまいつた」

大「それは少しも心得ませんでした、何時の間にまいりましたか」

數「芸者どもは少し端へ寄つて居れ」

とは是から灯を増し折から月が皎々と差上りまして、前の泉水へ映じ、白萩は露を含んで月の光りできら／＼いたして居る中へ灯を置きまして、此方には芸者が並んで居りますから、何方を見ても目移りが致しますような有様、今襖を開けて出て来ましたは仙台平の袴に黒の紋付でございます。其の頃だから半髪青額でまだ若い十七八の男と、二十七八になる男と二人がすうと摺足をして出て来ました。脇を見ると隅の方に女が一人振袖を着まして、調べを取つてポン／＼という其の鼓の音が裏皮へ抜けまして奥へ響

き中々上手に打ちます。大藏は何うして何時の間に斯かよう様な能役者を連れて来たかと思つて見ますと、どうも見た様な能役者であるとは思いましたが、松蔭にも分りません。少し前へ膝を進めて熟よく々見ますと若い方は先年お暇いとまが出て、お屋敷を追放になりました渡邊織江の悴せがれの祖五郎、今一人は春部梅三郎、兩人共にお屋敷を出て居おつて、二人が何うして此こ処へ能役者に成つて来たことかと、鼓つづみうち打を見つると祖五郎の姉のお竹ですから松蔭は驚きまして、是は何ういう訳かと濱名左傳次と互たがひに顔を見合せて居ります内に、舞もしまいました。

數「大きに御苦労く、さアくくこゝへ来て、ずうつとこゝへ来な、構わずに此こ処へ来て一いっばい盃……それから松蔭もこゝへ来て……えゝ、これは貴公も知つて居おる通り、渡邊織江の悴祖五郎で、彼あれは春部梅三郎じや、不調法があつてお暇になり、浪人の活計たつきに迫り、自分も好きな所から能役者となりたいたと、何うやら斯うやら今では能役者でやつて居おるそうだが、これは祖五郎の姉だ、器量も好よいがお屋敷へ帰るまでは何ど処へも嫁付かたづくことは否いやだと、鼓を打つたり、下した方かたが出来る処から出入町人の亭主に心安い者があつて、其そ処こにいると云うが、今日こんにちは幸いな折柄で、どうか又鼻屑なせくにして斯ういう事が有つたら前々まえく屋敷にいた時の馴染もあるから呼んでやつてくれ」

大「これは思掛けない事で、祖五郎殿にも春部氏にも暫く……」

と松蔭も腹の中では驚きました。

大「えゝ、只今は何処に」

數「いや、国へ尋ねて来た、それからま何うするにも仕方がないから、奈良辺で稽古をし

て、此方へ出て来たので、是からが本当の修業じゃ、さア〜一盃〜」

梅「松蔭殿、面目次第もない、尾羽打枯した浪人の生計、致し方なく斯様な営業をいた

して居り、誠に恥入りました訳で、松蔭殿にお目通りを致しますのも間の悪い事でござい

ますが、構わんから参れと、御家老の仰せを受けて罷出ました、貴方様には追々御出世、

蔭ながら悦び居ります」

祖「祖五郎も蔭ながら、貴方様の御出世は父織江がお世話致した甲斐がござると蔭ながら

悦び居ります、今日は思掛けなく御面会を致しました、此の後共御最願を願おう……斯

様な御酒宴のございます節には必ずお招きを願います」

竹「松蔭さま暫く、竹でございます」

大「これはお竹さま、これは実に妙でげすな」

數「いや実に妙だ、芸者は帰したら宜かろう、却つて此処にいと屋敷の話も出来んから、

取急いで秋田屋芸者共を早く帰せ〜」

番頭「へえ〜」

と急に船に載せて帰しました、

數「さ、こゝへ来て昔の話をしよう、この祖五郎の父織江は福原別懇であつた、忠義無二な男であつたが、武運拙くして谷中瑞麟寺の藪蔭で何者とも知れず殺害され、不束の至りによつて永のお暇を仰付けられ、討つたる敵が知れんというが、さぞ残念であろう」  
祖「はつ、誠に残念至極で」

と眼に涙を浮めてお竹と祖五郎が松蔭の顔をじろりと横目で睨め上げるから、松蔭は氣味悪くなり、下を向いている。

數「春部梅三郎は腰元の若江と密通して逃げたという事だったの」

梅「はい、誠に恥入つた事でございます」

數「うん、それが露頭した訳でもなし、是まで勤め向も堅く、ほんの若気の至りで、女を連れて逐電いたしたのじゃが、未だお暇の出たわけではなし、只家出をした廉だから、お詫をして帰参の叶う時節もあるう、若江という小姓も小さい時分から奉公をしていた者で、先年体好くお暇になつたとの事、是も出入りは出来ようかと思う、所でお前たちに私が問



うがな、大殿様は今年はもう五十五にお成りなさる、昨今の処では御病氣も大きに宜よいようじゃが、どうもお身上みじょうが悪いので、今度の御病氣は數馬決して安心せん、もしお逝去かくれにでもなつた時には御家督相続は誰が宜かろう、春部だの祖五郎はお暇になつてゝも、代々の君恩かたじけの辱たたない事は忘却致すまい、君恩を有難いと考えるならば、御家督は何う致すが宜しいか少しは考えも有ろう」

祖「手前の考えでは若様は未だお四才かお五才で御頑ごがんぜ是もなく、何弁わきまえない処のお子様でございますから、万々まんくいち一大殿様がお逝去かくれに相成つた時には、お下屋敷にならせられる紋之丞様より他に御家督御相続のお方は有るまいかと存じます」

數「それは些ちと違ちがうだろう、菊様はお血統ちすじだ、仮令たとえお四才よつでも菊様が御家督にならなければなるまい、御舎弟を直すのは些ちと道理に違ちがつて居おるように心得る」

梅「いや、それは違ちがつて居おりましょう」

數「違ちがつては居おらん」

梅「併しかしお四才よつになる者を御家督になされば、矢張やっぱり御後見が附かなければなりません、それよりは矢張やっぱりお下屋敷の御舎弟紋之丞様が御家督御相続になつて、菊様追々御成人のちの後、御順家督ごじゆんかどくに相成るが御当然ごとうぜんのことゝ存じます」

數「いや〜然うでない、お血統は別だ、誰しも我子は可愛もので、御実子を以て御家督相続と云えば殿様にもお快くお臨終が出来る、御兄弟の御情合も深い、深いなれども御舎弟様が御家督と云えばお快くないから御臨終が悪かろうと思う、どうもお四才でもお血統はお血統、若様を御家督にするが当然かと心得るな」

祖「是は御家老様にお似合いなさらんお言葉で、紋之丞様が御家督相続に相成れば、万事御都合が宜しい事で、お舎弟様は文武の道に秀で、お智慧も有り、先ず大殿様が御秘蔵の御方度々お賞めのお言葉も有りました事は、父から聞いて居ります」

數「それはお前たちの知らん事、何でも菊様に限る」

大「え、松蔭横合より差出ました横槍を入れます、これは春部氏祖五郎殿の申さるゝが至極尤もかと存じます、菊様は未だお四才で、何のお弁えもない頑是ない方をお世嗣に遊ばしますのも、些と不都合かのように存じます、菊様御成人の後は兎も角こゝ十四五年の間は梅の御印様が御家督になるのが手前に於ては当然かと、憚りながら存じます」

數「然うじゃあるまい」

大「いや〜それは誰が何と申しても左様かと心得ます」

福原數馬は俄に面色を変え、容を正して声を張上げ。

數「黙れ……白々しい事を申すな、松蔭手前はそれ程御舎弟紋之丞様を大切に心得て居るならば、何故飴屋の源兵衛を頼んだ」

大「はっ」

數「神原五郎治、四郎治と同意致して、殿を蔑ろにする事を私が知らんと思うて居るか、白痴め、左様に人前を作り忠義立を申してもな、其の方は大恩人の渡邊織江を谷中瑞麟寺脇の細道において、手槍をもつて突殺した事を存じて居るぞ、其の咎を梅三郎に負わそうと存じて、証拠の物を取置き、其の上ならず御舎弟様を害そうと致した事も存じて居る、百八十余里隔った国にいても此の福原數馬は能く心得て居るぞ、人非人め」

と云い放たれ、恟り致したが、そこは悪党でございますから、じりゝと前へ膝を進めて顔色を変え。

大「御家老さま怪しからん事を仰せられます、思い掛けない事を仰せられます……手前が何で渡邊織江を殺害し、殊に御舎弟紋之丞さまを失おうとしたなどと誰が左様な事を申しました、手前に於ては毛頭覚えはございません、何を証拠に左様なことを仰しやいますか、承わりとうござる」

數「これ、まだ其様なことを云うか、手前は五分試しにもせにアならん奴だ、うゝん……」

よく考えて見よ、先奥方さま御死去になつてから、お秋の方の氣儘氣随神原兄弟や手前達を引入れ、殿様を蔑ないがしろにいたす事も皆みな存じて居おる。殊に其の方を世話いたした渡邊を殺せつが害致したり、もと何処どこの者か訳も分らん者を渡邊が格別取做とりなしを申したから、お抱えになつたのじや、上かみへ諂へつら媚こびを獻じて、とうとう寺島主水を説伏せ、江戸家老を欺おわき遂せて、菊様を世に出そうが為、御舎弟様を亡なき者にしようと云う事は、疾とうに忠心の者が一々国表へ知らせたゆえに、老体なれども此の度態たびわざ々々出て参つたのだ、其の方のような悪人は年を老とつても人ひと指ひとさしゆびと拇指おやゆびで捻ひねり殺すぐらいの事は心得て居おる、さアそれとも言訳があるか、忠義に凝こつた若者らは不忠不義の大罪人八裂やつざきにしても飽足あきたらんと憤いきどおつたのを、私わしが止めた、いやそれは宜しくくない、一人を殺すは何でもない、況まして事を荒立する時には殿様のお眼識めがねちが違ちがひになりお恥辱はじである、また死去致した渡邊織江の越度おちどにも相成る事、万ばん一此の事が將軍家の上じようぶん聞きに達すれば、此の上もない御当家のお恥辱はじになるゆえ、事穩お便んびんが宜しいと理解をいたした、こりや最早何どの様に陳のじても遁のがれる道はないから、神原兄弟は国表へ禁錮おしこめ申し付け、家老役御免、跡役は秋月喜一郎に仰付けられるよう相あいさだ定まつて居おる、手前は不忠な事を致し、面目次第もない、不忠不義の大罪人御奉公も相成り兼かねるによつて永ながの暇下いとまされたしという書面を書け、これ祖五郎此の松蔭に父を討たれ、

無念の至りであろう、手前はお暇を蒙<sup>こうむ</sup>つて居る身の上、仮令<sup>たとえ</sup>悪人でも殿様のお側近くへまいる役柄を勤める大藏を、敵<sup>かたき</sup>と云つて無闇に討つことは出来んから、暇を取つたら、直<sup>すぐ</sup>に討て……梅三郎貴様は大藏のため既に罪に陥<sup>おと</sup>されし廉<sup>かじ</sup>もあり、祖五郎は未<sup>いま</sup>だ年若じやによつて助太刀を致してやれ、これに岩越という柔術<sup>やわらとり</sup>取の名人が居<sup>お</sup>るから心配は無い、貴様力を添えてやれ、さ松蔭書付を書いて私<sup>わし</sup>へ出せばそれで手前はお暇になつたのだ……秋田屋の亭主気の毒だが此の庭で敵<sup>かたきうち</sup>討<sup>うち</sup>を致させるから少し貸せ」

清「へえ」

と驚きました。

清「泉水がごございますが」

數「いや、びちやく落<sup>おつ</sup>こつても宜しい、急に一時<sup>いちじ</sup>に片を附けなければならんだ、さ書け書かんかえ」

大「はつ……併<sup>しか</sup>し何<sup>ど</sup>の様<sup>よう</sup>の証拠がござつて、手前は神原兄弟と心を合せて御家老職<sup>あざむ</sup>を欺<sup>あざむ</sup>き、剩<sup>あまつ</sup>さえ御舎弟様を手前が毒害<sup>どくがい</sup>いたそうなどと、毛頭身に覚え<sup>おぼ</sup>えない事で、殊に渡邊織江<sup>せ</sup>を殺<sup>せ</sup>害<sup>がい</sup>いたしたなどと」

梅「黙れ此の梅三郎が宜く心得<sup>お</sup>て居るぞ、手前は神原と心を合せて織江殿<sup>せ</sup>を殺<sup>せ</sup>害<sup>がい</sup>致した

其の時に、此の梅三郎は其の場に居合せ、下男を取押えて密書を奪い現に所持いたして居る、最早遁れる道はないぞ」

祖五郎は血眼ちまなこになつて前へ進み、

祖「やい大藏、人非人恩知らず、狗畜生いぬちくしょう、やい手前はな父を討つたに相違ない、手前は召使めしつかいの菊を殺し、又家来林藏も斬殺きりころし、其の上ならず不義密通だと云つて宿へ死骸を下げたが、其の前々菊まえくが悪事の段々を細かに書いて、小袖の襟へ縫附けて親元へ贈つた菊の書付けを所持して居る、最早遁れる道はないぞ、手前も武士じやないか、尋常に立上つて勝負いたせ」

大「はつ……不忠不義の大罪重々心に恥じ、恐入りましてござる」

數「さ、書け、もう迎むかもいかんから書け、松蔭手前も諦めの悪い男だ、最早遁にぐるも引くも出来やせん、書け」

大「はつ」

數「まだ恐れ入らんか」

大「はつ」

數「も一つ云おうか、白山前の飴屋小金屋源兵衛を欺だまし宗庵という医者を抱込んで、水飴

の中へ斑猫を煮込み、紋之丞様へ差上げようと致したな、それは疾うに水飴屋の亭主が残らず白状致してある、遁れる道はない」

大「あゝ残念：是まで十分仕遂せたる事が破れたか、あゝ」

と震えて袴の間へ手を入れ、松蔭大藏は齒齧をなして居りましたが、最早詮方がないと諦め、平伏して、

大「恐れ入つてござる」

數「おゝ、恐れ入れればそれで宜しい、お秋の方も剃髪させ、国へ押込める積だ、さ書け  
く」

大「只今書きまする」

と云いながら後へ退るから、岩越という柔術家が万一逃げにかゝつたら引倒して息の根を止めようと思つて控えて居ります。後へ退つて大藏が硯を引寄せて震えながら認めて差出す。

數「爪印を押せ、其処へ」

大「はっ」

と爪印を捺して福原數馬の前へ差出し、

大「重々心得違い、是れにて宜しゅうございますか、御披見下さい」

敷「其の方の手跡だから宜しい、さ是从庭へ出て敵討だく」

と云うと大藏は耐えかねて小刀を引抜くが早いか脇腹へ突込んで引廻しました。

祖「汝れ切腹致したな」

と祖五郎が飛掛つて二打三打斬付け、遂に仇を討遂せて、直にお屋敷へお届けに相成

り、とうとう悪人は残らず国表へ押込められて、お上屋敷の御家来十七人切腹致し、渡邊

祖五郎、春部梅三郎はお召歸しに相成り、渡邊祖五郎は二代目織江と成り、菊様の後見

と相成つて、お下屋敷にまいりました。また秋月は跡家老職を仰付けられ、こゝに於

て福原數馬は安心して国へ歸る。殿様は御病氣全快し、其の後大殿お逝去になつて、紋之

丞さまが乗出し、美作守に任せられ。又お竹を何くれ親切に世話をした雲水の宗達は、美

作の国までお竹を送り届け、それより廻国を致し、遂に京都で大寺の住職となり、鴻の巢

の若江は旅籠屋を親族に相続させ、更めて渡邊祖五郎が媒妁人で、梅三郎と夫婦になり、

お竹も重役へ嫁入りました。大力の遠山權六は忠義無二との取沙汰にて百石の御加増に

相成りましたという。お芽出たいお話でございますが、長物語で噺御退屈。

(拋酒井昇造筆記)







## 青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の九」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫

1964（昭和39）年2月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の九」春陽堂

1927（昭和2）年8月12日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、くの字点（二倍の踊り字。「く」を縦に長くしたような形の繰り返し記号）はそのまま用いました。二の字点（漢数字の「二」を一筆書きにしたような形の繰り返し記号）は、「々」「ゝ」「ゝ」にかえました。総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」は、それぞれ「其の」と「此の」に統一しました。

底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示

す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※本作品中には、人名などの固有名詞に一部不統一が見られますが、あきらかな誤植と思われる場合を除き、原則として統一はせず、底本のままとしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：かとうかおり

2001年1月6日公開

2004年7月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 菊模様皿山奇談

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>